磯ちどり

女學世界定期增刊

第一巻第十五号


三井呉服店
季節向き新柄流行品を階上階下總躰に陳列致し尚ほ御休息室をも取設け置候間御慰み旁御子様方御連れ遊ばされ緩々御遊覧なし下され度願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越し被下候はゞ即日小包郵便にて發送可仕候尚ほ注文御案内書御入用の節は御一報次第御送り可申上候
電話
東京本局 特 五二五 一二一七 一八六〇
大阪東 特 四七三 一六五〇
東京日本橋區駿河町
大阪高麗橋二丁目

冬季増刊「磯ちどり」目次

寫眞口繪

小説

國文

消息文

普通文

和歌

新躰詩

名流雜俎

雜報

少女文庫

華族女學校學監下田歌子女史著

第壹編 お伽噺教草

全一冊菊判和裝
正價金三十五錢
郵稅金六錢

お伽噺は其昔若君姫君のお伽衆が其お相手になせし噺なり由來此種の噺は日本にても外國にてもお實話あり寓話ありて何も幼稚なる兒女の腦裡に能く映して修身の助けとなり智を磨き躰を强くするの手引草ともなるの効著し下田女史の意を此著に注がるゝ周到にして敎育に資する高且大といふべし慈愛深き世の父兄諸彥は愛兒の爲めに一本を購はれたし、

第貳編 庭訓お伽噺

全一冊菊判和裝
正價金三十五錢
郵稅金六錢

此書は本邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同種類中より其今に取りて可なりと思ふものゝみを撰み出せるなり總て此類の書中には甚た面白趣向の者ありて往古の風俗を知るの栞とせんは此上なきものあれど其兒女の敎育に適せさるものもあれは述者深く此點に注意を加へて說明したれば年少女子も一讀其意を解し得て大に風敎の裨益となるべし

第參編 內國少女鑑

全一冊菊判和裝
正價金三十五錢
郵稅金六錢

下田歌子女史が家庭敎育に熱心なる又斯文に堪能なること今新に喋々を要せず旣に此文庫も第三編を發兌するに至れり此度の一冊は我日本に於ける古來より近世迄の少女が傳記に就て大方少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる挿繪亦精妙なれば家庭の讀物として無上の寶冊なるべし

發兌元　東京本町　博文館

最近の大發明 肺病專門藥

肺病 血精

(一名)コンサンプションスペシャルメヂシン

本劑はツベルクリン●ヘートルの如き比に非ず日本及世界各國の藥局法と雖未だ其制定を見ざる一大新劑にして此藥を用ゆれば血液中に主成分の入込み汗並大小便に迄本劑の香を放ち其香の盛なるに從ひ効驗益々顯る輕きは一劑大患と雖三劑以上五劑を用ゆれば全治す大家の腎療も効なき人は速に用て非凡なるを知り給へ本劑は肺病及**肺結核**に最も適當の新劑也クレオソートの如き腸胃を害する藥品に非ず●禮狀續々來る

藥價壹 劑貳劑 八拾錢 ●貳● 五拾七 參圓 圓● 劑八四 八拾圓 ●五錢 拾圓劑 拾錢五

(郵送料八錢●拾六錢)

專賣 東京本郷湯島四丁目十五 **オリエンタル藥舘**

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致べし

東京下谷上根岸町百十一 藥學得業士 **金澤巖**

(電話本局二三二五九番)

增酒資料(さけふやす)

と壹斗の酒は直に貳斗となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法傳習望の方は郵券四錢送れば詳細なる傳習手續摘要錄を送呈す

東京市神田區五軒町拾九番地 日本授產館

わきが根治確證藥

何程重き慢性わきがにても誓つて根治し決して再發せざることを確證す價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固慢性症根治分貳圓卅錢の參種あり着金即刻送藥す

東京市神田區五軒町十九番地 日新館藥房

血塊 月やく忽ち下る確證藥

本劑(藥名調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も忽ち下す特効あり但し妊婦は流產ノ恐あるに付飲を嚴禁す價六拾錢壹圓拾錢特別製貳圓廿錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

可驚 肉色の白くなる新劑

いか程色黑きも本劑特別製分貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美ノ容貌となることを確證す

價八拾錢特別製分壹圓四拾錢

東京市神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

慢性 胃病根治劑

到底不治の難症と斷念せし慢性胃病患者は最終ノ試藥として壹週分服し見よ忽ち根治確證す價壹週分四拾錢參週分壹圓廿錢

東京神田區五軒町拾九番地 日新館藥房

腦病根治 健忘即治 記臆增進確證藥

記臆薄弱健忘腦力乏弱神經系病を根治して大に記臆力を增進す

價七拾錢、壹圓七拾錢、貳圓七拾錢、特別製分參圓六拾錢

東京市神田區五軒町十九番地 日新館藥房

(甲の二)

毎月一回發行

商業叢書

定價各編不一

列國の生存競爭は、將商業に依り勝敗を平和の戰爭に決せんとす、是の時に當り世界無比なる商業上の好地位を占むる帝國の將來は、豈に商業を以て立國の大方針とせずして可ならんや。然れども文明の商戰場に立つ戰士には新敎育を要す。商賈性來應劫記の類は既に用を爲さず。必ず學理と實驗とにより、世界を敵とするの方譜を具へざる可らず。是れ此の商業叢書が目下の必要に迫られて發行するに至りし所以なり。著者は盡く專門の學士。其書の眞價はまた多言を要さゞるなり。

法學士 勝部國臣君著

實用手形法釋義

全壹册　洋裝菊判

特製金四拾錢　郵税金六錢
並製金參拾錢　郵税金六錢

手形の使用は今や金融界の最大便法と爲り之に因て現金の授受を省き商取引を圓滑にし以て商工業の發達を助長すること擧て言ふべからず然れども其信用擴張の結果は手形濫用の弊を釀し延て經濟界の恐慌を生するの虞あるは近時の實況數々之を證す而して其弊を生ずる所以は一は手形の性質を解せざるに原づく手形法の研究は實に法律家及實業家の爲めに最も緊要となれり本書は痛快に之を明説し論評せり。

目次

（甲の三）

發兌元　東京本町　博文館

著名士學大家執筆 ∴ 有名和洋畫伯插繪

洋裝菊判美本　　壹册百卅頁餘

世界歷史譚

全部卅六册 ∴ 每月壹回發行

第壹編　釋迦……高山文學士著　觀山畫
第貳編　孔子……吉城文學士著　不折畫
第參編　耶蘇……上田文學士著　不折畫
第四編　ビスマーク……笹川法學士著　象堂畫
第五編　ハンニバル……大町文學士著　古也畫
第六編　マホメット……阪本文學士著　蓮藏畫
第七編　漢高祖……三上文學士著　蓮藏畫
第八編　ルソン……島田法學士著　蓮藏畫
第九編　岳飛……笹川文學士著　金秋畫
第拾編　コロムブス……桐生法學士著　白識畫
第拾壹編　ガリバルヂー……岸崎法學士著　不折畫
第拾貳編　彼得大帝……佐藤文學士著　春汀畫
第拾參編　華聖頓……福山文學士著　古洞畫
第拾四編　孔明……安藤法學士著　松亭畫

法學士名尾良辰君著

第廿九編

クリスピー

遠藤耕溪君畫　正價拾三錢　郵税四錢

伊太利の統一はエマニエル王の英邁とガリバルジークリスピー諸人の風雲の際會とに成れり然るにガリバルジーカヴール等前后世を去るの後獨り生存して希代の大手腕を揮ひ伊國をして一躍て歐州強邦の列に入らしめたるものは實にクリスピー其人なり本傳其人を寫して活躍出んと欲す際觀たりといふべし

第拾五編　ソクラテス……久保田文學士著　不折畫
第拾六編　グラッドストン……近松法學士著　不折畫
第拾七編　歷山大王……幸田文學士著　不折畫
第拾八編　王陽明……白河文學士著　春汀畫
第拾九編　ガーフ井ルド……酒井文學士著　不折畫
第貳拾編　デモスセヂス……十時文學士著　古洞畫
第廿一編　シエクスピーア……中村法學士著　春汀畫
第廿二編　那破翁……土井文學士著　不折畫
第廿三編　孟子……永井法學士著　春汀畫
第廿四編　成吉思汗……太田法學士著　不折畫
第廿五編　クロンウエル……松岡法學士著　耕溪畫
第廿六編　戈登將軍……赤松法學士著　春汀畫
第廿七編　虞蘭士將軍……布施法學士著　春汀畫
第廿八編　ウエリントン……高木文學士著　春汀畫

定價●壹册拾參錢●六册七拾錢●拾貳册壹圓參拾錢●廿四册貳圓五拾錢●郵税壹册各四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の四)

月代



白馬會出品

（齋藤棠白氏撮影）

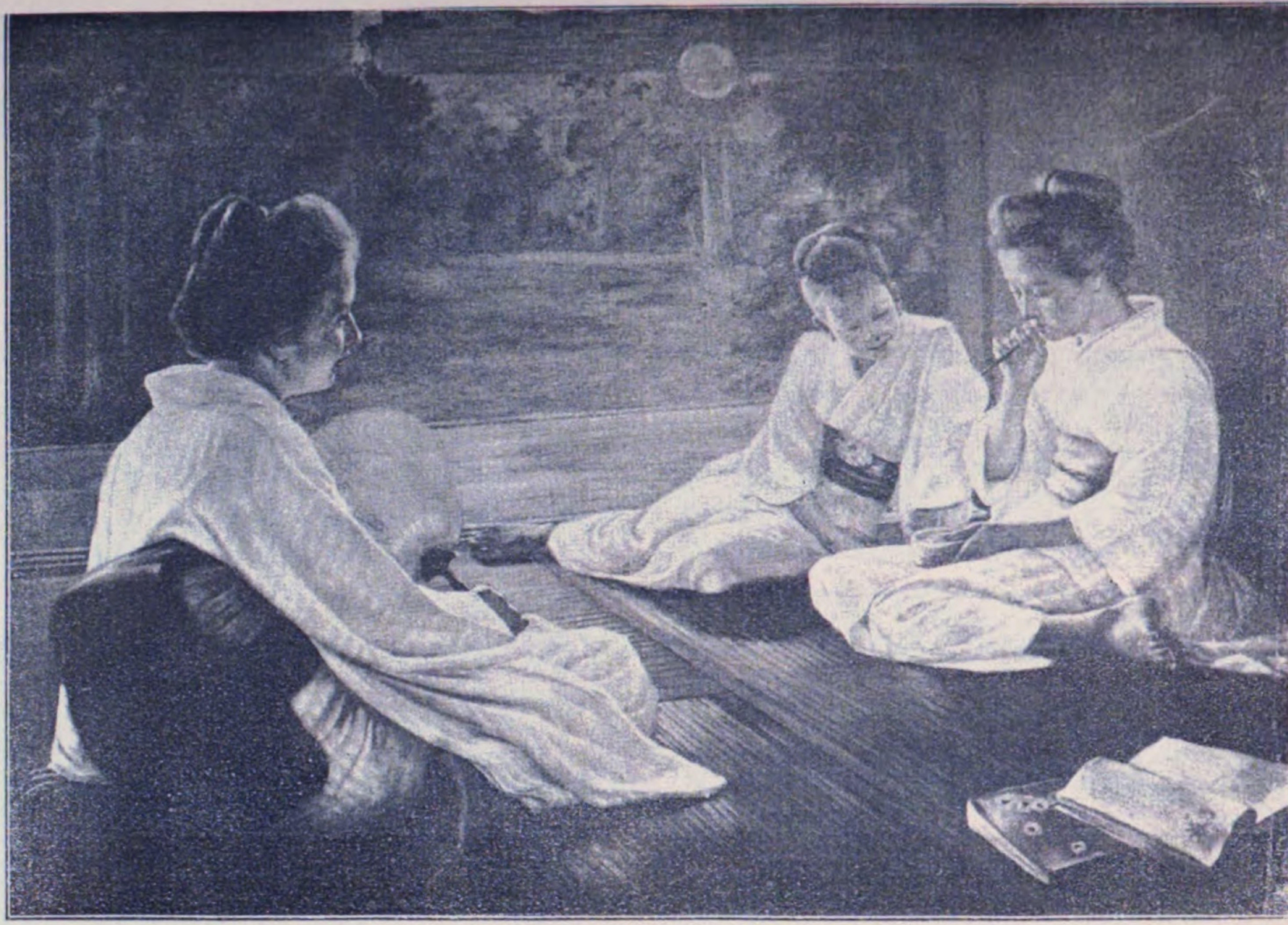
白瀧幾之助氏筆

瑞西名所



レマン湖畔シオン城

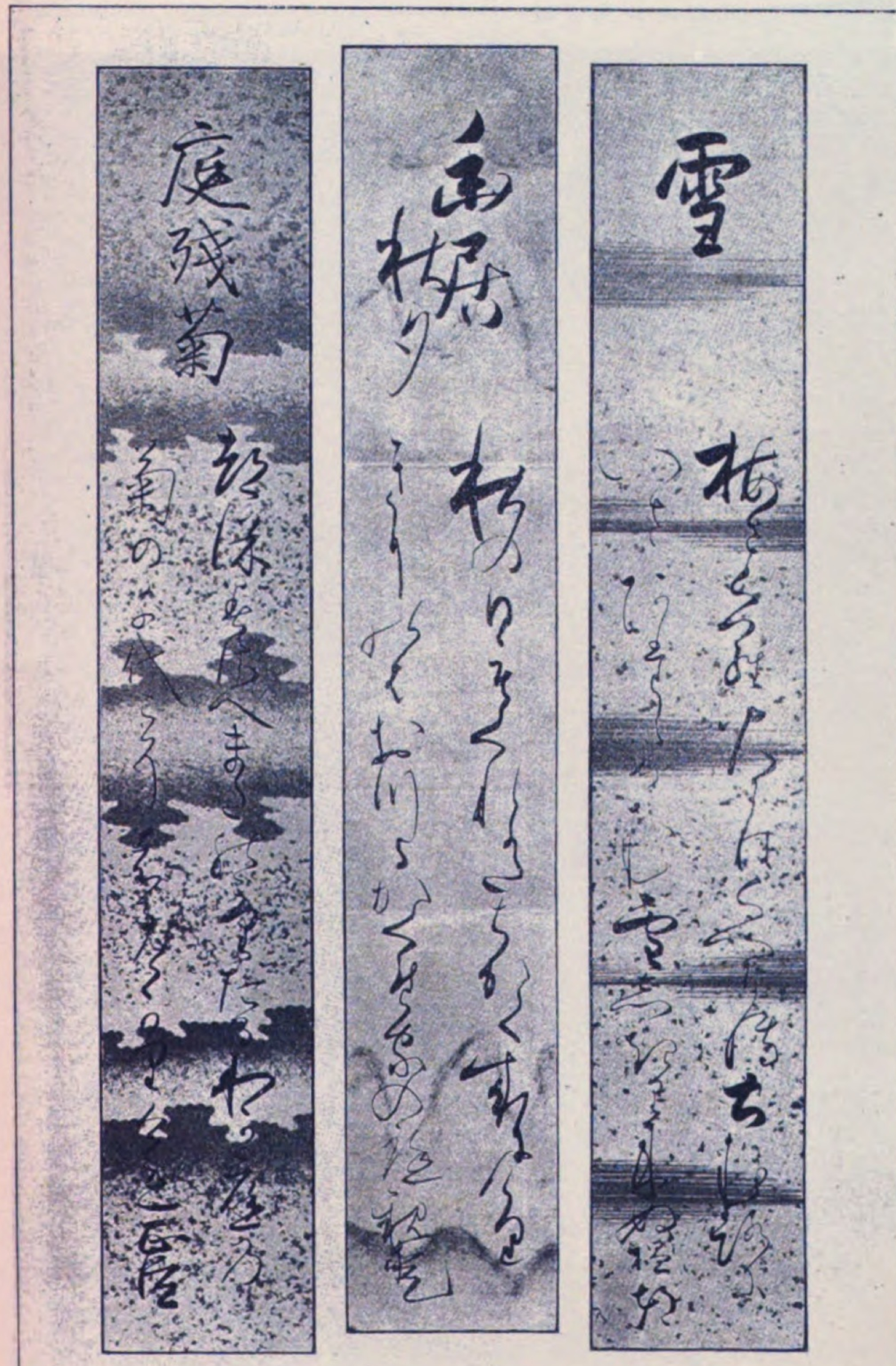
白馬會出品



（齋藤紫白氏撮影）

北蓮藏氏筆

名家筆蹟



小杉榲邨翁　多田親愛翁　坂正臣氏

編輯顧問　哲學博士 農學博士 新渡戸稻造　エー、エム、ベーコン

編輯主任　櫻井鷗村。津田梅子

THE ENGLISH STUDENT

英學新報

英學興隆の今日幾多英學雜誌の後進として本誌の世に出る自から主張無くんばあらず、其主張其價値は豫め自覺するを須ゐずして刊行の後ち世に評價わるべし、要は醇佳なる俗語の活用と高尚なる英文學の皷吹とにありて學生が校課の餘力に資し兼ては教師諸學の參考に補ふあらんとす、

●第壹號要目●

（十一月十五日發行）

社說 發刊の辭 **寄書** 教育家偶語○英國高等師範學長イー、ビー、ヒューズ子稿 **講義** 新渡戸博士著武士道●イゾッリ、シユ、ストーリーズ、ルハンブラ和譯、●アルハンブラ和譯

飜譯 福翁百話英譯、 **會話** 自轉車行

書牘 德川將軍贈與の寶刀に關する米國公使ハリスト大統領クランドの贈答文其他、材料 **雜錄** 詩人ロンクフエロー 豐富、興味津々 ーと津田梅子●英語と米語との相違●神傳說

附錄 ロンクフエローの肖像、同詩伯の手簡眞蹟（珍品）寫眞版刷

懸賞 和文英譯問題（金）（賞一●壹等金五圓●貳等金貳圓●參等金壹圓

●編輯に關する用件並に新刊書の御寄贈は凡て府下豐多摩郡千駄谷村八五三、櫻井彦一郎宛

（本誌發刊を贊助の名流●順次不同）

元英國高等師範學校々長　イー、ビー、ヒューズ
明治學院教授　エム、エヌ、ワイコッフ
立教學院長　元田作之進
外國語學校教授 高等師範學校教授　本田増次郎
東京帝國文科大學教授 文學博士　中島力造
女子高等師範學校教授　瓜生繁子
同　安井哲子
農學士　志賀重昂
東京帝國文科大學講師 文學士　高山林次郎
學習院教授　石川榮次郎
ドクトル、オヴ、デイヴイニチー　ケリー、ッ
第四高等學校教授　杉森此馬
東京商船學校教師　齋藤[illegible]郎
外國語學校教授 外國語學校教授　福岡秀猪
日本女子大學校教授　村井知至

體裁（四六判二倍大・每號廿四頁以上）

每月貳回（壹日、拾五日）發行

定價（一部金八錢●半ヶ年分（十二部）前金九拾錢●一ヶ年分（廿四部）前金壹圓六拾錢●郵稅壹部五厘

（一のこ）

發賣元　東京市神田區表神保町　東京堂書店　●大賣捌所　各地書林其他全國諸新聞雜誌販賣店

最も信用ある
最も正確なる
當用日記懷中日記發兌廣告

明治三十五年 當用日記

菊判形四六判形は紙數各五百四十頁菊半截形紙數五百二十餘頁
御注文は必前金

當用日記 五種

菊判大形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）……正價金六拾五錢 郵稅拾四錢

菊判大形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金五拾錢 郵稅拾四錢

四六判形 特製（舶來洋紙背皮美製金文字入）……正價金五拾錢 郵稅拾錢

四六判形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金三拾五錢 郵稅拾錢

菊半截形 上製（舶來洋紙總クロース金文字入）……正價金三拾錢 郵稅八錢

（乙の二）

明治三十五年 懷中日記

全一册

毎月の初めには年中行事遊覽案內食品月令節物時令詩歌俳句等の記事便覽あり

特製……（表紙新案薄口船來洋紙頗美本 總クロース金文字入紙數二百八十頁） 正價金拾八錢 郵稅四錢

並製……（表紙新案薄口上等洋紙 摸造皮金文字入紙數二百八十頁） 正價金拾貳錢 郵稅四錢

弊館出版の當用、懷中各日記の正確堅牢にして實用に適するまた多言を要せす今回用紙印刷體裁製裝に至るまで尙一層の改善を加へ懷中日記は從來の厚表紙の外に屈折自在の薄表紙製を案じ又當用日記に新たに菊判大形の分を創製し且當用日記には中央氣象臺技師和田雄治君の調査に成る全國氣候一斑を揭け各月の溫度天氣晴雨等の豫測に便す之を舊年の日記に比すれば材料の愈よ豐富なると記事の愈よ精確なること江湖坊間の日記と同日に論すべからす請ふ續々御愛購あらんことを

（製本出來）

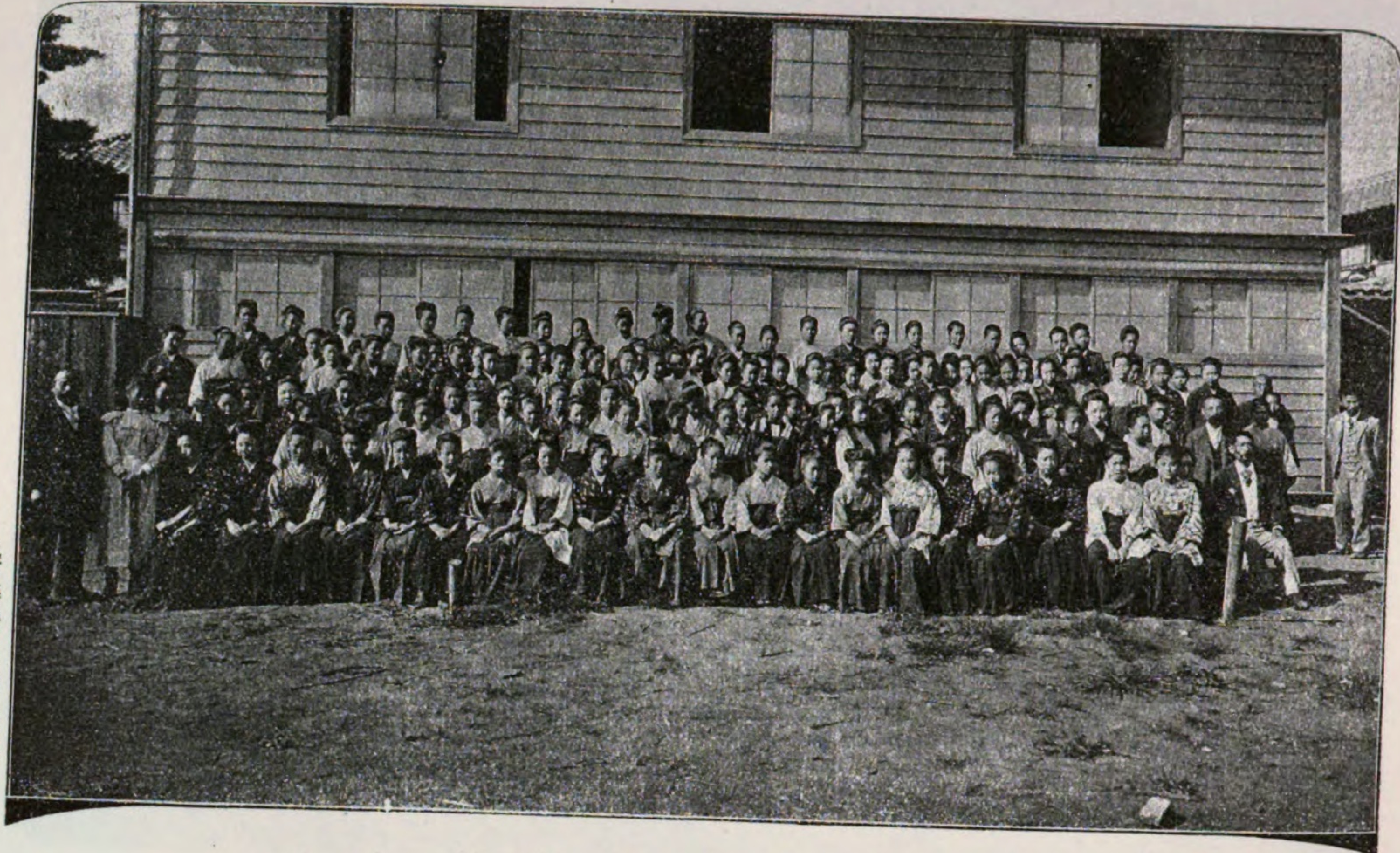
發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（乙の三）

秋の松島



（光村利藻氏撮影）



(齋藤紫白氏撮影)

東京女子美術學校生徒



福岡縣柳河高等女學校卒業生



淸國上海市街

通俗百科全書

全部廿四册　全壹册菊判＝百二十頁　毎月一回發行

安田清忠君著

第廿三編

通俗學校管理法

（製本既成）

全一册菊判
三百二十頁
正價三十錢
郵税八錢

本書は務めて實際につき平易なる文字を以て小學校管理法の一斑を通俗的に說明せり而して其材料を內外教育家の著述に基き其理論と應用とを參酌し加ふるに多年斯道に從事せし實驗に徵し其利害得失を講究す蓋し一には本邦學者列傳及現行教育諸法令を揭け一は以て碩學鴻儒の性行を知らしめ一は以て教育令の通覽に便せり故に教育に從事するの諸君は素より本書を机上に備へざるべからず

既刊目次

- 第一編 通俗日本歴史…足立栗園君編
- 第二編 通俗世界歴史…長谷川誠也君編
- 第三編 通俗明治歴史…坪谷善四郎君編
- 第四編 通俗徳川十五代史…岸上操君編
- 第五編 通俗文學汎論…奥村信太郎君編
- 第六編 通俗倫理學…足立栗園君編
- 第七編 通俗法學汎論…法學士桐生政治君著
- 第八編 通俗商業簿記…高橋邦次郎君著
- 第九編 通俗政治汎論…鳥谷部銑太郎君著
- 第十編 通俗英語案內…磯川太之助君著
- 第十一編 通俗言語學…宮田修君著
- 第十二編 通俗銀行簿記…窪河武澄君著
- 第十三編 通俗會社簿記…高橋邦治郎君著
- 第十四編 通俗經濟汎論…青山育次郎君著
- 第十五編 通俗官廳工業簿記…高橋邦次郎君著
- 第十六編 通俗理化一斑…藤野修吉君著
- 第十七編 通俗日本地理…大和田建樹君著
- 第十八編 通俗文章學…宮川鐵治郎君著
- 第十九編 通俗世界地理…澁江保君著
- 第二十編 通俗動物學…河村守輔君著
- 第廿一編 通俗教育學…永持德一君著
- 第廿二編 通俗獨逸歴史…河上清君著

正價前金 ●自一編至十五編一册廿五錢●六册壹圓四十錢●十二册貳圓七十錢●十六册以下一册三十錢●九册貳圓五十五錢●郵税一册八錢

發兌元　東京　博文館

（丙の二）

角田竹冷君閲
牧野望東君
星野麦人君
共著

俳諧年表

製本躰裁優雅にして几上に備へ繙る温古知新の風趣あり

本書は延徳元年より明治卅四年に至る迄四百十三年間の俳諧關係の總てを網羅し山崎宗鑑が一休和向に參禪せし以來俳道の出來事俳人の生死俳書の編述等一目瞭然の年表なり俳家文學家歴史家は座右欠くべからざる珍書なりとす

製本既成……發賣

正價六拾錢郵税八錢

全壹册和製上製

博文館發兌

福地櫻癡居士新作脚本

再版

芳哉義士譽

歌舞伎座新狂言（劇編）登場

全一册洋裝繪表美本

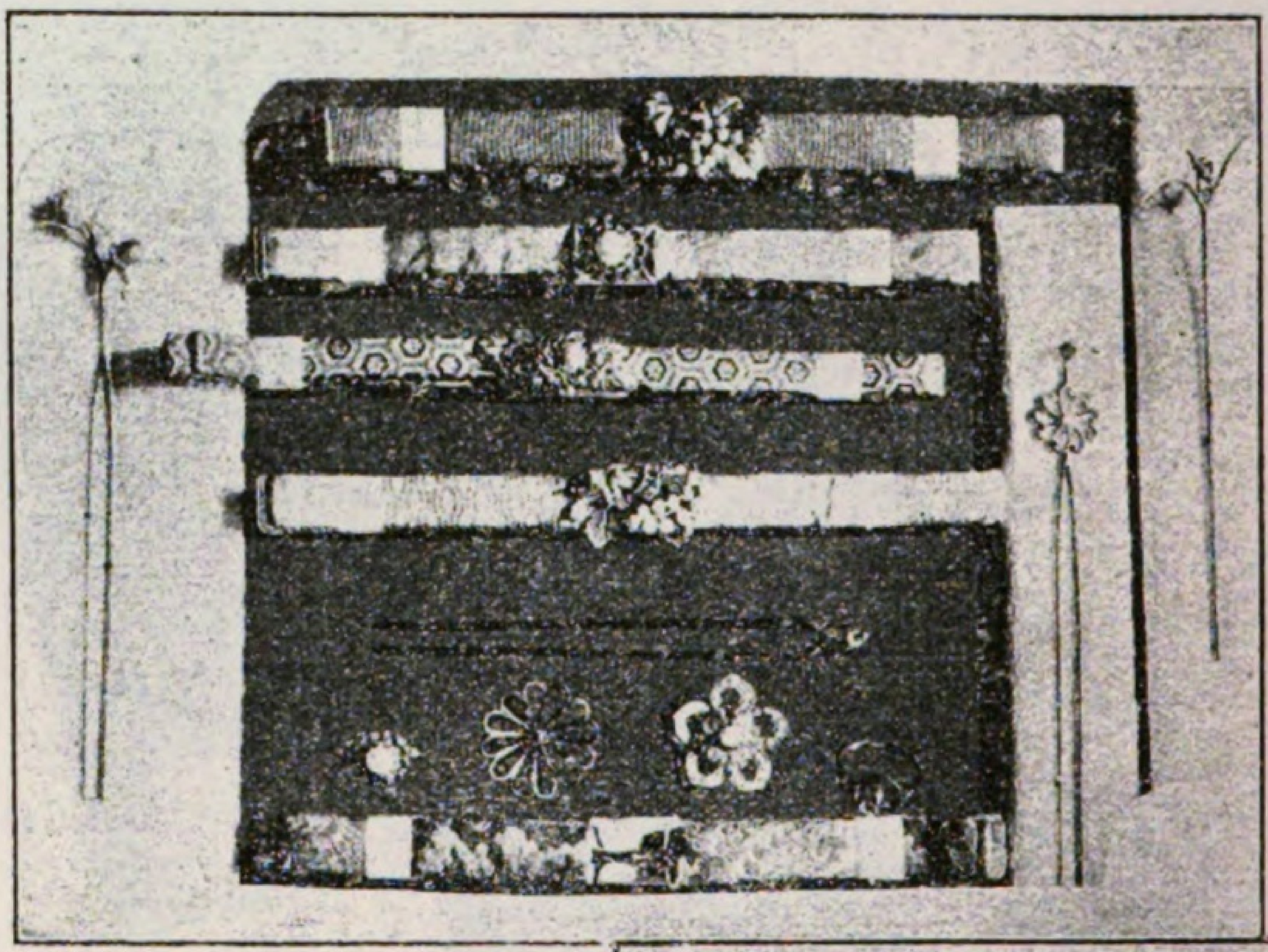
正價三拾錢郵税四錢

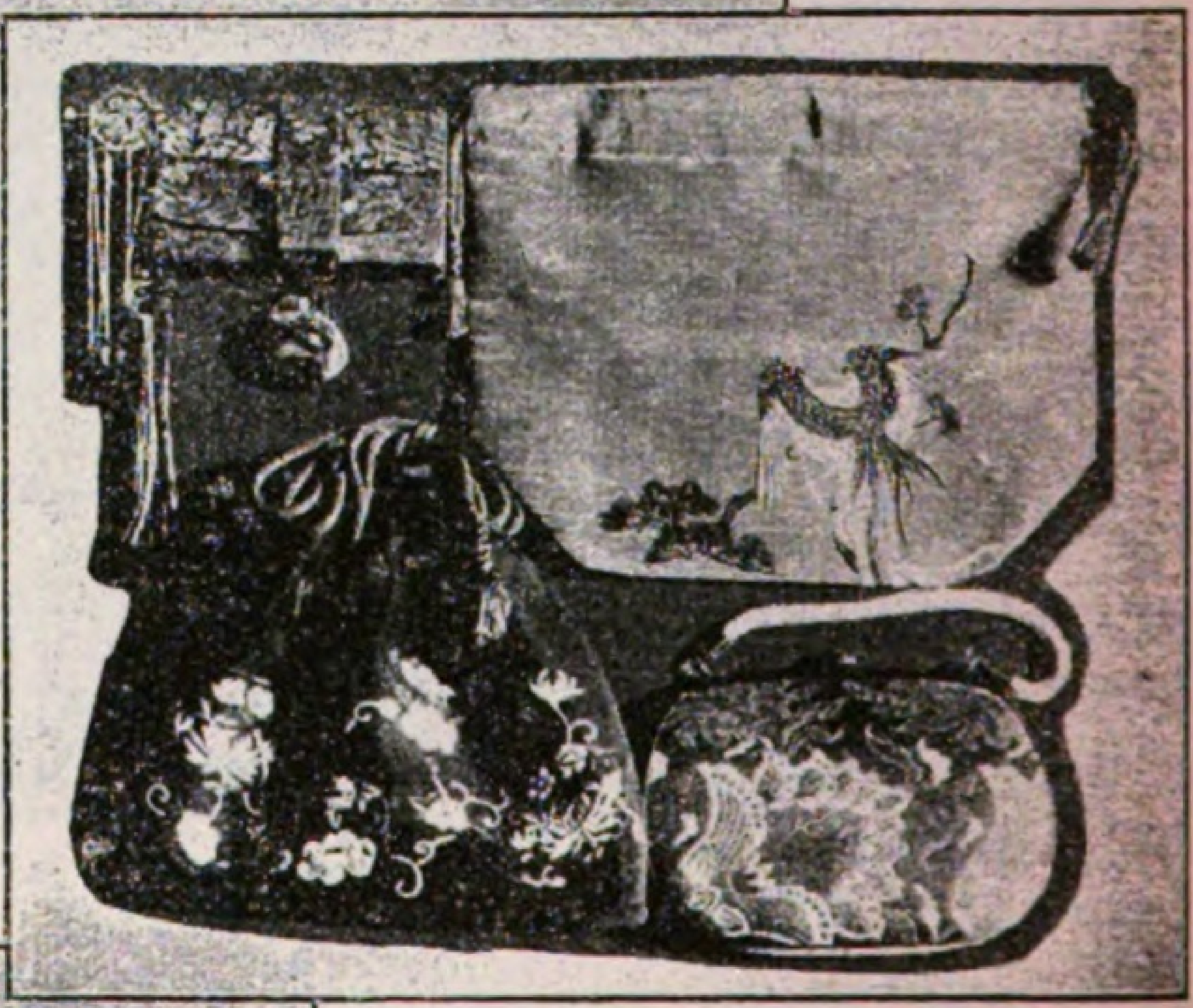
此脚本は櫻癡居士の新作にして團菊兩優久振の登場演劇に上るものなり其筋書は赤穂義士復讎事畢りて諸侯家へ預けらる大石内藏助等十七人は細川邸にありて慎で幕府の裁許を待つ幕府にては其處刑に關して議論兩派に分れ遂に切腹に決す此際大石の心事細川侯の義俠又は夫妻親子の訣別最後の決心等を脚本として之を五幕に作る櫻癡先生の斯文に堪能なる新に喋々するを要せず江湖の諸君陸續御購讀あれ

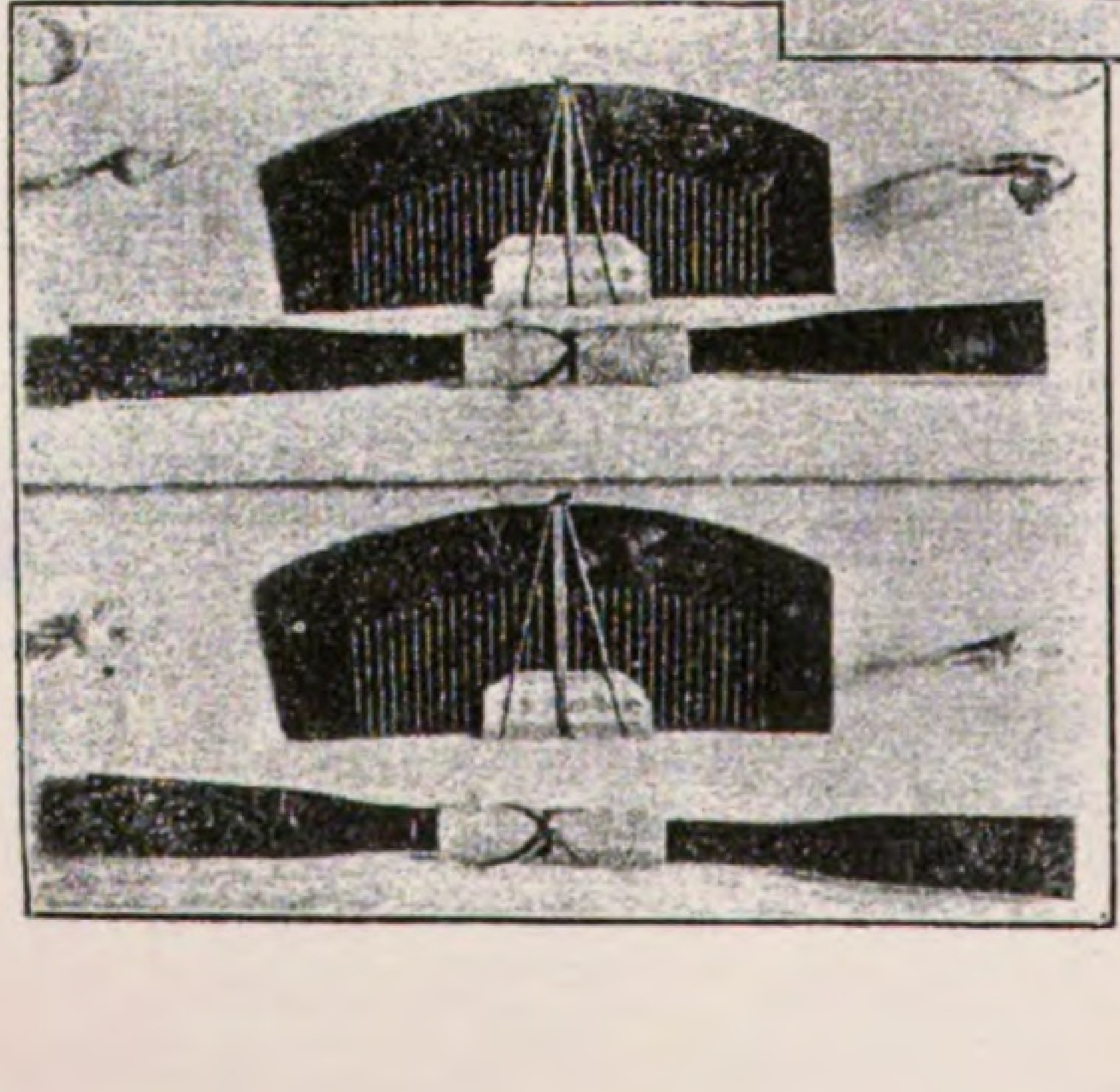
發兌元博文館

（三の四）

流行のくさぐさ



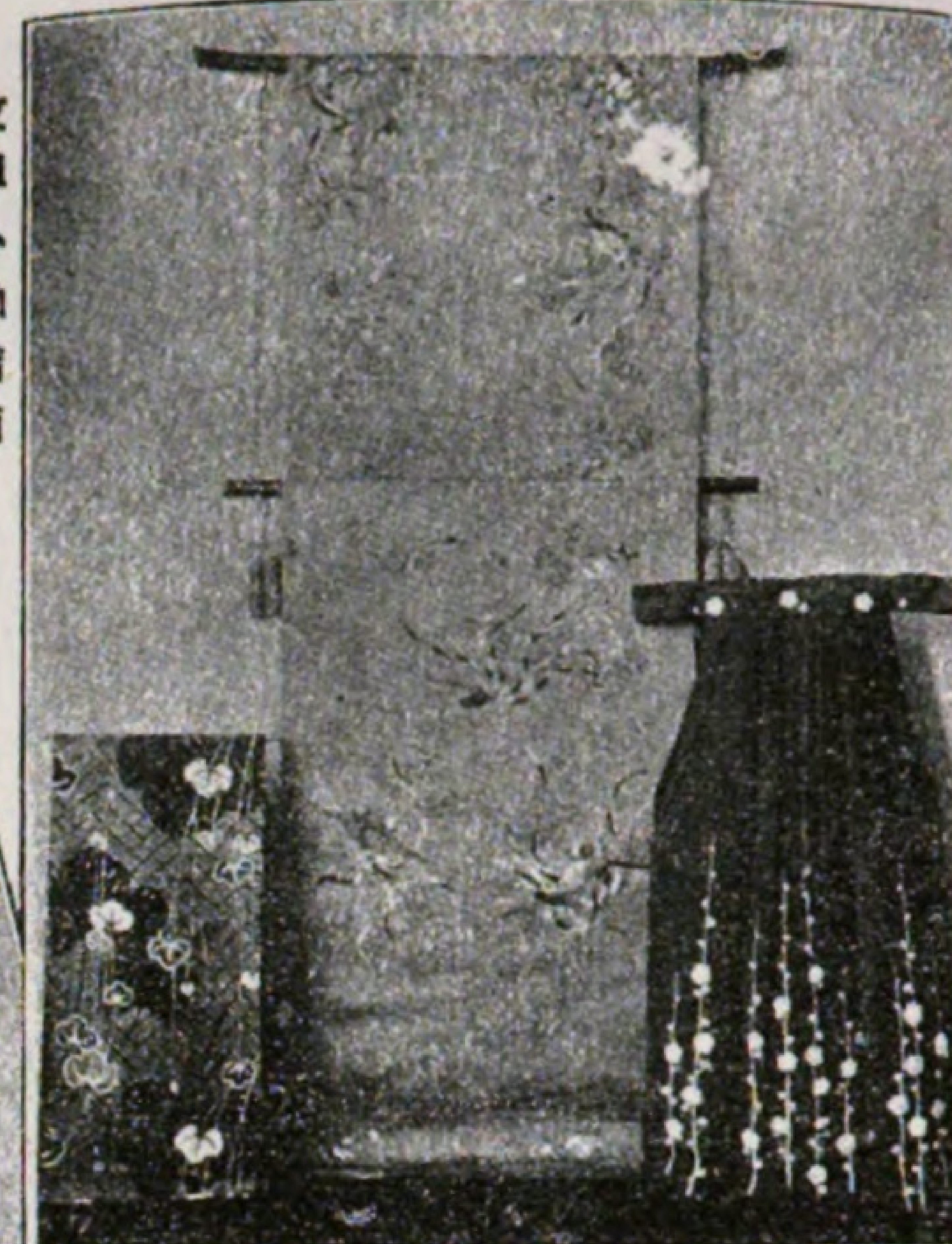




（雑録欄参照）

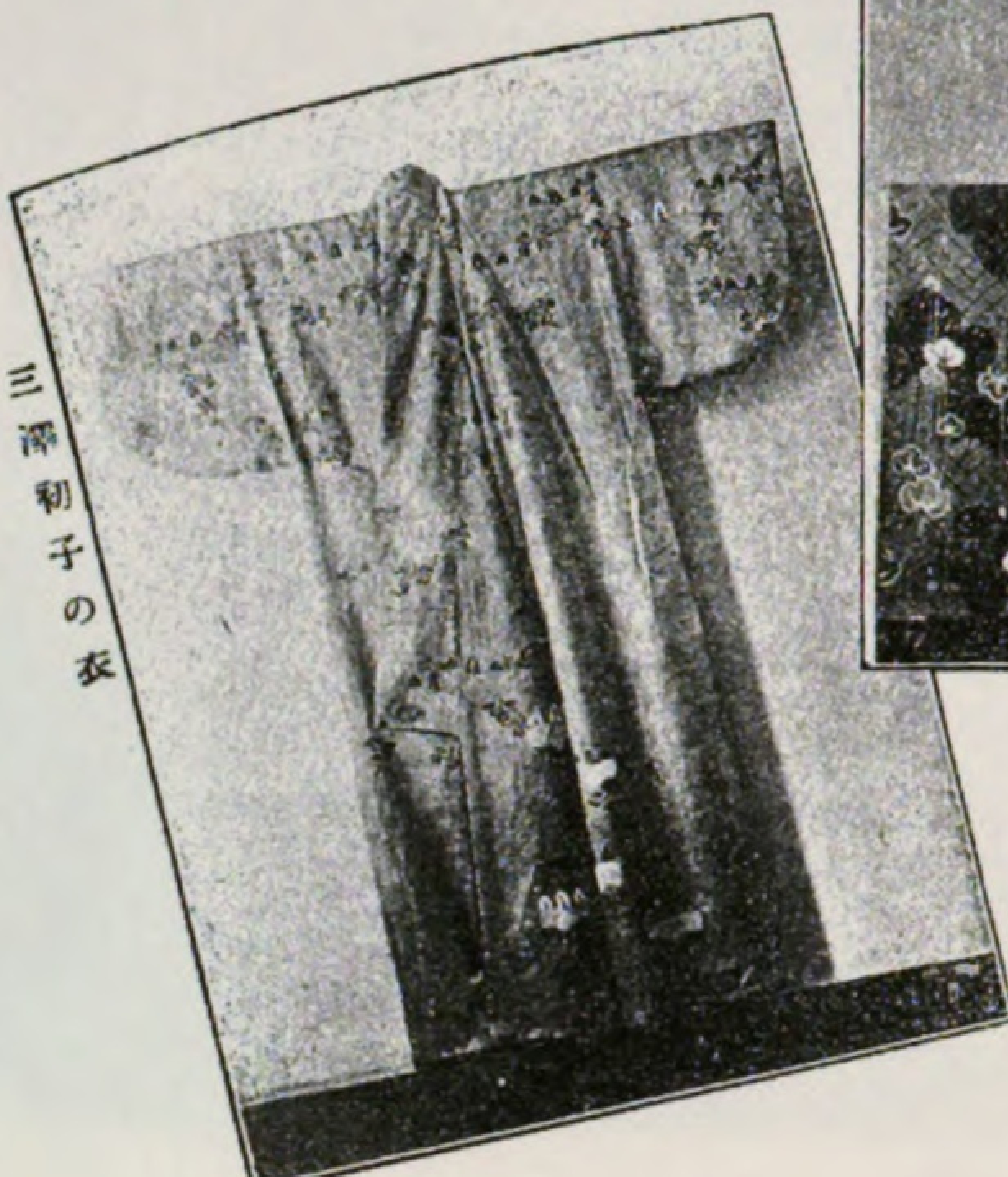
三井呉服店陳列場參考品の内

錦織丸帯

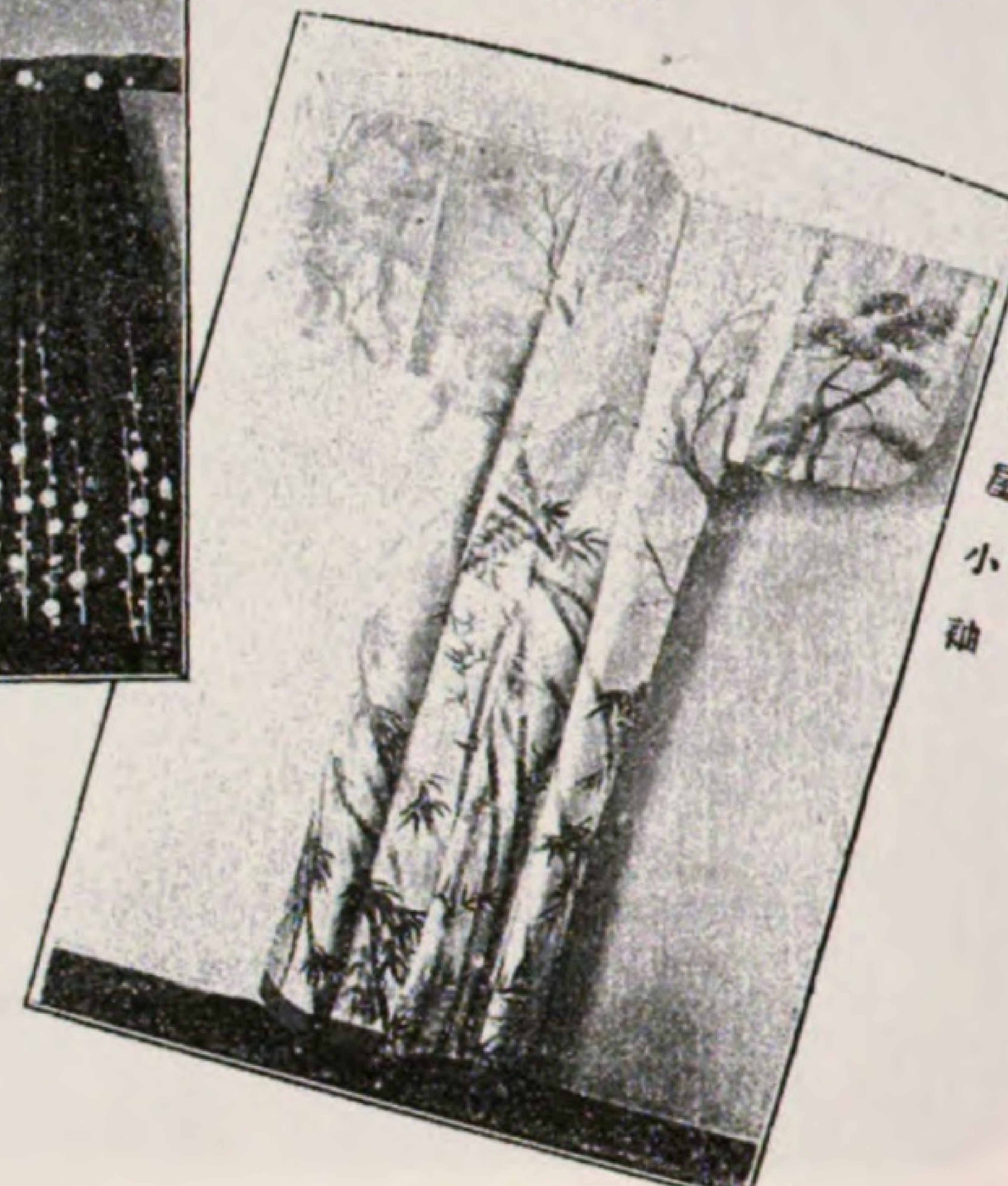


友禪小袖縮緬

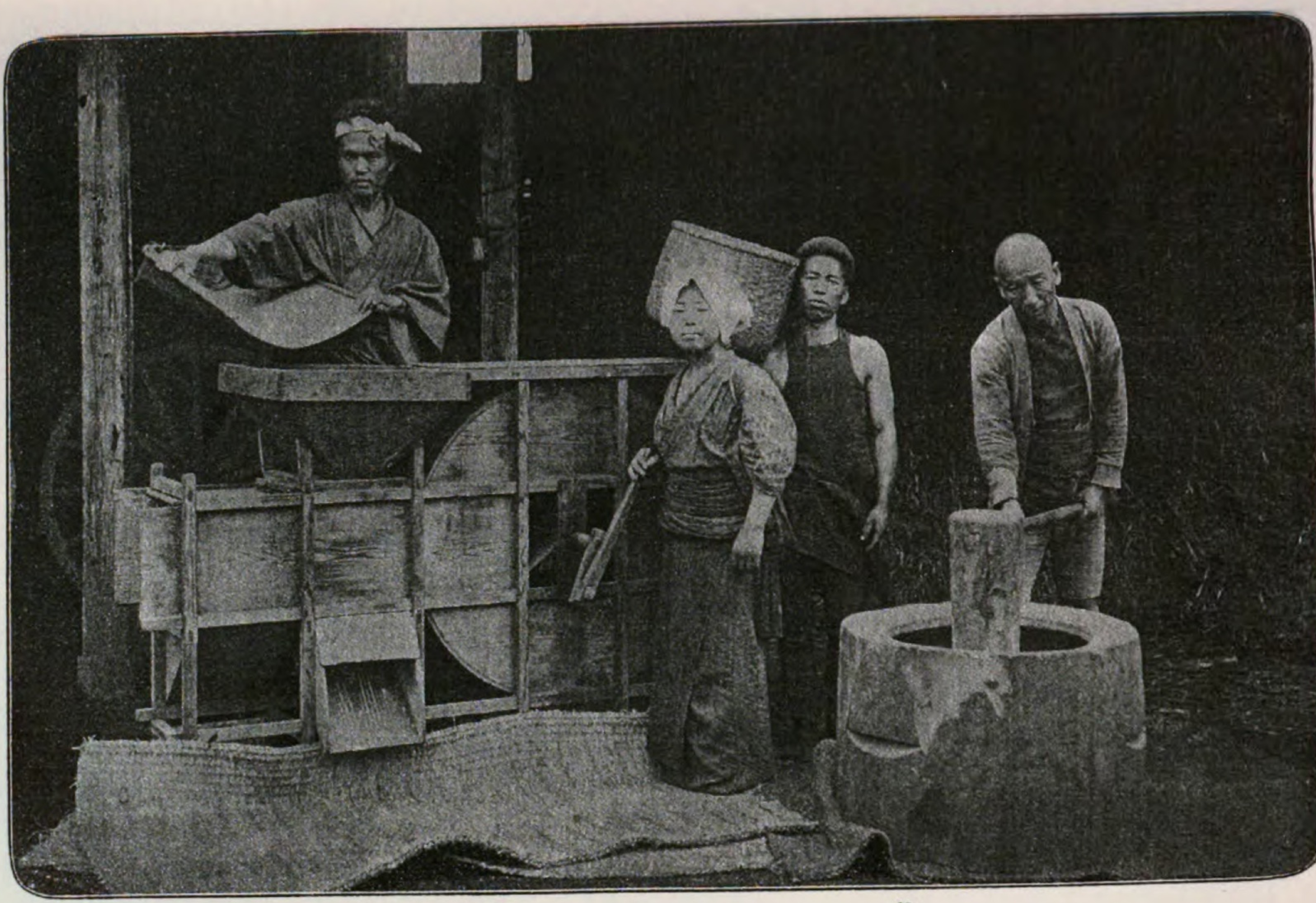
〃禪縫紺女袴



三澤初子の衣



淀屋小袖



收穫



男爵夫人末松生子



少年史譚

全部拾貳冊洋裝
大判美本 毎月壹回發行 定價 壹冊拾五錢◉六冊前金八拾七錢◉拾二冊前金壹圓六拾錢◉郵税壹冊四錢

偉人の傳記は人生の嚮導者なり、慰藉者なり、譬へば雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して勇往せしめ、又人を慰藉して艱苦の中にも失望せざらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。言ふ勿れ古人の傳のみと、觀察の新を以てすれば、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。少年史譚の著者は、見識筆力共に當代の撰、而して平生私淑せる古人を擇び、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血あり、涙あり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳紀中の好傳紀也、……《文武堂藏版》

第壹編 平相國

高山文學士著 筒井年峯君畫 （十一月廿日發行）

本邦歷史中最も趣味あるを源平時代と爲す、而して最も趣味ある源平時代に於ける最も趣味ある人物は實に平相國清盛入道其人に非ずや、樗牛先生其椽大の史筆を揮ひ、少年諸君の爲に茲に是の偉人を傳す。風雲卷舒、意氣千秋、讀者卷を掩うて尚ほ眠る能はざらむと。……

第貳編 鎭西八郎

國府犀東君著 武内桂舟君畫 （十二月廿日發行）

源平時代に於ける武將の標本として、強弓の譽は歷史に勇しき巨跡を留め、海上の探險者として船の通ずる所。伊豆の七島より琉球諸島に航し、王化の及ばざる地を開拓して波浪の如き極めて變化多き歷史を有する者は鎭西八郎爲朝其人也。滿腔の同情を以て此歷史を書く、平易にして流麗、蓋し少年の好伴侶か。……

發兌元 東京日本橋區本町 博文館 ◉ 大賣捌 東京神田表神保町 東京堂

（丁の二）

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六册袖珍美本

風雅文庫第壹編

都々逸の栞

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雜題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を揭集し卷末には雜題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雜俳家のみの重寶にはあらず

製本既成
正價金貳拾錢
郵稅六錢

風雅文庫第貳編

冠句の栞

雜俳中の流行物なる冠句は冠附、傘附、狂俳等の名は變れども全國に廣く行はる、本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初めめ全國作家の秀吟を網維し、卷頭には卷附の作例を擧げて初心の爲めに東西を指し、冠附題林中には冠句の題數百を蒐集し、附錄には上句附下句附の佳作を揭げたれば俳諧の參考ともなるべし

附り前句付
正價金貳拾錢
郵稅六錢

續刊目次

狂俳の栞
狂句の栞
狂歌の栞
雜俳の栞

上記の六册を纏めて奥帙に製ひ明窓淨几の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齢も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

新刊 一俗曲大全 全壹册
鶯亭金升君校訂
正價金六拾錢 郵稅拾六錢

再版 一都々逸一千題 全壹册
鶯亭金升君編纂
正價金參拾五錢 郵稅六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(丁の三)

巖谷漣山人著　有名畫伯挿繪

毎月壹回發行　全部壹百冊

世界お伽噺

菊版洋装美本

既刊目次

第卅二編　中川華舟繪

南亞米利加

虹の橋

附錄新世界

全壹冊　正價七錢　郵稅貳錢

此お噺は原著を「ガツタルの旅行」と言つて南亞米利加の有名なるお伽噺です昔支那に公冶長といふ人が居て、この人がまた鳥や獸の聲〻聞き判けたさうですが、虹の橋一のガツタルも鳥や獸の聲〻聞き判けたお話で一羽の鵠に案内され虹の橋を渡れば雲の洞へも迷入りとう〱神樣に人間の大將になれと云ふ命令を享けると云ふのですが「新世界」もまた北亞米利加のお噺でこれもガツタルに能く似た面白いお伽噺ですからサア〱讀んで御覽じろ

（丁の四）

發兌元　博文館　正價 前金壹冊七錢 ●六冊四拾錢 ●拾貳冊七拾八錢 郵稅壹冊貳錢宛

女學世界定期增刊第十三卷第十五號 後ちらし冬の巻



小說

特賞（賞品金十圓）

うづみ火

陸中國釜石鑛山內 水橋康子

兩國といへばにぎわ敷所と聞ゆれど、二洲橋畔のやゝ上手御藏橋近く、一代の富廣き庭廣き家々もみちてほるゝ富人の構えと昔のおもかげ殘る武家の邸つゞきとの片側町、時折車の音の聞ゆるばかり、春は回向院の角力の太鼓夢の中に聞て夏は富士筑波の水彩畫を天ねむの後景として、見わかぬ住居さりとて向島根岸の如き不自由は無、娘か望かなひ、かの殿の內君とならば向河岸に隱宅立てゝと望は、あながち河向ひの唄女らが母親達のみの夢想にもあらぬぞかし。

洗出の木目の立た高からぬ塀にかゝりて、盛はさぞと思はるゝ櫻の大木、枝ふりといゝ物好な一構、門の折戶片々いつも內より開かれて、づうと玄關迄御影の敷石、椽無の二枚障子いつも白う、若非のきわの柿の木に唯一ツ、光程じゆくした實の重さうに見へる、右の方は萩垣にしきりて茶庭ら敷折々琴の音のもるゝもゆかし。安非別宅との門札、扨は木町のかど通掛りの人もうなづく物持、家督は子息にゆづりて此處には卞日の頃めふけし末娘、名さへ愛とよぶのと二人先代よりの持傳

家藏はおろか、近頃手に入し無比の珍品、名書も此娘の爲には者數ならぬ秘藏、生附とはいへおとなし過とは學校に通ひし頃も、今琴の稽古にても、近所の娘か小言の引合は何時も此家の御孃樣との噂聞に附、倚々父親の不憫增なるべし。

いつもは御庭に松葉もは入時分秋頃から御隱居樣のはさみの音も聞えず、どうかなされた事かと拾八九の赤ら顔、紫めりんすと黑の片側帶氣にしつゝめづら敷車賴に來たお三をつかまえて口も八町手も八町走るさすが車屋の女房の立咄、どうして〱御庭いぢり所か御本宅にては御取込で御目出度けれど、此方樣では秋からかけて孃樣の御病氣、御隱居樣の御心配それは〱實に御氣の毒でならぬ、今年は菊も好出來たけれど御客も遊ばさぬ位、御茶の會御道具の會、隨分忙敷時なれどまるで、火が消たやう、私らも樂すぎて勿體無早く全快遊ばすやうにと祈つては居けれ共、段々御やつれなされてと常にも似ず潤るゝに、それは〱知ぬ事とて御見舞もせなむだがさぞまあ旦那樣は御心配、御可哀想に早く御全快おさせもふし度、そして又御本宅の御取込とは御噂の有た奥樣の御妹子が御方附になるの、彼宅は御目出度事さぞ此宅の旦那樣もどんなにか御うらやま敷だろふねとの同情、ほむに御隱居樣も御出掛遊ばすのであつた、急で御賴申升よ御藥取に廻らねばとかけ行に、女房も無言で塵除はづして金紋の車念入に拂、あづかりの前掛てうちん取揃えれば亭主の仕度も出來ぬ、今迄御無沙汰したのが面目無何と御見舞言た物やらと、獨言引出したとたんうがら〱と淺草の市歸か勢よく五六臺、前後して通ぬけぬ。

風は寒が好天氣淺草の觀音の市も大當、川蒸氣の汽笛もたえずひゞく、年の暮近し世間は何と無ざわめきて今日はいぬの日、明日はねの日とりの日と、扨も嫁入ざたの多事今宵本宅の嫁の妹折枝とて廿を一越た此間迄寄宿舍養ち、早くから姉夫婦に引取れて居たので、本家の娘として此處の孫としての嫁入、進まぬながら是も義理と、ひる前に隱居も古銅の花瓶と、二幅對の箱と合乘てゆかれた跡入替に、昨日花屋から來た松の枝小僧が取にくる御上の分下の分とわけた御膳籠もは入附添の手代より目錄もそれ〱行渡り役目すめは御祝酒の廻りて女子供にざれかゝり大聲立て、ばあやにいらまれこそ〱と出行跡、ばあやも跡の事心附て自慢の

かね黒〳〵と大奥様が形見の鼠小紋三紋附着ておよろこびやら、皆々の御禮も兼てさ今の内お風呂にでもおは入なさつて少し御庭でも御覧ないまし、おやすみ遊ばしての内私か御附申て升摘と、看護婦に替しは兼とよびて年も同十七の氣に入差よつてほつれ毛をかきあぐればほろ〳〵と涙白枕に毛布に、お嬢様御察申升かねは口惜て〳〵彼方の奥様に喰附てやりとう御坐升、ばあやさんもばあやさんだ貴女の敵におよろこびにゆくなむて、義理だつても私口惜貴女〳〵はなぜ、御敵中たやうに御父様や御兄様におつしやらなかつたので御坐升よお嬢様、唯心で涙をこぼしていらつしやる柄猶御病氣も重り升わと、主人ながら友達共思ふ仲よしのかうは言た物の、言過て病にさわりは



せぬかと今更冷汗色をかへての心配顔、嬉敷に附我身のかひ無は堪兼て夜着に顔差入て忍なき、兼が進ろ薬に息をついて兼やもう御言で無よ、此様な病になつた爲父様と姉様の御仲も丸く美敷すんだのは、家の爲によろこんでいるは私、静夫様は肺病だからとて死と定つているではなしと言はつて下すつた物の先様でもお一人子御兩親の御不服なのは、あたり前だわね、ちいつともうらむ事は無ねえ兼、よし折枝さんがゆかぬにした所がどうでよそからおもらひ遊はすの物、御姉様の御望をかなへた方がねそうであらふたが今朝も父様が悲想なお顔を遊ばして、私しや自分の慾はあきらめているがせつ角父様もゆるして下すつて、だが父様はどうして静夫様を御知りなすた

のだろふ、我知て居て、知ている所が私柄と、いやまて思は思を生て心經の高ぶつて居今、先何事も胸にと、ほんに承はれば我がわるう御座升だが孃樣御結婚はなさらず共御心に替り無ば、お嬉しう御座ませう静夫樣も決て貴女をおわすれは、これ覺がお有でせうと取出す手箱の内香わせし白ばら一輪、中に深雪つもる夜の明星かとばかり紫匂ふダイヤモンド、此指輪は彼人の手に日頃光しそれよ白ばらは二人が紀念の、さゝやきし其時の息やこもるなつかしやとばかりつく息も苦氣なり。

我が涙ながら來し頃は早暮て、七間間口に並びしてふちん門並の附合も廣く、此處一町はやみの夜ならず金屏の松盛ふる色を示前に支配人の立つ居つ、何の奥樣一の忠義振かと腹は立ど、さすが襟かき合せ店に奥に二度三度心ならずもよろこび述て扱孃樣よりと、包ほどけは、父親の好戀人の意匠、おもとの實七つゝ四分と五分の無疵の珊瑚惹りに惹りし花笄今宵の縁故となる可、兄より祝物それを贈心はと父親も主もはおやも顔見合すれば我は堪かねて涙はら〱こぼしつゝ外にも一品花嫁には幸に見られねど盃受く静夫はわな〱と、打ふるひぬ、つき上る苦敷思も涙も共に唯一息眼つぶりてのみ込ば、又盃は嫁に廻りぬきちりと取手に光物静夫が目に入し時、花笄の片々する〱とぬけて、かた袖仲人が取つくろふひまも無、盃臺のわきにみぢんとなりておもとの實は、ころ〱と静夫が袴の前にころがりぬ。

祝儀すむやそこ〱定紋の車幾臺大川端の家にとむかへりあわれ病人やあつしくなりにしが、あたゝかき息こもろうばらの園うやさまよう、細き息の通ふばかりとや、にきわしき家の外にも淋敷こゝの庭木にも夜一夜木枯の吹あれて、あくるあしたよりあわれ父翁の面痩目にたちぬ。

（評）書き方は稍や古風なれど筆のあゆみ凡ならず、二州橋半麗居ずまひの光景より、年の暮のそわ〱しさ、婚禮のこだ〱まで描きて餘情深し、病に惱める内氣娘が姨の妹に戀を襲はれつゝ猶父の爲め家の爲めおのれを捨てゝ切なきおもひをじつと耐ゆるあたり、洵々たる才媛文學をなして顔色なからしむ。

特賞

白菊

大阪　ひさかた女史

（その一）

はかり難きは人の運命なり昨日まで世にも人にも誇りし榮華の夢も覺めては語ふ友もなき野末の月に昔を偲ぶの身となる文よむ窓の燈火だに得難くて螢を集め雪を積むとし時にだに逢はゞ一躍して廟堂に立ち天下の政を左右するも難からず才秀で智ありとも時に逢はずば空しく叢の中に世にも人にも知られず朽ちはつるあはれあはれあしたの露にも似たる人の身は富貴も才も頼まれず日夜只だ運命の神の御心のまた〱弄ばるゝ果敢さよ

君が爲には命も惜しからぬ身をも捨つべしと戀ひまゐらせし靜雄の君家は富み才智また世の常人に勝れ玉ひ只暮るゝ日明くる夜をまゝならぬものにして足らぬがちなる世を望月の缺けたる事もなし過し玉へれば世にも幸ある御身と、なべての人にも云はれ亦自らも思ひ玉へりしにあり此榮華も亦只時の間の夢なりしこそ悲しけれ

果敢なき虫の類とてもつゆ徒にし玉はぬ君なるに如何なる災神のなす業にか世にも恐しき人殺しの疑をもてひとやの裏に假寢の夢破れがちなる御身とは成り玉ひぬあやにしき重ね玉ひし御身には鐵金の窓の風如何に寒からむ今年は石山にてなど語り合ひし三五の月をひとやのうちに何とか見玉ひけむ

世にも人にも捨てられて浮世の外に只一人袂を絞り玉ふ君が御心推しまゐらせては少さき此胸も破り裂くばかりにてよもすがら露まどろまず涙に明せし事幾度ぞ花麗しければ君を慕ひ月清ければ亦君を思ふ可弱き女の悲しさは君が苦み救ひまゐらせむすべも得知らず只明くるにつけ暮るゝにつけ嘆に沈むばかりなり

君が花澤男爵を殺せしとの疑は動し難き證據のありて君を誠の罪人と思はぬ人はなしとか淺ましけれど今は甲斐なし我ひとり君が無實を叫ぶとも

浦の苫屋の海士人がしほなれ衣ひるとてもしほひに見えぬ沖の石よしや乾くともほすよしもなし君がぬれ衣

あゝこれも運命の神の御心か

(その二)

涙のうちに秋風は梢々に名残止めて跡なき浮世に冬の粧ひなりぬ凄まじかりしよべの嵐寝覺の枕そば立てゝ如何に悲しくや聞き玉ひけむ君が好みし垣の白菊心ゆくまで咲き開き君待ち顔に香れどもあゝ

近きにひそむ禍のありとしも知らず蕾猶堅き此白菊を替らぬしるしとて君は衿に妾はかざしの花として此悲しくもつれなき世を嬉しきものに語り合ひつゝそゞろ歩きし夕もありけるが

今は涙に胸塞がりてよゝとばかりに泣き沈む松波藤子が心の中ぞ哀れなる

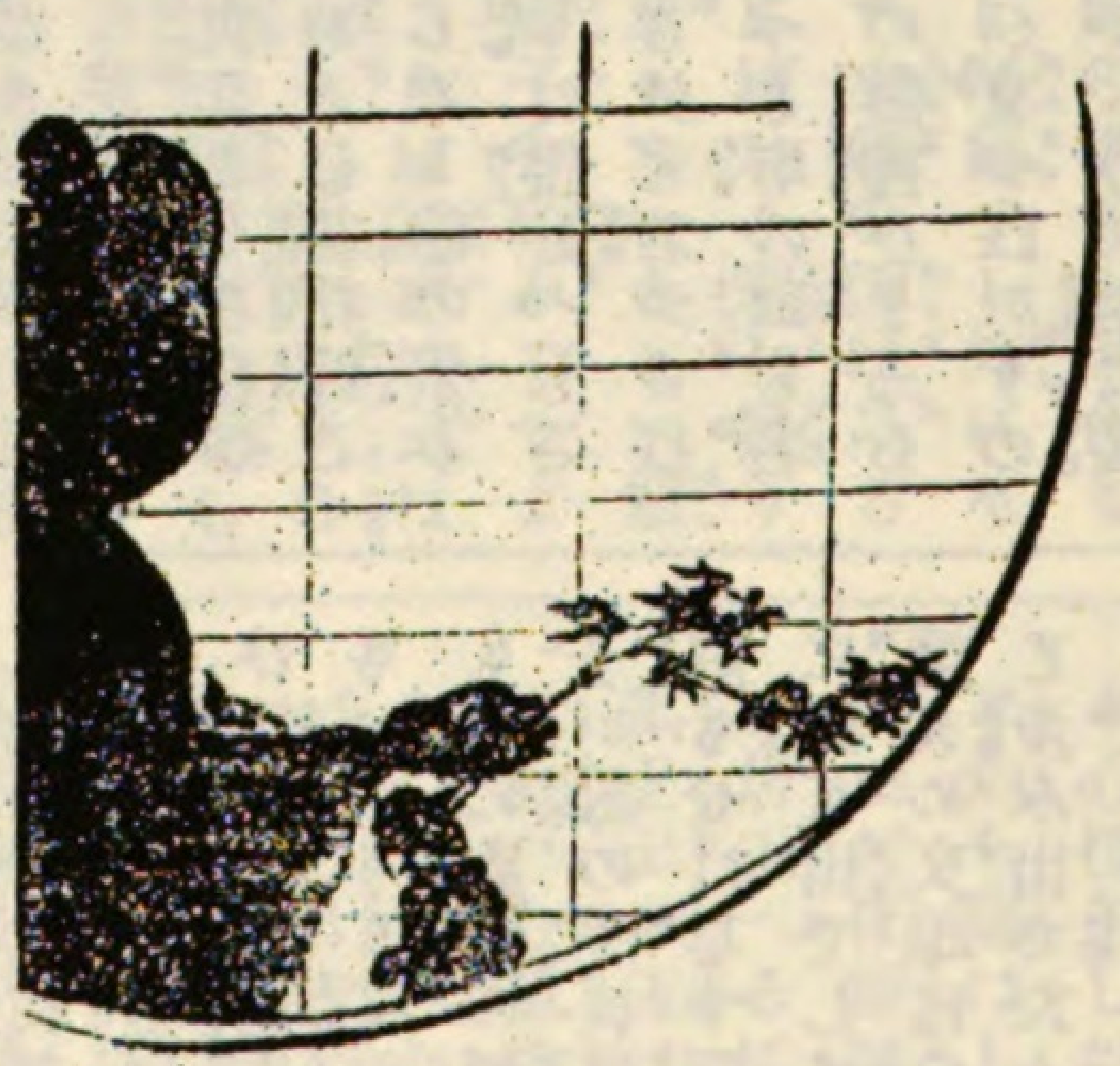
半開きし窓に身を寄せて立てる其面窶なりし頰は落ち櫻花にもたとふべかりし顔色もいたく青ざめてほそやかなりし其姿はよし弱やかに曇りし眼を見るともなく冬枯れの庭に放つ折しも枝折戸そと開きて入り來る人の氣配に涙見られじと窓をとざして内に入り何げなき様にてあれはやがて外なる人は入り來て藤子の君はいまさずやと訪へば藤子は中より障子を開きて窶れし面に笑を浮べ文雄様にてかいとめづらしやいざ此方へと内に入れ氣は進まねど詮なくて茶など進めぬ文雄はつく〴〵藤子を眺めていたくも窶れ玉ひにけるよ足らぬ事なき御身もて何事をか思ひ悩み玉ふとほゝ笑めば悩むとしも侍らねど便りなき身の杖とも柱とも思ひまゐらす人の君も知り玉ふ花澤男爵を殺せしとの疑ひをもてひとやに苦しみ玉へるが明け暮れ心に掛り侍りてと云へば文雄は驚き顔に君には静雄の君を知り玉ふかさるにても斯くまで窶れて思ひ入り玉ふは如何なるゆかりのおはしてかさても文雄ぬしの氣疎さよ静雄の君は我が未來の夫なるものをとは思ひながら流石に口には得出さず静雄の君は妾が兄の友にて兄なき後は親とも兄とも慕ひより侍りしをもて斯くなむ心を悩まし侍ると答ふれば思ひも掛けぬ事よと云ひしのみにて何をか考へながらふと庭を眺めやりて先きよりの得ならぬ香は彼の花なりけるよさても美しの花の色や菊は白こそまされなどいと氣樂げなり

(その三)

あはれ頼み難きは人の心かな彼の君ときめきておはしし折こそ朝に夕に訪ひ來て睦み玉ひし文雄の君なるに今其友のひとやの中に苦しむも得知らぬ様にて我一人淋

白げの言葉ぞ惜けれど藤子はいとゞ腹立たしくて答へだにせで打ちそむく言葉は暫しとだえてそぼふり出でし雨の音耳立ちぬ

文雄は何をか云はむとて幾度か口でもりしが藤子の君よ君が優しきみ心にて我文雄が必生の願ひ聞入れ玉はずやと云ひ出てぬ藤子は果敢き女に何の願かおはすならむ云ひ出で玉へと事もなげなり文雄はいとゞ云ひ澁りしが斯くては果てじとさればなりいと無禮なる願ひながら我を夫とは見給はずや萬づ人に勝れ給へる御身よりはさぞや身の程知らぬものとし思し給はむさりながら切なき我胸の思ひ推し玉ひてと一句一句皆眞心より出づると覺しき其言葉も靜雄の身をのみ氣遣ふ藤子の耳には露入らずほゝと打ち笑ひつゝ君には何が嬉しうてさせる戯をかの玉ふ今はなか〳〵に戯れかへす言葉も出でざればと答ふれば悲しくも聞玉ひしものかな假にも人事の大禮を戯に云ふ我とし思ひ玉ふかと恨み顔なりさては戯れにてはあらざりしかさりながら少しは靜雄の君が上をも思ひ給へ彼の君が生死の境なる公判を翌日に見てはさせる事語らむ心も出で侍らぬものを君には親しかりし彼君の上心苦しくはおぼさずやと詰れど文雄は恥たる色も無くさまで靜雄が上を思ひ惱み給ふかさらば靜雄を救ひまゐらせむ藤子は目を瞠りて何と云ひ給ふ靜雄の君を救ひ得させむとか世の人はもはら君を誠の罪人と云ひはやすとかそを如何なるすべありてと聲忙しく問へば文雄答へて君までも世の人の空言を誠とし給へりしよまことゝ靜雄の君は無實なり彼の夜我は花澤家に宿りしが夜半過ぐる頃月餘りに清きまゝ廊下に出でしに男爵も同じ心にや池邊に立ちて空を仰ぎ居給ひぬ聲かけむとする一刹那思ひもかけぬ一發の銃聲と共に男は敢えなく倒れ給ひぬ餘りの事に暫し呆れて立ち盡すうち短銃持ちて走せ出でし者あり己が隱れし松蔭より木の間をくゞり



持花
五

て裏門に出づべき道はありながら周章まどひて我見る下を走せ拔けしこそ不覺なれ我は一目にて曲者の名を知りぬ亦罪を犯せし其原因も胸に浮びぬ藤子の君此曲者を誰とか思ひ給ふと云ひ來る文雄の一言一言に藤子の顏は色づき來つ膝の進むも覺えぬ樣なり

（その四）

文雄は言をつぎ外にもあらず此曲者は我友なりき君知り給はずや花澤男は日ならず結婚の約あるを其花嫁こは我友が命も惜からじと慕ひし人なりしなり戀の恨みや難くかゝる大罪犯したる友の其行は憎むべしされど其心の哀れさに人には云はざりきされど君がさはかり心を苦め給ふを見ては何をか包むべき事の誠を名殘なく打ち開て靜雄の君にかゝる疑の雲拂ひまゐらせむ程に今は心安く思し給へ藤子が飛び立つばかりの嬉しさは穗に現はれて聲さへ浮き立ちつゝげに君は妾が爲には神とも佛とも仰べかりけれ靜雄の君の上ひとへに願ひ侍るになむさても嬉しき事よ今は心の波も名殘なくなきぬ結ぼれし心も頓に解け侍りぬ春風に逢ひし早咲の梅にもまして嬉しげなり藤子の君靜雄の君が上今はみ心安かるべしさらば先に云ひ出てし我言の葉の御返しこそ承はらまほしけれ君が言葉ぞ我生死の境なるよく〳〵思ひめぐらし給ひてよと云はれて藤子はハッとばかり頓に言葉も出でず一度冴えし其顏色忽ち青ざめて優しき目に露を含み首を垂れて言葉もなし動ありて文雄は再びのう藤子の君よ我切なる思ひに嬉しき答へ玉はずや元より我には過ぎし君ながらと思ひ込みたる業にて云ひ出てたれど藤子は首を上げむともせざりき文雄は堪えかねて二度三度促せど答へむともせぬ藤子の樣に何事をか心付きけむ忽ち口を噤み藤子が雪の手に落つる涙の露を乾度見つめたり

庭もせは早や闇に包まれて芭蕉を打つ雨の音漸ふしげに風も出でしと思しくて池の汀の枯柳あなたこなたに靡きぬ文雄は何思ひけむ立ち上り物も云はでツカ〳〵と歩み出でたり藤子はあなやとばかり落つる涙はらひも敢へず追ひすがり文雄の君待ち給ひてよ君が怒りはさる事ながら暫し止まり玉へかし我心の中も云はまほしきにと云へば文雄もさらばと座に歸りぬ藤子は悲しき聲に語り出づる樣君が千尋の海よりも深き御情は身にも餘りて嬉しけれど妾には末はと盟ひし夫ありさばかり我身を思し給はゞ此上のみ情にさる御心捨て玉ひ

て妾の操を全からしめ玉へ我身よりは救ひの神とも見まゐらす君なるにそが厚きみ心を仇にすなる我心の苦しさは如何ばかりぞやさりながら生とし生ける人の身は只運命に左右さるゝものぞこも亦神の御心にやあらむ許させ玉へとばかり涙に咽ぶ文雄は聲顫はしてこは思ひもかけぬ事よして君の夫とは何處の誰ぞと氣色も荒く問ひ出でたり夫の名をとやと少し躊躇つゝ外にもあらず彼の靜雄の君にこそ聞くや否や文雄の面は見る〳〵紅を帶び眼さへ血走りて碎よとばかり拳を握りしめつゝ息さへもいと荒く暫しは言葉もなかりしが頓に冷なる笑を含みてツと立ち上り藤子を顧みてやよ藤子君がつれなきみ心はよく知りぬさらば再びは云はじされど〳〵我友は戀に狂じて人の命をそこなひぬ男心——皆斯くの如き物ぞさもあらばあれ君は彼靜雄と嬉しき月日を送り玉へ我は今より呪ひの言葉まゐらすなりさらばよさらばと云ふ聲を跡にひらりと庭に飛び下り走るよと見るまもなふ姿は消え失せぬ

(その五)

藤子は窓に縋りてそは餘りにつれなからずや返させ玉へ今一度くりかへし呼べと叫べと梢を鳴らす風の外には音もせず藤子は力も盡き果てゝ倒とばかり泣きふしぬさりとては文雄の君も餘りならずや己れが戀の成らざりしとて罪なき人と知りながら口を噤みて彼の君を無實の罪に失はむと云はぬばかりの今の言葉あな恐ろしや假にも人と生れしものゝすべき事かはされど常より心様正しからぬ文雄の君なればさもあらむあゝさりながら痛はしきは靜雄の君か上よ翌日公判の席にてさらぬだに證據とやらのいとよく揃ひたりとて人毎に疑ひ居玉へるに只一人事の眞實を知り玉ふ文雄の君緘の事を云ひ玉はずば何によりてか君が身の隈なき事や世に知れむ嵐の前の燈火にもまして危き君が命かなあはれ汚れし人のわなにかゝり無實に命を落し玉ふ君が心の口惜しきは如何ならむ猶それよりも乾くまも無き袖の涙を友として味氣なき世に只一人存ふる妾が心の悲しさ切なさは幾倍ぞあゝ世は鬼の住家なりけり正しき者を守り給ふ神や佛はおはさずや妾等前世に何の惡業ありて斯かる苦を見る事ならむ今は便らじ神も佛も君死出の旅路に出て立ち給はゞ妾もなど遲るべきなかりしに塵の世の浮身には死しぞ殊に嬉しけれ藤子は涙の中に斯く思ひ定めしが惱は漸ふ亂れて今は

何事も思ひ分かず夢現の境をたどりぬ

（その六）

暫時吹き休む風雨の間の物音ふと聞きつけて性體無かりし藤子は顔を上げたり青ざめし頬には幾條かの黒髪亂掛かりて涙の跡さゝしるし露けき眼に異様の光りを浮べて屹度耳を立つればこたびは少し明に聞えぬ正しく外より音なふ物音なるにこの夜半に誰ぞとは思ひながら庭傳ひに折戸開けばこは如何に窶れたれど紛ふ方なき山峰靜雄なり藤子は仰反るばかり驚ろきて靜雄の君には侍らずやひとやにのみと思ひ侍りしをこの夜半に如何なるよしありてかかゝる處へと叫べば靜雄はあなやとばかり藤子の君聲をな出し玉ひそ夜半とは云ひながら此處は公の通路ぞとく〳〵人無き居間に導かせ玉へ何事も其上にてと四邊を見廻しつゝ聲を竊めて云ひ出でたりさらばと藤子は夢心地にて我居室に導き入れぬ燈火の光りもて靜雄を見ればありし面影跡なく失せて頬の骨高く髭さへ延びて眼の光り只ならぬに淺ましの御姿やとばかり泣き伏す藤子に向ひてひとやにありし此靜雄如何にしてか此處には出て來しと思し給ふ藤子は言葉なけれど心の騷は打ち顫ふ聲の疑にも知られたり驚き給ふな我は今嚴しきひとやを破りて逃れ出てしなれ身に覺えも無きぬれ衣を被ぶりてひとやの苦は受くるとも何日かは雲間の月の誠の光り現はれずやはと頼みし甲斐もなく我ながら怪しき迄に萬の證據皆我を罪人なりと指さしぬ世の人の我を眞實の罪人と云ひはやすも無理ならず我運命は已に定まりぬ無實の罪に命を失ふは前の世の約束と諦めもせむさりながら忘れむとして忘られぬは君が面影なり君と誓ひし言の葉を空にして世を去るは百とせ盡きぬ我恨みなりとてもかくても一度世に汚れし名をば謳はれし身の清かりし元の身に返らむとしも思はねば今度誠破獄の罪を犯しぬこは只君と共に片時たりとも暮さまほしとてなり君が心は如何にぞや

更くるにつれていやすさむ風雨にいく度か心を驚かしつゝ云ひ出でたり藤子は心騷がれて言葉も出でず靜雄はいよゝ急き立ちて今は徒に悲む時かは我は掟に背きし罪人ぞ片時を爭ふ今の場合心おきなし玉ひそ汚れし行と見下げ給はゞと云ひ掛る言葉を遮ぎりて藤子は屹度面をたゞ靜雄の君よ我心今は堅く定まり侍りぬいざ伴はせ給へ何處地へなりとも御心のまゝに

さらばとばかり笑を含みて突立つ静雄遅れはせじと藤子も共に立ち上り荒れ狂ふ風雨の中に駈け出でたるが黒白も分かぬ闇の中に姿は忽ち見えずなりぬ

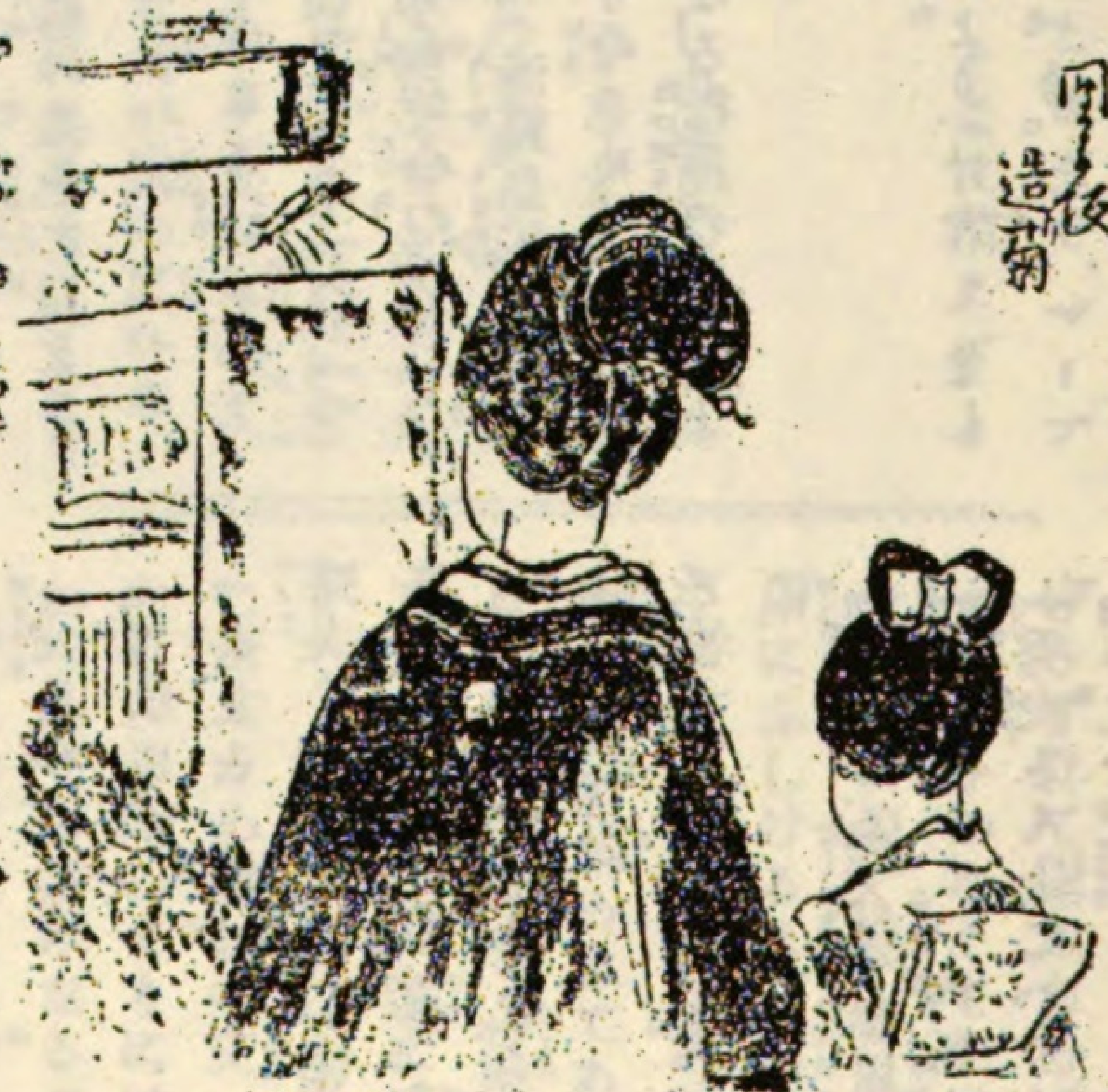
空はいよ／＼荒れまさり天地も裂けよと荒ぶる風雨に折るゝ梢の音凄し

蝦夷が島根と名に呼ばれし北海道の山おろし雪また道を踏み分けて十勝が岳の岩がくれ世を忍ぶ身の便りよしとて花の都をあとに移り住みし若夫婦あり

名に高き北海の雪積るが上に積りそひてこゞしき岩根も見え分かず日を遮り道を蔽ひし草木も跡なく埋もれはて瀬に白む谷川の流れさへ止まりて身にしみ渡る雪の風絶えまなき外の寒さをよそにして閉せし窓の許なる爐邊に榾朶折くべて打ち向ひ聞く人もなき山里の心安き思ひのまゝに語り興じていと樂しげなり尾上によばふ獸の聲凄く吹雪烈しき今宵もまた

閑夜 造菊

（評）想は新らしとにはあられど文に氣勢ありて讀むに倦からず、凡作にあらじ、力めて止まずんば造詣する處大なるべし。



天賞

磯ちどり

和歌山市北田邊町三九?村方
藤田いさを

（一の巻）

漫々たる紀水のながれに臨みたるたかどのゝ、おばしまにもたれつゝ、物の本をよみ居るは雪子なり、三位薩摩の守の後をはる／＼と見おくり給ひて、涙をおさへてたゝれたりしに、忠度、前途程遠 馳懐雁山之暮雲と、高らかに詠ぜられければ、三位も、ひとゝ哀れに思ひて、涙をおさへて入りたまふと云ふに至りて、さても哀れの御身の上や、昨日までは雲の上に、凋零の霜をしらず、搖落のあらしきかずして こまやかなる春のゆめにゑひ居たまひし公

達の、今日は、都なる花の友垣おとにして、後會の期なく別れ落ちたまひ、明日のやどりの心おきせらるゝことよ。劍槊相摩して終夜澄わるのうち、如何なる夢をか結びたまふらむと、今更感にたへざるが如くなりしに、やがてかたへになげやりつ、夕暮の景色に目をうつしぬ。

限りなき海原をながめつゝ、思ひありげなる樣、それよ詩人の見給ふならば、必ずや新躰詩とやらの一つ二つ口ずさみて、このわかくうつくしき少女が心のうちを、これやかれやと推しはかり給ふらむ。淡路島影もかすかに消えゆけば、夕陽の紅のなごり今さめて、夕づゝの光むらさきに、夜のとばりは右手なる松原の黒みよりひろごり來る。

『姉さん、御本をおくれ。』

うつとりとながめ入りたる雪子の後より、けたゝましく走り來りて弟の雪雄はかくさけべり。

『ご本てどんなの。』

フッとふりむくうち、雪雄は早くも足もとにありし書をみとめながら手にとりて、

『姉さん、これ今おわきなの。』

雪子はほゝゑみながら、

『はアいらないが、雪さんそれ持つて行つてどうするの、中々むつかしくつて雪さんには讀まれないよ。』

『何よまれないつて、かもはないわ、僕をしへて貰うんだもの。』

『誰れに。』

『秀夫さんに。』

秀夫との一語、いかにおやしく雪子の耳をつらぬきしならむ、頬は紅に、されど、彼女はほゝと笑みき。

『そうなの、そんなら持つておいで、かまはないから。』

『はア。』

と答へてかたへを去らむとせしが、思ひ出せしが如くに、

『姉さん、僕今手紙を以て行くのよ。』

『誰れの……何所へ。』

『秀夫さんとこへ……見せようか。』

『お見せ。』

『だけど、誰れにも見せるなつて云つたわ。』

『誰れが……。』

と。雪子のとひかへせしに答へず、雪雄は、

「これよ。」

とて、一通の文ふところより取り出して、雪子の手に渡しぬ。

あはれ、たが文なりしならむ、しらず。

唯、十日の月かげ、あざやかにてりしときまで、マーブルに刻みし如き動かざる雪子の影は、そこに消えざりき。

（二の卷）

こひしきしたはしき秀夫樣。なやましのゆふべの夢にも、その面かげを浮べては、枕にのこすこそのいとほしく、庭の葉かぜにさめての後も、其のまぼろしに憧憬がれしそのなつかしの人は、さても甲斐なや、妾が一人のいとしき妹の、妾れと同じき思ひに、小さきむねをなやます面影の主ならむとは。そゞろありきの夏の夕、かしこにかすむ松原のかげに、切なき姿が胸の思ひの、そぶりに出でゝや彼の君は、妾れのうれしきうれしきことをの給ひぬ。あはれ其のゆふべより、百花きそひさき、匂ひにみちたる春の野を、獨りさまよふ心地して、胸には暖きさゝなみの、吹きくる風にしたがひて、晩江の清き水渡るがごとくおぼゆるなりき。されど、妹の心をかへり見よ。かくまでに思ふ心は、かしこのわだつみにもまさりて廣く深きに、其のさわぐ胸の大波小波の餘波だにも、彼の君の心にかよはぬを、いかにつらしとかこちけむ。そを思ひかへしやれば、日かげうすれて雨ふらむずる秋のひろ野をたゞひとりさまよふ思ひのなくてやは。

先きつ日の、曉の風にえたへで、かりそめながら病の床にふしけるも、性來、いき〱しかりし彼女の、けふこのごろわきておとなげに、憂ひ抱けるが如くなるも、皆、これが爲めにてあるならむ。うすくれなゐの兩頰、日にあせゆくも、心につらき涙の雨にうつろひ行くにてあるならむ。遂に思ひたへて、うちふるう手に筆とりて、心のまことつゆいつはりなく、耻をもかへり見でしたゝめしよべの文、あゝやさしの妹よ、ゆるしませ、あしざまの心よりにはあらねども、彼の文、妾れはくりかへし〱讀みたるぞ。こひしの君にさゝげむとて弟にゆだねたる彼の文、げに妾れはよみたるぞ。その時よ、かの文よみしそのときよ、夢かやうつゝか、まどひもだえし姿がこゝろのうち、哀れとそなたは思はずや。

心の奥にひそめる一むらの憂ひの雲、次第にとく廣くなりて、雨をおこし嵐をふかし、よろこびの波を排ひつくして、暗にきらめく光、光をうばふ暗。心は千々にもつれゆく。

思へ、妾がこひしきその人は、またわれにはやさしき妹のそれならずや。されば、この戀を得てわが心をみたさんとするは、やがて姉たる道を誤るものにはあらざるか。よしそは然らずとするも、わが戀人を得たる暁に、妹の思ひいかならむ。已みなむ、わが思ひ。されど、妾れ今思ひたえしとて、きづかはしやな彼の君の御心、もとより、朝に道ゆく人はその夕を見ずといふらむ冷やかさにはあらぬ御心にておはせば、妹の願ひ容れてたもれと云ひしとて、妾れにのたまひし、松のこかげのやさしの言の葉ぐさ、いたづらにうらがらせたまふ樣にも覺えず。さらば、さらば、あゝ、如何にせばや。めぐる思ひはなほつきず。

一しきりの時雨、松風にまぎれて過ぎゆけば、秋の日全く暮れけり。煙に似たる淡き雲の一ひら、西の空にたゞよひて早足く、こなたをさしてかへり來る海士の子の、ふなうたやゝに近づきつ、左手の堤のものうる家に早やほかげ三つ四つ見えそめて、さきの雲、細く長く、消ゆるともなくきえゆけば、天清く風さえて、うすぐらきたそがれの氣、幽黯の色をたゞよはせ、悲愁のかげをのせて身に迫り來る。

あはれ雪子、今日はいかにして明け、いかにして暮れしか、それよ彼女のこの一日、苦しみともだえとの黑き大なる翼に掩はれ果てたりし心には、このうたがひを解き能はざるべし。

しばしへて彼女は、天の一方をにらみてほゝゑみぬ。やさしき目には早や涙なくして、くしき光の一點その奥にかゞやきしを認めき。

(三の卷)

『露子や。』

雪子の妹露子、母のこゑもてかくよばれければ、やをら思ひある身をおこして、こゑしたる方へと。

母君の御室の障子しとやかに啓けつ。

母なる人はほゝゑみをたゝえたり、いつもに露かはりし所とてなく。

『お母さん、何か御用で。』

なほほゝゑみつゝ

『そんな所では話ができないから、近くおよりなさい。』

進みしと云ふは名のみにて、彼女の膝はもぢ〳〵したる許りなりき。

『先頃もちよと話した通り、露さんも最早年頃だから、このまゝ捨てゝおくと云ふことも出來ないし、それも好い緣がなければ仕方もないことだが、露さんも若い時からよく知つて居る通り、あの原田ね、秀夫さん、實はあの人から露さんを是非にと云つてこの間媒介人まで頼んで、申込んできたのだよ。

あの人は才もあり、人からもこの上なしだし、お父さんも大抵それに定めてお居での樣なのだよ。

尤も姉の方も打捨つておいて、妹の方をさきに緣付けると云ふのは、少し異なことだがね、雪さんも露さんも、おそかれ早やかれ、どこかへ行かねばならん身だから、少しも早う一人でも定めてしまつた方が妾等の心やすみになるのだからね、

といつて、兩親がかうと云つた所で、この樣なことは親の思ふとほりに行かないものでもあるから、露さんが承知せぬと出來ることでもありませんしね、お父さんも御前からとくと露さんの心をきいて見よと云はれたのだし、何も耻かしい樣なことはないから、つゝみかくしをせずに、しつかりとした露さんの心をね、今云つてください。』



永々しき言葉して漸くに口を結びぬ。

あはれ、露子のこゝろ如何にうれしかりけむ。ありが

たきかの君の心よ、さてもやさしき母上よとて、うれし涙もこぼれむばかり。さりとてこのうれしの心いかにして母上につげまゐらせむか、さすがに弱き心の磯うつ波とみだれかへりて、云ふべき言葉もとみに出でこて、熱したるほゝをかくさむとて、うつむき居たりしに、

『いやなのかえ。』

と、とひかへされて、恥かしさいよゝまさるのみ、さりとてこのまゝ時をうつさむもゝどかしう。

やう〳〵に口をきりて、よしなにと一言。洋燈の青白き光をおびたる其のつやけき黒髪の島田髷、こゑと共にうちふるひつ。

襖ひとへ隔たりたる隣りの室に、この有樣を忍び聞き居たる雪子あまりのかなしさの音に出でゝ、むせび泣きすとは、誰れか知れりや。

（四の巻）

今にはじめぬことながら、たのみ甲斐なの人の心よ。彼の君は、小ゆり花さく香りのかげに、何と妾れにのたまひしぞ。その言の葉今妾れはまこと忘れむとせり。されどこれ、妹のあはれなる姿見かねてぞ、妾が戀の花をちらして、やさしの妹の心の上にさかしめむと思へばぞ。されど妾れは、最後の君がこゝろを頼みとしてかく決しぬ。さるに、さるに、あゝさるに、君より妹を望み給はむとて實に思はざりき。あはれ其の人が、思ふまゝなる歩みの世には、一人のこれる妾れをも　顧むとはしたまはざるか、若し妹との緣つながれしならば、それよかへりみむともし給はざるべし。戀のかたきの妹よ、こひのふかでの白羽の征矢、はなちし弓の持ちぬしよ、その妹をうらまむか　やめよ、妾が妹は、暗の中に何のおもかげも認めて放ちしのみぞ、あやめの分ぬ暗の中にさまよひたりしは妾が罪なりき。かゝる暗の世に、なほさりともと賴み居たりしは彼の君がこゝろの光妾れには望みの色にみち〳〵たる君がこゝろを見たりしなり。さるに甲斐なしや其の光さへ、彼の君のつれなきこゝろは早くもふきけして　妾れひとりはこなたに、君等ふたりは、戀のみかみのそでの影に。あゝ云はざれ、思はざれ、うらみしとて何の甲斐やある、なげきしとて何のしるしやある。こひを失ひて泣き得てよろこぶ、妾れも彼れも思ひは皆同じきぞかし。もし彼女にして、妾れのせちなき心をしりしならば、か

く容易く母の言葉に従けざりしなるべし。おゝそれよ妾がこひの成らぬものと諦めて、妹にゆづらむものとかくまでかたく思ひ居たりしを、心よわや、またもやはかなき思ひしてけり。やめよ、やめなむ。さはいへ妾れはしのばるゝ、かの君のやさしかりし御言葉忍ばるゝ。

思ひたえなむ道もがな、それよ、熊野の山のおくふかく北山川にのぞみて、浮世をよそにすまへる友垣に、おりし境遇うちあけやりし今日のかへしに、心のきづの癒えなんまで妾が家にたづね來たまはずや、深山のすまひ友なくて困じ居る折から、是非に思ひたゝせたまへとありき。それよ行かまほし、行かなむ。親しき友垣と共に、手をひき袖をつらぬる昔に立ちかへりしならば、如何にをかしきこともあるならむ。及ぶべくば、妾れも共にかの山おくに朽ちて、再びこの土にかへり來らじ。さなり／＼とひとりうなづきつゝ、見わたす方や熊野の空ならむ、はてしもなき海、青くもひろう。

（五の巻）

露子が縁談早くもまとまりて、千代もかはらぬ玉椿、千秋萬歳のかげうた歌ふも早や明日となりぬ。雪子は妹に見えんも心憂く、めでたき事に急ぎまはれる父母の手助けせむともなく、少しの頭痛を口實として、ひねもす己がへやにのみこもり何するともなく日々物うげに暮し居たりしが、今日、あすはいよゝとのことをきゝては、心に固き思ひのありしなれど、さてもみだるゝ心の中、心よわやとおのれに歸れば、家出のこと心に浮びぬ。

めづらしくもふしどを拔け出でたる雪子、椽側の柱に身をもたせかけ、すき通らんばかりの胸に雪にも似たる右手をおしあて、目を閉ぢ首を垂れて身動きだにせず。

去るは今ぞ、明日のことを思ふも心つらきに、まのあたり目に見ては、それよそのときは妾が心如何になりゆくらむ、とてもこのまゝにてはあらざるべし、小さき心いかで見るに忍びむや。去らむ、さりとて父母に願ふも、さしせまりてめでたきこともあるに、少しのひまの旅立ちとて願はむも許したまはざるべし。必ずや今四五日經てかのことの終りてよりにせよとの給ふなるべし。されば人には告げずに、今宵を妾が旅の夕と定めむ。

かく心に決すればまよひの胸のさぎり殘りなく晴れて、心は友垣のかたへに飛ぶ。實にや故里をつらしと見たる彼女の心には、異郷の空をやさしとや見るらむ。さとふく風松が枝をならして通ひ來れば、生憎にみだれかゝる後れ毛を、ものうそうにかきあげつゝ、小羊の如きまなこかすかに見ひらきて、

『妾が戀人……妹の戀人……秀夫さん……秀夫さん、妾の樣なもの、どうせかまつて下さるまいが……いゝえ、かまつて下さるな、秀夫さん、どうぞ妾の願ひでございまする、この上は妹を大切にしてやつて下され……妾に仰しやつた樣なほんの御心なぐさみまでならば……妹が可愛そうですから、妾は、妾は、捨てられたのは少しもうらみませんから……たゞ〳〵妹を可愛がつて……。』

と、はら〳〵とこぼるゝ涙に、絶えつつゞきつひとりごちぬ。柱をはなれむとすれば、綿の如くつかれし五躰、よろ〳〵とよろめきて倒れむとしつる身を、辛うじてまた柱にさゝへて目を閉ぢぬ。

（六の卷）

けたゝましき汽笛二こゑ三こゑならして、熊野通ひの汽船は今青岸港をはなれ始めぬ。あやしや何時如何にしてこゝに來りけむ、雪子の影甲板の上に現れぬ。

あはれ、妾れ今こゝに來りてそも何處に行かむとするぞ、父にそむき母にそむき、遙かに遠き友の家居をさして、何しに行かむとはする。それよ浮世のそとにたのしき花を見、をかしき月をながめて、其のかはりその影につきぬ命をたのしまむとてぞ。父ゆるされよ、母ゆるしたまへ、妹よゆるせ、弟よゆるせ、早や妾れ雪子は、世にあらぬものと思ひたまへ。故郷の花の友どちわきてかの君、後會の期をこむ世にまたむ。これよりは、衣を那智のお山にひゞく瀧のしぶきに洗はせ、心を清き北山の流れに洗はむ。

思ひ出づれば、去年の春なりし、妹とゝもにかしこの濱に遊びしとき、よせて音なき浦の波を示して、たのしからずや妾等が世も、かくおだやかなるべしと云へば、妹もまだ人の事のそこに松風のしづかなるばかりと思へばぞ、たゞ心ものどかに打ちうなづきしが、彼所は何處と問ひ出づる、そは沖の島なりと答へて、そこよりは海あらく波立ちさわぐ樣の、そなたは夢にも知らざらむ程なりと驚かせしが　はからざりき、妾れもいつしか世

のうづまく波にのまれて、おだやかなるべしと、思ひ居たりし行末は、あゝ、今渡り行く海なりき。風さわぎて、浪たかき、この海なりき。

船はすゝみ〳〵て彼れこそは妾が家の燈火ならめと見つめ居たりし火影は岬にかくれぬ。わかき女のよゝとむせぶこゑを砕きて風愁々。

（七の巻）

人は一たびものにこりては、美しきその香さへ、いとふものぞとは、君さとりたまひしか、あらずや。世に男女の中にすぎ去りしことをかへり見むは、いとおろかなる所業なり、又未來を知らむとするも淺ましきことならむ。過去のことは過去の墳墓に葬りて、新らしきたのしの思ひ湧かしたまへ。されど妾れも人もかなしきことには、夢といへる一つの故障ありて、去年は今年の夢となり、一昨日は昨日の夢に入りて、いつまでも人を泣かするぞつらき。君も今日このごろまたもや御氣色のすぐれ給はぬは、その夢の甘き手に捕へられしに侍らずや。

男女の戀はたゞまのあたりなり。否まのあたりなりと思ふべきものならずや。血の湧きし己れの心もて今の冷かなる人の心をかへり見たればとて、そは悲しみを呼ばむより外にかひはあらざるべく、今の狂へる若き心もて、五年十年の後の望みを定めむとするも、何をか得る所のあるべきぞ。君たゞ戀は現在にして價値あるものと思ひ給へ。凡そ世に形あるものゝ價値あるものは幸福なり。形なきものゝ只價値のみ存するは戀なり。價値、その戀はたゞ價値のみと君は思わずや。よしや今、雲間をもれて地の大なる暗に消ゆる稲妻のそれにも人の戀は似たりけるよ。げに稲妻を過去に顧ればそはたゞの暗なり。げにその光を未來に望まんもまた闇のそらなり。然して、今目のまへに光る稲妻は形なきものゝ價値なるべし。あはれ人の戀は　それより他には出でずかし。とは、雪子の友が日毎夜ごと、彼女の憂ひを一日も早くきえしめむとて、語る所なりき。

（八の巻）

人の妻となりて、浮世の生活に入りたる露子よ、汝がうるはしの心とうつくしの姿とをもて、とこしへに夫のこゝろを失はざれ。木立ふかき所に、袖のともがき慕ひよれる雪子よ、友の物語りさては心づくしをおろそかに思ふことなくてあれ、いたづらに失望をなしそ、心

の傷み一日も早う忘れむとせば、ゆめ戀のはかなき影逐ふなかれ。げに過去を忘れよ忘れてかへれふるさとに、その日を変れその時を、筐をとゞめて待たむかし。（をはり）

（評）趣向は平凡にして取るに足らざるも文章着實にして强いて奇を求めざる所いさゝか女史の身上なり、結末の戀愛觀はなくもがなとおもへど、これも君が老婆心と見ば妨なからん。

地賞

産まぬ中

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

高塀にあたり廻らした嚴めしき二階作の一棟、黒塗の大きな門に陶器の表札には、川島秀雄と筆太にかき記されてある

小さきホックリの音が玄關口に止つたと思ふと軈て可愛らしい聲で、「露ちやん居て」と呼ばつたのは、薄紫友染の被布に品のよい瓦斯糸織の袷を着て、下髮にトキイロリボンを結んだ、年の頃十一二の丸顔に二重まぶちの愛らしき少女である、

今しも離れ座敷からは、三味線の音しめ卑く三下りの何とやらいふ歌を、仇つぽい聲で唄ふのが聞ゆるのみで、人の出來る氣色もない、

「露ちやん居なくつて」と細い可愛らしい聲を少し張上て呼んだが又答へがない、少女は手持無沙汰で何やらモジ〳〵とはにかんで居たが、軈て氣を變て臺所口へと廻つた、

擂鉢やら手桶やらが亂脈に置てある流元に、毛色美しい鷄が何やら啄んでゐたが、ホコ〳〵と人の來る足音に驚いて逃げて了まうた、少女は忍び足に家の中覗き込つゝ「露ちやん」それでも未聞りしてゐる、例の肥へて赤る顏の口輕い下女は見へないで、

程過てがた〳〵と障子の音に、はッと少女は愛くるしい目をみはれば、ふく〳〵と肥へてゐる猫が今しも眠より醒たのであろう四ッ足を伸しながら勝手の方へ歩て來た「露ちやんは居ないかしら」少女は獨言云ひつゝ猫の歩く姿を熟と見送つてゐる

パッたり三味線の音が止つたと思ふとばた〳〵と人の足音が聞えたので少女は弗と振返り見たが「ア露ちやんの母ちやん」と口走つて首を縮めたなり垣根の側へ

隠れて了た。
奥から走しつて來たのは此家の妻君なのであろう、黒縮緬の丈長の羽織と、瓦斯織の縞の荒い袷を、だらしなく着てゐる、少と面長な兩眼に媚のある口本の緊つた艶々しい顔色、年頃は三十四、五であろう、髪は丸髷を根下がりに結ふて黄楊の櫛を横に挿た、何處なく仇つぽい垢拔のした、唯が目にも元の素性の察しやられる妻である、少女の隠た垣根を後にしてゐる座敷へ這入た「露よ〳〵」癇走つた聲で呼ぶのである、
「チョツ何して居やがるんだろう」猶一層聲を張上げて、露子よ〳〵
「はい」と微な聲で、あたふたと二階の梯子段を下る音がして軈て座敷の襖が開くと、徐かに這入て來たのは露子らしい
「何して居たんだよ!」何となく怒氣を含んだ言葉付である



「はいアノー」可愛らしい曇りのある聲で答へた
少女はハッと立直つて「露ちゃんだわ」と垣に躰をひたと寄て耳を欹て、聴て居る
「アノーもないもんだ」投げる樣に云ひ捨てたが軈また、
「露ナ昨日は何處へ行て遊んで來たよ」嘲付樣な言葉である
「鈴木さんの花ちゃん許」
少女は覺えず眼をみはり唾を呑んで氣遣氣に身動もせぬ、暫の間は露子の啜泣聲と、誰やらが頻に宥めて居る樣子のみで、何も聽えなかつたが
「よくも〳〵此の餓鬼は」とさも憎々しげな聲の聞えたと思ふと、眞鍮煙管の笞にでもあてられたのであろうか「わつ」と痛さに堪へられぬ樣な泣聲と同時に、慌しく逃げていつたは露子である
「アヽ露ちゃんが……可哀想に」垣に佇む少女は顔の

色赤く青く、小さき胸にはうら悲しい感情が潮のように渦巻てくるのであろうか乳の邊をじつと押へて、愛らしい目よりは涙が頬を傳つて落てゐる

折柄威勢のよい人力車が門の外に止つて、小石を踏む靴の音がきこえた「御歸りなさいました」と例の下女の聲がした時、

「遊で來いよ、そんな泣面なんぞして此方へ來たら聞かないぞ、早くさつさと遊んで來いつたら」一間の内を睨らまへ〳〵玄關の方へ走り去つたは母である

露子は嬉とやうに、玄關口を見返り〳〵「父ちやんお歸り」小聲に私語つゝ兩手で目を拭ひながら、勝手の方へ歩て來た、

「露ちやん」邊を憚る聲で呼ぶのがきこえた、露子は弗と少女の姿を見とめて「アラッ花ちやん」轉げる樣に走つて、犇とばかりやさしき腕に縋りつきぬ、

「露ちやん叱られて」早や二人の目よりは涙が止め度なく流れてゐる「露ちやん什麽したつてその」花子は露子の脊撫でつゝ、

露子は太織の羽織を袖長く着て、下髮に赤いリボン結んだ、いつも沈める顔の今日は一しほ沈んで、流るゝ涙を袂で拭ひながら猶泣啜つてゐる、

「露ちやん妾此處できいてたのそしてね、悲しくつて泣いてたのよ」露子は堰上つゝ「母ちやん妾が他所へいつて……家の事いふからとて……怒つて」猶スー〳〵と泣啜ながら、袖をまくりて無言に示す露子の二の腕にす、さても哀れや、紫色の痣二箇所、

「まあー」と花子はパッチリとせし黒目勝ちの眼を怪しく光らせて、奥座敷の方を睨めつめながら、またも同情の涙に咽んだのであつた、露ちやんの母ちやんは惡い母ちやんだね、早くどこかへ行つて遊んで來よう、母ちやんに見つかるといけないから」

折しも木枯の風は、木々の枯葉と共に二人の袂を飜へした「おゝ寒い」と花子は身を震はせながら、泣沈で居る露子をうながし立てゝ、可愛らしい二ッの姿は、遂に門の外に消へて了つた、

奥では笑ひさゞめく聲がさも〳〵樂しそう

下

見渡す限り秋更けて、錦にまがひし秋萩の花うつろひ、露の白玉かざせし女郎花のはかなげに殘れる、姿やさしき薄は倒れ、今は僅かに野菊の白き赤きが、所疎らに

咲てゐる小川の柳蔭に、可愛らしき少女等二人何事か樂しそうに、ひそ〳〵と語りあつてゐる、今しも菊花を手に持つて歩み出した二人は、彼の花子と露子であつた、悲しい樣はいつの間にか消へ去つて、お下髪のりボンひらめかしながら、夕風に四ツの袂わほらせつゝ、笑ひつ唱ひつ嬉々として猶道を急でゐる、さるにても何に誘はれて行のであろふか、日は早や西に入らんとするに夕やけの雲は赤々と二人の美はしき面を照し大きな白い雲は北の方に延びて、段々と紫色に輝き初めた、四方より群立鳥は、村境なる八幡宮の森の中に集まつて、空には一ツの黒い影も見えぬ、そよ吹く風は冷かに小草の露をはら〳〵と散して、聽てまた、肌薄の二人の襟元を洗つて、流れて行くのである

折柄彼向より走つて來た、意地の惡るような男の子は、



ドングリ眼光らせつゝ「川島の櫻子やアーイ……泣虫やアーイ」と憎まれ口たゝきつゝ逃げて了た

露子は何物か思ひ出した樣に、早や目の中は涙ぐんで、花子の手を彝とばかり握りしめた

「あんな蟄わんな惡い蟄、相手にしないつたよ」宥め〳〵花子は左の手を、露子の肩にのせかけて、道を右へ替えた今しも今日の務をなし終へたのであろら鼻唄歌ひながら歸つて來た農夫等は、二人の少女の後姿を熟と見送つてゐる、色の黑い目の窪だ、腰切半纏を着てゐる、六十ばかりの老爺と、洗洒しの盲縞の筒袖に、淺黃の古股引をつけて、草鞋を穿てゐる、三十許りの男とであつた、二人の脊には小山の樣に草を負つて、手にはぴか〳〵光る鎌を持つてゐる

「ナント美な娘子だなアー、一躰何處の子だえ」若者は老爺を顧た「おれサアー、ありや鈴

木さんの嬢様と、川島さんの嬢様だあな」それぢや何だなアー、よく繼子〳〵といふなアー、あの嬢様の事だんべエー」

老爺は聲曇せながら「そうだアーよ、あの嬢様の身になつたら、なんぼうか辛かんべエーよ、實の母様が生てゐた時なんざアー、隨分可愛がられて育たもんだがのー」

老爺は目を瞬叩き〳〵今更思ひ出したように、歩こふともしないで熟と何物か見詰めてゐる

俺そんな事知んねエーだが藝者とか何とか引込んで置くだアーとよ」老爺は洟をかみながら默頭ゐた

「ウンそをなんだアー、先の奥様といふなアー、それを苦に病んでトウ〳〵昨年の春死ちまつたんだアーよ、俺人の事でも憎くつて〳〵、そうしてあの可愛らしい嬢様を、その女子が毎日〳〵酷ッたらしう苛めてるやがるんだとよ、死んだ奥様の行く所へ行かれめへぢやねへか、俺與當に憎くつて憎くつて」老爺は語尾に力をいれ氣が喘んで激するように謂だが、落窪んでゐる目からははら〳〵と涙を流し〳〵ホット留息を吐いて空を仰いだ、若者は老爺の話に引込まれていつか聲も濕んでゐる「だがのー、詰り旦那どんがその女子に甘いからだんべエー」「全くだアー、それだから嬢様は賢え者だて、旦那どんには苛められのを話す事ねえだとよ、與當に感心な子だのー」

折柄那處より來たか一羽の雁がはた〳〵と羽撃して、悲しい聲に後に殘しながら又も大空へ飛び去て了つた

老爺は弗と心付いて、雁の飛び去た方を眺めてゐたが二三間先に人影を見とめて、急に若者の袖を引いた口に葉巻をくゆらしながら、八字髯卑からず、氣凜とした年の頃四十二、三の脊の高い紳士である、余念なき二人の話に耳傾けながら歩んで行くのであつた

「川島の旦那どんだ」若者は小聲に、聞えたんべエーかに老爺は輕く默頭ながら「きこえたんべエーよ、惡い事したいアー」と空を仰ひたが「ア大分遲くなつたいちと急くべエーよ、家には婆妻が待てゐるだアーからアハ……」二人の影は歩一歩遠く、遂に木立の蔭に見えずなつた、

* * * * * *

櫻川の下流を左に見て、うねりうねつた道を樂しそうに語り行く二人の少女は 村より半町ばかり離れた雜

木の茂つた廣い汚ない庭のある破寺の門前に不圖立止まつた、門の家根は蔦蔓が差別なく絡み付いて、門に續いてゐる袖垣の邊も隙間なく糸瓜や蔓に包まれゐる、淸らなる小川は細い流を作つて、垣の根方に添ふてうねりうねりながら、右手の蓮田にトク〳〵と注いでゐる、千草は最うシットリと夜露を置て、可愛き二人の爪先には冷な玉がハラ〳〵と零れかゝるのである

「露ちやん、いゝ母ちやんの御墓は此處なの」俯向勝の露子を顧みて訊たのは花子であつた

「おゝ」微に答へて、足疾に母の墓に立止まると其まゝ草の上に崩折れて聲を惜まず泣伏して了た

あはれ露子の心はまあ恁んなであつたろう

身に沁むばかりの夜風は斫るが如き寒を落して來て、村はづれの農家の幾つは、早や燈火さへ見えてゐる、空の薄雲は全く拭ひ去れて、松の頂に輝いてゐる三ケ月は青白い光を二人の頭から浴せかけ、地面へは細く長く墨畵の樣な少女の姿が映つてゐる

花子は貰泣に紅の唇を嚙みしめつゝ、露子の脊を撫でながら袂に央ば面を埋めて歎き沈んでゐる

折から夕靄こめて朦朧たる袖垣の陰に黑き人影のイむのが見えた、小さき一ツの影を無言に見守つたまゝ身動もせぬ、何物かに感激したのであろう、ぶる〳〵と身を震はしたが、さも切なげな聲て

「露子許してくれ……わゝるかつた……許してくれよッ」ホッと吐息と共に大空を見上た目よりは幾筋の淚が頰を傳つて落ちてゐる

千草に啣く虫の音は深けて、折から遠寺の鐘が寂寞を破りてボーン

＊　＊　＊　＊　＊

裡なく川島家よりいぎたなく罵る聲はきこえずなつた、それと同時に露子の顏は活々として、ゆたけき頰には淚の痕が見えぬのである。

(評)達筆に書きたりといふの外別に言葉もなし。

入賞

失戀

徳島縣徳島市大道一丁目升記定吉方　波間花子

《一》

曩昔の樂しき夢はあらうたかたの果敢なき泡なりける

よ、今は苦しき現にさまよひて、亡き戀人を思ひわづらふ妾が心の悲しさを察し給へ、のー滋野の君よ御身は妾を命までもと愛し給へるは女の身のなどて嬉しからざらん、されど妾には心をゆるせる戀人のありて、未だ鴛鴦の契、結ばざりしも中々に熱き情の忘られず、あけくれ君の事のみを想ひて果ては妾を只獨り殘し黄泉に旅立ち給へる、つれなさを怨める事も屢々なるよ、愛の神はなどてわが世に、一人の懐しき戀人を奪ひたる。などて此妾も共にうばひ給はざりし、悲しき失戀のいたみの日々につのりて、今に生きたる形骸を抱けるも同じき樣にて、死灰の如き心の奈何にせん、再び愛の燃ゆらんやうもなく、只うれしき君の心は仇には思ひ侍らざるも、うべのふ事の能はざる妾の心を察し給ひてよ、のー滋野の君。」喞つやうに兩袖を合して、身は朶蘭の上に泣き沈めり。

まだ十九ばかりの花のいたましき姿、品よき島田髷のうちこはれて、髮の縺れ白き頷脚に艶なり。

滋野の君と呼ばれたるは年頃廿五六とも見ゆべく、眉美しく鼻高く日頃想ひにわづらへるか、頬の痩著しく、眼どおちて仰向に頭を勾欄に擡せ、腕交みしたるまゝ言葉なし。

やがて微かに眸をひらき、かたへの處女を打見やりて何か謂ひ出さん勢氣なりしが、あわれに點頭ける處女の裊々しく凄婉なるに、亦もいとゞ心の亂れ染めて、中々に謂ふべくもなく口を噤みぬ。

處女は滋野の心を量りてやるせなく、うらぶれたる姿を視るに付けても、胸迫まりていとしさの思ひに堪えず、さるにても此君が妾の戀ひしき其人にてあらば、如何ばかり嬉しからん、かゝる處に兩人して睦まじく言葉をかはさんものをと、坐ろ懐しの面影をうつゝに畫いて、思はずも深き太息をなしぬ。

やがて滋野の君は思ひ定めてか徐ろに、綾子の君よ、我心は最早や決しぬ、われもとより情にあつき身の、などて永遠に君を忘れ參らす事の得べき、われはさる果敢なき戀にあらず、わが命のあらん限り失戀に泣かん、勇ぎよく身を捨てわが世に望みたゝん哉。

あゝわれ滋野清は最早や此世に無きものと思ひ給はれよ、君の他に何れの人を求めてこの心を慰め得べき、只々日々に想ひはつのるのみ、憂きを重ぬるのみ、せめて君を戀せざりし昔ならば、如何ばかり此世を樂しく過

さんものを、今は絶望なり我望み何かせん、あゝあゝ君の戀人の羨まるゝ哉、われは此世に生きて失戀に悶えんよりは、かの君の如き身になりて、黄泉の客となる事の遙かに幸福ならめと思ふよ。」力なく終りは獨り言のやうに謂ひはてゝ苦しき太息をなしぬ。綾子も、我身の爲にかばかり想ひわづらへる君の優しき御心にはなどて嬉しくも思はざらんや、そゞろ淚の瞼に浮ばれて、

「妾は君が深き情は永へにわすれじ、されど淸の君よ御身は叔母様の一人子ならずや、御身今愛なき妾を徒らに思ひて、此世をつらく送り給はんには、いかはかりか嘆きに沈み給ふらん、老ひゆく叔母様のひたすら賴りに思はるゝは御身ならずや、何卒妾の事は夢幻のそれとも思ひあきらめ給ひて、の一昔の心快き人となり給ひてよ。」

淸はそれをも聞かぬ樣にて、

「われはまことに意志弱き人なり、甚だしき失望に陥いては、再び立つの勇氣もなく、たゞ重き痛みを負いて懊惱せんのみ、あゝわれなるものは此世に消えぬ。」



長き〲息を吹きて觀念の眼を閉しぬ。綾子は胸ふさがりて、今は氣の毒の思ひに堪えず、

「さらば淸の君聞き給へ、妾もし夫持つ心の起りたらんには、必ずおん身の言葉に從ひ參らせん程に、まな心をいため給ふな。」謂ひける綾子の口元を淸は徐ろに打見やりぬ、綾子は有繫にさびしきほゝ笑みを洩らせり、あゝ淸の心やいかに。

（二）

前は曠々としたる大海を控へて、此那邊に麗しき家居の續けるは、上流の人の別莊か、但しは風流心ある人のこゝにすまゐを定めけるか、何にても其内にあまり目だゝしからぬ黑板塀を繞らして、見越の松の見ぶりよき一構あり。小さき表札に滋野淸と記せるは、この地それがし新聞の主筆を勉めて、兼て靑年詩人の名聞え高し。淸の父

り清がまだ幼なき頃に冥途の人となり、母一人手にて育てられけるか、いと弱々しく心沈める性質なり。此頃清のたゞさへ憂へに沈みて、母の見る目もあわれなるは、綾子と云へる美しき姪の來りたればなり。そは東都にある弟の愛嬢にして、父母はゆく／＼大學に居る、さる知人の息子秋澄時雄と云へる心だてよき人とめあはさん、心ぐみにて相互に許せる中なれば、綾子は背の君と呼び妻と呼ばれんは何日にてあらんなど樂しみて、日毎に愛は深くなりまさり、睦まじく盡きせぬ未來のうれしき夢を、繰り返し／＼語りあひしも幾度なりしぞ。あわれ人の世に冷やかなる秋風立ち染めて、庭に白露繁き時、彼の君は無情の風に誘はれて、果敢なくも再び歸らぬ遠き死の國に逝けり、噫、綾子のなげき今更に謂はずもがな。

父母は病めるが如き憂欝に沈める綾子を、叔母なる人のもとに、あづけたらんには、切めて快よき海邊の景色にも、また慰むるよすがもあらんと、一人の下婢を附き添えて此地に送らしめたるなり。

〈三〉

今し夕陽は西に沈まんとして、名殘りの光りを波の額に投げかけ、磯に碎くる白玉はあやに纏れて、寄せては返し返してはよせ、はやも夕べの潮風は波の面を掠めて、人の心を醉はしめんとす。

例の綾子は己が書齋と定まりたる、二階の勾欄より此美しき自然の景色を眺め入れり。

さるにても想ひ出さるゝは、亡き戀人の身の上なり、こゝに來りて早や半ばの年を過ぐれども、一日とてもうれしき日はなく、只悲しみの深くなるばかり、この指の細りたる事よ、さぞやふくよかなりし頬も、色あせてやつれたらん、時雄の君よ妾が斯くも想ひ惱める心を知れるか。そぼ降る雨の夕べにも、磯に碎くる荒波に夢破られし夜半も、いとゞ君の事を偲びて、ありし樂しさを想ひ浮べ、はては耳底に響く波の音さへも君の囁く、み聲かとも疑はれて、うつゝ心の亂れ／＼暫くわれに歸りたる時は、只淋しき風板戸をおとづるゝのみ、中／＼に盡きぬ恨みの泌々と身にしみて、圓かに夢を結ばざりし夜や幾そ度ぞ。

綾子は限りある身の、限りなきかゝる想ひに耽けりて、今迄あたりの景色も眸に入らざりしが、ふと見れば早や陽は既に昏れて、渺々たる大海遠く烟り、果てしもな

き蒼空に月の光りは微白く、星は疎らに瞬き繁し、この眺め中々に人の世のものにあらず。今更にいとゞ知らぬ何物かに迫まられて、眸には一ぱいの露を宿しぬ。やる瀬なく視返れば、何日の間に下婢の持ち來りたるか、洋燈の光り眩ゆし。

綾子はひしと襟を掻き合せ、床にたてたるつま琴を採り、せめて昔を偲ぶ一ふしをもと、指をだどらしぬ。とは曾て君の心を樂しましめし名さへも懐しき想夫戀。あやつる十三絃の糸に愁をこめて、そゞろにうち顫はるゝ音は限りもなき、怨みを繰り出さるゝや。

琴の手は俄かに繁くなり、亦も力なく沈みて、次第に餘音長く冴えに冴えたり。

家内寂として物音もなく、流るゝ音の澄み渡りて、只覗ふは月のみ、ありし昔の人はこゝに非ず。

綾子は調ぶるよりは想ひ先にたち、いとゞ悲しさの胸に迫りて、あはれ帛をさくが如く聲と共に、其處に得たへず泣き伏しぬ。



暫くは起きも上らざりしが、やがて疲れたる身をよろ〳〵と、亦も勾欄に身を寄せたり。波の上も眞砂の上も、光り薄き月照りわたり、茫と夢の如く淡し。

ふと見れば磯邊に身動きもせず、立ちつくせる人影あり、正しく清の君と思はるゝはいかに。あゝ悲し、妾は亡き戀人を偲びて堪えざるを、清の君は現在の失戀に泣きて、寒き磯邊にさ迷ひ給ふ。あわれつらきは浮世なる哉。

腸を絞ることばかり、今は小さき胸に想ひ溢れて、唇をかみ締めつゝ、双手を乳のほとりにあて、眸を閉ぢたるまゝ月に嘯けり。

* * * * * *

綾子は日毎にやせゆく清を見ては心弱き女の身のいた〳〵しさ、なりて、せめて此身が、この地を去りたらんには、亦忘らるゝよすがもあらんと思ひ定め、明日は東都

へ歸らんと其由叔母に傳へぬ。

その夕べの事なりき。手に一輪の紅菊を持ち頭らなたれ、俯目になりて訪ひたるは清の君なり。綾子の側に坐し、力なく謂ひけるは、

「綾子の君、われがよしなき戀の爲めに御身と別るゝの果敢なき事となりぬ、せめて東都に歸られし後も、雨降る夜半君が戀人を偲びたる時、何卒御身の爲めに一生を犧牲にして、この一片隅に失戀にもぞゆるわれのものあるを、忘れ給はざれな、こは日頃わが丹誠せし紅菊なり、希くばこれを文の栞りになりと殘し給ひてよ。」謂ひ終りて露か涙か潸々と膝の上に閃らめきぬ。

綾子は身を顫はしつゝ、顏を蔽いて、

「あゝ此深き情あつき君が心は、などて妾忘れ參らすを得べきや、此花は君が無量の思ひを罕め給へるものなれば、永へに妾は秘め置かん、心安かれよ清の君」

清は淋びしく笑みて、

「さらば綾子の君。」謂ひ捨てゝ坐にも堪えぬやう、しは〱そこを出でぬ。

あとに一輪の馨り高き紅菊は殘れり、綾子の心今は亂れぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その朝心強くも綾子は、人々の嘆きをあとに遂に東都に向ひぬ。

（評）文辭にして想陳

秀逸

運命

志摩　山崎壽子

（上）

仰げば一輪の孤月高く天心に冲して萬顆の星は麗しく瞬き銀河長く西南の涯より北東の空さして流る。我思へばオヽそれよ今宵はふみ月七日の星の祭である我立つてゐる丘の下の茅屋で竹の葉につけた短冊がヒラ〱と夜風に躁つて其家の棟の紫羅傘の花は隅なき月の光を浴びて雅に鎭守の森の邊よりは田家の烟淡黑う立上つて露重げに生しげれる千草を割つて潺々と流るゝ小川のせゝらぎいと幽に後には一本の橘がゆかしい香を惜し氣も無う放ちてゐる「お月樣お幾ッ十三、

九ツ」と呼はう稚子のいとせめて哀れな冴えた幼い聲が何處からともなしと聞えて「いづくも同じ秋の夕暮」と詠じけん古歌の意がしみ〴〵と感じられるのであるすべて此樣な折は種々の事が胸に浮ぶもので我はそゞろに懷舊の念に沈ん「世の中は三日見ぬ間の櫻かな」とはよく云つたもので僅か五年間故鄕の地を踏まぬ計りにかくまで變り果てゝゐるものか幼稚馴染の洋犬のジョンが哀れ果敢なうなつた計りか「坊ちやま坊ちやま」とよく愛してくれた隣のセムシの婆さんも、ジョンと同じ道を辿つたまだそれのみかは悲しや同窓の友であつた前途有望の才子が恨を吞んで夭折したのもある

彼れから此れと緬想する中フッと思ひ浮んだは幼稚馴染の露ちやんの事で露ちやんは我と同じ年號の勝氣な快濶な無邪氣な少女で常々この橘をめぐつて鬼ゴッコをしたり子を取ろ〳〵をしたりしてよく遊んだものだ月清き七夕の朝互に母のわたゝかき懷をぬけ出てゝ小さき手を組み合つて消え殘る曉の星の淡き光を頂き玉かとまがふ草葉の白露踏みしだきつゝ供へ物取りし頃の樂しさ竹の葉につくる短冊の數多きを誇り燈籠の美はしさを愛でし折のいかに面白かりしよアヽ今一度天心爛熳な幼な時にかへつて無邪氣な樂をくりかへしたら

それから自分が小學を卒へて東都の中學に入つた年の夏の休暇に歸鄕した事があるオヽ其折よ我ハヂョンを率ゐてこの丘に上つた時つと露ちやんに邂逅つたが房〳〵とした黑髮を後に結び下げて二の腕の邊まで單衣の袖をまくり上げて白眞な肉付のいゝ右手に深帳の洋傘を翳してゐた午後の日脚は斜に木の葉を洩れて雨を催ほして居るが濕つてる空氣は蒸す樣に熱く蟬の聲は汗を絞るかと怪まるゝ計の間に彳んでたまぎる汗を手巾て拭ひつゝ樂しかりし種々の物語に笑ひ興じ合つたがやがてしのつく計り降り出した雨に惜しき袂を引分れた其後五年間彼の活潑な少女には接せぬのであるが人の評には父に譯れてから繼母と弟と三人何處ともなう彷徨つて居たが今はある所の高利貸の妾となつて居るとの事である我は餘りの意外に始は容易に信を置かなんだ

あれ程潔白な少女が人の生血を吸ふてふ高利貸のしかも妾となる筈が有ふかそは大方お饒舌な誰かの口から

ふと出た根なし言で萬一實としてからが何か深い事情が有つて照君の怨を呑んで心ならずも厭はしき人の眺めの花となり果てゝ居るので有ふいや人心は變り安きものだから彼女の心もいつかうつろひて淺間しき身を恥とも思はないで居るやも計られぬなどゝ半信半疑に惱みつゝ橘の木に身を凭せて夢見る樣な眼をして恍然となつた

(中)

「みだれ苦しき小手卷の糸の願もしるしなく絕し契を如何にせん年にまれなる七夕の星の逢ふせも羨やましかたしく袖におく露と消ん此身を同じくば君が邊りの草の葉に」岩間をくゞる水のさゝやき松の梢を吹く風にたとへんも古めかしくや優に妙なる琴歌が耳に入る我は常に琴の音は喜ばないのであるに今宵は何だかある懷かしいものが居て差招かるゝかの樣に何となう床しさに我知らず音を慕ふて歩み出した

我はいつか雅な別莊らしい家の前に立つて居た琴の音は既に止んで軒の風鈴がひとり床しい音を立てゝ居る折しも琴の主で有らふ簾の此方に身を表はした佳人がある張手な浴衣に流ひ髮を夜會に結んだ廿歲位いの氣高い女でやがて花車な素足に鼻緒の痛い庭下駄を引摺りつゝ此方へ歩みよるので我は見られまじと歩み去らうとした時「チヤ望月さん」と不意に優しい聲をかけて飛立つ樣に駈け寄つたは彼佳人である我は魔術の杖を頭に加へられたかの樣に其處に立縮んでしまつた彼女はいきなり我袖に縋ふたからである

狂女だらふかでも我名を知つて居るは不思議だ誰だらふと考へても一寸思ひ出されないで忙然と目守つて居ると「望月樣清樣眞實にお怨で御座いますから妾をお忘れなすツたの……妾は〳〵束の間も貴君を忘れた事は有ませんにねえ」と彼女は恨めし氣に露を帶んだ涼しい眼で眤と見上た我は何とも分ずドギマギして

「忝しついお見外申しまして失禮致します貴女は何誰？」

彼は宛然パ子仕掛にかけられたかの樣にビヨイと飛のきさまスツクと立ちて淸ちやん妾ですよほら彼の丘で五年前にお別した露をお忘れなさいましたか實にさなり昔日の露ちやんであると知得た我は汚はしき物にふれし心地していきなり露子をつきのけて屹と眼を注いだ大きゝ眼刻める如き鼻所謂曲線美の最も能く發達し

たる唇五年前の俤其まゝではあるが其折はふつくらと豊な薔薇の花びらを絹の薄ものに包んだ樣な頬のそれはそれは生々した少女であつたに今はひどく窶れて色は白しと云はんよりは寧ろ靑く眼の邊に物思はしげなる影生じて露に惱める女郎花の如何なる人をも同情をよせしむべき風情がある

かゝる可憐の少女を如何して疎む事が出來ようか旭に向へる淡雪の如我疑心は次第にとけて先刻の冷やかさをいたく悔んだ「ア、露ちやんでしたねェあまり御容貌が變つていらつしやるのでお見外致しました其後は所闊て御機嫌宜しう御母樣も弟樣もお變り無くいらつしやいますか」露子は手巾を顏にあて、泣逆吃つゝ答無つた我は何と慰めん言葉も出ず只同情の涙に咽んだ

田面から吹き送つて來る風は颯と四ッの袖を飄がへして草叢にすだく虫の音は一しきり烈しく沈默は暫時四邊を支配した

露子はやがて哀を乞ふかの如く打仰んで「妾は卑しい汚れた女でもはや昔の露では御座いません前途に光明の輝いていらつしやる貴君と絶望の淵に沈んだ妾とは天地の違でせうア、妾は義理ある母と幼ない弟との爲に一身を犧牲にして人の道をも世のそしりをも忘れて口惜しい日を過して居のですアーもう何事も申ますまい何卒心の中をお察し下さいまし……」御免なさい私は今迄潔白な貴女を少しでも疑つて居た心が眞にはづかしいですたとひ今貴女は表面は汚れた水にまみれていらつしつても決して心の淸淨までも汚れては居ないので私は矢張昔の露ちやんよりも高潔なお方と確信しますそしてあくまでも貴女のお朋友です何卒昔の通りの親友だとおつしやつて下さい」「貴君はいつもお優しいお心でゐらつしやいます勿躰ない其御一言が妾はどれ程嬉しいでせう」と露子は亂れかゝつた夜會卷を細やかな手でなほしながら涙の顏を少し擡げてさみじく打笑んだ

（下）

露子ホツと溜息を洩らしつ「忘れもせぬ今夜でしたねえ二人が樂しう七夕のお祭したのは……」「あの折はお互に罪の無い稚な盛でしたなあ」我はそゞろに今昔の感に打れて露子の冷やかな手を取つたまゝ悄然と低頭れた「望月樣望月樣此の悪魔の棲所の樣な世に只た

一人妾に温かな同情をよせて下さいます御優しい清さんいつ迄もお話は盡きませぬが最早お別れ致しますよかくなり果てた妾の身は如何なつてもさら〳〵厭ひませんけれど波風荒き世に出てゝ名譽を博しようと遊ばす貴君にまでヒヨンなぬれ衣はお着せ申たく有ませんからねそして妾の最後のお願は昔のお朋友に殘酷な悲境に陷つて居る薄命な女萩野露があると云ふ事を時々お思ひ浮べ遊ばしてせめて哀れの者とでも思し召し下さいますならば何れ程滿足なんてせう」岩間に咽ぶ深川の如絶々に述來りしが、急に猿の如く身を躱して「左樣ならお別れ致します」と幽に云殘しつ彼方へ駈け去らんとするを我はあはてゝ其いた〳〵しい肩に縋つた「アーもう少しお待ち下さい僕は如何でも貴女をお助け申さいでは！」彼は頭を打掉りて「御深切は有がたう御座いますが妾は惡魔に魅せられて居るのですからとてもだめですアー貴君に別れて一人魔窟に入る心の中を御推察下さいまし……」と肩にかけた我手を確と握つて懷かし氣に見かへつた其風情房やかな切下げの髮をゆらめかして無邪氣に遊び戯むれた當年の俤が何處かに殘つて居る我はわけも無く涙さしぐまるのである

「お名殘惜しう存じます」と云つた我聲はいたく打顫へたりして彼の窶れた手に温かな接吻したので――

月はいよ〳〵冴えて女神の如く神々しき全身をてらしてゐる、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ソヨ〳〵と肌を透す冷たい夜風床しき橘の馨につツと眼を開いた我は根方に身を托せたまゝいつかまどろんだ一夢なるに呆然と今さらの樣に四邊を見た存は一面の冷汗で心臓ははげしく鼓動して居る

「如何しても今の夢は眞實としか思へぬ」と我知らず獨語した痴人夢を説く我は何時の間にかく恐に返つたかとうらはづかしく忘れ去らうとしても蒼白い顏や琴の音が眼や耳について居る我一生中に眞面目らしう夢を信じる日が有らふとは露程も思つて居なかつたに今の夢計りは精神の本能の靈妙な働きで冥々の中にたよりなき友の苦悶を告られたのでそして彼女は夢の如く何處かで冷血な嫉妬深い人に束縛されて悲しみに沈んで居るのだらふと思はるゝのである

我には一片の汚れた心は無い只切なる友情のために草

を分ても尋ね出して少しも早く救ひ出してやりたいと
思ふのであるが今は學生の身で如何する事も出來ない
が卒業のあかつきこれ乾度其事を實行しようと決した
けども彼女はそれまで無事に居るであらうか
次第に遠き／＼彼方へ隔たり行く彼女の姿救を乞ふ
が如き顏のあり／＼と眼前をさへぎつて其名の露の果
敢なう消えて永遠逢見る事が出來無ひかの樣我は再び
彼女に面して救ひ出す折があるだらふかまことに覺束
ない限である
今しも橘の梢の邊に輝いて居た星が一層青い光を引
いて西の方へ飛んだおれはよも露さんでは――アヽ思
ふまじと我は顏を掩つた
アヽ懷かしき露子よ今一度姿を表はしね床しき女よ哀
なる友よと我はもの狂はしく彼方此方を駈巡つて優し
き橘よ彼女にゆかりある橘よ我は汝を見る如彼女を
の俤とも思ふなりと最後に橘を抱きて泣きぬ
橘の本を放れて器械人形の樣にツイと叢に立つた、
我は滿腔の熱情をそゝぎて「神よ我友を守らせ給へ」と
天を仰ひで默祈した
秋木萋萋　其葉萎黃　有鳥處山　集于苞桑
と誰やら王照君の詩を吟ずる聲が幽に遠く犬の遠吠が
哀れに長く聞えて傾むきし月は大理石像の如く立てる
我半面をてらしてゐる
空には高く吐鳴一聲人の哀を知り顏に血に叫びつゝ行
き過ぎてしまつた

（評）結末力あり落想のよきを採る

秀逸

飛鳥川

白菊

秋の夜ふけて叢にすだく虫の音物さびしくとぎ出でた
る鎌月のするどくかゝやきて庭の小薄さわ／＼と音す
る心細さ云はん方なくにあはれを増せとや燈火の影は
の暗くなりはてゝ愁然と物思ひ顏なる露子の君が青白
き面を一しほすゝからしむ。いかなればこの君かくも
愁にしづみ給ふらん。やよ露子の君よ何故かくも妾に
つゝみ給ふや今はかく／＼だてなき姉妹もたゝならぬ中
に侍るを、君には御兩親ますこやにてましますよし妾
はそれのみ御うらやましう思ひ參らせつるにはからざ
りき父母が君よりは今までの御音づれとては只君が妾

が方にひきうつり給ひし折一葉の端書を給はりしのみに侍らずや、まいて御心中には言ひ知れぬ御くるしみのましますにや人知れず御袖をしぼり給ふ御樣子見まゐらすだにかなしくてわきやらぬ涙にむせばれ侍り今夜はまだても君が御心の底打わけ給ひてよ。語りまゐらせん今は何をかつゝみ侍るべき一樹のかげ一河の流れも皆他生の緣とき侍れ、そも妾がなつかしき故園を遠くもへだゝりて片山里にさすらんゆくりなう君が御情にあづかりし身のもとを長くもともきかせ給んや、まと今の兩親と申すは妾が實の父母に侍らず、實父は秋山千世雄とて某郡の郡長を務めて妾が三五の年までは慈愛あまれる家庭に生ひ立ち何不足なく蝶と愛でられ花といつくしまれ浮世に樂しみ長閑なりし春もくれて落葉窓をうつさびしき秋のくれ圖らずも父母とも前後に卒れ給ひしより悲しさやる瀨なき寄邊なきさの捨小舟何方をたよるあてもなくばかりに侍りしが亡き母君が妹にて幼き時より遠國の人に育てられ今はさる人の配となりて富かに暮し給ふよし母君が生前にきゝ及び侍りしが捨つる神に助くる神とかや見ず知らずの叔母君が許に養はるゝ身とはなり侍りぬ、其夫たる人こそ今まで妾が父とし事へし增山義雄となむ云ふ人にて侍る、其より妾は叔父叔母君が情によりて高等女學校に入學し一心に學びの道をたどり侍りぬ、最實父が遺産にて妾が學費にみて給ひぬ其頃養父の家に力の君とておはしけりかねて養子となされしが心ばへもいとやさしく威ありてたけからぬ　御姿末たのもしき方にて學びの道もはるかに秀で給ひしが此春より都にのぼりて大學に入り給はんとて明日は出立と云ふ此夜養父母は力の君と妾とを呼びよせ給ひてのたまふより今あらためて云ふもおかしけれど我等夫婦の間に實子とては一人もなく只御身等が世に立つをのみ老ひの樂み幸年頃も似つかわしければ露子を力に妻あはせて此財產をゆづりなば老後もいかに安からん此事心にそまずやと問はせ給ふにぞ妾はいかにこたえんとまづ胸とゞろき時ならぬ紅葉をほうにちらしさしうつむきて侍りしに力の君はしづかに頭をもたげ御情あつき御言葉何條異存の候べきといらへし給へば養父母はさもうれしげにてさればこそ我子よ露子はいかにとうながし給ふにぞはやのぼせて只よしなにと云ひしのみ後は夢中にて明けぬ。ステーションまで見送り參らせし折御身も文

の林を分け盡し我身も望を遂ぐる迄は互に夢ゝ怠りぞ父君母君には我にかわりて孝養を盡されよと細々に敎へ給へばやがて滊車は滊笛一聲黒烟を殘して走せ去りぬ、其後文の通ひも繁かりしがはやくも翌々春になり妾は十八の春を迎へ女學校の補習一年を卒へ侍りぬ、四方の山々霞立ちこめ軒端の梅も今を盛と咲き匂ひ春知り顔になく鶯の聲ものどかなる此頃をいかにし給ひけん母君は心地惡しとて打ちふし給ひしがにはかに重りて今は危く見え給ひぬ妾はかなしさ心細さに腹中は泣きながら神佛を祈り御介抱申せし甲斐もなく父君と妾とに後の事どもくれ〴〵言ひのこし力は未歸らずやのみ言葉をこの世の名殘り三十九歳を一期とし夕の風に誘はれて終に果敢なくなり給ひぬ、力の君が電報片手にかけ入られし折ははや落花の後悲しともつらしとも言ふ言の葉を知らず果敢なき野邊に一すじの烟となし佛事の營みも過ぎにしかば力の君は又もや東都に登り給はんとて妾にのたまふやう此度彼方に至りめでたく業を終へんまでは今二とせ程の月日なり御身もつゝがなく月の桂を手折らん折をこそ待ち給へとて一葉の寫眞を殘して出て立ち給ひぬあゝ今更思へば是ぞ君が情のみ言葉の聞き終めなりけるよ、かくて夏も去り秋の初めつ方になりぬ、或る人の周旋にて東京なる青柳中佐の妹君たつ子と名のり給ふ御方を後の母に迎へ侍りぬ、其より力の君は青柳家に止宿し給ふ事となりぬ、只力の君が音づれを命に夢心地にて送りしがうつる月日の程もなくはや翌年の春も去りはれ間だになき五月雨の空とはなりぬ、いかにしけん此頃は力の君の消息全く途絶えして妾が出しゝ手紙ははや數重なりたれど一度も御返事給はらず心もとなさ悲しさに絶えねど人に語らんすべもなう只心をのみ痛め侍りしがほのかにきけば今の母君が姪御青柳愛子の君とかのたまふ方は御姿もいとうるはしう今年十八の花盛とやら中事にて遊藝にもたけ給聞ゆる才媛におはするよし母君がほめ給ふも理なれど其たびに妾におかしうあてつけてあざけらるゝ事のつらさよ、或日挿花を命じ給ひたれば又もやはづかしめらるゝ事かといとつらけれと庭に下り立ち雨後の雫したゝるばかりの薔薇の花をきり取りて手ばやく挿し終ればいつにもなくいとうほめ給ひやがて心ありげにひざすり寄せてのたまふよう御身もはや年頃になりたれば善き縁をと考へ居りしに此

度或銀行の差配人にてさる人物のよし周旋くるゝ人のあれば父君ともかねて相談致し置きぬ御身が心きかまほしとせまり給ふにぞ妾はあきれはて口母君が面を見つめ侍りしがつら〳〵思へばげに口惜しや今の母君が御入輿の日亡き叔母君が御遺言を父上の御口より吐かせ給ひてかねて御承知の事なるに今更このみ言葉こそ心得ず口惜しうて妾は他に嫁する身には侍らずとふるう口びるをかみしむれば母は得意のせゝら笑ひ成る程亡き人が遺言とか何とやら言ふめれどよく考へても見よかし力は増山家の長男然るべき人の令嬢を娶りて身を立て家名をも興すべき者なるに御身の如き孤を妻にせんにはいつ開運の期あらんや殊に御身は秋山の家名をつぐべき者なりいよ〳〵以て力との結婚ゆるしがたしそれ程の事わきまいなき者とは思はざりしによく〳〵見下げたる心やと又あざけり給ふ御顔うらめしともうらめしつらしともつらしやそれにしても父君や力の君にはかくまで心の變り給ひつるか秋の空とは今ぞ知らるゝされど今胸に深くも入りし一ふし御身の如き孤を妻にせんには力が一生の不幸なるべしとは身をきらるゝより猶つらしや舅の權を肩たのみ立身の途をはかり義を捨てゝかへり見ざる如き力の君にはあはされねどいかにしけん妾に絶えて音づれの無きはたとい御心變りしにもせよあまりに無殘なるみ心や若くはさへぎる者の業ならんか。あゝ妾が此時の心地さつし給はれ今思ひ出しても口惜の涙せきくるものを。あはれ我が實父母の世にましませばかゝるはづかしめは受けざらんにあゝわが養母のながらひ給はゞこの苦みは有らざらましを軒の雀はなかぬとも妾か袖のかわく隙なくはりのむしろに座す心地にて悲たんの中にからくも一とせを過ぎぬ。翌春櫻花爛漫たる庭の光のまばゆき日に力の君が大學卒業されて文學士の名譽なる祝宴は開かれぬされど妾にちかひ給ひし力の君のみ言葉はむなしくなりぬ。養父に留學を請ひしも聞かれざりき妾が此山里に旅立ちしは實に其翌日なりしよ其後一ヶ月程立ちて東京日々新報の欄に文學士増山力氏は過日青柳中佐の令嬢愛子と目出度結婚せられたり。あゝ思はじな妾が心はすでに決し侍りされど〳〵心の操はいかでやぶるべきたとひうゑになくとも他し人にはいかでまみえんおこがましけれど終生教育の事業に身をさゝげて山里の埋れ木とこそなり果つべけれあゝ我身

ほど幸なき者は侍るまじ今は只宿る木陰は君がみ情のみさはれ、三好の君よ虫のなく音を聞きてだに世に亡き人の忍ばれ垣の菊を見る折も植ゑ捨てゝ來し故園を思ひ花月雨雪につけてありし昔を忍びつゝはや二とせを過ぎ侍りぬ、げに世は飛鳥川かはる淵瀬は世の習ひにこそ侍らめや。折から孤雁の一聲空高く父母をや戀ふる夫をや戀ふる夜は寂莫として物さびし、

（評）飛鳥川きのふの淵は今日の瀬とかわろ浮世のさま諭き得てよし

賞外佳作

一葉の名刺

たまその

《上》

夜來より降りつゞきたろゆきは地上幾寸をやつもりけむ。ふみだす下駄のはおとすぎゆきし靴のあとにも土はみえず。白皚々たろこの天地、この景色、いかでよそにすぐさんやは。瓢序子の翁もありうちつれたろ一むれもありいづれもさむさを忘れたらんやうなり。さろ中に自用車の車夫のかけごゑも勇ましげに走れろが五臺六臺うちつゞきたろは、いづれ由緖ある人の雪見の宴ひらくなろべし。

こゝは某とかやいへろ町の下宿屋の二階すまゐ、八疊一間をかりきりにしたろ二人の兄妹あり。窓のもとなろ二つの机そまつなろ本箱などならべたろは、なつかしき父母のもとこひしき故郷をあとにして、吾妻のそらにわけ上りし學生の身なろべし。

兄上けふこそは勘定なしはてゝ侍らん。はや大晦日も目のまへにせまりたろなれば、こぞもおとゝしもきのふ——廿七日に何にはいくら、何にはいくらと一年中の費用くわしくかきておくりまゐらせしを、ことしはまだこぬぞ何ぞ變りし事のあろにてか、と、くにゝいます父君母君のいかに案じてやおわさむ。おん膝もとにしたしくつかへまつりし折さへ、にかとおん心にかけさせられしを、ましてや今は日毎のゆきゝもこゝろのまゝならぬ幾十里の外にてはなしたまひしなれば……机の上に簿記帳算盤などならべて、妹の房子は心配げに兄の顏うちみやりつ。兄なろ孝尙は一寸こなたをみてなかしげに笑ひ、何をいふ汝のごとくあれもこれもと僅なろことまで氣にかけて、いらざろことに心いためたまふやうなろ父母にはましまさぬぞ、汝のそのやうに心をつかふそのさま聞かれなば、うれしとはおぼさで親のこゝろも知らぬおろかものよと、さげすみたまはむと又殊更にうちわらふ。房子は別にゑまんともせず、さりながら兄上この間の手紙にても父母の君のおん心はおしはかられむ。返事いだすべきを試驗中とて筆とろひまも惜しまれつゝ、けふはあすはと延びゆくにつけていかに案じやしたまひけむ。匿れてのおんたよりに常には直にへんじくべき筈なろに、今度はあまりおそければ、もしやとぞ思はろゝがいかにと、いひおこせられしにはあらずや。妾れは其の時みこゝろの中にだに思ひ及ばさでありぬと、始めてわが身の等閑になし得ぬことをさとり侍りたろなり。さればそれよりは少しの事にも氣のおかれて……哀れみ深き親に心配かけじとつくす心も、兄には露かよはざろにやよその事のやうに聞きなして、わざとらしう咳一つ。引きあけた

る窓ごしに門みやりて、房子門すこし見ずや、老いたるもわかきもうちつれて人通りのいと賑やかなる事かな。この稀なる雪をいたづらに見はてんも惜しとての、外出にやあらん。話を他へうつさんとするは親の心も妹の心もおもひまうけざるにてか、面倒なるわざのこのましからぬにてか、さりとては……人皆のそでふりはへて遊ばんを、このいぶせき宿にこもりてあふのあはぬのと氣をもみつゝ、算盤や帳面とにらみあひするも、いと愚のわざよ、それよりは遊ぶかたなか〳〵に面白くこそあるなれ。頭もかろくなりしやう覺ゆれば我は友などさそひて雪にあこがれ、行かまく欲す。汝もかの川田の君と共にゆかずや。はや立ちて着物きかへんとするに、引きとむるともいかで思ひ止まりたまはん今は詮なしと、心のうちにあきらめて、行かなんとおぼさばいづこへまれ行きたまへ。そのしろに歸りまさば必らずよ、勘定なしをへてたべ、妾の分のみはゝや片附きをるなれば……けふはあまり氣も進まれば、妾は留守居の役ひきうけ待らん。さうながら兄上行き給ふとて何もあらずては淋しくや在さむ。下にゆきて何ぞ……立たんとするを否々とあわたゞしうひきとめ、わざ〳〵いつひくべきものかは。道すがら好むものなどあらばそれをや取らん。何事もかまはぬ書生の身はいとやすきもの道ばたにて何かくふとも、誰とがむるものもなく笑ふもの　なし。汝等の思もせぬところぞと打ゑむに、こなたもさびしげに笑浮べ、さのたまへど兄上、その服裝はいかにや、まこと書生ならば平生着のまゝにてもよからんに。答はあらでするどき目に妹の顔うちまもる

兄のいでゆきしあと、とりちらしたる机の上かたつけんともせず、脱ぎすてゆきし兄のきもの戸棚へ入れんともせず。手は形ばかりに火鉢の上へおかれたれど、大方は灰となりしも知らぬさまなり

木元の名はおうちに居給ふや。おうちなり上りたまへ。手にとる如く間近にきこゆるは、此家の下女と川田の君のお聲なり。房子は嬉しげにはしりゆきて、はしごの上に待ちうけ、よくこそおはせしはや入り給へと誘ひ入れ、さぞや寒くおはしけむさてもこの火の少なき事よと今更の如く氣づきて炭つぎそへ、よう降りたることかな。彼の友は川田澄子とかや呼ぶ、同じ學びの庭の教草かたみにつみはして心隔てぬしたしき友なり。さればあまりの雪にてふみだす下駄のはもうづもれがちに、くひつきしやうなる雪のその上へ〳〵とつきあひて、ころ〳〵になり危うくまろびかけし事も五度六度にてはべりぬ。心のみはいそげも思ふやうに足のはこばでもどかしく、いつもの倍も時を費やしたりけむ。いひつゝ勝手知れるまゝに季倚の机の上の時計見んとして、あらぬに心づき、兄上はいづこに。雪見にとて今しがたいでゆき侍りぬ。すべき事をもなさで……そはいと稚なるおんふるまひかな。などで共にとゆき給はざりし。いつもならましかば無理にもつれだつべけれどけふは少し面白からで——妹の身として兄の事とやかく口にせんは、いとをこがましけれどこれもへだてぬ間とておん耳に入れ侍らん。君も知りたまふべし年々そのとしの費用かきて、國許に送りしを。こと年も早さし迫りたれば、はよう送らんと兄上に計れども、今日は頭の痛む或は他に用事のあれば、などのたまふに無理にともいひかれて、一日〳〵と心ならずも延びもて行きしが、けふこそはとこのやうに算盤も帳面も、兄上の机の上にならべおきしに、手にふれんともしたまはで稀なる雪をよそにせんやはとて、いでゆきたまひぬ妾れとても行きたさはこみ上ぐるやうなれど、妾が心もおもはで遊びたまはんことの腹立たしく、わざとやめ侍りぬ……：我儘ものよとてな笑ひたまひそ。笑顔もてかたり出づればゑがほもて受けて、そはおん胸くるしくやあらむ。これより二人してゆき給はずや、二日三日を經ば君もわれも年一つ老いゆくべきに年内に思ふまゝ名

我なゝしみて遊び侍らん

（中）

天にいます淸き神はくれゆく年を共になしめとか、この汚れし罪の世を一夜の程に、目まぶきまでにつくりなしていとゞ美くしく淸らけく、この銀のやうなる雪のまにと銀にてありなば、降りいづるや人の氣づかぬうちに直にひろひためて、百千の寶つまゝしものをと、欲深き人などは惜しむなるべし。

さても美しきことかな、かゝる景をあたら下駄にふみちらして、風流がる人の心こそはかられぬ。などいふわれ等もその群に入らずや。打ち興じつゝこゝ隅田の河べにさしかゝりしは、かの澄子と房子なり。堤の櫻も春ならぬ花をつけたるど、酒に醉ひし人もくるひまわらんともせず。靜けさは花の春の遠く及ばぬ所なるべし。優やかに坐りて雪に對するは詩歌人なるべく、目を樂しまさむがためにはあらで、口腹を肥すのよきいひ草になすは、いやしき輩なるべし。あとなるはそのあたりの雪のけがれしやうに、さきなるは下駄のはがたの入りたるの迄きよく、心ありげに見ゆるも人皆の情なるべし

とみるかなたの二人の客、一人は黑の三紋の羽織きたる男の後姿、今一人はなんなにて彼男と相對して坐りたが目にもそれと悟らるゝ、いやしき貌なり。

房子はそなた一目みて、ハツと計りにあらぬ方へ目をそらし、澄子の顏ぬすむやうにみてそのまゝうつむきぬ。雪を下駄に弄びながら一心にそをみつめて。

驚きぬ〳〵實に驚きぬ。かの紋付の羽織きたるは兄上なり。正しく兄上なりしなり。道にて好むものかひてんとて無手にて行かれしは、かゝるところに來てあのやうなる事せんが爲なりしなり。常服にてもと思はるゝによき衣と着かへられしはかゝるところにきて、あのやうなる事せんが爲なりしなり。悟りぬ〳〵今はじめて悟りぬさても惡なるよ。走りゆきて諫めん――とは思へどかゝる人出なるをいかにせむ、衣のまへなるをいかにせむ……アヽこのまゝ見すごさゞるを得ざるか。なまじひ人に知られんも面伏なし、さりとて見過さんも口惜しいかにせばや。房子の君あなたへゆきたまはずや、一所にのみ居るとも面白きことならねば。ゆかんかゆかざらんか、迷ひつゝありし房子はやう〳〵心をさだめ、そもよからん。と手をひきあひながら、惜しきこのばに下駄のあとのみを殘しおきて……去りぬ。

逃びがたき廷は時々ふみとゞまるとおぼしく、その度每にふりかへる目は、いつも同じところに注がれぬ。學問といふはことし大學の文科を卒へて、世にも譽ある學士てふ肩書を得たるなり。さるからに心傲にたかぶりてものごと我まゝにふるまひ、金錢など己が管理するを幸に、ひそかに持ちいでゝ遊びつかひ、遂にありぬ方へふみ入りしなり。

來春は房子も女學校を卒業するなれば、それ迄一人遣かんも氣づかひなり。且は房子も心ぼそく思ふらむ。されば汝は當分都にとゞまりて、妹の監督かた〳〵、研究すべき事どもあらば心おきなくつとめはげむやう。とはこの夏父母のもとより、學問がめでたく卒業したるよろこびに添へて、かき送りこしゝ手紙の中の心なりしなり。さるに……親の語も忘れたるか？己が身をもわすれたる？監督すべき身を、却て妹に監督さるべく立ち到りしこそ淺間しけれ。

道より澄子に別れて歸り來りたる房子は、ゆめうつゝの間にさまようやう、車に驚かされし事も度々なりき。あやうく人につき當らんとしたる事もたび〳〵なりき。いかにして此家までたどりつきたるや、委れながら疑はるゝばかりなり。

例の一間へ入るや冷えし手をあたゝめんともせず、無意識に兄の机の引ぎだしはあけられて、中より銀行の通帳とりいだされぬ。くりひろげつゝ見てありし房子の面にはたちまちにして、愕然たるおどろきの色眉宇の間にひらめき、その涼しき目には不安の色みちみちて、今しも溢れ落ちんかと思はるゝ時しづかにとざゝれぬ。

アゝ知らざりし〳〵、かゝることのあらんとは、夢にもおもひ知らざりき。さてもいつの間にかくは引き出したまひたるものか。大分前よりなるを少しもきづかざりし愚しさよ。要るべき時の用意にもと預けおきしなれば今更使ふをゝしまねど、妾れにかくし居たまふは暗きことのあればなるべし……その暗きことよからぬことに、使ふためとては預けざりしを。まこと要るべきものならば妾れにも相談したまはむに――さるにても何に使ひすてたまひしものか。怪しきは彼の女なり。誰が見てもそれとさとらるゝ賤しきものに、あれ程馴れぬたまふは察するに、近頃よりのことにはあるまじ。もしや彼が妾れにかくしつゝ、ひき出だして使はれしにはあらざるか？果して然らば何とすべき。それの宴會これの懇親會とて、夜おそく迄かへりきまさゞり事のありしは、かゝる遊の百種なりけりな……あれこれと、一向に勘定をきらひさけたまひしも、げに道理といへば道理なり。

かくさし迫りしを如何すべき。よきやうにいひなして、父母の君を詐りまつらんも本意ならず。さりとてありのまゝかき送りまひらせて、おん胸をいためまつらんも心苦し。アゝ何とすべき、何とすべき。

かくまでに立到りしも露知らざりし我身の不甲斐なさ、おろかさ、妾れはそも何をもて、父母にいひわけなしまゐらせむ。

今更すぎし月日をくりかへすとも、果して何かせむ。如かじ。兄上を諫めて、むかしの心に立ちかへしまゐらせむには。

夜をそく孝衍は歸り來れり。

〔下〕

大つもごりの日、澄子は今年最終の日を友とゝもに遊ばんと、房子を下宿屋に訪ひぬ。

房子はいつになく、沈みてありき。

澄子の君、妾は浮世のかなしみといふこと、始めてさとりはべりぬ。そは尋常にかわりしおん事かな。くるしからずばその事わけ、語らせたまへ。さらば聞きたまはれ。すぎし日君とゝもに雪見にゆける折、兄上は友とゆき給ひしと思ひきや、かたるもいまわしき、賤しき……澄子はあわたゞしげにおしとゞめ、そはやめたまへ、われも知りて侍りぬ。あの折君に一言しらせまゐらせんかとも思ひしかど、さはとてやめ侍りぬ――が何とかせし。知りたまふとならば、そはいはじ。あの夜兄上はかへりきましぬ。いたう酒をやすごされけむ。金時のやうなる赤き顔したまひて、足もとさへもあやうげに、酒の匂ふんぷんとして面むくべくもあらず。そのまゝぐだりと横になりて手枕して、寢入りたまひぬ。あまりの事に、かへりまさばかくいふて諫めまつりてと、思ひ定めん氣も張もぬけさりしやう、暫しは呆然としてありしが、折から下の大時計の十二時を報ずるに、おどろきて床ひきのべ、兄上にはさむからぬやう夜着などそとかけまゐらせて、たどらんとすれどはかなき夢路や、ひるの事むれにうかびて寢らるべきかは、まどろむひまもつかの間、一時もきゝぬ。二時もきゝぬ。

三時近ともおぼゆるころ、醉のさめしにや、兄上は起き出でたまひて、水などのみたまふ樣子なり。人にきかれんもつらしと思ひ居りしことゝて、寢しづまりたるは時こそよけれと、妾もおきいでゝ傍へ坐り、まづさりげなきさまして、いたうもよひ給ひしものかな。といへば、友に是

非にとさそはれいなみもなりかれて、と言葉らしうのたまふ。妾はチラと見まつりしか、さても兄上のお友達はうつくしきおん方と申すべきか、汚れしおん方と申すべきか、兄上のおん目よりはうつくしとも見えたまふべし……われは男のおん方とのみ思ひなりしに……赤きおん顔たちまち青うかわりゆきて、妾をにらみつめたまひし時の、その目のおそろしさ。これが日頃やさしかりしか兄上かと、淺間しさやうなる惡の浮びいでぬ。それより妾は詫めまゐらせてき。言葉のあらん限り、心のつゞかん限り、われながらようもいはれしと思ふほど……兄上はきゝはて給ふまで目を閉ぢ首をうなだれて、一言をも發じたまはず。わが詫げにもきゝ入れてたまひしか、あらずか。返答とてはしたまはねに心もとなく、兄上とつよくさけびて膝をゆすぶれど、目をみひらきたまはんけしきもなし。あやしと顔さしのぞけば、

こゝまで語りきたりし澄子の目は、あやしうもうろをおびけり。

ア、實にかわりはてにし兄上のおん心かな。悔悟の念にせめられて、うなだれ居たまふとおもひしを……知らぬゆめ路に分け入りゐたまはんとは……目をとぢてゐられしも首うなだれてゐられしも、實にねむりておはせしなりき。妾はその時ほど奇なる感じの起りし事はあらざりき。腹だゝしと思へば腹だゝしく、悲しと思へば悲しく、歎かはしと思へば歎かはし、悲憤慷慨こも〴〵わきゝたるとは、かゝる時をやいふなるらむ。

その夜は一夜うつゝの中にあけはなれて、鷄はなるゝ鷄のこゑと共におきぬ。兄上も同じやうにおきたまひしかど、よべの事おん心にさわりしよにや。否必よさわりしならむ。怒りのまなざしするどく一言もゝのいわせたまはぬに、われはたゞいかにせんと思ひまどふのみ。朝飯もをへていつもならば新聞の小説の話など、くさ〴〵せさせたまふに、その日は新聞もよみたまはず。妾の顔みて〴〵おきし豫定のことなど、思ひ出しもしたまはぬやうなり。妾も敢てとは思はざりき。

机の上本箱お中につみかされありし書物など、あれこれとえりわけて一包になし、その他衣服道具などをもつゝみたもふにいぶかしさに、たえで、何したまふやとゝひゐらせば、ものは何とものたまはで、キッとにらみたまひし時の……その時のこわさおそろしさ、覺えず涙のほろ〴〵とこぼるゝをとめ得ざりき。

さすがに其時を思ひしのびてや、ホロリ一滴の露は澄子のひざの上に落ちぬ。

はなしはしばし、とだえたり。澄子は答ふるすべもわきまへず只々己が身のやうにも思はれて、熱心に耳をかたぶくめり。

本の包と衣服道具のつゝみとを、又さらに紐にてかたく結びあはして、それをもちていづかたへか行きたまふやうなるに、思はず、いづくへゆき給ふとゝへば、止まりてかへり見たまひ、わが行かんと思ふ所に勝手にゆくに、何答へずとも……わが心のまゝなれば——いとひやゝかされどするどくいひ切り給ひて、あとをも見ずに降りたまふ。妾はひきとむる勇氣も再びとひまつる勇氣も消えうせて、目は的もなく何物にか据り、耳はきこえやするとすみにすむ。されど兄上のおこゑはきこえざりき。その日はうやむやのうちにくれて夕飯もしたゝめ終りぬ。夜に入りてもかもりきまさず、十一時もすぎ十二時もなりぬ。下女などいづかたへゆかれたるにやと尋ねれど、行先はもとよりわからず。何の〳〵、といひくれど、兄上の爲おそく迄おきてゐられては、却て心ぐるしければと無理にねさせて、さて今や門の戸たゝきたまはんか、あけよと呼びたまはんかと心まちにまてどあらず。あれかと思へばそは近きとなりなりけり。遂にかへりたまはざりき。あくる日即きのふよ、二晩もおちゐてい

れざりし故にや、こゝちなやましく、されど今日こそはと苦しき中にも樂しみにして居りしに……ア、それも徒になりけるよ。歸りまさぬことけふにて三日二晩、今はゝやのぞみのつなも切れはてぬ。

悲しきおもひときれ〴〵に語りをはりて、身をしろ程の涙ふりかゝるを、辛くも手巾もてふきとめぬ。

さな力落したまひそ房子の君、渡るこの世はげにうきよなり。きのふの樂はけふの苦。われも人も今はゝかなき夢にさまよふなりし。そのゆめよりさめたらん時よ、その時こそはこの苦しみをやがて樂に轉ずるときなれ。今にも溢れんとする同情の涙、やうやくにせきとめて、友をなぐさめんとする厚き心、あやしうもそのこゑはふるへり。妾にとりては一人の兄上、その兄上のさまよひ出でしなれば、かなしかちざるにはあられど、猶それよりも心づかひなるは、父君母君なり。かくと知ろしめさばかり驚きなげきたまふらん。年頃日頃はぐゝみてし甲斐に、最高の大學をさへ卒へ、これよりは長閑に世をものがるべく、初孫の顏もみらるべくと、たのしみゐたまふならし……妾は迷ひはべるなり。そは他にもあらず、ありのまゝ書き送りまゐらせて、正月早々不吉のこと、おん耳に入れんも心苦しく、さればとてそしらぬ樣よそほふも、何とやらん氣のとがめて胸わろき業なり……と思ふをいづれによらんか、よしあし定めてたばせ給へ。友はつく〴〵ときゝ終り、さらば君のゝたまはす如く、いづれをよしともいづれをあしとも、さだかにいひきられねど……たとひ父母の君のおん胸いためまつるが惡しとても、そは一時のおんことなり。直に知らせまゐらせば、あなたにもそのつもりにて心あたりの方々へもたづねらるべし。もし又いたづらにかくし置きたまはゞ時へて知りたまひて、あの時直にしらせくれなば、こなたにもそのこゝろえにて、つもりせしならんに。とのおん恨言必らずのたまふべし。同じに知らるゝものならば直にいひやりたまはんかた、なか〴〵に心やすくやあらんと妾は思ひ侍り。友の愛をわがうれひとして、友のために計るその誠心のきよきたうとさ。慈愛にめでてるまなざし、同情にみたされたる胸、げにげに神のそのまゝならむかし。

* * * * *

共に見たりし雪の隅田、いまはや花さくころとはなりぬ。優等の賞を第一のみやげものとして國にかへる房子、見送る澄子、をしき名殘はかたみにつきじ。

咲々たる汽笛とゝもに、車は靜かにゆるぎいでぬ。さまで隔たらぬにはやおぼろげなるおん顏は——ア、うらめしやたまりしこの涙。友と別れてかなしまんとは思はざりしを。一人にてかへらんとは思はざりしを。この旅や、果してうれしき歸國なりけるか。はたしてかなしき歸國なりけるか。なつかしき筆の跡はたがひにしげかりき。

御兄上樣はいづことかやの紺絞に、自由廢棄させて今は二人くらしゐたまふよし、仄にきゝ侍りぬ。この便を見たる房子の驚きはいかに。あはれ兄上は賤しき女のために父母同胞をさへ、見すてたまひしか。身はこの木元の家の相續人たることをも、わすれたまひしか。人にさけすまるゝをも、思ひたまはざるか。……われはさほど迄にとは、思はでありぬ。おはれ買ひかぶりてありしよな。

其年もくれて、あくれば新らしきとしの、房子は十九の春をむかへぬ。よき婿もとめてとは、父母の時折はなしあふことなりけり

羽根つきあぐみて、見るともなしにみる名刺受の中、文學士てふ肩書もなつ評かしく怪しきはこの一葉の……目なれたる字の、木元奉尚・……

（評）惜むべしこの冗言駄辭、今少　文体の經濟あらまほしけれ

月夜

京都　大石鬼狹里女

連日の晷熱で、桔梈がぎい〳〵急がしい頃の或る宵であつた。月は今然然と山を離れた。妾は芳枝さん許へ行く道すがらである。

芳枝さんといふのは、妾とは幼少から姉妹のやうに……よりは一層親しい友達であつた。未だお互に一度も厭な顔賃合つたことも無く、惱り合つたことも無い。喧嘩なんかいふ事も無論のこと、彼我の間には隔の憎といふものは影も無かつたので。

處が、一昨日妾が訪問れた時であつた。妾は始めて芳枝さんの濟ま無い顔色で、餘り口も交かず、ばきはきしない、平生とはがらり變つた擧動を見たので、妾も何だか面白く無かつたから、折角相談しやうと思つて居た事も話さ無いで別れて歸つた。で、妾はそれが氣になつて氣にならないので、最一度會つて相談にも乘つて貰はうと斯う思つて、妾は今此處まで來かゝつたのである。

相談といふのは他の事でも無い。妾も去年學校を出て最う嫁婚期でもあるから、早く身を落着けたいと兩親が騷いで居られたのが、今度略去ろ方へ話が纒まつたので、妾は今その事を相談――と言つても別に何う斯ういふ譯では無いが――その事を打明けたいと思つて。

妾の嫁く先方といふのは、極遠くはなるが母方の縁家なのである。其人と輙まればならぬ人は二三年前に去る法律學校を卒業した初雄さんと言つて、今年廿六歲、お互に知己の間柄であるから、別に金の草鞋に敎非常で聞き糺すといふ必要は無いので、話は暗默の間に纒まつたのであつた。先方は立派なお方、殊に兩親の眼鏡にかなつた良人、妾のやうな不束ものには過ぎた良人とおもふと、妾に異存の有らう筈は無い。直に思ひ浮べるのは行末の事で、婦心の恐ろしいやうな、悲しいやうな、又何處にか嬉しいやうな心持もするので……。

右は案山子の立つて居る瓜畑、左は今穗を出したばかりの黍が風にざわ〳〵と囁いて居る。まだ小い芋の葉には、折から冴えた月光を浴びて、金剛石のやうな露が光つて居る。水が涸れたので休むで居る水車小屋の種を通り拔けると、鳴子が劃然と空に縮かれて、やうやう走り穗が出たばかりの早稻田に波打つて、凉しい風が渡て來る。

妾はいろ〳〵の事を胸の中に繰返しながら、石地藏の立つた辻を右に折れて、𨻶有るだら〳〵坂へ差しかゝつた。此の坂を下ると芳枝さんの家は最うつい其處なので。

坂の兩側は櫟林で何となく淋しい道、殊に田舍の夜の靜けさは一しほである。が、始終通り馴れて居る妾は別に何とも思はないで、其上まで登り詰めた。其處には小い祠があつて、二三株年經た巨杉が雲を衝いて黑園々と蹯つて居る。月は今雲に吞まれて小暗くなつたかと思ふと、直に顏を出して再び淸光を廣い野面一面に浴びてかけた。あの燈火の瞬いて居るのは芳枝さんの家であらう。

と、少時佇立んで見て居たときに、つい坂の下に二個の人居を認めた。而も男と女。

月が冴えて居るので夜目ながら明かに見えるのである。じッと瞳子を据ゑく見て居ると、男は年若い……何うも初雄さんのやうな……あへ、慥に初雄さんである。女は誰であらう、初雄さんの影になつて見え無い。……誰であらうと妾の胸は有繁に騷ぐので。

二人は此坂を上つて來る樣子、……話聲も微に聞こゑるやうになつた。妾は見付かつては能くなからうと思つて杉の小陰に衛と身を隱して了つた。

二人の話聲は斷續に聞取れるやうになつた。

『假かに決定まつたので……進まないが……兩親の……實に困つて……。

正しく初雄さんであつた。

だつても今更……妾は本當……………。』

女の聲は、あゝ、其聲は紛れもない芳枝さんで。

二人の姿は最う其處にあらはれたのであつた。妾が居るとも氣がつかず、芳枝さんの華美な浴衣の袖口をこぼれて居る赤いものまでが明かに、手は初雄さんの腕にしつかり絡みついて居た。妾はおぼえず渾身が電氣に感じたやうに打震へた。杉の樹が無かつたならば恐らく其處へ倒れたであらう。

『それは最う爲方も御座いません。這麼足らはぬ身ですから……それは最う……。だけども初雄さん、妾は這麼普通ならぬ身体になつて了つて、本當に最うと、初雄さんの腕にはづかしい身を支へて居るらしい、樣子でがつくり顔を垂れて、左の手で手巾を顔に當てた。泣いてらつしやるのであらう。

『妾は最う人には顔を合され無いし、寧そ……死……死んで了つた方が……と思つても、那樣無分別を起して此上恥の上塗をしてはと……、あゝ　妾は本當に何うしたら可いのでせう。』

『這麼ことにならうとは思は無かつたのだ。今更親の命を背く譯にも行かないし、困つたなア。』

と、初雄さんも眞實困つたらしい樣子。

『まア併し身体を大切にして異れ無くちや困る。……妊身になつたと聞くと……何うも困つた。』

と長い溜息。

二人は妾とは十間と距たらない、祠の前の、大きな、扁平い石に腰をおろした。双方無言で、時々長い溜息が交る〳〵聞こえる。冴えた月を受けて俯向いて居る芳枝さんの半面は凄いほど蒼白う、崩れた束髮に薄紫色のリボンが落ちさうになつて居る。初雄さんの顔色も冴えて居なかつた。

突然、芳枝さんは仆れるやうに初雄さんの膝に取縋つた。

『妾　最う……、本當に途方に暮れてよ。あゝ何うしたら……

と、涙に顫つた、細い、顫へた、絞出したやうな聲。

『何うつて、私にや何と分別もつかない。』

切無さうに言つて、優しう手は芳枝さんの背へ。

芳枝さんの忍び音に泣く聲が聞こえた。

前日、芳枝さんのはき〳〵しなかつた擧動も思ひ出されて、はじめは沸騰るやうであつた妾の胸は、頓に氷のやうに冷へて了つた。

*　*　*　*　*　*　*　*

芳枝さんは今初雄さんの奥樣となつて、其中に出來た坊ちやんを掌の中の玉と愛でながら、樂しい月日を送つて居らつしやる。

妾は二人の中の睦まじいのを見て嬉しいにつけても、又折々は氣が鬱いで、今に兩親の意に背いて獨身で居る。

今夜も月の好い事。

（評）秋の夕暮に懸を惹くへき作なり

底無沼

芙蓉女史

こゝは八幡の森かげの底無沼よ昔よりこの沼に石など投ぐる時はいかにうらゝかなる日とても黒雲をこり雨を降らすとか云ひ傳へ又年毎に一人二人は必此處にあさましき最後をとぐるとかにて螢取る童つばなぬく小女は更なり野らより戻る和郎までが此邊は通はざる此處に來るとしもなく來りしよ。紺青を流しゝ如き水の面に月かげ落ちて玉如汀の老松古杉は鬱蒼たる枝を垂れ風の渡る毎にゆら／＼と動くさまながら大蛇の玉を爭ふに似たるよ。吁々去年うるにてかのしたしき澄子の君と互に中垣のへだてなく語りにし其時始めて君か心の奥をさとりぬそれよりは一層したしうなつかしう一日だに相見ざれば何となく淋しう遊息奉るが常なりし學校にて口さかなき誰彼「澄子の君は靜子の君の兄君そ嫁き給はんこそよけれ」など云はるゝ時は花の顏さと紅そめてソト我かほを見て伏目になりておはすが常なりき、己とてかの君の如きやさしき人を姉上としてかしづき參らせなばいかにたのしからん、あはれ兄君とは相應しき御伉儷よさぞや母君にもやさしうおはさん。去年姿が重き病になやみし折は學びやの行きにかへるに訪ひ給ひ病のあつかりしをりは幾夜となくつゆまどろまでわが枕べに氷よ藥よとまゝとの姉も及はぬ御みとりまししき母の手に育ちし我とていかにうれしかりしよ來んとしの秋頃は姉とよひまつり妹とよばれんものよと語りあひぬ。今年の春なりしこゝの別莊に學びの友とち折集ひかしこの岡のふもとにすゞなすゝしろ土筆なとつみし折母君と兄上も共にいで立ちわかなつみ給ひき昔人は己れこそ今日の巧名をほこらんとてや此處にもよ、かしこにもよとさけびつよびつ余念もなく摘み居給ひしお我々たゞ行く末の事など思ひつゞけられかく母上兄君とかの君とむつましう語りつゝ遊びなはいかにうれしからんいや／＼ことしの茸狩には必ずさ、なるべき其時はいかに樂しからんなと思ひつゞ思ひてひとりほゝ笑む折かの君いつしか己が前に籠を片手に立ち給へる姿の優にやさしう我目には慈愛の神とをかまれぬ「靜子の君よ何かうれしき事のをはすらんうらましきことよ我にもあかし給ひね」と草のむしろにすはりのたまひければ「今日はな燒きそ若草の」とひとりこちけるに澄子の君はかほ打あかめ花にたわふる胡蝶の二つを眺め居給ひし無言なれと互の心えかよふらんこの時かなたにて一こゝに蛙栄の澤に侍べるよとく來ませ」とさそふも今日はことさら耳立つもあやし折しも後より兄君の「靜子よこの霖のいかにいろうく美しからずや」と給はるを見れは實に世の常ならず花大きしきよらなりきそをかの君に參らせしかの花はたしかに君か詩集のうちあらん淡かりしゆかりの色も今はいかにあせ果てぬらん。其夜兄君に「澄子の君はいかにおぼすぞ」とほのめかし參らせしに」事もなげに「やさしの小女よ」とうたへ給ひしには何となう物たらぬ心地せしよ。

今年の夏は兄上も大學を卒へ給ふべけれと指折り數へつゝ我身を忘れて澄子の君の上思ひつゞけ學士の位受け給ひなは己よりかの君のたゞすの森の玉垣より赤き心なのへて願ひなば常にやさしき兄上いかで無下に退け給ふべき母君とかくにのたまはば身にかへて願ひ奉らんとまで思ひしにあたなりし／＼吁々今思ひ出すもなか／＼につらしある夜母君姿を一室にまねきのたまふ樣「兄上もはや程なく卒業し給ふべければ嫁を迎ふる事となしぬそは汝も知りつらんかの古里の幸子よかれは幼時亡き父君のめで給ひ終に親人に請ひて正夫とす許嫁の中なるよ去年よりたび／＼のほせんと云ひ越たれと未修學中なれは卒業を待ちてといひ送りたれば

此度はいよ〻迎ふる事となしぬ正夫はまた早しなどいひ居りしが遂に母の意に從ひしよのう靜子汝も昨日より裁ちぬふわさなど手傳ひませ」と聞きゝし時の胸の中いかに苦しかりけんいかにかなしかりけん身ふるひ肉わなゝく心地し其まゝ倒れんかと思はれしが辛じて「母君兄上は幸子の君を深く知り給はねばもしや御意にかなはざる時はいかになし給ふぞ」はいふこゑさへもあやしうふるへぬしよ」いや幸子なれは氣に入らぬ事あるまし其はこの母か替ふへけれは心易めよ例へ正夫か何かといひし時とこの母か願つてもらはではやまじ」といよ〻心苦しう夢なれかしと願ひしかど終にまことなりし最早かなうましとは思ひしかど「のう母君かゝる事は一生の大事にておしつかわさは後に悔ゆともかへらぬ事なるためしも少なからねはよく〳〵兄上の御心をこそ」といはんとせしに御聲荒く「靜子よさる生意氣なる事云ふまじきぞ今更なにいひしとて何かせん」といたく御けしき損じたれは妾は過言をわび部屋に退きひたりいかに悶へしよ今より兄上に妾が願とかの君の思ひを語りて願ひなはよも叱り給ふ事はあるましかくてもしや御心の此方にうつりなはいかにうれしからんいや〳〵さる時は母君いかに御心くるしめ給はんさる事は夢々思ましきぞさりとてこを澄子の君の聞き給はゝいかになげき給はんいかに力落しまさんかくまで心にちかひし事今更つれなく云わるべき母君の御心に從ひ奉らんには澄子の君を失望の淵に沈め參らするにひとし姉とも師とも賴み參らする君をすくはんには義理ある大恩うけ母君にそむき奉らではかなはしいかにせましく。そも幸子は今の母君のまことの姪にてかれの母は賤しき者とか聞きしいかなる人かあひ見し事もなきよよまてさる話は夢にたも聞かさりし父上の御言葉とはまことにやいや〳〵かりそめにも母君をうたがひ奉る事の罪深かさよ之皆妾か心の邪推なりひかみなり耻かしや。

それより日々祝ひの用意とり〳〵にて母君のみひとり忙がしう見え給ひしよ用意とは何ぞ裁つもの縫ふもの兄上のものとては一つもなく皆幸子のものなるよ心進まぬながら何くれと手傳ひ參らせありしが夜もすがらいねやらず枕紙のかはくひまはなかりしが遂にすこやかならぬ身とて病の床にたふれぬ家にありてよろつの事見聞くもつらくかつ祝事あるべき家に臥し居らんも心なきわざと母君の御ゆるしを得てこゝの別莊に來りしよ吁澄子の君はいかにおわすぞかゝる事は露しらで在すらんいかにせまし〳〵我はもはやかの君にまみし奉るべき勇氣なしさりとてこの世にあらん內は逢ひ參らせではかなうまじ吁々己れ此まゝ此沼に入りてんよさあらにいかに心易からんものをと水の面見渡せば月は早傾きそめ此の沼に投じて死せし人を吊らん爲の蘇唐坡はいくつとなく亂れあひたる數の去年よりはいたく增し心地せらるゝよ頭の上の柳の枝はおの頰を紙るか如くなでぬ

女丈夫

丹波　武部みちよ

官軍のかこみをうくること、すでに二十八日となつた。糧食彈丸ともになくなり、千辯萬謀、又皆つきはてゝしまうた。われどうかして、この圍を遁れいで、この由、仙臺藩につけて、援兵を乞はうと思ふけれども、玄武隊ともあるものが、君の死を余處に見てどうして落ちえられようか、今はたゞ城を枕にして、うちじにするよりほかたはない。汝は女の身である、どうがして、官軍のかこみをくゞりこゝ落ちのびて、この由、仙臺藩につげ、援兵を乞ふがよい。もし事なつたならば、汝の忠、汝の孝、これにすことはあるまい。疾くおちよと、いそがしてゐる。を

りしも城の櫓はもえ落ちてしまうた。

筒音もしばしゞまつたやうである。月はまだでないかして、うすぐらい。若松城の搦手の方に、あらはれでたる一人の少女身には白衣をつけて、襷とりかけたるが、薙刀杖づき、はへひ志ばりて、志ばし敵陣うちみやれる、いといさましい。松の木蔭に身をよせて、涙をはら〳〵とおとせるは、よほど歎息のありさまである。あゝたのみにたのんだ、仙臺藩は、はや官軍に降つて、かへつて、こゝをせめにきてをるやうである。明日見ようと思ふた花の、夜のまの風に散りゆくならひ、昨日まで、何事もともにとかたらうてをつたに、事迫ればかはりゆく人の心のうたてさ、今は何をたのみにこゝおちのびやうぞ。まして官軍のかこみは八重九重遁れようにも遁るゝ道はない、君にも御運はつきたと思召せ、父上にもおまへかまへて若き人におくれ給ふな。白虎隊は奮戰して、一人も殘らずうちじに志たとか、いとしい弟や、今は中有の旅にわしをまつであらう、さあ……さあ……わらはも同じ旅いそがうと、左の片袖もぎとつて、小指くひきり、さら〳〵とかきつけたのは辭世の歌でもあらう、やがて懷劍ぬいて喉きらうとする、をりしもうしろよりまてとよんでだきとめた人がある。

孫のあやの忌明祭に、みうちのものもあつまつた。祭もすんで、まどゐとなつた。好みの道とて、話を劔道にはじめた。本年の組合には、女であるとの事であつたから、どのやうなものかと案じてをつた。當日となつて、その人にあふて見れば、年は六十に近いが、よほど壯健に見える。十七八歳の娘がついてきてをつて、きゝますれば、本日母の相手には、あなたとの事に承りました、何分にも女の事、かつ年も老いてをりますれば、よろしく賴みますと、ついてまはつて、三四度まで頼まれた。女にまけたといふても殘念、かつても何でもないこと、まことに案じた通り、こまつたことゝなつた。さていよ〳〵志あひとなつた。先方は薙刀をとつてきた。目つきといひ、身相ととひ、男に少しもかはらなかつたが、まけもすまい、かちもすまいとあしらうて、久しう勝負がつかなかつた。時に驗査役より、勝負はわかりました、もうよろしいとの事であつたから、止めたことであつたが、思もかけず、當日一等賞は私であつて、かの老母も又二等賞であつた。その夜、わが旅宿に音づれてきて、妾は元は會津藩のもので、落城のをりは辭世の歌までよんで、死を決して居たに、幸にもいきのこりて、只今は薙刀指南を樂みとして、老を慰めてをるといふを、話の始めとして、よくきいて見れば、會津落城のをり、わしのたすけた女であつた。名は佐藤みつ、年は五十四。三十四年後の今日、武德會で再會したとは、めづらしいことであつた。そうして、その娘は美術學校の卒業生で、我家のちよをよく知つて居るとのこと、一昨日かへりてすぐちよに話して見れば、美術學校で、あのお方は二番、わたしは一番にて卒業をしましたが、私にまけまいとて、よほど勉強せられた事であつたと、これとても、又奇遇ではありますまいか。孫のちよ子は、茶菓をもつて、こゝにきましたが、これにつゞけて、又佐藤の娘の話をしかけまた。



△　△　△

他人の作を讀んで見るとさして感服するのは尠いが、扨て自分に筆執つて書いて見るとなか〳〵おもふ樣にはならぬもの、まして小説のやうな人の感情に訴へるものであつて見れば、そのものを完全にしやうとおもへば一と通りの辛苦では出來ない、況んやそれが妙齡なる婦女子の事とすれば猶更である、併し人間の天性といふものは世の中のむづかしい事他人に容易すく成し得難い事をやつて見やうとおもふものに、あらゆる辛苦、あらゆる艱難にも堪へ忍んでもやり遂げたいといふ希望があるもので、この天性あり、この希望あつてこそ妙齡婦女子の手に美はしい製作も成し得らるゝのである。女學世界の才媛詞藻も回一回より各種の文の上に進境を見るので、選評者に於ても甚だ喜ぶ處である、例により佳作の分を擧ぐれば左のごとし、寄稿總數百六十二通。（二十三階堂）

うき身	白菊女史
一木菊	天野ゑつ子
寒牡丹	まつかぜ
新夫人	岩山雪子
女浪男波	岡本すゞ子
夢のあと	想月女史
底なし沼	芙蓉女史
小夜の中山	村上靜子
白椿	仙田まき子
月夜	きりさめ

母樣	上田りう子
この文	冬月史女
懐舊の涙	南山女
秋の一夜	堀越ひで子
曇空	川瀬千代子
思ひの種	つゆ子
ぬれきぬ	寒相寺のぶ子
常盤木	しら波女史
[illegible]	粉竹女史
友情	しらゆき
天命	梅野たま
落葉	露魂
女丈夫	武部みちよ
母樣	上田りゆ子
薄倖少女	小林柳煙女
ゆめのあと	想月女史
更衣	はるな
やまひ	いてふ
夜がたり	多賀紫花子
飛鳥川	ふぢ子
まこゝろ	惠美女
夏の夜	馨枝
繼母	野百合
地鎮祭	杉山なか
夏の日	公子
夏の夜	萩子
遠見	もみぢ女
花のゆくゑ	白井ゆかり
胸のおもひ	はじめ
秋のおもひ	たれ子

天賞

秋の山住

伊豫宇和島袋町　ふぢなみ

今日も夫は牛ひきていでましぬ、篶の細道奥ふかく分け入りてふりつもりたる落葉を拾ひにとて。なりはひの爲とはいへ、昨日今日ふきすさぶ秋の山風のいかに御身にしむらん、かくと心づかばいま一とつ衣かさねてまゐらすべかりしものを、かまへて風邪ひき給ふな、さてはやがてひるげの頃とならん時、妻が心づくしの握飯腰より下して紅葉散りしく木の下蔭を莚に岩間洩る苔清水結び上げつゝ舌打ならしてやきこし召すらんなど、さま〳〵なる事を心に思ひて、機織るなげひの右に左にゆきがふ其ひまも兎角に夫の上をわすれかねつ。居爐の傍に夫が山かせぎの衣綴したまへる姑の君と共に山深く分け入りし人の上を語らひあへるまゝ、短き秋の日も暮れなんとすっされど夫はかへり來まさず。外の方にいでゝ見れば、前なる山川に浮ぶもみぢ葉のめぐり〳〵てながれゆく樣のいと面白く、さてはかなたなる瀧の白糸色かはるまで木々の梢の紅葉たるに折からてらす夕日に一入はえまさりて、あたりはさながら紅の幕につゝまれたらん如く、心なき賤が身も、日毎對へる眺めながら、我にもあらで暫は物も覺えず。いかにかへりの遲き事よもしや夫に變りし事のありしとはなきか、さる事なしとしても母思ひ妻思ひの君なるに心なし時をすごし給ふ如き君ならじとは思へど、歸りのおそきを見れば、さても氣遣しき事よ、いかにせばよからん、さなり〳〵家にゐて心をのみ苦しめんより、そこまでゆき見て來ん、獨さびしくともしばしまたせ給へやとて、いでゆかんとするに、姑の君のさな氣づかひそ、いまにかへり來なん、己が家には老ひたる母、さてはいとしき妻もあるものを、そをわすれ果つる彼にはあらじ。何か他によき獲物にてもありしならん、されどゆかんとならばあまりに深入りすななど後より心づけたまふもうれし。やがて十丁ばかりも來やしぬらんと思ふ頃、彼方なる叢蔭に人のけはひして、一

聲たかくなきし其聲は、まぎれもやらぬわが家の赤のそれなりけり。さてはとどび立つばかりの嬉しさに、とく走せ行かんとせしが、まてしばし夫が例の自慢の聲、のせざるはいかにと胸さゝろかしてたゝずめば突如として清く朗かなるなつかしの其の聲はさびしき秋の夕暮のこだまにひゞきて聞え初めぬ。あなうれしいよ〳〵おん恙はあらざりしよとはじめてむねなでおろしつ。

こゝまで迎へに來るには及はざりしものを、いかでさる事のあるべき、それよりもあれを見ずやと牛の脊を指さし給ふを、何にかわらんと見上ぐれば、落葉いれたる籠の上に松茸を湖の穂にとうしたる串のいくつともなくをかれたり。いかにしたまひしと問へば、今日はよべの名殘にやをち葉もいと多く、はやう籠にもみちたれば、疾くかへらんものとは思ひたれど、茸狩せばやと尙ふかくわけ入りしに、松の下かげほの暗き所にいでぬ。得ならぬ香もそれぞとしるく探れば、さぐる程いと多く、あまりの面白さに、日の暮るゝも知らでおりしに、下より赤の呼ぶ聲にをどろかされて、やう〳〵かへさにはつきぬ。己が興に浮かれて人々に心遣させしは罪多かりきなど語らせ給ふ。さてはさにて侍りしか、それにしても、母人のいかにまちわびてや在しますらん、君にも今日はいかにつかれやしたまひぬらんとて、こたびは夫にかはりて牛ひきつゝ、たのしくかたらひかはしこ、わがやのあたりまでかへり來ぬ。とみれば姑の君は家の前なる土橋の上にたちた待ち居たまひき。それと見るより眉の間に豐なる嬉びの色をたゝへさせ給ひて、おゝ歸り來しか、いかにまち遠ふかりしよ、湯もわきてあり、とく足洗ひて休めやとて、さま〳〵にいたはりなどさめ給ふ。牛の脊なるは、三人にて共々に納屋に運びいれ、此身は牛を裏手の小川にひき入れて、體くまなく洗ひやり、小屋に入れて、これには飼糧充分にあたへて、今日はいかにつかれやしけん、あすの朝まではやすらかに休めや、可愛のものよと頭なでやりつ。

扨は明けぬ、夫はきのふの落葉さては姑の君にまゐらせてなほのこりし松茸を、けふは二里ある町へと賣にいでたまふなり。今しも母人つゝがなくて在せしか、かへりには好ませ給ふもの求めてかへらん程に。などのたまふおん聲のきにゆるに、脊戸に衣干しゐたる此身も、走りいでつ。さらばゆき給ふか、よしや品は賣り切れずとも、明日の糧に困るとにもあらねば、少しもはやうしてかへらせ給へや。今日はお風呂なとたて申して

まちまゐらせんといへば、そはかたじけなしとて、御かるかやをみなへしなど秋草のさきみだれたるかなたの小道を牛ひきてたどらせたまふおん後姿いつまでも〳〵とかど邊にたちて見送りまゐらすれば、おやにくやたちこむるさ霧につゝまれて、なつかしの其かげは見えずなりぬ。たゞ風のまに〳〵清く朗かなる鄙歌の聲のみぞいとかすかに聞えける。

清新なる筆づかひ、情景躍動す。（桂月）

地賞

冬の夜兄を懷ふ

東京府北豐島郡瀧の川八幡前　田中とし子

さ夜ふけて筧の水の音も絶え〳〵に寒さいとたへがたく折から來なく鳥の聲物思ふ身には一入しみ渡りぬ兄上は余念なく夢見したまへり妹ははや床につきてすや〳〵とねぶれりわらはゝ母君の御腰さすり居たるがかゝる折父君おはさば如何に心強き事ならんと思ひては御なつかしさの込みあげて思はず涙のおちくるにはつと母君の方を見ればわらはの顔ながめ給ひ何を思ひてなげくぞと優しう問ひ給ふにいとゞ悲しく御答もし得でさしうつむきしが母君はわらはの胸を知り給ひてされどなげきそいかにしたひまつりても世にまさぬ父君は御かへりあるまじさるを泣くはかへりて愚かなるぞ雄々しく生ひたて父死すともかへす〳〵力落すまじきぞと父君のたまひし事わすれしか心弱し涙とゞめよまして昨日けふは健二も歸り來つれば父上おはすも同じよゆめなげきそと諭し



給ひしがいつしか御目に露の宿れるよ兄上もふりむき給ひげに吾程不孝なる子は世にあるまじ一朝のはやり氣より家を出でさまよひありき五つ年の間一とびの御音づれもなさゞりし爲父君は亡せ給ひ母上は病ひの床にふし給ふ皆これおのれが成しわざあな恐ろしゆるし給へ／＼また御身にも樣々なる心配かけたる數へ擧ぐればいと多かる罪譬へん方なしされど／＼早もとの健二に立ちかへりぬれば力の限りはつとめん程に安心せよ今迄の事はゆめと思ひ給はれなう母上の御病ひにさはらん程に涙をふきねとのたまふ御口の下よりあゝ不孝なる健二は父を殺し母を病ましめたる大罪人よと深きといきをもらしつゝ男なきに泣き給ふにぞいよゝこらえ得で聲をあげて打ち泣きぬ

驚き立ちて見れば燈火ほのぐらく病み給へる母君の御顏半てらしゐたり兄君の御姿は見えずたゞそこにはあどけなき妹のねむれるのみあゝ夢なりしのよも然らじ幾度び見廻せどもあらずさらばまことに思ひねのゆめなりしかあな口惜し兄上の歸りませしは夢かあゝ茫然として涙も出でず折しも母君の健二々々と呼び給ふ母君もまた夢見給ふか斯くまで皆々の心を苦しめつゝ兄君はいづくに住み給ふぞ父は死し母は病みたるよりなき妹二人の日々涙にくるゝとも知り給ふまじあゝ幼なかりし折は悧潑者よ愛らしき子よと人にほめられし御身もかくなりては世にも人にも捨てられ給ひつらむ自から招き給ひたる事とはいへもしさる事あらばいかにせん頼みまつるは兄君のみなるにあゝ兄君は遂に不孝の子にて終り給ふかあなうたて鳥獸すらふるさとを思ふものをいづくに何して暮し給ふかわが家こひしと思ぼさぬにや妹あはれみ給はぬかあゝうらしめき兄君よされどもし此寒き夜にやすらふべき所もおはさでさまよひ給はじいかにせん御病ひや引きおこさんさきくませ兄君かへり來ませ兄上神よまもり給へ

はりさく胸のくるしさに妻戶あくれば二十日あまりの月物すごく松が枝にかゝりて夜を守る犬の聲かすかなりあゝ兄上は此淋しき夜をいつくにて過し給ふか

悲哀纏綿、卒讀するに堪へず。　（桂　月）

入賞

木枯のゆくゑ

麴町區富士見町六丁目六番地河野方　寶相寺はつね子

松のこずゑに、こぼれる月の影をふきよせて、このゆか

へ木からしのたけりゆくゆく冬はいづくぞや。こゝにはさゝやかなるわら家ありて、若き女と母との二人居ぬめり。母はしわかれたる聲して言へるやう、ひまもる風のいと寒き今宵かな、そなたもさぞつかれらむ、まだいぬるにもあいだのあるべければ、いでや消えかてなる火桶の火かきおこして物がたらむといふに、女も針もつ手をとゝめて、この寒き夕を老いたる身にはいかに侘ひしく思ひ給ふらむ、吾身男に生れなましかは、いかにもしてみ心やすういたし侍らむを、女の身のかいなきに、えも心はかりも任せす、いと口惜しう思ひ侍ると言ふに、いなとよそなたの心つくしは、この母もつねゞ心うれしく思ふなりさるにてもわたら盛りを、髮もつかねす、よき衣も着ず、こゝちの年を過させつるこそいとほしく思ふなれ、と言へは女は打消して、何しによき衣などのそみ侍るべき、



心のにしきにこそは、とさひしく笑へば、しな事言ひたり、氣になかけそ、と言ひて、この間に女は火桶の火かきおこしたるに、二人はこれにさしむかひて、何ことをかかたりあひぬ。

津の國の難波の春はゆめなれや、あしの枯葉に風わたる世なりけむ、わが家とても昔は富みたりといふにはあらねど、あまれる財なほ多きに、何につけはしたなきをおほえざりし。ふたりが中にそなたを設けてよりは、花に、月に、そなたをいつくしみつゝ、風にあてざらむやう心をくだき、おい立ちのさちならむことをひそかに神にいのりたる、その甲斐ありて、そなたはすくよかに生ひ立ちぬ。そなたも知りつらむ、亡き父うへの知人におはする吉田の息子春雄と言へるを、ゆく末はそなたにめあはして、うつくしき孫のかほを見むと思ひたりしを、そなたが高等小學を卒業のまきはに、吾父上

はあらぬことに手を出し給ひて、さらでもやゝ下りくだりさまにむかひし、吾家の生計も、日ましに惡しうなりゆき、そを苦に病みてか、父上にはかへらぬ旅にいゆき給ひぬ、そなたがためにつくりおきたる新しき衣も、あさましき人の手にわたりぬ。はつかに殘れる品など人の手にわたして、この山里にもからくも世をさけつ、貯への金とても多くはあらねば、しはしのほとにてつかひ捨てつ、春秋ながきそなたをかくは勞しつるよ、もし世か世にてあらむには、父上ましまさずとも、かゝる苦しみをさせさらましを、そなたと行くすゑをちぎらむと、定めたる吉田の家は、わが家のかく衰へたるにつけて、影だに見せずなりぬ、今はゆきかひもなくなりぬ、今までたづね來りし大方の人も、訪ひ來ずなりぬ、こなたのまづしくなりたるが、いと口惜しけれど、なべての人のなさけはうはべにのみ心を寄する世なれば。春雄とそなたとはげにつき／＼しきめをとなりき、そなたが春雄と余念なく遊べるを見ては、すゑの望を胸にゑがきて、人しれずほゝゑみしも、いくばくなりしか、きけば今は海外にもの學びにゆけるとか、やがて歸朝の曉には、他よりよき妻をや得るならむに、そのをりの春雄の心のうちに、片山里にうらぶれし一人のをとめありと、よもや思ひいでさらむ、思へば／＼いとほしきはそなたよ、

と、母はさびしげに言ひぬ。

またしても母うへには春雄の君のことを、おもひいで給ふか、それはむかしの事なり、いまは春雄の君とても、われをわすれ給ひしなるべし、今は嘆かじ、うき世の風はわが一家をおそひて、魔の手にわれ等を苦しむる世なれば、いなさりとも魔を根まし、また世をいきどほらし、なべて世の人の心の薄きに、思ふに戀も慾にはかたれざらむ、ほまれも富にも劣りたる世ならむ、さあらむには、世にいれられむもいさぎよしとも思はぬを、大方の男の心やいかならむ、秋の空とし言ふめれば、げに時雨はれゆく空にたつ雲の、また頼みがたきものにやあらむ、頼みなきをかち頼まむは、あまりにおこに似たらむかし、さはいへ母人のあさな夕なの御こゝろもちゐ、いかにさう／＼しくおもひ結ふらむ、これのみいと悲しう侍る、まいて、あさぢふに霜かきまさる昨日今日、いかにわびしく思ひたまふらむ、されど、母ひとよ、けかれたる人の世に媚（こび）を入れむよりは、ちりもけかれなき片山里に、さう／＼しくも暮らすかたいとよがちむを、このまゝふたりしてくらさは中々にたのしく、こ

れにまさりたるよろこひはあらじ、と思ひ侍るを、母人にはいかゞ思ひ玉ふらむ、と、あまりにものさひしけなるに、なくさむるかこと、言ふめれは、

まことにそなたの言ふももつともなり、われとてもおとたる心のまゝに、おほえすむかし、今を忍ひなから、わらぬとさへ言ひけるよ、さそやそなたの心にもさはりつらむ、いまはかゝる話しはせし、夜もすこし更けたるに、ひまもる風もやゝ寒うなりたるに、風なひきそ、そなた病みたらむには、とし寄れる母一人いかにせむ、手もつかてそこら迷ふのみならむを、早や寝ねよ、夜のふすまかろしとも、母か心はかりのわたをいれ置きたれは、夜寒の風をしのぐには、あまあらむ、そなたばさきにいねよ、

など言ふに、女は母の言ふがまに〳〵、さからはず、いとよきほどにして、このわらやには、やがて二人のゆめは結はれぬ、紅葉吹きちらす木枯しの風は、このうらやのひまもりて、このあはれの母と子を、夜のふすまの許におくりしか、あまりにかなしきこのものかたりに、心なき身もあはれやおほえけむ、そのまゝよわくなりゆきて、とほさかりぬ、いま木からしのゆくゑはいつくそや、まかみな〳〵荏野のすゑをやめくるらむ、

陳腐なる小説の出来損ひみたやうなれど、多少あはれなるふしとせず　（桂月）

秀逸

しら菊の花

埼玉縣岩槻町　大亦たか子

けふは辰日大安日、よき日なれは、やがて生れん幼兒のため、そが産着の料、ぬひ給ひてむやと、母君のの給はすに、うれしくて、いそぎ針箱をうでぬ、日あたりよき障子のかげに、麻の葉、鹿の子、紅しぼり、くさぐさのきれ、目もあやにとり出しつ、花紅葉、麗はしき色よと母君の給ふに、さるは幼兒の、衣れつたの川なればと、打笑ひつ、あまりにちさく愛らしき衣かな、はやく着せても見まほしや、

さても生るゝ兒は弟なるべきか、妹ならんか、父は男をと望み給ひ、わらはもそれを、ほりすれど、さていかなるべき、女のためにと準備なせば、男兒の生るゝものぞときゝて、かく、なまめきたる、わかき衣ども、心がま

へしつる、こも母のねぎごとなるべし。

今は世になき吾母君の、わがうなゐがみなで給ひて、あはれいまし、口惜しき汝よ、何とて女と、生をうけしぞと、泣き給ひし時、父君はたゞ面を背け給ひし、せめてもの思出にとて、わらはゝ、十二といふ年の頃まで筒袖に男の袴きて、革袋かけて學校に通ひぬ、しらぬ人は坊様と我を呼びしか、あゝそも夢なりし、わらはゝ遂に女なりしなり、ともすれば、はかなき想に伏沈む、かよわき女子と何生れけむ。もつ針ふとすべりぬ、そは縫ふ糸のつきしなりき。

心ゆく限り、文の林に分入らせてよ、との吾ねぎ言も、父はしりぞけ給ひき、女子の身に深き學問の用なくとて。わらはの、赤十字社看護婦のむれに入りしは、そはせめてもの心やりなりし、母が昔の夜語りにきゝし、ナイチンゲール嬢が、いさましく優しき、其同情の涙は、幼きわが胸にふかく染みてき。

みだるゝ胸の、想をやらんと、閉ぢこめし障子ひらけば、暮秋の日かげ力なく、廣き庭をてらしぬ、きのふはまだ、つぼみなりし、垣の白菊一輪ひらきたるに、哀れげなる蝶一ツすがりぬ。あはれ蝶よ、おのが身のつひの終りもしらで、菊の香に酔ふか、さめずや胡蝶、はかなき夢の菊の葉そと打ゆれば、蝶は驚きて、ひら〱と飛びぬ。よしなき罪を犯しつるよ。

蝶の思もことわりなれ、いかに清く美しき、菊の香なるよ、お菊の香、されどこも塵の世の外ならず、やがては罪多き人の子の手に、あれら清香を汚すことなきか。

天にありては星、地にありては花、人のよのわれら女性の身、あくまでもかよわく、はかなものとなり終るなるか、殺伐粗野なる人の子は、清けき朝の花の露も、いやしき星の夕の微笑も、冷やかなる眼に何とみるらむ。さはれ、われはうらゝじ女の身を、よしや養ひがたしと嘲けらるゝとも。われに同情の涙あり、無限の美感あり、胸にあふるゝ感慨のなからでやは。血なく骨なく氣概なき平凡の男兒と生れむよりは。

秋風よ心して吹け、そこには菊の香の、みちみてるを。蝶は香を慕ひて舞ひもどりぬ、わらはゝ急ぎ針の手を運しぬ。

多少の感慨、秋風、胡蝶、白菊などを點綴する處、作者の筆力を見る　（桂月）

秀逸

あゝ春の海

小西雅

ひろ〳〵と果しも知らぬ青海原は白帆あげてこぎゆく船もおぼろに霞こめていとのどけきに、花を見すてゝやかへりゆく雁がねの一むら海くつらねたるなどえも云はれずなむ。かくも快き春の海をのぞめば誰しも心のどかになりて、日頃はうきにたえしづむ人も束の間に洗ひ去られ、てそが心には一點の雲だにかゝらず、いとさはやかにすが〳〵しうなりゆくらむ。さるに、あゝさてもあやしの我心かな。人のかくまで樂しき春の海を見る毎に今まで物にまぎれて忘られたる憂の假にわきいでゝ涙とどめえぬこそあやしけれ。されどこは深きいはれあるとなり。いでや夢をぼろしの如き過去を追想せむ。



造花

指をりかぞふればあはれ久しくも八とせにけるかな。今はしも八とせの昔とはなりぬ。我未だ六才にて幼稚園にかよひける時、をば様〳〵とてこひ慕ふ人一人おはしき。元より我家には何のゆかりもなく、たゞ其の君の父母なる人の近きほとりに住み給ひしかばよろづ心安うしけるが基となりしのみなるに、いかなる宿世のえにしなりけむ。なれ初めてより血を分けしをばにも勝りてなつかしくしたはしくていつも〳〵あそびにゆきぬ。

春は花さく櫻か元にまゝ事をなし、秋はをばの君にそひねせられて罪なき夢ぢをたどりしかの頃のたのしさ。

満つればかくる世の習などは夢にも知らで樂しく一とせをすごしける。さるにあけし年の春 夫の君の御都合にて大坂にのぼり給ふべくなりぬ、

あゝ春の海、春の海、こゝに於ていとも悲しき永劫の別れをこそはつげたれ。あはれ目に見る知きかの時、甲板に立ちて殘りをしげに見下し給ふをば君の御目と、我見あげし眼と互に合ひし時ぞ現世にての見をさめなりしとは神ならぬ身の我も人もいかでか知るべき。

其後御文は度々來れども、皆ふる里をなつかしみ、かへりたしとの文字はいつも見えてあはれいく度か袂をぬらしけむ。やがて秋ともなりけるに雁のおとづれはいとも悲慘なるしらせをつたへぬをばの君は世を去り給ひきてふ。

この時の我心やいかに。まして彼君の父母なる人のなげきは言ふも愚なりき。

年月は早くたちてはや八とせの昔とすぎ去りぬ。戀しき君の御おもかげさへおぼろになりゆくぞ悲しき。あはれ賤の をだまきくりかへし、くりかへすとも昔を今になすよしもあらじ、いかに思ふともかひなき事とは思へどもなほ忍ばるゝは昔なるかな。

汐干がり、船あそび、樂しからずしもあらず。されど其たのしさよりも一しほ悲しきうれひの雲のたのしき光をおひ去るをいかにせむ。

八とせ昔にかわらぬ海原を、今も昔の船はかよへり。わはれ八とせの昔、その船にのりて其海をわたし人や今いづこ。

筆は極めて幼稚なれど、情趣の掬すべきものあり。

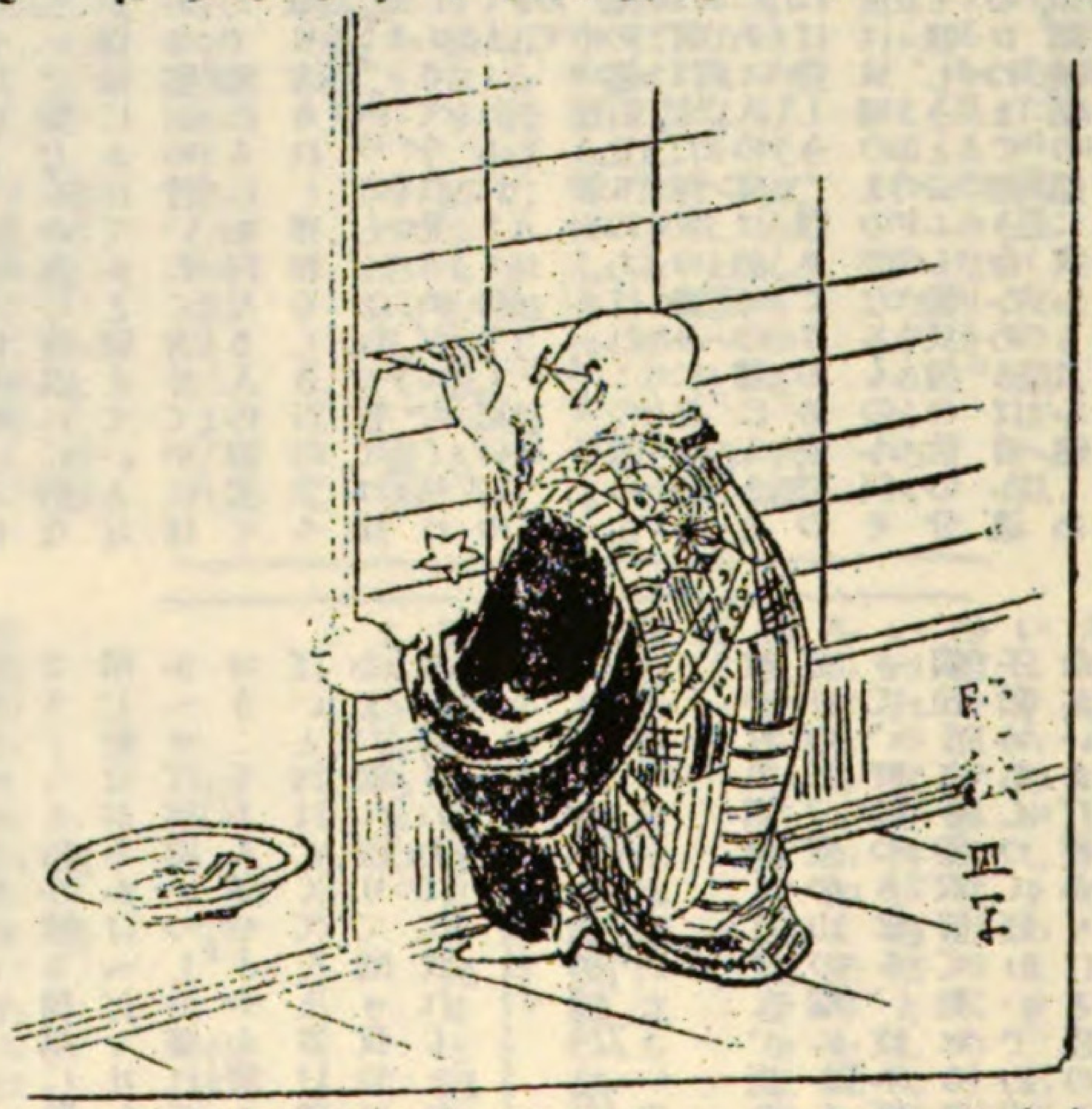
賞外佳作

須磨の暮秋

神戸 なみ子

相知れる人のこの頃須磨に移りすみたるが許より松の嵐浪の音の外にはたえておとなふ人もなくて 行平の中納言にはあられども しほたれつゝわびくらすないかでとへかしなどいひおこせければ哀に思ひて一日ひる過ぐる頃よりとぶらひ行きけり門おしあけて入れば物ふりたる松の木立なつかしく箒のあとあざやかなる上に落葉いたう散りしきたり奥の方に庭のほどよりはさゝやかにたてなしたる家居のさまも所がらいとつき〴〵しその人いたくよろこびていざとて手をとりて案内す磯近くしつらひたれば此方彼方の島も山も海を隔てゝ只まのあたり見え空も水もひとつ色にすみわたりたる沖の方を白帆あげてゆきかふ船のさまもたゞならずなかし人ずくなればつれ〳〵とものさびしげにてあたりのさまも塵の世の外の心地すかゝる靜けきすみかこそ羨しけれといへばなか〳〵にわびしうて友まどはしゝ浦千鳥と共に踏琴に涙のよる〳〵なきあかすのみなるなとてやがてかにかくと物語するほどにいつしか日もかたぶきぬれば歸らむとするに などてか さは 心みじかき夜こそいとゞものさびしきに今宵ばかりはなどしひてとゞむあながちにふりすてゝひなむもさすがに

心くるしければうべなひて日くれはてゐどなほかたらふ程にいつしか夜もふけにけり思ふほどをいひつゞくれば長き夜もあけむとすむはやれたまへとそゝのかされてまうけの臥床に入りぬ夜寒の頃なればふすまひきかづけど何とはなしにいねがたきにあたりはいよ〳〵靜まりはてたりしひてれんじて眼ふたけば かれ〳〵に聞ゆる虫の聲々も耳にさしあてたるやうにて心細げなるに遠き浪の音は近くなりてたゞ枕にうちよすると思へば又ほのかになりつゝをちかへり ひゞき松の嵐は ゆくへさへさながら見ゆる 心地してあたりの梢をかなたざまに おとづれ わたるもたえがたきまでに さびし何となき身にすら涙ぐまるゝをまして 物のあはれ しれらむ人に聞かせましかばと 思ふもの からげにさすらへ人の 心地していとゞ まどろみあへでうちみじろぎなど するにふと耳に入りたるあやしの 音よ松の 響にも浪の響にも浪の音にもあらぬめれば 又耳かたむくるほどもなく 嵐のためみに聞こえしは里の砧のひゞきなりけりあはれ 夜も 更ぬるに誰の爲にか いそぐらむ たゞかりそめの一夜斗りの 草まくらになほ 一しほの露なきそへさせそと思ふにかぎりもなくものかなしかりしか



あしたの御墓

ひ さ か た

我がなつしき祖母のみ墓ことしの春一度まみえまゐらせてより事にまぎれてえ詣でず冬枯れの草木の亂れにあたりは如何にか汚れつらひいざ行きて清めまゐらせ玉と東雲の空やうやう白みかゝれる程に家を出つ

見渡すかぎり狹霧立ちこめて山も川も見え分かずゆきかふ人もあるやならや秋はいつしかしめやかになりぬ霧いと深き道ゆけば曉の風ひやゝかに裳をはらふに寒さは身にぞしみ渡る

道の邊に蔦延木毎冬枯れてみゐめだになうみどりを誇りし松が枝さへ今朝の霜に色あせて只らむ春の風まちがほなり 猶ゆく〳〵果敢なげに只一本咲き殘れる野菊の花の黄なるがふと目に止まりつ あやにくに手向くべき花の香だになきにいと思ひ惱みし折からゆくりなくも目に止まりしにの花祖母が好み玉ひし菊なるに猶嬉しうてこれなぞとそと根をぬきて携さへぬ

遠くもあらぬ道の程なれば早やたどり來つ手桶に清水汲み入れて靜に墓場の形ばかりなる折戸開けばさつ冷たき風ではなれし世を知らすなり

同じ様なる墓石いくつか過ぎて御墓に詣で清水を手向けあたりを清めさて彼の野菊なみ墓の石の傍におぼつかなくも植え終りつあはれ我なつかしき祖母の君よ我今日の手向草一時ならず枯れも朽つるまで朝な夕なに眺め給へかし天つ御空の麗はしき花の香にはとうべくも侍られどみは只我誠ばかりの眞心ぞ汲みて給ひてよ云へど聲なくみ墓の苔長へに靜なり立ち登りし香の烟俄に亂るゝは祖母が御袖にふれてかと覺えていとなつかしたゝずみしまゝ見渡せば見覺えある墓石の皆いたく古りて中には苔さへ蒸せるがあり詣ずる折々香花絶えず薦れるに如何なる人の御墓ぞと思ひし事ありつる墓石の今は跡なく取り去られし亦新らしき石の立ちたるは如何なるよしのなりてにやとそぞろ涙のさしくまれつ嘗ては緣を誇りて燃え出で、柴草の露に咽び霜におさて今は見るめだになく枯れ朽ちしも哀れなり倒れし卒都婆　霜白くかゝれるにさし出でし菊の花の露はら／＼と散るはそもや何を果敢なみて

悲しくそよぐ吳竹の許にまだ新しき一基の墓石立ちぬあはれこの墓の主よ我みとしの春この四邊さまよひし時は君は未だ浮世の營みに身を任かせて猶長かるべき行末を夢みしならむにあゝ人の身は朝毎の霜にもまして果敢なきものよげにや朝の紅顏も夕には空しき亡骸まぐさかる荒野の末にさらす世の習ひ榮枯盛衰かあらむ世は只時のまの夢なるものを何そか喜び將た亦何をか悲まむ尊きと云ふも賤しきと云ふも皆只假の世の分ちのみ末は同じ苔の下にぞ眠るなる露のひぬまの短き命をあるは君を追ひあるは利に走り戀に泣き饑に苦みて煩悶懊惱の焔に我から身を燒くあはれ罪の子が神に求むる救ひの聲を松風靜けき苔の下にいとも安らけく眠たる御魂何ときゝの聞くらむ

あゝ此汚れなきみ墓にやどれる幾百の御魂よ運命の神の手を逃れて高づ一筋に香惡さくは賢愚などいまはしき分ちもなくて覓むる時なきいとも平の其眠如何ばのりか樂しからむ如何ばかりか嬉しからむ羨ましの身の上にみなあはれ幸なの我は猶いくとせか添世の波にただよひつゝ憂き春秋を重めるにかみの靜けき墓場を我富にて樂しき眠につくはそもいづれの日ぞ嗚呼未猶遙し

さう／＼と梢を渡る朝風に散るは芝生におく霜かみ墓にやどる白露か同じ世ながらかけへだゝりしみ墓に詣づゝ心もすみぬいざと許り歩みをかへせば狹霧いつしか霽れて傾く月影夢よりも淡し

ゆきこてふ人影やうやう繁き道をゆく／＼つゞれをまてふかたゐを見ればいと汚はしくてそとさけ錦をかざる人に逢ひては一度悟りし樣なりし心また素に返りて醜き我裝ひのそだつに耻かしうて人なき裏道急ぎつゝ家に歸りぬあはれ我れもまた罪の子なりけるよ

夏の夜がたり

山口ふよう

蚊やりの烟絶えはてゝ、庭の虫の音のみ、ひとりかしましきに、十日あまりの月、東の山の端にさし出でゝ、庭樹の葉毎に宿る露の白玉きらめきて、軒につるせる、岐阜灯燈の光ははとかすかなり。

端近う白き浴衣着て坐せる翁の、鬚あくまで白きが、常に手にせる唐扇子動めかしつゝ語りいでぬ。

余がいまだ若かりける程のことなりき、元來釣を好みて、魚氣違と呼ばるゝ程にて、若かりし時は殊に甚だしく、親のいさめも聞かばこそ、まして人のいさめは、馬の耳に風と聞き流して、夜となく、日となく、綸片手にあやつりながら海に暮しぬ。

ある夜、友どち三人四人誘ひ合せて、釣に出でぬ。夏の始めつ頃なれば、

夜風涼しく面を吹きて、艪聲おかしく、友が自慢の追分節いと高やかに、うたうに、船はいつしか沖邊に出で鼈流島のほとり飛石、狼石、となんいふ岩かけに、錨を打ちて、釣を垂れぬ。この嶋には避病院ありて年々死者多きところなれば、夜陰このほとりを過ぐる人さへ無きに、若氣一徹に恐氣もなく、煙管口にして釣に餘念もなかけり。

折しも月の始めつ方なれは、月さへ見へて、あたり眞黑く友の顔さへ見へず。只遠く小戸の清流に、漁火の明滅するを見るのみなりき。

如何にしけん、釣自慢の面々、我こそ先登よ、と名のりのあぐるものも無く、無言のまゝに尚ほ釣れるなりき。

折から余が針にかゝれるとのあり、いざ引きあげて誇らんものと、手操りて見るにいと重けあり、さらば必ず大るな魚なるべしと思へと、逃れんとする様もなく、只糸を引けば上り、伸ばせばまた下る、手ぐりてはのばし伸してては操り上げつゝ遂に上げぬ。水の面と覺ぼしきほとりより、勇みて之れを船に投ぜり、其音恰かも石を投げたるが如し。あやしみて之れを見るに、しかとは見えれど白き様なり、石ならむと思へと、石の針にかゝるべき答なし、試みに手を觸るゝに、冷やかにして、堅きこと限りなく、形圓し。皆釣りを止めて眺めぬ。

心の迷ひか白きもの、動くやうなり。

あきしといへば、友も奇やしと答ふ。只心を靜めて之れを見るによく動めけり。

火打石と我は呼びぬ、友は側よりさぐりて余が手に渡せり、あまた度摩擦せし後漸く火を發っ。この瞬間我は消然として、四肢戦き、林寒く、覺えず後へに退きぬ、友も亦黯然として退ける様なり。

あゝ、余が釣り上げしものは白骨なり、まさしく人間の頭蓋骨なり而してこの頭蓋骨が動けるなり

あやしと思ふ心の、いよ／＼募れるまゝ、われは戦く手を調して再び火打石を取りぬ。

次ぎの火光に、すかし見たるとき、白骨の穴より數本の足の出でたる見き、我は蟹の住へるに非らずや、といひしに、友もまたさならんと答ふ。

いよ／＼あやしきあまり、三度石をすれり、はたして頭蓋骨の中に宿れる蟹の目、鼻口などの穴あり、おのが足を出して歩けるなりき。

いづれの友も再び黯然として聲なし、われも亦體おのゝきて、全身を水をかけらるゝか如く惡寒を覺へぬ。

我は立ちあがりて頭蓋骨をば海中に投じ、双の手に艪しかと握りしめぬ。

漸しの後、我は海岸に立ち、魚籠片手に、艪を荷へり。

余はみづから、何時の間に如何にして歸りしかを知らず、家に歸り後、なほ心やすぐれざりき。

語り終れるとき月の光さと流れ入りて翁の鬚いと白らかにかゞやき、目あやしらきらあきぬ。

反古袋

伊勢　西井善子

殘菊

岩間流るゝ小川の岸、あるは、清水滴る崖のほとりに、わづかばかりの野菊、他の草々の枯れはてしをも知らず顔に、さき匂へる中々にゆかしく、賤が家の破れたる垣根、落葉いとしげき古樹の根元、さては、見る色もなき枯野の中などに、二株、三株、しをれながらも枯れ殘りて、

小さき花さける、いと哀れ深し。庭のすみ、床の下などに置きすてられたる鉢うえの、枯れ／＼なる菊、あはれ、花さかりなりしころは、高殿の欄の上などにも、かざられたりしならんを、など思はれて、げに／＼あはれなり。

秋風

八千町うちつゞく田の面の稲の、いと豊かにみのりて黄金敷きたらんやうなる上を、さら／＼と小鈴うちふるがごとき音たてゝ、渡りゆく風、中々に床しく、松の梢に通ふ風、琴の音に似て、非狩のかへるさなとにきゝたる神の御聲かと疑はる、されど、さき乱れたる萩の花、うち散らす風、麗はしく紅葉せる木の葉誘ひゆく風など、共にいとにくゝ、亡せし母上の一週年に當れる日、御墓音信れて、み前にぬかづけるなりしもさとふきくる風の、なたへにもたせありし、卒塔婆、はたとうち倒しつゝ、手向けありし花の枯葉ほろ／＼と散らしたるいと／＼無情なり。

鴉

彼方此方田に、稲刈りゐし農夫どもの、家にかへり来るころ、鎮守の森の一きは高き杉の樹のほとりに、二羽三羽の鴉、塒求めがほに飛びめぐれる、いと面白く、やせさらばひたる案山子の破れ笠の上に、飛びさらんともせで、とまれる鴉、歌に詠まばやと思はる。朝まだきよりうらの森になきさはぎて、楽しき夢やぶる、いとにくゝ、取らで大切に殘しなきし熟柿を、つゝき落したる鴉、更に惡し。

梅

梅はいと／＼優美なる花にこそ、人里遠き深山の奥、さては、小川流るゝ山の麓などに、たゞ一株、春つげ顔に匂ひいでたる、いとゆかしく、けづれるが如き崖の上の見るもおそろしきやうなるところに、落ちかゝらんばかりになりて、花咲き亂れゐる、繪にかゝばなど思はれて、中々に面白し、されど、あれたる古寺の本堂のあたり、あるは、門のかたへなどに、さきいでゝ、床しきかなりはなてる、さすが往時のしのばれて、いとあはれ深く、なかば木の葉にうづもれたる池の、汀などに、作なわすれず匂ひいでたる、またなんかし。新年の門松と共にたてある梅は更なり、式場、床の間などに、美しき花瓶にいけて、かざりあるいと／＼目出度、白髪の翁の隠宅となぼしき、ことそぎたる茅庵のほとりに、二本三本ばかり梅のさきみだれゐる、げに主の心も、はかり知らるゝぞかし。

糸すゝきの表紙

たまその

こきうすき、はた白きくろき雲、いづかたへか去りたる。一片の雲影にだにとゞむるなく、こゝろゆくばかり晴れわたりし大空に、ひかりをはなちて、またゝく數星のかげ、作りひき／ぼりたらんが如き、峡々の太陰にとなりて淡く、「糸すゝき」てふ文字はしるく、峰こへて雲こへて、秋の悲うたはんとする、雁の一つらとも見るらむ。折しも秋風一陣さつとふきくれば、咲きそめたる月前の秋海棠、うら葉おもて葉ひるがへりて、やどりし露のしら玉、今しもこぼれ落ちなんとす！

アゝ、この満月、この明月、そのまゝきりぬきても空にかけて、幾多の詩歌人に、仲秋無月のうらみ、發せざらましかばと思はるゝも、及ばぬ愚痴ならむかや。

あきの野か、山か、庭か、みるよしもなく、わかづよしもあられど、先にはうつくしき繪の、禾萩もあるべく、枝にはやさしき、尾花がそで、

むらさきふかきゆかりの、特もあるべし。そがつゞきたる根方は、月になく、すゞ虫まつ虫きり〴〵すの、よもすがらのやどとやなるらむ。あはれぐさ〳〵になく其のこゑ、高きひくき其の調。ふでにのせ紙にのせて、あかぬながめこの表紙へ、そのまゝ一しほの色、そえてしがな。その弟はいひぬ、このまろき月の中にしも、兎の餅つきて居るならむ。兎、兎、人にてある上からは、よしや陽ゆともくるふとも、ゆかれぬ身の、あはれ兎ともなりて、そのうつくしき、やさしき、きよき光に、とこしなへに變らぬすまゐさだめて、そが桂のはなの、優なる匂ひに、已がこゝろ、醉はさんかなとぞ思はるゝ。つみに汚れしうき世、人にけがれし浮世、いかにけがされしこの世かな。

花の色葉のすぢまでもさやかに見えし月のかげ、今朦朧たるは何?ア、それよ、こも又浮世のわざか。あらぬか。外ならぬ机の上の塵に、よごれしなり。

さてもいまはしきよ。天外幾百萬里のすみわたりたる夜半の月、手にとりてもみる。沈みがちなる胸もしかすがに晴るゝを、このくもり、このけがれ、あゝこなしも餅つく兎と見なしてゝ慰めがたきを如何にせむ。

秋の暮おもひを述ふ

下野 手藤つき

萩の上風うらさびたる曉、たえ〴〵殘る蟲の音の、霜がれ初めし尾花がもとにかすかに聞えて、有明の月の影淡きみ空に、本の葉の舟の漂ひて、はた〳〵と園の戸おとづれたる、草の庵に夢おどろかされしわび人は、まして猶やしぼるらむ。萩の下葉色づきて、さなじかの堅身にしみわたる夕、桐の汚葉におく露もそゞろ寒う見やらるゝに、冬めきて冴えたる空に、雁がれの行く秋を惜しみてや哀れに鳴きわたりたる程、千里の外の人こふる身は、まして腸を絶つ思ひやあらむ、書きつづればげにたゞならぬは秋も暮れ行く程にて、思ひなきだに袖しぼらるゝ習ひなるを、酷人のめではやすめるもちの夜に、盈つればかくる世の道理を月よりさきに我身の上に見せて、才足らひ姿とゝのほり心ばへゆかしかりける友垣の、雲がくれはてにしをこふる身はいとど哀れに覺えて、しぐれにかつちる紅葉ばよりももろきは、我がこの袖の秋の露にぞあゐ。「おしなべて思ひしことのかず〳〵に」と打誦しつゝつく〳〵と夕暮の庭のおもを見いづれば、誠は「なほいろまさる」やうにおぼゆるや。忘れもやらぬまだ秋の野は八千草の花盛りにておく露やう〳〵しげかりし頃、七草の花見んとて、ともに手を携へつゝかへり花さへ咲きてのとかなる日かげに、年頃仲睦まじかりければ洋傘の絹の模樣もつゆ嫌はぬをさしかはし、里人にまじりて花のいろ〳〵手折りぬる折にしも友は云ひけり、女郎花は花の色こそめでたけれ、あだめきたるが厭はしければ、はかなしと名には立てれど、これこそはと千草の中に一花哀れに咲きまじりたる朝顔を、うれしげに持たりける其面影は今も猶忘れがたきを、あはれ其の花の露よりもろかりつる人の命なりけりな。かゝらむしるしにや一日も相見ればば心うくて、物學びに行くも勉むるも遊ぶも共にしけるに、姉妹にやなど云ふ人のありければ、嬉しやはらからと人のいふは、われ今よりは眞の姉上と思はむ、否思ふは日頃よりなれば姉上と呼ばむと懐かしげにこそ友はいひけれ。哀れわれ姉ならば先だつべきをなどて一人のみいに給ひしと、今更のやうに悲しとも悲し。我が心はやみなりしもちの夜は、昨日やうに覺ゆるを、數ふればいたくも日數經にける哉、はや秋も暮れがたの哀れを盡す種なるに、何も〳〵足らはぬ方はなけれど黃金にも玉

にも代る實とめでられし彼の君失せて、たらちれの君やいかに歎きあまるらむ、我だに子しあへぬ袖なるをさ、さまぐ思ひめぐらさるゝ程、例のかきくらし打しぐれて心細さいはむ方なし、欸のおもとが書きおかれにし物語のうちなる某中將が、妹を失ひて「雨となりしぐるゝ空の浮雲を」とよみけむも理にて、實に「何れのかたとわきて眺めむ」とこそをほゆれ。

草の庵に世をわぶるも、心あひたらむどちならばうしとも思はし、遠き雲居に人をこふるも、この世にしあればいつかはめぐり逢はさらむ、あゝ我れよ、今は一人、友と契りしらべにし高殿に果敢なきうき世をかこふるのみ。

二なき友にとこしへに別れてまたこの秋をおくる身の、いかでか涙に袖の朽ちざらむ、さはれ秋はただ今年ばかりの秋にはあらぬを、友は遠く逝ぎて歸らず。いつの世にかは相見む。いつの世にかは共に語らむ。

十六夜物語（一節）

福島ますほ

先立つも後るにも、同じ夢の世の末は皆、一つの道の旅なれば、歎く事もあるまじを、さはいへ、若き木の花咲く春に逢ふこともなうて、朽ち行く程こそ、こよなう口惜しとも又悲しきはあらじ。

われは月見る毎に悲しみの慕りてはやるせなきまゝ、斯くはとろありきするなりけり、思ひ廻せば去年の秋、影も限なき望月の夜中なりき、神ならぬ身のさりとは露ばかりも知る由なく、朋どちの誰れかれと月の目出度きをいひ合ひてぞたはれゐたりし、明くる日の悲しさこそなけれ、車るもあへず心も空急ぎに急ぎて家路を辿りぬ、そは、我がいとしき妹のかりそめの病の募りて、しばしの命さへ危しとの報ありたればなり、其の時の驚き、其の時の悲しさ、知るはもとよりわらはのみ。

われは、人心地もせず、夢現とも覺えず、心は空なり、汽車さへも今は遲牛の歩みとやいはん、果は怨おして來ん驛は何、次は何と、心もはせ去りて彼方の雲の下こそなど思ひつゞけける程に、汽車を棄つべき所には着きぬ、今日は、常に似ず、俥も腕車もて續けぬ、此の水もはや渡れり、彼の岡もけぢかくなりぬ、さはれ、彼方の森までは未だ程あるを、妹やいかにと、心づかひを小車の、彼方此方に廻ぐらしつゝ、早くくゝとせき立つれば、思ひきや、情なしの車夫にしかられぬ。

潜戸おせば、うちより父上母君の、御涙滋く、御聲もしどろに、出で迎へ給にその御有樣、小さき胸は、はりさけんばかり、げに心さとなく、且は、遲りしよ事ぎれてよと、涙にひじて、くづれ給ふ人々の聲にも心ならず、いそぎ、枕邊に到り、屏風おしのけ見れば、あなかなし、あなくやし、白布もて顏を掩へる、香の烟りの末幽かなるなど、皆絶えはてし後の事とて、如何に呼べども甲斐なく、いかに叫べとも應へなし、唯ゝ安う寢入れるに似たる恩なさよ、やがて、ものいはんとて手を取れば、およびも冷へかへりて、いとゞ細りたる去年のものとも思へず、これもまた涙の種、かへり見れば集へる人々の、聲さへ涙にいとしめりて、泣きふし様、何の言葉もいでず、母君の、そが病のせはしう起りきて、なれに知らする暇さへ、なくてなど、悲しみの内にも詫び言仰せらるゝ御心の謎、おし計るさへ愚なりけり、なほ其のきはの事共、語らせ給ふにつけても。先立つものは唯涙のみ、悲しきかも、いたましきかも。嗚呼、一方ならぬ姿が心づかひも皆、仇となりぬ、今は、嗚、玉の緒の絶えもありはてなでしなばなど、甲斐なくもかこつのみ、人の命は、朝顏の花の上なる露とるいへ、いとしき己が妹のみ、などかくは、はかなかりし

か、慈愛深き父母の君は、なほ此の世にいまし、涙多き妾も、尙未だ此の世にあるを、嗚呼思へば溫かき昔の日は、誠にをじかの束の間の夢なりしよ、されど、戀しむまじ、なげくまじ、そも、この悲しみ、此の厭きのやまん時は、やがて、我が身が妹のわだちを辿るの時なれば、あゝ情なの世や。
其の後の事共ば記さず、唯其の夜十六夜にて、風もいみじう冷かに亘り、譯に蟲る月影の、いと白かりき。

我庵の秋夜

神奈川 吉田清子

人里遠き深山がくれの我宿は花の都と異りて世の憂き事の聞えぬものから見るもの聞くもの、いと靜にな夕な松か枝の小聲にまひ、淸らかなる月に、うろふきて只愛らしき妹と、此たのしき里に世を過しつ後は峰のいや高く、前は小川のいと淸く、あしたには白雲に身をまかせ、夕には流るゝ水に耳目を洗ひ、庭にうえてし萩桔梗を眺めては、心を慰むる其樂しさ、云はん方なし、嗚呼塵を吹きたつる風は、都大路と聞きしが、何處のあたりなるらん。
夕日も山に舂つきて、牛に跨がる童、家路を、いそぐにやあらん聲たからかに節おもしろう彼方の森のかげに後をかくしぬ、鳥は塒を求むるなるべし樹々の間に飛びかふよ月は出でぬ、ひろくもあらぬ、我庭の萩薄尾花に露とめて光りやどせるうつくしさ、そはよぐ風に玉とちりて音高きに妹の、あれよあれよと指して、我が袖を、とらふるも、いとをかし、折から、雁が音の三つ四つ五つ月をかすめて、飛び行くを、がんがん後の雁と愛らしき口を動かして歌ふもいぢらしきよ

木々の梢は、半紅葉して、また一入の興をそふ、妻こふ鹿の音こそ聞えぬ松虫鈴虫は心ありげに萩尾花の木に、かまびすしき迄になくよ、軒端につるしゝ籠には何やらん、これぞ晝の間に後の山にて妹の捕へ來し、くつわ蟲よ
夜は更けぬ妹は臥しぬ、あはれあはれ妹よ今宵は如何なる夢を結ぶらん今宵の月影にいかなる夢路を辿るらんげに樂しきは山里なる哉、嬉しきは我庵なる哉
塵にうもるゝ、世の人よ名利に走る世の人よ、などて此の境に遊ばざる世外の月、塵外の香、とこしえに輝き、無限に匂ふなる。

鄙の秋

神田 賤の家靜子

◎木々の梢も色づきそめて、葉わけの風もうす寒く、身にしみ渡る昨日今日、都大路に居りてさへ、何となう秋寂びたる心地せらるゝに、鄙の秋はさこそ繪にも似たらむ上野より花畑村の邊まで逍遙ひしは、去る十月の六日なりき。
◎黑き畑棚引にせる車は早くも北千住に留まりければこゝにて下りぬ。過ぎし火炎に灰塵となりし家の跡に、小さく新しき軒立つを視て、似もやらぬ唐の古事思ひ出でられて其當時を忍ぶも、なかしく又哀れに、なむ。町のはづれに到れば碁盤とも覺ゆる無限のちまち田にて畔の細路には名も知らぬ樹、あまた植ゑられてその葉紅ひにいと疎らなり。
◎路傍にそうない子の些々やかなる紙鳶を、小川の柳を越えて田中の案山子にからめわづらふさま、あはれなれば、手繩の竹にて放しやりぬ。
◎足もとよりけたゝましく立つ鴫におどろきて見やれば臥床と覺えて秋

草のうちの一輪の野菊、ふら〳〵と揺ぎて露をこぼせる、哀れにも優さし。

◉早稻刈る里の乙女の膝ばかりなる古服着て、赤き襷に二の腕を惜し氣もなく見せ、晒の手拭眉深かに被ぶりて、鎌を片手に、此方を振り向きたる風情珍らし。

◉柴垣にめぐらしたる農家の椽側に、ゐろき朝日さして座蒲團の上に白き小猫の日なたぼこりして、庭には牝鷄の四ッ五ッの雛を連れて、餌をあさりつゝ鳴きまはるさま、秋の景色とはいへざるも、繪にもほしき程なりき。

◉田畔に、高さ一と木の槐の枯葉少なき頂きに、百舌鳥の尾を揮りつゝ、秋もまなかになりぬると、聲かしましく鳴き頻る下に、農家の太く丸く肥えたる小犬の優しき聲に吠ゆるまに一興ありき。

◉路の片側に水濁りたる小さき流ありて、常に田より水垂れ落ちぬ、底は沼にて一面に藻草浮び、ちさけれど濁らぬ白き花、河骨に似たる黄なる花咲るいと嬉し。

◉田面の畔に數多立てる樹、あるは垣などに、刈りたる稻を二階三階と積み重ねてほしたるに、吉原雀群れ集ひてなくは、秋の豊を祝して謡ふかな、とも覺えぬ。

◉隅田川の支流なる綾瀬川の堤に出でしに、こゝも水は濁りたれど、堤の雜木繁れる上に葛の花咲き亂れて、水際の材の傍なる草の上に鶺の遊びて、上潮に帆をあげてのぼの船より謡歌幽かに聞えしはまた詩趣に富みたりき。

◉折りしも秋の空とて怪しき雲も出ざるに太陽の光俄にうせて、み空より錦糸を張らせし如く細き雨斜に落ち來るにさては時雨よと河に沿ひたる、河内屋てふ旅館に馳せ込みぬ。

◉夜に入れて雨も止みたれば、たくみ橋を渡りて村役場の邊まで出で行きしにこんもりと茂りたる木々の頂に稞の梢あらはに冴えたる月懸りて薄暗き内に古き社見えて、椽の下より小犬の鳴音聞えしは、いたくも身る徹しぬ。

◉其他種々あれども悉くは言ひ盡せず、諸嬢幸に一日の暇あらば近在に出でゝまの邊秋の景色を味び給へ。

姉のいとし子

大坂　井上登美子

亡き姉の遺し給へるこのいとし子よ、母に似給へる面ざし、ことにまみ口もとのあたり、見るたびに亡き人の上しのばれてなむ、さるにも姉が今はの際に、死なむ身にも生ひ立たむ行末の心元なさはと、指さし給ふは其稚子の上にて、あはれ子故の闇に迷ひぬとぞ聞く、いまだうきふし知るゐはしきみど子の、生れてわづか十月たちしのみなるに、逝ふよしもなき長のわかれぞ、たけのび人心つきて後なき母戀しと思ふならむ、われ母にかはりておふしたてゝむ、こなたは母の里なればとて、ことし春のくれわれ獨りあづまの都にのぼりてむかへ來りぬ。

都にてもろ人に愛でかしつかれしこと、はた行きかひの車の內にても、よき見ぞ持ちたまふなど羨やまれ、糞つら雷のやうなる人にも、おづることなく愛けうづき笑むに、秀でたる見はいのちすくなしとかやゆめ心なゆるべぞと、道師やうの人にいはれしこともありければ、心にかけて育てつ。

燈火かゝて物縫ひつゝ、傍にすや〳〵とねむれる子の寐顏つちながめて、つく〳〵と例の亡き姉の事しのぶれば、この子もまたわがかなしび

を知りたるや、目さめてうち啼く、かいいだきてミルクすはするに、なほ忘れでや、わが胸のあたりかいさぐり、ちゝをもとむるさまの、かなしきに泣きぬ。

つれは寐覺にもにこやかにうちゑみて、啼くことはいと稀なるに、こよひかばかり聲たてゝ啼くは如何したるならん、飢えたるかミルクすはせてもふりはなちてたゞうち啼くのみなるに、おのれまだ子をおふしたてしことなき身のいたく胸をいためつ、夜の明くるをまちつとて即くすしにみせたれば、こは別にさせることなし、得れば人の乳を飲ましむる方よからんといふに、其後乳おもやはんとて遠近さぐり求むれど、ふさはしきは一人もあらず、雨のふる夜半乳乞はんとて、この子いだきゆき乳おもやの戸うちたゝくに、久しうせざれば戸をあけくれぬに、飢えにたえずやますます啼く、はらだたしきものゝ一つに數へけんもけにさることにて、われも覺もずなきしことたび〳〵なり、からうじて近きあたりの人々のを乞ひ求めて育つるほどに、この頃また子なくしてさびしさにたえず、うつくしき子なり、あづかりてみんといふ人のいできにければ、しばしあづくることに定めつ。

あすつかはすといふ夜よもすから、きせてゆくべききぬ縫ふとて、家の人々と心急はしく針を運ぶ傍、人にいだかれてほゝゑみ、それと知らぬさまのいとかなしうて、人知れずたもとをしぼりしか。人を添へてつかはしぬる其夜のなかばかりに、をさなごのいといたく啼く聲したり、こはいかにと起きてさぐりもとめんとすれば夢にてありき、あはれこよひは知らぬ乳母に夜やあかすらむ、人やりならぬ思ひにこそ。

初雪

米澤　馬場春子

散りのこりし一本の楓の梢も今はと見えて木枯すごう霙さへしぐれし夜もすがらとくふらなんとえもねずおきいつればまを垣の中靜かにうつみていさゝのちりもとめずはれゐたるこひしらずすが〳〵しあはれ遠山小野より茅の軒までましろに清く山のはに殘むの月さへ影しろくしばし此世の外の事までも思ひやられていとうれしげにやきのふの暁のふをやも淺茅の庭も隙まかむまかむまでさまかわりてすが〳〵しく松竹の上はさらにて多くの木々の枝たがひて春にしられぬ花さきみち見處なく軒にしほれしきのふの菊さへけふ又白くと咲きいでたる春秋のあはれもなどかうしもやはむら雀のちゝとなく音もきのふにかはりて耳新し其音にさめし幼子のをしき庭もに二の字あとつけ勇める樣の心なさあはれだくべき人もなきまゝに自らちり集りしもみじばにいとつもりて山かと見るほと又うすらかにふりいでゝ窓べにつもれる書讀まなんと夜の樣さへしのばるゝほど幼子の手に生れし雪達磨のいよゝ肥え行くをあやしげに狗のまもれるあかずをかしや

年のうちに梅の咲けるを見て

芙蓉

いへはあれどとしのくれはかり、あはたゞしきはあらじ、やむごとなきわたりより、埴生のやどにいたるまで、身のほど〳〵につけて送りむかふる、いそぎとり〳〵にて家毎にすゝはらひ、或はがための用意など事しげく、道ゆく人も常とかはり、商人のもの賣るこゑもいさましや、か

しる年のくれもつとめなき身はのどかにて、文机に打むかひ窓おし開けは、さと吹入る風にたくひて、いとなつかしき香のするは梅になん、實に何事もおくれかちなる山里に獨ならはで、霜に堪へ雪を凌ぎて、かく咲きいでたるこそこうなうめてたけれ、この氣高き香をめでゝなにかしの法師は、古の事のたちかへり戀しと、書きおかれたるもことわりなりかし、されがやんごとなき玉のみきりに植ゑられて大宮人の詩に歌にもてはやさるゝもあれば、またかく人目遠き賤が垣根の片隅にゐまふもあるは、花の宿世とり〳〵にあはれなり、この花をさる處は出したてゝ、明暮はくゝまば、いかばかりかめてほやさるべきをと、梅に心あれば夕かほなられども口なしの花のちきりやとこそは思はめ、されど色をも香をも知れるとにはあらねど、己この花によりて樂しく花また己によりて其の色香むなしからず實にとし毎の心の友とこそはなりにけれ。

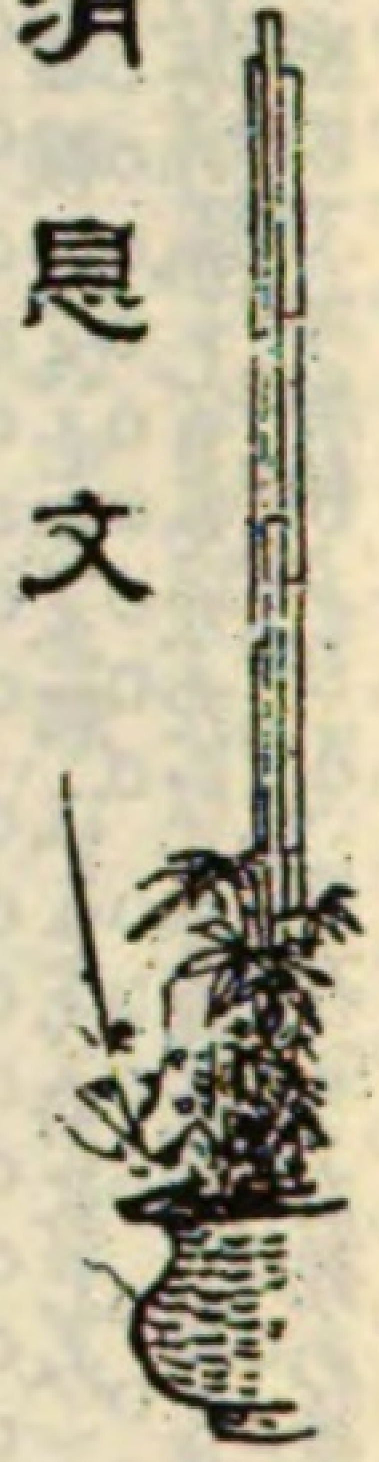
山里に菊を見る記

たき子

露の上ならましかば天つ星とも見まがはれんをかゝるさびしき山里の垣根の千草孰れも枯れて淋しき庭の面にひとり後れて咲き出てし千本の菊もわれより外に見はやす人もなしあわれやむことなき御園に植えられたらんには之が爲めに柱立て竹渡しなどしつゝ霜露を防かん料にと萬に心をくばらせらせ貴人の袖觸れ給ふ折もあらんを霜露にさらさるゝは更にてある轉にはちごなどのもてあそび草に手折らるゝこともあらんを如何に心なしとや打かこつらむなどあわれに眺めらるゝ折しも月いと面白う立ちのぼりて小菊の露にうつろいたるはげに玉とのみ見まがはれぬ

數ふれば今宵は九月九日の夜なりけりかけまくもかしこき宮中は今宵の御宴如何に目ざましう行はせ給はむされどつく〴〵と思ひめぐらせば字多の御門の御時重陽の宴に事よせて菅原の大臣を御前近く召し給ひ御題を給はせて御衣かづけ給ひける夜たゞ〳〵戀涙の外なくいかてか貶所の月をながめんと思しかけてんや去年今夜と詠ぜられし詩の心思ひやられてほと〳〵涙もよほされぬかたらふ友だになくてたゞ一人昔のことなど思ひめぐらるゝうちながき夜もいつしかふけて小菊の露もます〳〵しげうなりぬ月はいとようすみまさりて一しほのあはれを添へたるものから文朝の霜や如何ならんなどあはれに見やらるゝあゝ思へばかゝるいぶせき庭に折を忘れず咲き出てしことよあはれ霜よ心あらばいたくなふりそ雨よ心あらばいましばし降らてあれふらば如何にくるしからんふらばとくうつろいなむかくばかり操の正しき花を心なの霜や心なの雨やといかに打つぶやけばとて何の甲斐かあらんさはいへ此の菊の霜露を凌ぎて香しく咲きいでゝこそ昔より歌によみ詩に作りて其操をめて人の心の鏡ともてはやすなめりあゝ昔はこれが露をなめて千歳經たらん仙人もありとしきく世にうづもれたる己もこの花を心して千とせへたらんには其うちにいつしか香しき名を世に知らしむることもあらんとてなむ





消息文

天賞　都にある妹の許に

府下北豐島郡王子
王子停車場構內　遠藤すみゑ

秋の形見の垣根の菊もうつろひ果て、破れし軒端に訪づるゝ時雨の雨の佗しさ堪へ難き折りから、細々との御文下されいと／＼嬉しく、母諸共にくり返し／＼拜見致し候。其許には相變らず御通學の由安心致し候。皆々一同無事、殊に母上は至極御壯健に在らせられ候間、御案じなさるまじくな。御封入の成蹟表によればすべての科目とも優等におはして、殊に品行の最高點なるに、母上の御顏には、喜びの色あり／＼とよまれ、この姉も限りなう喜ばしく存じ候。すべて、學問は大切に候へ共、女子に最も大切なるは、品行に候へば、萬づ愼み深くして、かりにも人に後指さゝれぬ樣に御心づけなさるべく候。

此の頃都より歸り候人の物語りによれば、女學生の風儀、とかく荒々しく不品行の生徒も間々きこえ候由聞き及び候。そなたに限りては、かゝる事のなきは、必ず／＼とは存じ居り候へど、遠く離るゝ姉の身にとりては、寢ても覺めても、此の事のみ心配に堪へず候。誰しも求めてよこしまなる道に踏み入る者は御座無く候へ共、善には遷り難く惡には染み易きが、人情のならひに候へば、此のへんは、篤と御注意の上にも御注意なさるべく、又、御友達はよく擇みて、輕々しく御交際なさるまじくな。されど、數ある御同窓の事なれば、荒々しき振舞して、田舍者の物しらず、偏屈者よなどゝ惡まれぬ樣、惡しき友は敬して遠ざくる樣になさるるが宜しく候。かく親のもとを離れ他人の中の心づかひも、修業の一つにて、今日の苦は必ず他日の樂となるべければ、御辛抱肝要と存じ候。

さはさりながら、身體健康ならざれば、總ての事業も成就せずとか承り候へば、首途の時の母上の訓へを、よく守り、常々心がけて勉强し、試驗の前になりてあわてゝ夜明しなどの不覺して、かひなき病身の本となるやうの事し給ふな。なほうつりかはりの時節などは、御自分にてよく衣食などの上にも注意せられ、御身を大切に

なされ、成業の上は、あつぱれ賢妻良母のほまれを得られ母上の苦心姉の希望を空しうせざる様、ひたすら念じ上げ参らせ候。かゝる事は、怜悧なるそなたには云はずもがなふ事ながら、だゝ〳〵そなたの可愛き姉の婆心と、惡しからず御察し下され度く候。

都は如何にか。鄕里は立田姫の錦、日にそへて色深く和成り、山も谷も一面紅の幕を引けるが如く、森野川の白く碎くる水に、紅葉のほろ〳〵と散りて、水に弄ばるゝさまなど、見なれたる目にも、何とも申し樣もなき好景にて、獨り見ん事の誠に惜しき心地致し候まゝ、紅の色、殊に麗しきを、三ッ四ッ此の文の中に卷き込め申し候。

毎に女學世界御送り下され、御心づくしの程、如何にも有り難く、毎夜妾の讀み聞かせ奉るを、母上にも、唯一の樂みになされ居り候。又、妾も、沈み勝ちなる母上の微笑み給へる御顏を拜する事の嬉しさ、何ともたとへん方なく、秋の夜の淋しさも忘れ候。

此の手紙書き終り候折りしも、戸の隙間より、廿日許りの月影漏れ來たり候に、此の月も同じくそなたの書齋を照らし居候はんと思ふに、いとゞ身にしみておぼえ候。あはれなつかしきそなたは、今宵此の月に對して、いかなる空にてか居給ふらん。はた、また此の文の御手に屆く時は。猶申し上げ度き事は、海山つきせず候へ共、あまり長々しく候間、余は歸鄕の折りの語り草にと云ひ殘し申し候。かしこ。

（雨江評）妹を思ふまめやかなる姉の愛情、筆端に溢れて誠にやさしく、此の手紙を見て、うれしさに泣き候はん者は、唯だ此の妹のみにはあらざらむと存じ候。全篇の筆よく着實にして、そが中に、自から文才の見るべきのも候て、ゆかしき文章に御坐候。先づ初めに細々と妹に教ふる事をのべ、次に鄕里の折りからの景色にうつり、女學世界の送附のよろこびを添へ、最後に此の文書き終りたる折りからの情景を以て、一層懷ひしきよみの心にて、筆をとゞめたる、文體もよく整ひて候。所々に母の事を取りいだしたるも、姉妹の間の手紙として、大に面白くおぼえ候。末段、月影にさつての情景、其の心情も文才も共に溢れて、誠にめでたく、誠に天賞の光りを添へたりと存じ候。

地賞

秋の末都の友の許に

盛岡　志らゆき

待ちわびし秋の望中も、いつしかと移り行き、宵毎の虫の音やう〳〵ほそりぬるは、やがて時雨に木枯に人目

かれゆくしるしにやと、そゞろに心細く覺え候折柄、御許様には如何過させおはしますらむ。學び屋に通はせ給ふ御暇には例のやまと歌はさることにて、近頃は松にかよふ琴の音をもお心にかけ給ふ由、人づてにきゝ候て、ゆかしき御爪音は、遥けき都のあばら屋にまでかよひぬ心地も仕り候。

さても、指をり數ふれば、都にて別れ參らせしは、去年の今日にこそ。一とせの田舍ずまひに、やゝ物馴れし心地致し候へど、いまだによしあし語らふべき友もえ求めず、朝に小川の流れを聞きて、清く睦びし友を思ひ、夕に散る木の葉の數をかぞへて、はかなき別れを悲しみ居り候。都路はるけき處に候へば、寒さも余秋[illegible]なり申し候。はや去る頃より岩千富士の名にしるく、頂にはしら雪積り居り候。ふともの里は、萩女郎花こそ散り果て候へ、未だ秋のながめは殘り居候ものを、心急ぎの山かなと、吹き來る風も身にしむやう覺え申し候。山とし云へば、去年の今頃にもや、心あへる友打ち連れ、飛鳥山瀧の川へ遊びしこと思ひいだされ參らせ候。かの時はかく遠く離るゝこと、夢にだも知るよしなくて、又こんな年にもうたかたの契りけるを。あはれ定めて誰れ彼れ打ちつどひ、樂しき秋を眺め給ひけむと、承はらぬとだに推し計られ、只々都の空のみ戀しう思ひ暮らし居り、何となう涙の催さるゝことも、一度二度に候はず。節にふれたる御玉章なくば、いかで〳〵此の地の住居は覺束なきを、夢々忘れさせ給ふな。都の誰れ彼れにも、この事御傳へ給はり度く願ひ上げ參らせ候。



末ながら皆々様にもよしなに聞え上げ給ひてよ。

あなかしこ。

なほ〳〵先きごろ送り參らせし當地名產ぶどう飴、幷に鹽がま、殊の外御氣に召させたまひし由、これぞ風のたよりに承り及びしまゝ、此度は豆銀糖も添へて參らせ候。文机につかれ給ひし時、かつは此方を思ひいで給へとてなむ。

(雨江評) 筆志とやかに、且つ優美にして、やさしき女子のこゝろも、美はしき文才も見えて、ゆかしき文章に御坐候。住み馴れぬ山

家の心細き情景も、都に馴れ睦びたる友をなつかしく思ふ情も志めやかにやさしくげにと聞え申し候。○點を附したるあたりの筆、殊に文才愛せられ候。誠にしとやかに美はしき女子の文章は斯くこそありたけれと存じ候。

入賞

たれこめし友に無花果を贈るに添へて

埼玉縣南埼玉郡岩槻町　大亦隆子

わびしかりつる秋雨の漸う晴れわたりしけふ、久々にてひとりそこゝすゞろありきいたし候に、乳母が家の納家のうしろに、ふと見いでつるは、よく笑みわれたる無花果の實にて侍りき。そは君にもおもひわたり給ふべし。十年に近き昔の春、御身とわれと、お揃ひの友染の被布の袂、泥まみれとしつゝ、ちさき手に植ゑたるかの一もとにて侍るなれば。あまりのなつかしさに、みながらとらせさふらへば、一籠御許にも呈し候。樂しかりける幼遊びの頃、おぼしいで給ひて、赤き心を味はせ給ひてよ。さても、この十日あまり、やさしのみ聲もき參らせず。いかなることとなるべき、不順なる時候のかよわき御身に、つゝがあらせ給ふにやなどあらぬ事もおもひ出でられ侍るよ。例のみ心に、淋しき秋をかこちおはすにか。あまりにはかなごと思は屈し給ふな。さるにても、秋を哀れものとは、いつのよいかなる厭世家の定めしものにや。こは、わらはの肯じ能はぬ處に候。見給へ、君よ、栗の實は朝風に笑みくつがへり、柿は夕日の影に醉ひ、見渡す田面は、黄金の波ゆたかに賤の男が萬作歌のだみ聲もをしからずや。山には茸あり、岡には紅葉あり、わらはが書室には、白菊の香もみち侍るを げに秋ばかり崇高の樂しみを語るものはなしと存じ候。悲哀の眼に、ものを視給ふな。まゝならぬよとうらみ給ふな。君が清きやさしきみ心の花は、よしや凡俗の人の眼に見いだされずとも、美しきあまき香のこの無花果のごと、とりて味ふ、誠の友も侍るに、たゞ昔の快活なる君に立ちかへらせ給へ。塵の世と人はいへど空にはかゞやく星もあり、地にはかをれる花もあり、都の友よりおもしろき雁のたよりも、わらはが机につもり侍るに、ものせられつる歌の幾首と共に、幽なる菊の香とめて來給へ。釜の湯たぎらせて待ちまゐらするなむ。

かしこ。

（雨江評）　筆いざさよく、文しつかりとして、全篇少しのいやみ無

くこつばりと晴れやかなる中に、また可憐の心情も見え、才氣の物ゝべきも見え候て、清少が才女の人物何んとなう思ひいでられ候文章に御坐候。○點を附したるあたり詞、才氣誠に愛せられ申し候。やゝ和歌らしくおぼゆる方も御坐候へども、悲れ籠めてくよくとものを思ひむすぼれ居る友の心を、勇め勵ます文なれば反つて面白し存じ候。

秀逸 友の許に

本郷湯島六ノ一 小林しづか子

去年の秋病を得てかへりし函嶺に、ことしはまた病を養はむと、きのふ父にぐしてのぼり申し候。いつも變らぬ眺めなれど　繁れる山のあたり、うすくこき紅葉のいろ、岩間をぬひつゝ流れゆく瀧の音、まづうれしきに、別莊といふも名ばかりの庵に、しばしの主人となり候へば、よろづ心のどかに、そゞろ御許様の御境遇もしのひいで候。父は今山にのぼらむと出でたち、私と下女とは、足弱ければと、こゝに止まり申し候。

其の後は、みけしきも伺ひまつらず候を、そも都の秋かぜいかに吹き渡り候らむ、御許様には、新らしき家庭の御たのしさ、如何ばかりにおはしますらむ。承はれば、たゞ御あるじの君と御めしつかひとのみに入らせらるゝよし、御心細しとの御仰せなれど、又いかにみこゝろ安う世を送らせ給はむと、まことに御浦山しきかぎりにて候。私共など、片田舎のよそめには、氣樂らしう見え候へども、變れるさまの鄕にいりてはのたとへのごとし、心にもなき萬のわづらはしき事どもに、ほとくゝ困じはて、只暫し此庵にあそぶ春秋の數日に、一とせぶりのたのしさをばとりあつめし心地いたし候。

家には老たる祖父、兩親、はらからも十の數にあまりてと告げまゐらすれど、これのみは、御想像の外にや候はむ。祖父はひねもす机のもとに、父とあるじは、つとめにいでしるすの中、母の側にたちゐひなどいたし居り候ほど、學校よりかへりし妹の復習も終れば、やがて樂しき夕げのまとひに、日はくれゆき候。とにかくに、かねて語ひし理想の家庭のおもかげに志ざしし學課のゆるしも得たるうれしさ、風たゝぬ家の幸をのみ、神に謝し居り候。

筆のまにくゝ、やうなしごとかきつけまゐらせ候へども、げにこのあたりのけしき、かたうち人の眺めには、いと惜しきに、寄もなき身、寫生もいまは覺束なくて、

美はし、めでたしとのみいひくらし居り候。おはれ、君のみうたにこの美をうたひ給はゞ君のみ筆にその粋をゑがき給はば、山もいかによろこび候はむ。しばしの御いとまも得させ給ふまじくや。

よろづは、やがてたいめの折りにきこえおげまつりたく思ひにまかせかきたらしたるこのふみ、あだし人にな見を給ひそよ

かしこ。

（函江評）別にこれぞと取り立てていふよき節はあらざれども、やさしく美はしげなる筆にて、すら〳〵と安らかに書きながされたる所、女子の書簡文として、よくその體を得たりと申すべく秀逸と致し候。

秀逸

妹の許に

岩崎くら子

御文ありがたく拜見致し候。皆樣御揃ひ、御きげんよく入らせれ候との御事、何よりも御めで度存じ候。こゝ許も一同變りなくくらし居り候まゝ、御安心下され度候。御手紙の趣に依れば、姑君樣には、兎角つれなく御あたり遊され候由。御心勞一方ならぬ儀と、ふかく察し入り候。就いては何事も身をなきものにして堪へ忍び、たゞま心もてつくすべしとの優に勇ましき御決心、女子として誰れしもかくぞありたき事と感じ入り候と共に、若し母上此の世に居まさんには、如何ばかり御よろこび遊され候はんにと、嬉しさの餘り、そゞろ涙にくれ申し候。斯く志操堅固なる其許故、事新しく申す迄もなき事ながら、元來われらが父上には、幼くして母上を失ひ給ひ、後の母上即ちわれ等が祖母上には、殊に御氣あらく〳〵しくおはして、されば、母上にあたり給ふ事、世の常ならず。婢僕の道をも、みな母上のわざのやうにいひなしてせめたまふを、母上には、如何に身に覺えなき事にても、露あらそひ給はず。たゞわが身の至らぬを思ひ只管にわび入り、一意祖母上の御氣にさからはざらん樣、身を粉にして仕へ給ふ中、父上には、如何なる魔神の身入りけん、うたてや、われらの在るにも拘らず、御亂行日に增すのみにて、更に改め給はず。哀れ、此の時の母上の御心の中、如何に苦しかりけん、今にして推し參らするだに、胸ふたかるゝ樣覺に候。斯くもよく婦道を守り給ひし母上も、重ね〳〵の身の不幸を慨き、如何はせんかと一時は思ひまどひ給ひしが、優しく慰め給

ふ良君の御言葉もだしがたく、可愛き小兒に泣きをかけんよりは、われ泣きて忍びんと思し返させ給ひ、只われ等の成長をのみ樂しみに、むくつけき姑、つれなき夫に對し、ます〳〵つくし給ひし眞心の、いつしか通じ、御二方共我を折らせ給ひきとか。哀れ、かく迄御辛勞遊ばれし母上、今猶世にましさば、われ等もかくおひ立ちたれば、如何やうにも御心慰め參らすべきを、諺に風止まんと欲すれば、木靜まらず、木靜まらんと欲すれば、風やまずとか。誠にかなしきことの極みにおはし候。今更如何に思ふも詮なき事ながら、よきに附け、惡しきに付け、おもひ出されて、御懐しさ遣る方なく候。此の上は、何事も母上の御性行に倣ひ、一層忍耐の心を强め、誠意誠心一すぢにつくし給はんには、もと〳〵理に暗からぬ姑君、いつがみ心も和らき候べし。斯く海山遠く隔たり、親しく語らふ事も叶はず、せめて折々は御樣子きかせ給へ。又、何にても心苦しき事あらは、遠慮なく申し越されよ。外に便るべきみよりとても無きわれら姉妹、互に力になりもなられもして、志操全く婦として恥かしからぬ樣、世を渡り申すべく、亡き母上への孝行、是れに上こす事も候まじ。申し上げ度き事、澤に御坐候得共、又後便にと申し殘し候。返す〳〵も、御身の上御用心、幾重にも祈り入候。

かしく。



(雨江評) 筆はなほよく言ひまはし得ぬところあれど、其の情はやさしく正しく聞え申し候。殊に、亡き母の貞操をよく守り、姉妹互ひに力になりて、婦德全き女子として一生を送らむといへる詞は、世の婦人たる者の一生の心がけをつくして、めでたく存じ候。

(記者) 住所不明に付至急通知を乞

佳信玉章

習字教授法を問はれしに答ふる文

東京赤坂 木村花香

のたまへる如く、職を君と同じく登龍校に執り候ひしは、なほ嫩の葉わ

たる夕風のまたれにし夏のすゑに御座候ひしが、今はそれすら身にしむ時とは相成り申し候ふ。まづまづ、君には折りふしの御さはりもなう、月々御勤務、御教鞭を執り居られ候ふよし、國家のため、何よりの御こと〻よろこばしうぞんじ上げ候ふ。おのれにも亦恙なう日々通勤いたし居候ふま〻憚りながら御心のやすうおぼしめし下されたく候ふ。扨も、おのれが如きよろづにつけ遲れ勝ちなるふつ〻か者に、習字教授法をとの御質問、誠に以て痛み入り申し候ふ。されど、むげに御いなみ申さむも、なめげなる事とぞんじ候ふま〻、左にいさ〻かおのれが卑見をしるし置き申候ふ。さ候へど、こは實の實なる卑見なめれば、惡しとおぼし候ふふしは、いさ〻かたりとも、な採り給ひそ。さても、御質問の習字教授の事に就いては、おのれもつれ〳〵たしなめる道とて、先輩にも問ひたゞし研究致し候ふ事もこれあり候ふ。そも〳〵、世の小學校を通觀いたし候ふに。おしなべて習字科の授業としていへば、教師のかた休めのやうに考へられて、恰も商店の番頭の如く　新聞雜誌などを讀み居りて、一向に習字の方には無頓着なるが、通例のやうに見受けられ申し候ふ。これ、大なる謬見かとぞんじ候ふ。完全に教授したらんには、習字科程いそがしきはあるまじく候ふ。さるは、生徒習字の際には、教師は絶えず机間を巡廻して、生徒の姿勢を正し、或は執筆の不正なる、あるは文字の運筆結構に不正なる等あらば、手を執りて一々これをたゞさゞるべからず候ふ。然かせざらんには、學校にて特に習字科をまうくるのひつえうもなき事とぞんじ候ふ。さて、又教授の際、常に忘るべからざる事は即ち(1)正シク書カシムルコト(2)明瞭ニ書カシムルコト(3)審美的ニ書カシムルコト(4)速ニ書カシムルコトの四要件に御坐候ふ。こは、習字科の目的を遂ぐるの最大要點かとぞんじ候ふ。次には、清書の事に候ふ。清書は、一週間習ひたる文字を、二回清書せしめ、初め一回は中間に於てし、他の一回は最後の時間即ち次の新文字にうつる時に於てすべき事に候ふ。然して、前のものは、十分に訂正を加へ、其の訂正せられたる箇所には、特に注意して習はしめ、而して、又此の時には、黒板又は新聞紙に鉅大に書き示し、全生徒に向ひて其の不正の點を發見訂正せしめたらんには、文字形体上に關する知識を確實ならしむる一方便ならんかと存じ候ふ。而して、後のものは、評點評語を加ふるのみにて、甚しき不正に陷らざる限りは、訂正せざる方よろしかるべく候ふ。なほ聞え上げまほしけれど、細き點に至りては、到底拙き筆紙のよく盡すべうも候はず。こは、追つて近きほどにまう上り、たいめたまはりての上にて、ゆる〳〵御話し申し上ぐべく候ふ。先は取りあへず御返しのみを。

草々かしこ。

都の友より寫眞のとりかへを乞はれしに

日本橋　生方ひで

秋の野なかぎれる桔梗、女郎花などの草ふも、昨日の風に折られ、今朝の霜に色褪せて、日に日に寂しさ増す許りなる今日此の頃、唯、都の空のみ戀しく、夜毎〳〵の夢にくり返し候折柄、懷かしきあなた樣より御玉章、いたゞき、いと〳〵嬉しく、殊に御心すこしの御寫眞をさへ賜はり、さらに對面致す心地仕り、御なつかしう覺えし申し候。あなた樣、昔の面影少しもかはらせられず、ほゝゑみ給へる御やさしさ、たとへん方なく、來る人毎に見せ申候に、皆々感にたへて眺め入り、嘸や御心栄のやさしき御方ならんなどゝ、たたへ候に、妾も限りなう喜ばしく覺え候。

就ては妾の寫眞も、おこせとの仰。人毎に逆うは、よからぬ事と存じ候まゝ、近頃撮影の分一枚御送り申し候。御許樣と机ならべて物學びせし頃だに、見にくかりし姿の。鄕に歸り候てはり彼れ是れ忙しさにまぎれ、姿容などには、少しもかまはぬ此の頃の、なれる姿、我れながら、いと淺ましう思ひ候へ共、只、其の昔にもまされる心の程を御あはれび下され候て御文箱の隅になりとも御をさめ下され度く候

まこと日月には關守なしとか申され候通り、青葉の陰に、皆々樣と、つきぬ秋を分ち候ひしは、未だ昨日の心地致し候に、はや秋も漸く深く、冬をば告ぐる風の淋しき頃に相成り候。あなた樣初め都に御座す方々には嘸かし御學業日に日に進み候はんに、妾は學ぶ師も、語る友きなく、目に見るものは働とる嫗、草刈る童、聞くものとては山路を辿る樵夫の野歌のみなる山里に、農事の手傳など致し徒に其の日〳〵を暮し居候事のいと悲しく、實に人の行末と水の流れ程變り易き者は無之かと存ぜられ候。されど是れ人々に定まれる天運。徒に歎かんもせんなき事に候へば、刈萱の、とかく亂れやすき心を、水引の花に結び込め、只管、昔學びし事共忘れぬ樣にと、夜な〳〵復習致し居り候。なほ申し上げ度きは山々に候へ共、餘誼盡れ候へば、餘は、またの便りに譲り申し候。

かしこ。

今年分の校友會雜誌、目下御入用無之候はゞ、拜借願ひ度候。末筆ながら、御兩親、及び御同窓の御友達に、宜しく御鶴聲願ひ上げ候、



秋の夕くれ病にふせる友の許に

芙蓉女史

見る人の心々にて、あはれにもをかしくも覺えらるるとか申し候へども、月の澄むを見ても、千草における露を見ても、ひたすらにあはれふかく、千々の思ひを己か身一つにあつめし心地致し候を、まして病の床になやみ給へる君は、定めしうき秋とのみ御覽じ過し給ふらん。病は心よりよくもあしくもなるものとか申し候へば、必ず〳〵病の敵にまけ給はでよ。今日しも日頃降りつゞきたる時雨、やう〳〵に晴れ渡りて、さし出づる月かげ、淺茅の露に宿りて、玉の如く打ちきらめく樣、思ひすてがたく、かゝる時諸共に此の月をめでなば、いかばかりたのしからすなど思ひつづけらるゝにつけても、一日も早く元の如くならせ給はん事こそ、ひたすら祈られてなん。

あなかしこ。

在學中の妹に送る文

茨城 山口澄子

もみぢ葉も早や散りそめて、日あしも漸々みじかく相成り、露吹く風もいと物寒き此の頃、御許樣には御變りもなく、益々御勉强のよし何より嬉しく存じ候。此方一同變りなう、弟妹もいたりてすこやかにて、學問も追々進み、母上樣のこよなき樂しみに御座候。

さて、追々大試驗も三四ヶ月の間に迫り候事故、いかに御心せはしうおはすらんと、すゞし參らせ候。やさしき御父のまゐる度毎、一家よりつどひ、くりひろげてはまき、まきてかへし、御筆跡のいたく上達なされしに、皆々よろこび居り申し候。母上様には、只々御許様の成業を喞しつゝ、雨降る夕風の朝も、年老いし御身もいとひ給はず、糸紡ぎはたおりて、御許様に送る晴衣ぞと務めはげみ居られ申し候。今更かやうの事申すまでも侍られど、御許様の初めて高等女學校に入學を乞はれ候其時、叔父上様には、いたく御不服にて、女子にはさる用なし、殊に此の地より一人として未だ都に物學びせし者はなきに、まして父なく資産ゆたかならざる家故、只家事裁縫の事習ふこそ必要ならめと、中々にうけかひ給はざりしを、兄上様の只一人、かく學の道の日に月に進みゆく此の頃、いかで女子とて用なき事のあるべきと御熱心なる御助言に、母上様はいづれをそれと定め難れ、獨り御心惱ませ給ひしが、遂に切なる御許様の願ひを捨つるに忍びず、漸く望の遂せしめたまひたる事なれば、不撓不屈の心にて、御勉強の上にも、歩心にたゆみなく、此度の大試驗には、天晴れよき結果を得給ひて、母上、兄上、さては、叔父上様の御心をよろこばせ給ひてよ。

さるに、近頃、新聞紙上、其の他にて聞き侍れば女學生の風儀とかく正しからで、女らしき所少なく男らしき方に傾き候よし、子をもつ親の心は中々に安からで、母上様には、御許様の上如何あらんと安じ暮らされ居り候。物知らぬ妾などの、さかしらだちて申すにあらねど、水は方圓の器に從ひ、人は交る友によると、古しへ人の言の葉をひきて、御許様にも、大勢の御友達のおはす事故、よく〳〵心し給ひて、善きになじみ惡しきにそまらず、女子はいづこまでも物やはらかに、萬愼み深く、假りにも人に後ゆびさゝれざる様願ひ上げ候。世には少しの過ちより、すぎし世の善行も、あはれ水の泡と消え失せて、悔ゆとも及ばざる事、ままある習ひに侍れば、返す〳〵も、何事にもよらず、ひかへ勝ちにいそみ勵みて、憎まれず、はたそしられず、天晴れ美はしきやまと撫子と生ひ立ちて、後日學の園にかんばしく匂ひいでん給はん事、陰ながら祈り申し候。されど、過度の御勉强なされて、御身のいたつきともなり侍らば、何よりの不孝に候まゝ、學びの暇の折り〳〵は、空氣淸き所にそゞろあるきなどなされて、身躰の健康を計り給へや。かく海山遠く隔て候ても、朝夕見まゐらせん事も難き程に、よろづに心付け給はん事願ひ上げ候。なほきこえまほしき數々候へど、拙き筆のかきつくすべうも侍られば、まづはかくのみにて、

あなかしこ。

横川貞子の君に返しゝ文

東京赤阪　木村貞子

こなたよりこそ、君が文作るわざに長け給へること、扨は又御風姿の優にやさしく、且つはうるはしういらせ給ふ事は、かれ〳〵耳にし侍りて、つれ〳〵慕ひまつりしところなれ。扨も、けふたまはりし御文のゆかしさよ。いでや、これよりは、姉君とも親しみまつらむを。よろづに足らはぬこの不束者をも、御いとひ給はずば、血を分けし妹ともおぼしめされて、何くれの御心ぞへ給はりたく、ひたすらにねぎ上げまゐらするになむまこと、かばかりの御見みを給はりしからには、これより後、何事につげつゝ、みすて給はずて、御手紙のたび毎に、日常御學びの御實驗、さては、御みづからに感じ給ひし事ども書きそへ給はゞ、いかにうれしかるべき。妾は、一度かく親友とあふぎ奉る上は、善きにつけ惡しきに

けて包みなく教へをも受くべく、又御諫めをもいたゞきたき考へに侍り。されば、互みに一面の識なくては、なほ物足らぬ心地し侍れば、せめてもの思ひやりに、いかで〳〵、御近影一葉めぐませ給ひてむや。待ち奉る。おのれも近きに撮りて、拙き影の、君がみ前のお笑ひぐさとなり侍らむを。なほ聞え上げましき事の数々は、なかなかにみ空の星も啻ならねども、君がみ姿の拜したさに、燃ゆるおもひの胸に先ち塞りて侍り。さらぬだに拙き筆の、心のまゝに動かれば、一先でこれにてをしき筆をまで擱きぬ。餘はまづ御うつしゑを拜して、此の燃えたつ胸をおし鎮めての上にて、ゆる〳〵と聞え上やべくこそ。

なほ〳〵、恩田かれ子様へは昨日手紙を差し上げ置き申し候ふ。

(明治三十四年十月十日＊便ニ投函)

菊を贈る文

三重　亀井いと子

秋にやゝ深うなり侍りて、庭の面に咲きほこりし萩桔梗など、あはにみる影もなうなり侍り、ひとり菊の香のいとゆかしき時とは相成り申し候。さても、老人こと、いたく此の花を好み、毎年老後のなぐさみに培養致し候に、今年は氣候順なりしためにや。いつもより出來榮えよろしくて、兩三日前より咲き初め申候。かれて今日は御許様のいとめでたき御誕生日にあたらせらるゝやう、うけたまはり居り候まゝ、今晩しも千代の薫りのいと深きをえらび折りて、限りなき菊の齢にあやかり給はんやらにとて、御祝の印までに進らせ候。あはれ、今日の御祝ひの御床の生花のかたはしにだも御加へ給はらば、花の面目のみか人老も定めてよろこび申すべきことゝ存じ候。

あなかしこ。

歌文の添削を乞ふ文

下谷　白井すみ子

今日は、冬たつ日といふしるく、折り知りがほなる時雨打ちそゝぎ、木の葉さそふ風さへあわたゞしう吹きわたるわびしさ。師の君にはいかにすごさせ給ふらむ、心もとなくこそ。さても、この春、學の屋を卒へて、この山里に歸り侍りてよりは、年頃老の身一つに、萬のわざをとりまかなひ居りし母をやすめまらせんとて、家のつとめ何くれとなくかゝづらひつゝ、いとまなき身には侍るものから、猶例のこのめる道のすてがたくて、木の葉かくいとま〳〵、ねられぬ夜半の燈のもと等にて見聞きせる花鳥のあはれ、山ずみのわびしさなど、種子として歌に文にかきすさびつるが、やう〳〵つもりて今は文箱にあまるまでに成り侍りぬ。されどかく山ずまひする身のかなしさには、こを見せまつりて、定めのみ言葉たまはるべき師の君のおはしまさねば、いと〳〵本意なくおもひつゝも其の儘に打ちすて置きつゝ、ひたすら御教を受けたりしそのかみのこと戀しく思ひ居り侍りし折柄兄こと、とみの用事侍りて、明日都へ旅立するの事に此の折りおきて又いつかはといさみ立ちつゝ、文箱のそれを一つゝとなして、御許に奉る。土かひ氷そゝぎてたまはりし其の折り花も實もなきものゝみ多かりしを、御手はなれし昨日今日は、言の葉てふ其葉さへ霜がれはてゝ、見せまつるもはづかしききはみには侍れど、其の儘紙魚のあらかたに成し果てんも、さすがに口惜しき業なれば、御いとまの折々、み筆加へさせ給はゞ、實に身にあまる幸にこそ。萬は兄より聞え上ぐべければ、何も〳〵書きのこし侍るになむ。

かしこ。

妹の許に梅花を贈る

香川春枝女史

暦は改まりぬれど、未だ春の立ち侍らねば、寒さいと堪へ難う侍るを、御はたりにはいかに暮させ給ふにか。定めし學びの庭のなに竹にならひ、いよ〳〵勵ませらるゝ御事と推し上げ候。物忘り勝ちの身は、ひねもの埋火をかき起すのみに侍りしを、今朝めづらしうも、居間の窓近う初音の聞えぬるが、いとめでたくて、床しく覺ゆる折りから、ひまもる風の、何となく打かをるゝに、障子引きあくれば、今の初音に驚かされたるにやあらん、孤梅の春をも待たで、雪に交りて匂ひそめたりけり。實にいはんかたなく嬉しくて、ひとりながめ暮さんも、あたらしう思ひ侍れば、君にうらみられん事をも打忘れ、色香をし贈る御わたりにと、一鉢送りまゐらするになん。あはれ、此の梅花にならひ、霜雪をしのぎ、ひたすら勉め勵み給ひ、美しき實を結ばれん事をのみ祈り上げまゐらせ候。

紅葉見に誘ふ文

牛込　林喜代子

久しう御おとづれも聞え奉らず、此の頃の物哀れなる景色を、いかに見給ひてか過し在する。かの去年もたどりしみ山の奥は、今はさながら立田姫の織りなしけむ錦かと思はるゝばかり織りはへて、見る目もあやに、ことに夕ばへの景色いはん方なしなど、風のたよりに聞き侍りては、浮世のちりをもはなれたるみ山路深うわけ入らばやと思ふ心とゞめあへず侍るを、君にはいかでもろともに誘つられ給はずや。今此のよき時を過し侍りて、紅の錦の色あせて夜半の嵐にふきちらされたらんには、いと本意なき跡に侍り。又これよりは、久しうみ雪にかどをとざゝれて、野山のあそびもなりがたうなりゆき侍れば、障り給ふ御事なくば、もろともにとの御言たまはらまほしうなむ。いづれ、いつとはあすさぶらひて、とりきめ侍らむ。まづは御さそひまで、かへす〳〵も、うれしき一聲もらし給ひてよ。

あなかしこ。

教育界に入りし友に寄する文

近江　藤田れむ子

一筆申し上げまいらせ候。最早秋の草々も次第に枯れ、虫の鳴く音もいとゞ細りゆき候折柄。御屋形いづれも樣、ます〳〵御機嫌よく入らせられ候由、めでたく存じまゐらせ候。さて、御許樣には過ぎつる春の頃、女學校を御卒業あそばされ、その後は御ほまれも彌增しに高く人々深く、御才徳を慕ひまゐらせ、中には媒妁を以て聘せんとする向きさへ、かず〳〵有之候ひし御趣、陰ながら承り及び候。さるに、御許樣には、かねて思しめさるゝ旨ありて、何れも之れをうべなひ玉はず。たゞ朝暮まなびの道をのみ御いそしみ遊ばされ候ひしが、いよ〳〵當月より御身を教育界に委ねさせられ、日々學校へ御出勤あそばされ候由、まことに〳〵めでたき御事にて、その御心懸のほど、幾重にも感じ入り申し候。これまで大方の世のならひとして、女の早く嫁がざるを、いみじき耻のやうに心得、たま〳〵女學校などに入學する人達も、多くはこれを以て嫁ぎの時の履歴くらゐに思ひ、やがて一家の細君となりては、子などあまた儲けて。只日夜しげき家事に携はるのみに御座候。斯くては、今まで習ひ得たる學藝によりて、退いて家政をこそをさめ候へ、進みて世を益し人を教ゆるの事に至りては、ほと〳〵望みたえたる所と思はれ候。今日わが國女學生の狀態が、なべて此の如きものとすれば。其教育の進歩の

男子に伴はで、遙かに後れ居り候も、敢て怪むに足らぬ事と存じ候。御許様には、此の邊の利害にいたく御こゝろを注がせられ少くとも此の末十とせばかりは、男子の助けをかるまじとの御意氣込にて、教への鞭を執らせらるゝの勞、ます〳〵學びの道のおくがを御きはめ相成り、進みて御力の及ばん限り、世に貢献有らせられんとの御内意に候由、これ、聞すゝくも雄々しき御振舞にて、數ならぬ妾もしきりに御羨しう、且つは御慕はしう、思ひ餘りて堪へがたく候まゝ。拙き筆に物して、つゝしんで伺ひ上げ候。幸ひにおろかなる身を御見すて無う、御あたりのくさ〴〵御聞かせ下され候はゞ、何より嬉れしく存じまゐらせ候。

かしこ。

仲秋故郷の兄に

京都　植木とめ子

庭の淺茅生うらがれて、秋風さむくなりまさり候を、山近き御すまいは、さぞやさびしうもおかしうもながめ給ふらん。紅葉の頃にはといひおこせ給ひしより、春もすき、夏もくれ、軒の松風の柴の戸を打たゝく音も、それかとおやしまれてまちつるに、御文たまはり、いと嬉しう、讀みてはまき、まきてはよみ、幾度となく賤のをだ卷繰り返して候。承けたまはれば、舘野川の伯母君には、桐の一葉ともろともにはかなくなりたまへひし由、御家内様の御なげき、わけて父君には一人の御愁嘆と察し上げまゐらせ候。數あるはらからの内、世に殘りしは、父君と伯母君とのみなりしに、今は父君只御ひとり、とり殘され、さなきだに御身體すこやかならざりしに、伯母君御逝去の後は、御老體益々よわらせたまはんと、悲しく筆とるも物憂く、思はず顔を蔽ふ有様に候て、翼あらば、とぶが如くに父の御許にまゐり、孝養致し度く存じ候も、山川百里を隔てし弟に志あれば、さもならず。よしなるも、父上には古への孟母の如くやせられんと思ふに、たゞ一人薄暗きともしびの下に、種々の心にかき亂れ居り候。ついては、兄君一人の御心盡の程、幾重にもこひ願ひまゐらせ候。

おん地は、今年はことに外なる豐作にて、其れがために、村芝居などありし由。父君の老の樂みに相成り給ひじならめと喜び居り候。又、ほたりの年を祝ふ村里の人々等の悦びの顔いろ、まのあたりに見る心地致し候。

また、荒川堤茸狩の様、おん校の運動會のさま、こま〴〵とおこし下され、あつう御禮申しあげまゐらせ候。此の地の名物なる松茸も出で初めしかど、今年はいつもの年よりは、少なしとの事に候。又、昔忍ぶの御花内に植ゑ列れたる松の下には、初茸あまたいでしため、禁制なる埓の内に入り、あさりありき、警衛の人にいましめられ、あわてにげ出るさまなど、なか〳〵をかしう覺え候。去る十四日、ちかくの秋景色ながめばやと、心へだてなき友だち四人つれだち、洛西嵯峨野のわたりに至り、想夫戀を彈じて高倉院を慕ひし小督局、淸盛のつれなさをなげき、母人もろとも庵を結びし祇王女、瀧口を慕ひて都より尋ね來たり、遂に恨を殘しつる横笛などのあとをとぶらひながら、われらを招くすゝき草、女郎花など手折りて、家に歸り、なき伯母君の靈に手向け候ひぬ。

わたくし事も、去る九月より學校の選科なる音樂科に入り、琴をならひ居り、茶生花は他の師について修め居り候も、なか〳〵はか〴〵しからず、いつも兄よりたしなめり候。末ながら、皆々様へもよろしく御傳へたまはれかし。なほ申し上げ度き事、山々あれど、後のたよりになん。

あなかしこ。

此書したゝむる時、相國寺の晩鐘、耳をかすめ、山里の秋のけしき、

一人あはれなましゝ心地せり。

友の結婚せしと聞きて遣はす文

まつよひ

目出度きものゝ一つに數へられ、匂ひゆかしき菊の花の眞盛りなる今日此の頃、君には兼て定められたる夫の君の、こたび外つ國の學びの道を極めつくし給ひて歸朝せられしにつき、いよ〱結婚の式をあげられ候ひし由、そよとの風の便にうけたまはり候。御兩親様を始め、御一族様方の御歡び、殊に幾年か千里の波路をへだてゝ行末を樂み給ひし御二方　相生の松にはあらで、一本の松となりて、限りなく榮えさせ給はん事を祈り居り候。やがては、つぎ〱に御子様をあげ給ひて、兼々理想せられし温き「ホーム」が作らるゝ事も遠からずと存じ候。私事も、先つ年生れし計りと思ひし子供の、早三歳となりて、廻らぬ舌に拙な慕ひて傳ひ歩き致す様相成り可愛さも一しほに候。御互にふり分け髮して、朝な〱袖をつらねて、幼稚園に通ひしも、昨日の如くに覺え候を、いつの間に母といはるゝ身となりしかと、そゞろに罪なかりし昔しのばれ候。竹林の君にも、今年梅が枝に鶯の初音まちわぶる頃、嫁ぎ給ひてより未だ一年にも滿ち候はぬに、此の掌玉の如き御男子あげさせられ候。されば君にも一日も早く、母様と紅葉の様な手に温き乳房探らせられ給ふやうにと念じ居り候。

可祝。

忘れがたき友年のへて音つれけるへ返す文

みちのくの里にて　しげ子

かけても思ひもうけねいとも〱めづらしき雁な御玉章、ゆめかとばかりうたがひつゝ拜しまゐらせ候。かはらせ給はぬ御心を思ふに、おなつかしさも一入にて、嬉しさやる方なさにつけ、何とて斯くも久しう打ち絶え經にけんと、くやしく吾が怠りの罪、今更去り所なう侍る。承れば君には早や已に美しき家庭の御主婦として、可愛き御子さへまうけさせたまひきとか。色々と樂みかしづき給ふ御教育の任、はた煩はしき御交際の事など、凡く家政の御務め如何計り事わざ繁く渡らせ給ふらんが中に、數にもあらぬ身を、程へてもおぼし忘れず、よくこそ音づれ給はりし事の忝けなさ、兼て知る君が御心の習ひながら、更に身にしみて覺えられ候。仰せ給ふ如く、實に流るゝ月日ほど疾きはなく、忘れもやらぬ都の寄宿舎にて、本意なき別れの袖に、止め難き露そゝぎしも、はや三とせにまたがる昔となり侍りぬ。げに、かの折り、ふとしたる姿が病かかりそめの事と思ひゆるし、暫しとて此の山里にまかりしなるが、日に〱と重り行くつらさに、心のみこそはやれ、筆とる事も懶くて、殊に親しき君にだに、片はし一ひらの葉書に物いはせ侍りしのみにて過ぐしゝが、間なく君には一家の御都合により、惜しき學業も御半にて馴れし都を立ち去られ、故郷なる大阪の關をも越して、遙なる長崎とやらへ渡り給ひきとの御知らせ、うたてき枕の上に得たりし時は、なやみの上の悲みをさへうちそへて、程なく快つられんと待ちし上京の望みも、半ばはくじけ、只管浮世の定めなきをかこち候ひき。去りながら、筆とらん術もなき病の身は、只々不快の時をまち渡り、優しき君に心ゆるして、度々の御見舞の忝けなきをも聞えずてありしを、秋立ちて風冷けき頃より、引きへ身の快きを覺えたりしまゝ、今はとて、久々と絶えし罪の御わびに、積る思とりそへて、細々認め參らせし文の、君が御心にや違れたりけん、空しく御不在の附箋つきて戻りし時よ、己が昔をばさる事にて、斯くとも知らせ來し給はぬ御心をも恨み聞え、今日かあすとて御音

御待ち暮しゝも、甲斐なき其後は、恰も夢路を辿る如くにて、一向に御様子知る由なかりしを、風のあした雨の夕など、如何で思ひ出で聞えざらん、折につけ、御行方心にかゝりて、口惜しう思ひ侍りしを、此度ゆくりもなく御便りに接し、失せにし人に再び逢ひし心地もして、只管覚むるを危まれてなん。詳しき御消息によれば、長崎よりは、急の御事にて、所々御あるき暇なう、かてゝ様々思ひかけぬ御艱難もさなめさせ給ひし事と承るに、實に我が身など顧み給はん事のいとも難くおらせられしは御尤やと、恨み參らせし心淺さを悔み申し候。今は横濱におはします由、盛に慕ひまつれば、昔の儘の御面影も立そひて覺ゆるを、さりとも母君となられし御すがたや、如何にかはらせたまひぬらん、御寫眞もあらば、御子樣諸共のを給はり度、是非〳〵願ひ上げ候。それにつけ、甲斐なきこそ、妾が身。今に彼時の病すが〳〵しからず、徒に母が心を苦しめ居り候は、如何になり行末ならんと、只々失望と落膽とに心を領し、物と人々の情に生命つなぎ侍るのみ。去るにつけ、過ぎし昔のみ立ちかへり戀しく、同窓の友など殊に慕はれ侍るを、去る者は日々に疎きに〔もれず〕、今は大方の友とも打ちたえて、只夏子清子の君のみ、折り〳〵の消息洩し給はり候。曾て私共四人同室に起臥したりし事ゞ思へは、萬斛の情、涙と共に止め難く、互に顔合せて燈下に語り明かしし事、はた朝起の競爭に打ちまけて、部室の掃除もうけし事など、子供けなる仕業も、今は堪へかたうなつかしくなん。あはれ、今はた斯る樂みもいかでくり返し侍らん。せめて、此の後、いにし爲情を溫めて、昔にかはらぬ御親交たまはらん事、偏に願ひまつり候、

かしこ。

病みせる友の許に

秋もやゝふけ行きて籬が籬の白菊さへ時得顔に咲きそろひぬるに、共に眺めんと堅く約したりし君には、かげだに見えさせ給はず。いかに在し給ふらんと、心もとなく、花の散りなん日を惜みて待りしに、君にはいつのほどよりか打ちふし給ふよし承りて、いといたうむれつぶれ侍りぬ。妾病は已が心より引きたち侍るとかや。されば、心強う持たせ給へや。妾も今日はやむ事なきことの侍れば、明日にも上りまつらんほどに、まち給ひてよ。此のしら菊、君の病をなぐさめんとてや、今年はいつものより花も大きう咲き侍れば、み心なぐさむるたよりともなり侍らんかと、まゐらするになん。あはれ、妾の心をくみ給ひ、一日も早く心地よくならせ給ひてよ。

あなかしこ。

父上に奉る文

相州 山本花子

そよ〳〵とふきくる風いとひやゝかに、その葉にすだく虫の音もあはれ淋じき秋の夕ぐれ、づれなき風にたへやらで、桐の葉一片二ひら散りそめ、いとゞ物かなしき折柄、父上樣御持病御容躰如何おはしましまし候也。御樣子御伺ひ申上げ候。私事幸に無事學びの道いそしみなり候間、憚り樣ながら御心安う思召し給はりたく候。近き内、御病氣御療養の爲め上京あそばさるゝ由、御母上樣より承はり、喜び御待ち申しなり候ひしに、いまだ御出京之れなく、誠にらくたん仕り候。御足部御病氣は今初まりたるもあられば、何時まで御待あそばさるとも、𤸎𤸎なさらずば、御全快は望みかたく候。少しの事に御心配あそばされ、御出京御療養あらせられずば、再び本の如き時期もあらせられまじと存じ候。御若年の折りより今日に至るまで、五七十の星霜を、國の爲め世の爲めにとて御奔走あそばされなれは、御ひろうも一しほの御事と心配いたしなり候。

御病氣只今のまゝにて、御全快にいたらずば、室內の御運動は更なり、かれて御話の四國御遊歷もかたからんと存じ候。世の人は、金だにあればと申し候へども、いか程金あればとて、御歩行御不自由に候へば、少しの慰もおもしろうは御見物できざる事と存じ候。何にとぞ、一日も早く御出京、名醫に御診察御うけあそばされては如何に候や。少しは御快方の御望みもと失禮をもかへりみず、こゝに涙をふるつて、御願ひ申し上げ候。何事も私らはらからの爲めと思召し給はり、くれ／＼も御出京御療養の程、伏して祈り上げ。かけがいのなき父上樣、一時も長く御すこやかに、鶴龜の齡までさかえさせ給ふ樣、小供心の只一すぢに御療養御すゝめ奉るになん。時候不順の折柄、一層の御間の上、御大切に御攝養あそばさるゝ樣、幾重にも御願ひ申し上げ候。

あなかしこ。

◎師範學校に入學せし友に返す

美濃　平松とし子

御玉章のやう、いとも嬉しく拜し候。まづ／＼君にはいつもながら御さ江／＼しう渡らせれて、文の林の奥深分け入りて、學びの園に遊び給へるよし、いともおんめでたう存じ上げ候ふ。こなた事も變りなう物し侍れば、憚りながら御心安う思し給ひてよ。

偖も、君には、こはしたびつれ／＼望みを抱かせ給へる學校に御入學遊され候ふよし、つれ／＼の御心掛の殊勝なる、おくゆかしうて、いとゞ感じ入りまゐらせ候ふ。

伏して惟みるに、天運循環して、明治の御代を來たし、

今上叡聖にまし／＼て、朝廷の御威光は、昔にも遙かにまさり、殊に國民教育に大御心を傾けさせられ、くさ／＼の書生を養はせられしかば、文運は此の三十餘年が間に日に月に進歩し來たり、今やもろ／＼のとい國と肩を並ぶるも、をさ／＼け落されぬ程のいとめでたき國柄とはなり侍りにき。こゝに深く考ふべきことは、女子教育の事に御坐候。女子は、他日國家の要となりては夫を助け、母となりて其の子女をはぐゝみ育て、家政を整ふ可きものにし侍れば、其の任いと重きこと、今更耳新しう聞え上ぐるにも及ばず候ふ。されば、此の女子を教育するといふ事は國家の將來の爲めに、誠に大切なることに御坐候。

あはれ、我が大君の惠みの露に生ひ出づるなでしこの、天さかる鄙が猿屋の子守り娘、薪苅る山邊の少女、潮汲む濱邊の海士が娘子等の里にいたるまで、皆教への庭に集はせて、君が代を賦はせ、玉はこのます／＼道學ばせたらむには、御國の光威得て望むべく、益國の幸運永く千年の末までも流るゝを得む。

誰や、かばかり必要の女子教育を双肩に荷へる君が責任、いとも／＼重くして貴く、ゆめゆるかせにすべからざるわざにこそ。されば。露等閑になぼし給ひそ。右は御返し書に添へ、一ことすもふまゝをかくなむ。先づはこれにてなしき筆とめてなむ。

かしこ。

◎師範校なる友の許に

手藤つき

思ひながら、其の後はゆくりなう打ち絶え侍りしに、先づとや、君には御すくよかに物し給ふとや、げに御嬉しさの限りにこそ。こなたにもまめやかにいそしみ明かし暮し居り侍れば、よそながら御心ゆかるべさせ給ひてよ。扨も承れば、此の頃は早や教生として、教へ子を導かせ給ふ由。兼てよりの思召は、こゝにおはします事とて、學びの庭の様子を、

いかに美はしうも、生ひだゝせ給ふらめと、蔭ながら御床しうなむ。げに、君よ、さえなき此の身の、まいて女たるものゝ、今更は、さかしらだちて聞え參らするは、いかゞはしき業に侍れど、かくも親しう御交はりいたゞき、友の一人にかぞまへらるゝものから、今茲に、おもふ事の一節を、かいつられ參らするにこそ。あはれ、たど／＼しき鳥の跡、いやなき言の葉は、よしなに免させ給へ。とかうは申し侍れど、早やく知ろしめす如く、文の林にもたなり淺き事とて、たゞ、年頃思ひ渡りし事をなむ記し侍る。あゝ、君よ、斯く申す此の私は、もと、高き望み大なる目的を、胸にゑがきし一人にて侍るぞや。君見給へ　神代の昔より三千歳の間、清らなりし我がすめ國も、はた民草も、いつの程よりか、くだちそめて、色妙なる山吹の黄金の光に眼くらます人々の、如何に多く成り侍りし事よ。あゝこれを思ひ侍れば、女ながらも歎はしさに堪へかねて、鋭に身を教育海に投じ、力のあらむ限りは盡さまじとさへ奮ひ立ち侍りぬ。是れ將に、徒勞に腐すとや申すべきか。そはともあれ、このさゝやかなる胸の熱血、湧きかへり侍りしに引きかへ、世のひやゝかさよ。かぞいろの君さへ喜び給はねば、濁波にたゞよふ蜑の子は、たゞ一口に、教師をさげすみ侍りぬ。あゝ、茲に至りてか、妾の心中は、さながら怒濤荒ぶる如く、唯々、天を仰ぎ、地に伏しては、儘ならぬ世をかこち、すたれし人心をぞ、わび侍りしよ。實に神聖の職務に從ふ者は、かくもさげすみ、かくもがる／＼しう、もてなさるべきか。世人は其の心さがりはてしとはいへ、教育の如何に重んず可きかを、辨へざるにやと、いとしも怪まれてなむ。あゝ、事こゝに至り侍りしは、もとより教育者の罪も、少からざる次第とは申せ、物の是非曲直をだに辨ふる人にして、猶かゝる言を口に致すは、いかに／＼、口惜しきの至りになむ侍らずや。さりながら、今將た嘆きても、萬思ふにまかせぬ身にし侍れば、一言かくと告げ參らするにこそ。君のさかしき御心や、既に此の事は、辨へさせ給はんが、君よ、此の愚言を捨て給はず、ひたぶるに務め給へかし。忘れても、再び、かゝる世のそしり受け給はぬ様、御友垣とゝはからせ給ひて、武士の命を戰場に捨ること、教育の爲めには、命をしも、顧み給ふな。妾ゝ數ならぬ身には侍れど、蔭ながら、及ぶ限りは助け參らむを、廣き御心にうべなはせ給ひてよ。猶聞え上げ度き事は、難波の葦のいと繁かれど、さのみやはとて申殘し侍る。返す／＼も、寒さ體を侵し易き折から、いとはせ給へかし。

あなかしこ。

◉故郷なる妹のもとに

近江よし子

その後は、心にもなき御無沙汰致し居り候を、こひしきなつかしき御兩親様を始め奉り、御許様以下皆々無事に御暮らし成され候御事と喜び申し居り候。こなたには、叔父様も叔母も、いともすこやかにて、なにくれと我が子の如く御さとし下され候により、誠に／＼うれしく存じ居り候。妾も、相變らず邪氣なき神の子等と供に、日々樂しく暮らし居り候へば、かまへてかまへて御案じ下さるまじく候。此の頃は、いとよくなれ申し候て、前後左右よりつきまとひ候事のかはゆらしさよ。とてもとても、その道にたづさはる者ならでは、はかり知られぬ愛情のこぼるゝ事に御坐候あはれ、一身を犠牲になして、あの子等の爲めに、力のあらん限りは盡し申し候はん。までも、このあたゝかき教への庭に生ひ立ち申し候櫻木の、花の咲き出でたらんにはなどと、ひたすら前途の偲ばれ申し候。げにや、第二の母と申し候事も、なか／＼空言にては侍らず候。唯いさゝかにても、國家に盡すことを得候を、深く喜び申し居り候。扨

てとよ、いつぞやの御文にて、まのあたり御様子承り、ます／＼御勉强の御事、いかにいかにうれしくこそ存じ候ひしか。汝は情けふかき御兩方の御膝下にて學ばるゝなれば、今更申し上げんも、要なきわざなれど、女の殊に心すべきは、みもちにてこそ候へ。いかに才學の秀で候とも、其身の修まらず候ては、何の益もなからん。とかく此の頃は、女學生の風儀も、どうやら女らしき所少きやうに聞き及び申し居り候へば、よろづに心をくばり、女子たるものゝ本性を失はぬやう、くれ／＼も祈り上げ候。とにかくにも、攝生を重んじて適宜の運動をなし、健全なる精神はてふ語を、腦裏に納められ、充分體育に心掛け給へ。まして、父君もよる年浪の多ければ、さだめて、來ん春の卒業を、いたくもまたれ候ならん。あはれ、尊き父上母様を、御いたはり申され、其あひ／＼には、世にかしましき女學生の缺點に意をどとめ、母様を助け參らせて、實習せられんことも、之れ亦肝要と存じ候。さるにても、妾はかくへだたる身の、朝夕御仕へ申し上ぐる事のかなはれば、何卒／＼わが分をも合せて、一入御孝養御つくし下され度、返すかへも願ひ上げ候。尙々弟にも妹にも、このよしよろしく御聞かせ下され度候。申し上げたき事は、まだ／＼たんと候へども、はるか門のあなたにきゝなれ鈍擊のするは、まさしく近在なる白鬚神社へ參らんとちかひ置きつる予等の、あまりの遲きをあんじ煩ひて、見舞しならんと存ぜられ候間、父上にも母上にも、よろしく御傳へ下され度候。餘は又の便りにとさしおき惜しけれど、これにて筆とめ申し候。

かしこ。

●妹の嫁するときゝて送る

長門 草賀きく子

近頃はわたくし事にとりまぎれ候て。心にもなき御無沙汰に打ちすぎ候段、平にゆるさせ玉ひてよ。げにや、月日に關守なく。いつしか薗るばかりの青葉も、いろづき初めはやはら／＼とちり行く頃と相成り候折柄、まづ／＼御地には、かぞいろの君を初めまつり、御前様にも何のさはりもなく御さえ／＼しうすぐさせ玉ふとの御事、およろこび申し上げ候。こなたも一同相變らで暮らし居り候まゝ、御心やすくおぼしめさてよ。偖此の間父上よりのたよりにて承れば、御前様には此程縁談相とゝのひ、いつ／＼には、愈々嫁ぎたまふとの御事、こよなう御目出度く、幾久しく祝ひ納め參らせ候。就ては、御前様も、最早あけまさの子供心とは事違ひ、殊に御兩親様の御かげにて、一通りの婦女の道も、心得させ貰ひたる事に候得ば、今更わたくしより、嫁後の事などに付き、かれこれと理論がましく申さずとて充分御身御自身に御心得居らるゝ事と存じ參らせ候得ば、最早何も申さず。只だ／＼此の姉が、御身より先きに嫁入り致し居り候甲斐に、多少感じたる事も有之候へば御參考までに御注意申し上げ參らせ候。

一、上に仕ふるは、ふとんをしくが如く、ほつこりと正しく。二、下を使ふには火をたくごとく、すごさずふすべず。三、客をもてなすには、家具を扱ふ如くかたいぢせず大切に。四、身のはたらきは、水を使ふ如く、をしげなくさつぱりと。

右は、姉がかれて師の君よりきゝはべりし事なれば、嫁後ひとしほ感じ候まゝ、何卒御前様も事にふれ物に付けて、思ひ出でつゝ、御忘れなき様。殊に今度嫁かるゝ先様は、餘程他人の出入しげき家ときゝ及び候へばなおさら御注意相成り度、返す／＼も祈り上げ參らせ候。

なお／＼、祝の印に、何ぞ參らせむと、彼れ是れ思案致し候へど、格別これぞと思ふものも心づかず。ほんの印までに、白ちりめん一反差し上げ申し候。又、此の次白髮は、さしたる品にはあらねど、其のめでたき名

におやかる樣にとて送り申し候まゝ、御笑納なし玉ひてよ。只だ、此の上は、早く女松男松のそがなかに、雛づるの千代のうふ聲こそかきまほしく指をりかぞへ相待ち居り申し候。

かしこ。

◉嫁せんとする親友の許へ

伊勢谷江子

仄かに承はり候へば、日ならずして華燭の御盛典をあげさせ給ふべき由、君は更なり、御兩親の御悦び、さこそと察し上げまゐらせ候。申す迄もなく君は御さかしき御性質にましまし、殊に學びの道にも秀でさせ給ひて、智も才もかいなでならず候へば、妾如き賤しき身の、兎や角申し上ぐるも、恐れ多くは候へども、烏賊の甲より年の功とのたとへの如く、且つは、親しき友の間柄にしもあれば、子を思ふ親心ならねど、一度にても多く潜りし尻くめの繩に免じて、拙き辭をも顧みず、思ふが儘に、いさゝかごとかきつらねて、御耳を汚すことに御座候。

さて、今より後は、和氣靄々の我が家庭を辭し、恩愛の裏暖かき慈母の膝下を出でさせ給ひ、更に團欒たる新家庭をつくらせ給ふべき君にしあれば、其の責任の重く且つ大なること、申す迄もなく御座候。昔、女傑ジヤンダルクは、暗黑なる戰亂の世に生れ畢生の勇を鼓して、赫々たる光明を放ち、英名を萬世に輝かせることは、普く世人の知る所に御座候はずや。妾の希ふ所は、男にあらず、智にあらず、只貞の一字のみ。これ、いふに易くして、行ふに難き業に御座候。君にして、貞節の志もて、一途にはかへさせ給はゞ、聟君は申すに及ばず、舅姑の歡心をも得させ給ふは更なり、延ては隣家親戚の人々もよく其の德に化せられ給ひて、君を慕ひ奉るに至るべし。しかのみならず、ひるがへりては、御兩親初め御兄上樣にも、さぞかし御滿足の御事にて、自然至美至善なる一新家庭をも容易くかたちづくらせ給はんこと、鏡にかけて見るよりも、なほ

明かに御座候。たとひ、千百萬言かきつらねとも、願ふ所只此一事に御座候へば、我が心中御酌み取りの程、偏に願ひ上げ候。今後は、當方よりも、絶えず御機嫌御伺ひ申し上ぐべき所存に候まゝ、拙き我身、御見捨なく時々御玉章御惠みに預り度くこれのみ樂しみ居り候。先は。右君を思ふの一念、老婆心とは知りつゝも、善きもあしきもへだてなく思ふ數々、申し上げ候へば、惡しくな思ひ給ひそ。

あなかしこ。

◉雪の降る日友を招く文

熊本　白河たき子

昨夕の空もやうに、明日は雪ともならんかと思ひしもしるく、いと〳〵う降り積りたる今朝の雪に、霜枯れの見にくかりし軒の棕梠に、時ならぬ花を咲かせ、いぶせかりつる賤が伏屋さへ、さながら玉の臺と打變りて、いと見所ある樣に侍るを、たゞ一人眺めたりとて、何の興か侍らん。かゝるにも、奥深き玉のおん住居の內、此の程の御遊びや、如何に目ざましう賑はしうおはしますらむと押しはかりまゐらせられ侍る。いでや、此の折りを過さず、兼ねてかゝらばとちかひてし友どちあまた打ちかたらひて、一條院の昔をもまねび侍りなば、いかにたのしからんと思ふになむ。いで、何事も操り合せ、物し給はずや。何とてもてなし侍られど、降り積む雪を眺めつゝ、釜の湯沸みあるはかたみに歌よみ交はさんも、一しほ興あるべく、かゝる折り、玉樓金殿なる錦帳の下に、和歌彈琴のみやびを盡し給はんはさることながら、又伏屋の景色をもてはやし給ひて、眞句も浮び給はゞ、所がらいかにめづらかになかしう侍らんを、强いて草の庵を訪はせ給へかし。早や淸子幸子の君達も集ひ來まさんを。「日の光さしこぬさまに、思ふどち憂世を外に雪をながめん。

あなかしこ。

◉秋の日山里に參るべき由約したりしをことはる文

富山　日比野　さよ

ちりふかき都の内は、とやかくとまぎるゝ事のみ、侍りて、思ひの外に打ちたえ候を山近き御すまひの此頃よいかに靜けくもおかしうも侍ろらむかしと思ひやり侍り。さてもかなてより、此の秋こそ、暫し都をよそに見て、山路の菊に、齢をのべ高嶺の紅葉かり暮らし積る日頃の御話ども、かたみに聞えかはすべう契りおき侍りしを、さいつ年御軍のみぎり臺灣にまゐり居候伯父の、あやにくや近き中に歸省いたすべき由、只今電報に接し候ものから、これもなつかしう、はた瘴煙毒霧の中に生を得し日頃の勞を、慰さまほしう存じ侍れば、せんかたなく御ことわり申し上候、さぞな龍田姫の錦、日にそへて色深うさを鹿の聲も、あはれならんを、其中にや、散りはてゐらんかしと思ひやりてはいといと、口惜しう侍れど、さりがたきをいかがはせん。さても、そなたにては、かくともしろしめさで、いかばかり待ちわたり給ふらんを、かく、にはかにちぎりたがへ候事、いとど、罪ふかう侍れど、そは日頃の寛き御心もて、ざるかたにゆるしたまはり度、この罐詰當地の名物に候まゝ、山里の秋の穫物にとりまぜ給ひて御風味下され度、先は御ことわりまで。

かしこ。

◉新築落成祝に人を招く文

ゆかり

小春の空いとのどかに、歸り咲の花も見え候此頃、いかに詠めさせ玉ふ承らまほしうなん。扨、先日來祖父母が樂しき余生を送るべく新築いたし居りし別室、漸く出來致し候まゝ、來る十五日、かた斗りの祝いたし度、何卒正午より御入り被下され候やう、待ち入り候。もとより後の園の名に因みて、楓の舍とは申し候ものゝ、林間酒を暖めて紅葉を焚く風趣も侍らず。只老夫婦かむづかしげなる謠の一ふし、あやしき茶の湯の手前なりとも、せめては御賞玩下され度、かつ、なこがましる御願ひに候へ共、紅葉にちなめる御詠、何なりとも御寄せ下され候はゞ、殊に有りがたく存じ候。余は御めもじの折りにゆづりて、先は御案内まで、

あら〳〵かしこ。

◉修業中の弟につかはす文

相模　大谷津峯子

夜毎に置きまさる霜に、草木の枯れ〴〵て、やう〳〵冬めき渡りし昨日今日、御前樣には、つゝがなく御勉學遊ばされ候由、先日の手紙に承知致し、何よりの事と存じ候。此方御兩親樣始め一同、無事にくらし居候まゝ、御安心下され度候。實に流れて早き飛鳥川とやら、御前樣の此春始めて御上京の節は、何かと危ぶまれ、種々に心づかひも致し候ひしを、暑中休暇に歸國の時は、いとう大人びたるに驚かれ申候。日々新聞紙上にて見るに、學生の惡しき友に交りて、遂にはあらぬ方にふみ迷ひて、身を亡ぼすもありとかや、萬にさとき御身には、さる事も候はねど、心して善き友に交り、一心に勉强しやがては錦きて古鄕に歸り、兩親を安んじ奉るこそ第一の孝行にて候へば、かまへて〳〵忘るまじく候。さは云へ、只學問にのみこりては、おのづと躰のためにも惡しう候へば、度を過さぬやう御注意遊ばさる可く候。此方御兩親も、御身の日に月に進み行くを、無上の樂みとせられ、日々噂のみ致し居候。弟妹もいとすみやかに、お正月には又兄上と遊ばんとて、今より冬期休業を、指を折り數へて待ち居るなど、いと愛らしさの相まさり候。申上度事澤に候へども、余は後の便と申殘候。

かしこ。

普通文



天賞

讀書漫錄

東京道灌山麓元日暮里百八十三番内　岡田みつ子

第十九世紀後半以來積極的に妾等婦人の地位も高尚になり從て相當の權利自由を賦與せられたりしは是を眞に喜ふへきの吉兆ならすとせんや古昔は男女七歳にして席を同ふせすと謂ひ吾曹の結婚するは家に忠實の女番人を得んか爲又合法の子孫を設けんか爲に他ならすと謂ひ婦人にして姦通罪を犯すあれは奴隷に賣らるゝを拒否せさりしと謂ひ女子を教育する勿れ唯男子に勤仕せしめよと謂ひ總ての罪惡の元素は女子なり故に女子は地獄の門戸なりと罵詈せられたるか如しと謂ひ財產共有說主張の結果妻女共通說を唱道し大に妾等婦女子を器皿視し田畠視したるか如しと謂ひ痛く女權を抹殺し掠剝し總ての婦人の權利は一に男子の掌握に歸して其か自由を拘束せられ其か說枝を遏止せられ不幸にも禁錮的宇宙に跼蹐し己れの不運に泣きつゝありし過去世紀時代の反響を遡思顧慮せられしか轉た往時の妾等姉妹に向て坐ろに千斛同情の涙なき能はす想ふに極端なる男權主義を尊重せられしは希臘人にして渠等の婦人を視ること奴隷の如く凡そ擧措進退自由ならす一に夫の命令に服從し其男女間の確乎たる區別を立てたるは我か國俗風習と殆と相似たりし看よ悲慘痛酷なる暗黑時代は既に過き去りて今や寬大優渥なる光明の天地來り妾等は第十九世紀の寵兒として生存競爭自然淘汰の此舞臺に法律の範圍內に於て積極的の權利を賦與せられ自由の天地に活動し國家及社會に於ける獨立的人間と見做されたる我か民法の規定によりて明かに認識せらるゝこととなりとすあゝ進化の潮流は幸に連綿として今日に至れる是れ偏に妾等婦女子の幸福ならすとせんや

一利あれは一害あり一得あれは一失あるは是れ人世自然の狀態なり女權いよ〳〵擴張せらるゝにつれて社會上女子に自然の懸隔生し富者は滋々絕對的の權利を保有して快樂なる生活に安んし貧者は愈々無限的の權利を失墜して空しく苦痛なる生活に甘んせさる可らす則

ち財產の乏しき婦人は權利も又强からさる也其結果は生活問題に關して女權女德を省みるに遑あらす主として金錢の輕重を問ひ竟に今日の如き黃金主義の世界と化するに至れりしそれかあらぬか屢々醜業婦淫賣婦なとの聲海の內外に喧しかりしとは妾は卿等の轉た女權を誤解し婦人の躰面を瀆す其罪は疾むへしと雖も又聊か其心情の憐れむへき者あらん嗚呼財產あるものは醜女なりと雖も美人となり愚女なりと雖も賢婦と變し賤女も貴夫人となり不義不德も德義と化すあゝ黃金なる哉黃金なる哉請ふ之を西哲の言に聽き給へ『文明の人士殊に最も獸行に富む』と又諺に之あり曰く『米價騰貴して妾膝增加す』と

『婦人は我か大敵なり我か理想を破壞しつゝある者なり人心を惰落せしむる者なり』とは理論家として哲學者として獨逸白面の社會に消極的手腕を口に筆に唱道し而して思想界に尠からざる貢献を呈し百尺竿頭一地を拔きつゝありし彼有名なるロッチエ氏の妾等婦人社會に鐵槌を加へられたる警句なり同胞姉妹試に之が一句一句を採り來りて論釋し而して更に現下の社會に照應すあれは思半に過くる者あらん

學校よりの歸途姿背て寒風身を襲ふの時にも拘はらず一枚の襤褸に纔かはかりの喉をとり最と古びたる三味線を抱ひつゝ人の軒場に立つ其姿はみすぼらしきことなれと其顏付にては未た不惑の歲をも越えす纔かに一文二文の功力を受けて其日の糊口を凌ぎつゝありし婦人を視て遐かに同情の念に堪へさりけむあはれ彼女の親は乞食せよとの用意にまて三味線を敎へたる者にあらざりしものを嗚呼如何に人生の運命は是乎非乎之を顧慮するにつけても敎育の最も大切なるを感せずんばあらじ今の敎育は智育躰育にのみ重きを措きて德育問題に重きを措かす學校敎育のみ般んにして家庭敎育の毫も擧らざる旣理屈家のみ多くして神聖なる人物の更に彬出せらるる是れ素より怪しむに足らす何となれば其本をわすれて其末にのみ汲々たるの敎育者なればなり然れば則ち其本とは何ぞや妾は斷言するに逡巡せじ曰く根本的德育の原動力は家庭敎育にあることを

DIE BIENE ŬND DIE TAŬBE.

1. Eine Taŭbe sass aŭf ŭnem Baŭme ŭnten floss ein Bach vosbei. Eine Biene trank ŭnd fiel hinein. Die Taŭbe brach ein blatt ab ŭnd warf es ihr zŭ. Die Biene half sich damit aŭs dem Wasser ŭnd kam glücklich davon—

Es ist doch schön, wenn man gern hilft.

2. Bald darauf suss die Taube wieder auf dem Baume. Ein jäger kam und zielte mit der Flinte nach ihr. Das sah die Biene. Sie flog hinzu und stach ihn in die Hand. Der jäger zuckte und schoss fehl, und die Taube kam glücklich davon.—

Es ist doch schön, wenn man dankbar ist.

鳩蜂の見戯的文なりと嘲ける勿れ能く其内容咀嚼せは又以て聊か妾等の訓誡とならすとせんや

太虚漠々の天地に徜徉して更に理想もなくネームもなく主義もなく希望もなく襤褸の夜の身を包み只朝には僅かに悲哀の聲を絞りて人の情に糊口を凌ぎ夕には花に寢ね月に枕して自然の境に呻吟し青山黄嶺を未來の墳墓と定め一歩一臨悲慘の域にさまよひつゝあるわゝ渠等非人社會の境遇いといぢらしきことにこそ人に乞食と賤まれ非人と嘲けらるゝと雖も更に世の嗤嘲を目にもせす却て悠々自儘自然に向て其一身を任せつゝある渠等の境遇げに憐むべき者あるをわゝされと今は知らす昔は唯自然に行き自然に食ひ自然に眠り自然に考へ自然に謡ひ自然に嘲く其聲や悲壯其音や沈痛不知不識の間に發して偉大の詩となり諷して美妙の歌となれり渠等もと文筆に媚はすと雖も美妙の神は渠等を捨て給はさりしこそ最もとふとしとやとふとしさはれ妾は其か詠想の一二を示して渠等の槪念のいかゝを窺はしめむ　とせ女



運動

田毎ある中にもつらき辻君の
　顔さらしなにうんの月影

漸出非人界　又還天上遊　某
破笠與破杖　夢覺寺門前

くれ／＼ぬらき嬉しさもけふは又
　目しはたかの元の身にして

月てさへ高きにあれば障りあり　某
　おきふし安き草のさむしろ

蚊にいとひ犬に喰ろゝ骸かな　たよ女

死水は澤山なるそ草の露　某

一鉢千家飯　孤身幾度秋　不空遂不色
無樂又無憂　冬暖草園裸　夏涼橋下流
若人問此六　明月水中浮　六助

わたし身の露の命を消かねて
　夢のむしろにぬれぬ夜ぞなき　爲一

世を渡る難波の事もよしなきに
　身の浮草のあともとゝめす
富士の雪解けては元の墨衣
　かしくは筆の終りなりけり　　かしく坊

イブセン氏謂ひらく『眞理は流るゝ水に似たり何を掴へてか理と名くへき所謂眞理は史的價値ある者の謂のみ』と哲學者は眞理を扶出せんとし詩人は眞理を謡はんとし美術家は眞理を畵かんとし人生は眞理と戰はんとす陋なる哉世の人認せられよ眞理は魂なく目的なく愛情なく自由なき唯一の生命永へなる理あるのみに他ならさることを

婦人の感情的性質なるは能く宗教信仰に適するものなり洋の東西を問はす時の古今を撰はす女子にして宗教を信せさるものなし況んや殊に西洋の如き宗教國に於てをや宗教は妾等にペンを與へ無宗教に社會を毒を與ふされは婦人と宗教とは密接の關係を有すると同時に又家庭と宗教とは親密の關係を有せさる可らさることは自然の數なり何となれは婦人は家庭の帝王にして子孫の敎育者なれはなりされは婦人にして墮落するときは迫て社會の墮落は免るゝ能はす宗教は即ち眞美なる家庭を作り眞善なる敎育の原動力なるか故にたゝに情に脆き婦人の爭てか之に同化せられさらん不知不識の間に宗教心を煥發し竟に神聖なる愛のホームを造らるゝに臻るイブセン氏曾て謂ひけらく『婦人は善の原理未來の幸福界を造る起端にして女は總ての權利を有す』と妾等の宗教信仰は家政上大切なることとなりとす

評　此の文論する所は、曰く女權の擴張、曰く之れに係ふ弊風、曰く女性の眞相、曰く貧賤なる姉妹に對する同情、曰く理想、曰く眞理、曰く宗教等女性に關する重要問案、層々として顯れ出づ、文章暢達にして殆んと瑕瑾なく、議論明確にして、其根據を學識の上に樹つるものゝ如し、是れ此文の勝れる所以也　（日東）

地賞

婦人愛情論

いさを女史

人のすべての性情のうち、最も神に近きものは愛なり。一箇人の身にとりても、形成せる社會にとりても、愛其者の如く必須なるものはなかるべし。愛は恰も赫灼として蒼穹にかゝれる天日の如し、これ有るが爲めに眞々の世にもならず、無數の動植物の生を得て各其の生

活をいとなめるが如く、人生も亦此の愛の光のために盡く存するものなり。忠、孝、節、信、仁のうち、一として愛より導かれざるものなし。然して又愛は、天日の有史以來、少しの變更をも見ざるが如く、永久に墜ることなきなり。人智は退き、山は川となり、桑田變じて蒼海となるも、愛は遂に墜つることなきなり。偉なる哉愛よ、大なるかな愛よ。故に云ふ、愛は總ての社會的生活を成立する重要なる普通思想の一なりと。又云ふ、道德、倫理、愛ありて始めて其の基礎を固くするものなりと。

この廣大無邊の勢力を有する愛情に富めるものは、男女兩性のうち孰れならんか、われは女性なりと答ふるに躊躇せざるなり。元より男子は功名ありて、世上の峰巒たる行路難に對して、打ち勝たざるべからざる責任あり。固より是れ、愛より出でたるものとするも、或る時は愛を施す事に向つて、多大の障害あり、或時はこの宇宙の一大思想に反對せざるべからず。されば、愛の實行に於ける全然の責任は、かよはき婦人が兩肩にかゝれり。而も是れ、婦人の義務なり天職なり。故に云ふ、男子の愛は其の部分にして、女子の愛は其の全部なりと。

あゝ愛よ、愛は則ち婦人なり。婦人は則ち愛なり。愛は婦人の無形なるものなり。婦人は愛の化身なり。愛は婦人に依つて、其の炳然の光を放つを得、婦人は愛に依つて其の長所、特典、天職、生命、立場を授けらる。宜のために生き、愛の爲めに働き、愛の爲めに死す、又宜なるかな。されば、一變して惡婦となり、再變して善女となり、其の性情の變化端倪すべからざるも其の動機たるや、蓋し愛より外に出でざるなり。

婦人が毒婦たり妖婦たるに至るべき原因は、種々あるべけれども、多くは失戀に歸せざるべからず。愛の綽名たる戀愛の滿足を得たる婦人は、よし毒婦の面影ありとするも、毒婦たるべき餘地なかるべし。されど、若し彼れ等をして失戀せしめんか、たとへ清淨なる處女なりとするも、直ちに一變して毒婦たるに至るべければなり。

愛は婦人の生命なる限りは、戀愛も亦婦人の生命なり。戀愛を除けば婦人はあらざるなり。彼れは戀愛のために萬事を拋ちて之れに殉ず、高名、榮利、富貴、地位なぞは戀愛に比して九牛の一毛のみ。若し婦人に向つて戀愛を奪へば、全世界を與ふるといへども死すべし、何ぞ身の安全を保つの餘裕あるべき、是に於てか、其の制止

すべからざる感情は、心機を一轉せしむ。心機一轉するときは多くは、毒婦となり、妖婦となる。幸にして、此の一轉換なきものは、自殺を企て其が長き花の生命を、清き愛の犧牲として顧みず。毒婦と云ひ妖婦と云ふもの何れにか罪ある、社會は社會の秩序と法則とを維持せんがため假りに是を罰すると雖も、若し社會が彼れ等に、心機一轉の動機を辨明するの權利を與へしむれば、たとへ毒婦といへども、妖婦と雖も、彼れ等は依然として清淨無垢なる婦人たるやも知るべからず。

之れに反して、其の他性に對する愛——混々として盡きざる——が滿足且慶すべき反響を傳へしものとせんか、或は良妻となり、或は賢母となりて、孜々其の天職をつくさんは自然の數なり。之れを要するに、惡婦といひ善女と云ふも、畢竟、愛に對する社會の働きの其の反應より起る所の名稱に過ぎず。

婦人は先天的に神に近きものなりと云ふを憚らず。之れをして然らざらしむるは、一に社會の罪なり、境遇の罪なり。然るに世人は、毒婦、妖婦は皆、婦人獨特の短所より來るものと誤認し、其の品性などに至りては、那邊にあるか云ふものとてなく、婦人は實に憐むべき地位にありき。或は『婦人女子之言、一切不可聞』といひ、或は、『婦人は小人なり』と云ひて、あらゆる悲難、迫害は、このかよはき小天使に向つて加へられ、自由を奪はれて拘束を與へられ、光明を奪はれて闇黑を與へられ來りぬ。而も誤れる在來の社會は、この誤れる福音を信じて、女子の叫びのこゑ、恨みのこゑ、悲みのこゑは社會の耳に何等の微響をも傳へざりき。實にや、愛の惠みを知らず、愛の光を知らざる世なりき。

維新の制度なりて、卦建の俗敗れてより、歐洲の文物は水の低きにつくが如く、我國に流入してより、女子間に於て少しく其の責任を自覺するに至りぬ。其の結果、女權擴張、男權剝奪のこゑとなりて、其の拘束を脫して光明を望まんとせり。女權擴張不可なり、男權剝奪斷じて不可なり。思ふに歐化せられたる結果、歐米婦人の如く、日本女子の責任をして今少し社會に重視せられんことを望みしことの、あまり極端なりし故ならん。たとへば、棍棒の直からんことを望みて、反對の方向に向つて直以上にまぐるが如く、時としては極端に走ることの必要はあれど、其の極端は到底望むべからざることに屬す。唯々、婦人の使命の偉且大なることを認識せられ、其の美しき愛の光の、充分なる發輝を許すべき餘地を與へられなば足れり。これ、婦人自身の爲めの

みならず、家庭の爲めなり、家庭の爲めはやがて天下國家の爲めなり。

社會の紀綱、風俗の中心となれるものは婦人なり。風紀矯正、風俗改良等を如何に謀らんとするも、婦人にして軸となりて其の心身を碎かざれば、何の實効かあるべき。また感化事業、慈善事業等も皆愛情を基礎として成立するものなれば、之れ亦婦人の主動を要す。この絶えざる社會の戰鬪塲裡に於て、傷者を慰勞し、懊惱せるものには慰藉を與へ、忿怒せるものは調和し、傍ら惡風の蔓延を防ぎ、風紀を維持し、この社會をして宛ら和樂に滿ちたる一家の如く、うるはしき團結を形成せんには、只此の廣大無邊の勢力を有する愛に依らずんば能はず。されば、自然愛の權化たる婦人に、この責任を求めざるべからず。實に婦人の、個人及び社會に及ぼす影響は、積極にして活動的なるよりも寧ろ、消極にして制限的なる種々の法令制度よりも、遙に大なるものなり。



社會が婦人の愛の力を認識すると共に、婦人にも其の覺悟なかるべからず。則ち、從來、封建の時代に於けるが如く、思想單純の世にありては、空々、寂々、只其の一家庭にありて、貞操、忠實を實際に行ふをもて、大なる責任を果せるものと思惟せられ居たりしも、これよりは社會的方面に、より大なる盡さざるべからざる義務を有するものなり。日本婦人は歐米婦人に優る所多しと雖も、この國家的觀念を體持せることに於ては、大に劣れり。時弊の改まると共に、この國家的感想を我國婦人に鼓吹せんとするは、蓋し歐化主義を稱するものゝ女子教育に於ける長所なるべし。

嗚呼、我れ等婦女子は、愛の應用より出づる同情、平和、慈愛の其の輝ける光を唯一の武器として、內にあつては子にそゝぎ、夫にそゝぎて他より羨望せらるゝ家庭をつくり、外にあつては、貪慾を憐みて其の愛を更に隣りにほどこし、更に〳〵海內に及ぼさんことをこそ望ましけれ。

時勢の轉變は、また〳〵こゝに女學生なる一階級を產めり。われは是れ等に向つて少しく不平を抱くものなり。紫のリボン、海老茶の袴一として優美ならざるはなく、容姿をつくろひて往來する樣、愛すべし。紅唇より洩るゝ清き聲にて操る英語フレンチ皆な流暢なり。テニスも巧妙にして、自轉車上そが長き黑髮を微風に弄ばして走る樣、喜ぶべし。されど、婦人の長所たる同情、慈愛の念は動もすれば減殺せられんとす。これ敎育の罪と云はざるべからず、あらゆる風習に、保守主義と歐化主義と水火相容れざる混沌たる現代に於て、敎育界にのみ其の風波なからんや。時勢獨り進步して女子敎育は毫も進步せず、是れ一國の開明と云ふに足らざるなり、さればとて、女子敎育を隆盛ならしめんとして、保守、歐化相戰へる曖昧且疑惑に存する敎育を授けんとするは我れ取らざるなり。而して現代に於ける女子敎育は慥に左なり。精神に於ける畸形女學生の生ずる宜なるかな。

世の敎育によつて女子の開明を謀らんとする君達、願はくは、一面に於て歐化主義をとりて、今少し婦人獨特の長所――愛――を發達せしめよ。又或る一面に於ては保守主義をとりて、神洲女子獨特の美質を失はしむる勿れ。

不學奇言を弄す、たゞに所感をしるすのみ、大方の君子の後に嘲笑するも辭せざるなり。

評　この文は、婦人の愛情について論ぜるもの、論旨少しく明確を欠くが如き個所もあれど、その爽暢なる筆路は喜ぶべし、この論は要するに、消極論なり、消極論なれども思想混沌の今の世には、一般の刺激劑として、無かるべからざる論なりといふべし、吾人の見る所にては、作者は美文家として其技能勝れるが如し　（日東）

入賞

軒端の葡萄

信州松本町東の丁　小岩井愛子

縁したゝる青葉のかげ、なつかしう覺えしもげに夢の間にてありけるよ。初風まづ荻の上葉に音づれて、まだ一重なる夏の衣の袖うら淋しく、前栽のむら竹の葉越しさやかに、ほのめき出でたる月の光も、何となう昨日にかはり身にしむ心地して、世は早くも秋に入りにけりと覺ゆるほどに、なに驚かさんとにや、窓に落ち來る桐の一葉にも、哀れの催されて一入わびしや。物思

ひの中に、うかりつる夏も暮れて、秋立ち初めし昨日けふ、ふと見出せば眼にとまりしは軒の葡萄の房にぞありける。

日頃はさまで心にもかけざりしが、蔓伸び葉茂りて、ところ／＼に露したゝらんばかりなる紫の房の、秋風に吹かれてゆらぎたる、いひ知らず美くし。あはれ、その實、その房。

是なくば忘るゝひまのあらましものを、この葡萄の今は却りて追懐の種となりけるこそ、返す／＼も悲しけれ。

想ひ起す去年の夏よ、われは妹と二人して此の棚の下、葡萄の陰に夕涼みしつゝ、はやく實れかしとて、青き小さき房を仰いでイみたりき。やがて秋風のそよ／＼と葡萄の棚を渡る頃、ひとしく紫の房は實りぬ。たとへば神のたくみの手に刻まれて、み空の漿を湛へつゝ朝雲の湧くが如く、濃き紫に染め出されぬ。あはれ、われ等が両手さし延べて、ゆらげる房にかけし時、たるゝ雫の美はして露の實の、われ等の口に觸れし時、そもいかなる笑まひの我等の頬に浮びたりけん。かくてわれらは此の陰に遊び、此の下に戯むれ、倶に樂しく又來れ秋を待ちたりしに、秋風はもとのまゝに吹き初め、葡萄は昔ながらに實れども、あはれ去年の人は既にあらず。



あはれ果敢なきは人の命なり。朝顔ノ花に宿れる白露の、朝日待たぬ果敢なきさまの、げにそれにも似たるかな。わが妹は此のかなしき運命なりき。

假初と思ひし病の次第につのりて、世は梅の盛りとなりて人は春に醉ふ時となれども妹の病は癒えず。作戸の櫻も綻びて、友は花に戯むれて餘念なき頃となれども妹の枕はあがらず。遂に春暁れなんとして、慘雨梢にそゝき狂風花を散らすの夜、名たゝる醫師の心づくしのかひもなく、家人の泣き悲しむも顧で、妹は空しく仇し野の露と消えぬ。あはれ泣けども去りしものは來らず、呼べども逝きしものは歸らぬぞ是非もなき。その後は墓詣でもて、

せめての心やりとせり。

それよ、昨日の夕ぐれなりき。われは妹の亡せし夜、さては野べ送りの夕のことなど思ひ出てゝ、そゞろ物思ひに堪へざりければ、かねて生前の好みしものとて葡萄の殊に美はしきを携へ、妹の奥都城に詣でぬ。そはせめて亡き悌を偲ばんとてなり。墓邊にすだく虫は唧々として世をはかなむが如く、涙は秋風に落ちておのづから聲あるも、冷かなる石碑は空しく殘照に立ちて、何事をも語らざりき。只墳墓をおほふ杉の梢にまたゝける、珠の星を仰ぎしのみ。

あはれ去年の秋めでにし人は既にあらされども、軒の葡萄は昔ながらに實りぬ。春夏は榮え秋冬は衰ふる無情の草木に比しても、なほ果敢なきは人の命のそれなりけり。

評　こは幽かしき葡萄の影を見て、亡き妹を偲ふの情を揚げるもの、景によりて聯想せられたる、綿々たる情緒、何等の哀絶ぞ　（日東）



秀逸

婦人と信仰

信州上水内郡榮村住良木四八一番地　小林恒子

吾人は宗教を輕んじて婦女老幼の傳なりとするが如き一種の小見に賛成するものに非ず。されど又た妄りに宗旨の事を云々するを喜ぶものに非ず。さは云へ世間の人々が各々其宗旨に熱心して、其學ぶ所を生涯に於て現はさんとはいと切に冀ふ處也。

總べて世の中の人間は、只六づかしき法律の縄のみにて縛り得べきものに非ず、又儒者が見臺に向つて講釋するが如き四角四面なる道徳論に因つて抑へ得べきものにも非ず、是非共阿護を頼むの信仰心を養ふに非ざれば、濁り果てたる世を掃蕩せんとを期し難きものなり。

今の世の人動もすれば、宗旨と云へば只お寺の事にて法師の役目のやうに思ふ者多けれども、諸宗の祖師達が、道の爲めに命を惜まず苦心經營したるは、決して左る如き淺墓なるとには非ず。宗旨の効驗が信心する人の心に泌み渡り、身を修め家を齊ふる上に於て精進猛省のとこそ諸聖人並に諸大賢の心より願ひし所なる

べけれ。斯の如くにして、宗旨若し信仰する人の生命ともなり、精力ともなるに至れば、玆に王法と竝び行はれて、世を濟ふに多大なる力となるべきは言を俟たず。さればかゝる篤き信仰心を保たむとは、勿論男女に限らず望ましきことにして、男なりとて別に宗旨を輕んじて善しと云ふ謂れなきは論を俟たざれども、女子は殊に心弱く、身も又餘り强からぬものなれば、信心を盛んにし、神佛に依賴するやうありたきもの也。

男子は獨立を以て榮譽の冠とするものなれば、時としては神を嘲り、佛を罵り、天上恐るゝ所なく、天下拜む所なく、後生を願はず、因果を感ぜず、發心もせず、經も讀まず、思ふ儘に荒れちらすも又面白きことならむと雖、婦女子の無宗敎—無信仰—は如何に思ひ直しても興醒むる心地するなり。假令へば學問は普通を超えたる婦人なりとも、其人の心の中には神も佛も無く、天命を懼れず、冥利を憶はずとありては、恰かも色美しき山吹の絕へて實なきやうにて、誰しも其人に對する畏敬の念を減ずるに非ずや。

我朝の昔には、尊きわたりの御身にて、卑賤の病者に浴を賜ひ、親しく其汚れたるを洗はれたまはりしもありとか聞きぬ。又婦人の一身をもて許多の棄兒を拾ひ、之を撫育すること父母の如くなりしもあり、これみな信心の致す所なり。奈良京都などに行きて、名所古蹟を尋ぬるに、婦人の信心によりて成りたる美擧尠なからず。思ふに今日の婦人はかゝる信心あつき女子の裔なれば、祖先に對してもまさしく無神無佛の振舞あるまじき筈也。さるに此頃の神事、佛事を觀るに、たま〱女の顏を出すとあれば卑しき者の手踊りなど云ふとのみにして、紳士の令閨たり、貴族の令孃たる淑女の、神事、若くは佛事にたづさはりて、宗旨の極意なる敬意及愛憐の精神を事實に現はすこと尠なきは、返す〲も遺憾のことなりけり。聞說、米國などにては、寺院の事業は大抵婦人の手に一任してありと云ふ、之に反して我國の如きは、寺院の事業を以て僧侶の手の放任し、婦人は全然之を度外視して過ぐ。是れ則ち世を濟ふべき宗旨その者を以て、徒らに寺院の壁の内に隱匿せしむる者なりと云ふも不可なかるべし。之れ吾人の到底默視しがたき所也。

烏兎匆々白駒の隙を行くが如く、明治の照代も旣に三十四歲を經たり、今は學校に於て所謂コンモンセンスを受けたる婦人にして、すでに家庭の主婦となりたる人また多からむ。吾れもと不敏、識者の冷評を恐れ

ず、所感を記して是等の人々に告ぐを云ふ而已。

評　婦人に信仰心ありたきは、吾人も之れも認むれとも、此論の主旨、淺薄にして妥當を缺くの憾あり、但し文は精洗せるもの丶如し（日東）

秀逸　思ひ出草

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

秋としいへばさらでだに淋しきものなるを、まして今宵は吹く風に雨さへまじりて、ほろ〳〵と紅葉こぼるゝ垣根のあたり、悲しき聲をふりしぼりて鳴きしきる虫の音に、幽ながら砧の音の打添ふなど、取集めたる哀れさに、ほの暗き燈火の本文によむ妾の心はいつか結ぼれて、ありし世の事どもは軒の玉水の響につれ、さても輪の如くに浮び來るよ、

思ひば去年の秋も暮なんとする頃なりき、常に姉上とも賴み參らせし吾友花子の君には、日頃快活なりし樣子の怪しきまでに打替りて、涼しき目元は露にうるほひ、美しき紅顏色褪せて、折々身を切らるゝばかり切なき、吐息をもらし給ふなど、親しく交はる妾の怪しくはた氣遣しさに、一日紅葉狩せむと誘ひ參らせ、人目も關も絶へはてたる、おく露しげき野邊迴りつゝ、夕陽次第に薄くなりゆく柳の下陰にやすらゐて、君よ何をかさはられは給へる、妾の心には露へだての侍らぬものをさても恨みぞかし、樂しみを分つのみ、友の道かはいかで〳〵苦しき事の半ばをゆづり給へや、爪にきけば先の月にまゝしき母君をを迎ひ給へりとか、もしやそれにて侍らずやと、怪しき胸のうち問ひまつれば、ひた泣きになき倒れて、只憂き事とのみ苦しき胸のうちはえ語らで、あはれ涙の淵の底ひのみは中々にかはくべうも見えざりしが、はふり落つる涙ふり拂ひて、晝猶暗き木下陰に弗と眼を注ぎ給ひし君は、翅破れし秋の蝶の、枯れし尾花の根本にあはれはかなく死せる樣を、しげ〳〵と眺めつゝ、あゝ妾もかくなり果てなば中々に心安かるべきと、獨言いひ給へし君が聲は、霜夜の虫のそれよりも哀れにきこえたりき、妾はいひ知らぬ悲しさに溢れ出る涙とゞめ難かりしが、うたてや君が言の葉ぞ、あはれいつはりにてはあらざりけり、

宵の明星光りうすれてほの白う、吹く風いと物凄き夕より、風の心地と打伏給へし君は、はかなき思ひの積り〳〵て、重き病のまくら離れ難うなりはてしこそ、返す

くも、口惜しけれ、一日病室を訪ひまつれば、目はくぼみ、頬は削げ、紅の唇は墨を含みし、さても變り果たる御姿に、聞え上げん言の葉もなく、膓は細かく刻みゆかるゝ心地ぞしぬ、微に眼を開きし君は、嬉しさの色ありくとやつれし面にあらはしつゝ、胸せまりてや言葉はなく、舜とはがり妾の腕を握りて、はらくと落し給へし涙は、あはれ幾多の情のこもりたりけむ、折から窓うつ風の音寒く、庭の木の葉のはらくと地に落ちて、猶一しほ哀れ深うおぼへたりき、病も肺と宣ふに胸つぶるゝはかり打驚き、涙一時にこみ上げて其まゝそこに泣伏せむ、病人の部屋とも知らず顔に、あらくしく襖おし開きて入來りしは、花子の君の後の母上にておはしき、輕く妾に默禮せしのみ、何事もえいはで病みふせる君を冷かに見やりつゝ、やがてまた立去り給ひぬ、花子の君はいかになしけむ、唇固く噛みしめて眼閉ぢつゝ、忍び泣きに咽び給へしよ、

程なく妾は父上にともなはれて、此地に移り來べき前の夜なりき、又も訪ひまつれば、ひたぶるに妾を待ちつゝありしとや、さてまた、なつかしき友よ、情深き友と、君が情はとこしへに變らで、病みふして頼りなき我心を慰めてよと、痩せ細りし兩手を合するを見れば わゝいかで、明日の別れをかたり得らるべき、まして病み衰ろい給へる君の深き歎きに沈み給はゞ、いかに御身に障りやせん、さりとて此のまゝいはですむべき事にあらぬを、とやせん角と思ひ惑ひつゝ、胸に漲る悲しさにはらくと落せし涙を、怪しと君は見咎めてひたすらに問ひ給ふに、あはれ告げ參らす力もうせ只幸くましてよと泣臥せば、あなやとばかり驚き給へる君は、痩せ細りし躰を強ひて臥床に起きなほり、君はいつこに行き給ふにやと、か細き聲に尋ね問はれし時よ、いかにかなしかりけむ、事しかくと告げまつれば、只さめくと泣き沈み給ふに、かねてよりかゝるべしは期したりし身も今更のごとおもほへてひた泣きに歎き沈みしぞ、いとゞ哀れ深かりき、さはれかくて思ひつくべきにあらねば心強くも、さらば幸くと、只一言を無量の思に代へて、惜しき袂をわかちしは、あはれ今宵の如く日は雲間に隱れてあたり小暗く、更けては寒き秋風のそゞろ身にしむ夜半にてありき、

此地につきしよりは、一しほやさしき君が上のみ忍ばれて、拙き筆に幾度も事問ひ侍りしかど、あはれそは徒にてありけるよ、朝な夕な門邊を通ふ人音にも、戀しき君がおとづれにはあらざるかと、胸まづ轟きて馳て出

せしは幾度なりけむ、されど〳〵あゝされど、遂に雁のたよりのそれとだに聞よしなく、春と過ぎ夏と暮して又も淋しき秋はくれゆくらむ、さるにても君は如何に過させ居給ふらん、宵々の夢まどかなりや、はた、病の床に憂き事ども思ひ廻らしつゝ又も泣き沈みておはさずや、雨滋き夕鳥なく夜半も、やつれはてたる君が俤のみ浮び出されて、つくるはしなき思ひにふけしむるぞいとゞ哀れ深しや、一夜夢路に通ひし君の御姿は神々しく病はとみにいえさせ給へて、今はとのけがれ〳〵たる罪の世を遠くのがれ出神の御園に樂しく遊びたはむれゐ給へしに、あゝ花子の君よと、知らず叫びし己の聲に夢破られて、弗と心付きし妾は、いひ知らぬ悲しさに獨り胸のみ打騷がされしよ、あはれ君戀しきなつかしき花子の君よ、幸くませ、妾は只君が恙なき事をのみ神佛にねぎまつるになむ

思ひわまりて窓おせば、千草に啣く虫の音は深けて、いとゞ露けき夜風のそゞろ身にしみ渡りぬ

評　文に雅氣あり、想はあまりに悲觀的に陷れども、筆の運ひは達者也、若し修錬怠られは、成功の見込なきに非ず（日東）

賞外佳作

深山住の賤の女

神田　賤の家　靜子

あきの國は北の北、お國境の山續き、其名もいとゞ怖ろしき鬼ヶ城将の麓にて、をちの山との崩れ込みたる中間、擂鉢の底にも似たる谷陰に、ま籬も破れて、尾花が袖も霜枯れつゝ、そが中に露を置くかと縮またる唯一と本の野菊、哀にも咲き出でゝ、水清く花藻浮べる些々やなる古池の彼方住、朽ちて軒傾けるはにふの小屋とぞ、天にも地にも懸け替へなき妾が母の城郭なり。今朝早く妾は裏の峯上に枯枝など拾はんとて、襤褸の上に洗晒せし眞岡木綿の丈短きを着て脚半に足を堅めつゝ、幾切れし藁草履穿て、前垂は去歳の春、母様が父様に逢ひにとて廣島へ行き給ひし時のお土産、形は秋の七草、尾花や萩や女郎花が野分の風に靡く間を清水が縫ふて流るゝ景色、大事に納め置きしを、今日は何故か母様の之れをしめよとのお言葉、山行には野露など懸れば餘りに勿體なく思ひしかど、去りとては又〆めても見度く、遂に母様のお言葉に從ひしが、未だ一荷も落葉かゝぬうち、木の間の枯葉に怪しき音するに、仰上れば冬の空、山里の常、あやにくに巽の方より、まよふ浮雲湧出でゝ時雨るなりき。今暫しにて一荷出來上るものを、とあせれ共、大事の大事の母様の土産なる此前垂、雨に濡ちして色褪すてはの疊みて懐中に入れ、竹籠背中に負ひ、朝來る路際にて採りし初茸從柴に差したるを持ちより早く、下り坂路の小岩に躓きつゝ、或るは細谷川の丸木橋あやぶみつゝも渡りて、ひた走りに夕霧寺の生籬の邊まで到りしに、極く優しい兄とも慕

ふ方給樣、文机を離れて例の破窓に倚懸り給ひ妾を覗て黑染の袖振りかざしつゝ招き給ふに近寄れば、しのぶの露に濡れて谷間へ歸る藪鶯に梅の花笠貸そうづ、と窓のうちより田子笠を出して貸せ給ふに、之れにて濡るゝ憂ひ無ければ近路に山のせた田の畔傳ひ、妾が庵の門邊に歸れば、今迄軒の古き柳の根方なる新藁の上に寢轉び居たる「忍ぶ」と呼ぶ小犬の飛來りて飛附くに今日は何とて妾と山路へ行かざりしと頭撫でやりつゝ、納屋に籠を卸して青竹の側に笠の笹を置き、筧の水に口を嗽ぎ、池を溢れて垂るゝ水に足洗ひぬ。平日なれば母樣の忍ぶが知せに門邊又は東の丸窓より首出して言葉掛け給ふなるに何故か今日は顏も出し給はず、さても今日は不思議の事のみよと庵の内に入れば母樣は妾が古机の傍に玉章やうのもの膝に載せて右手を帶の間に挾み悄然と垂首れ居給ひて妾が方を視向きもせ給はざるは、先づ胸裡は波立ちぬ、されど慄くあるべきにあられば無理に動悸を推靜めて母樣の傍近く進み、如何にし給ひしと伺へばいたく驚き給ひて其女は何時歸りしぞと訝氣に妾が面視給ふに覺えず微笑めば母樣も笑ひ給ふて其後は常に變りし事なかりき、否よく／＼視れば御眉間の雲霽らずは霽れやらぬやうなりき。されど然れどこは皆僻目にてありし、母樣は妾の前にては笑ひ給へど物蔭にては以前の通り案じ給ふ御樣子なりき——そは妾が夕餐の仕度にと立ちし後——掻き來りし落葉を軒端に焚けんとて出でし後などひそかに伺ひて知りぬ。されば妾が胸は再び波立ち初めて愈ゝ亂れぬ、然はあれ共未だ妾には此方より問出でゝ慰めまいらする勇氣は無かりき、……唯々獨り胸裡にのみ思ひ案じて……。斯くて夕暮ともなりけるに時雨はかはりて吹雪となり、窓より風に連れて吹き込むに雨戸立切れば庵の内は閴として靜かに淡き燈火の下に母樣と二人さし向ひ、外面には梢を鳴らす風の音、雨戸を叩く雪の音、時々裏の峯上より梟や名も知れぬ獸の鳴く聲聞えていと淋しくも物凄く、忍ぶは庭の片隅に眼を圓くし耳を欹てゝ外面の樣子伺ふやうなり。

夕餐を終りて母樣の今日はさこそ疲勞れたらば殊には霰降りて寒むければ疾く床に入れ、との給ふに母樣は、と謂へば自分は今暫し用事あれば先きに寢れよと遠慮して言給ふさらばとて先きに臥りしが眼は冴えて眠られず思ふは今日の審しき上に移り行きぬ……常には優しく何一つ安じ給ふ御樣子も無かりしが今日は何故のあのお顏色、御病氣にては無きかと、若し然なりとすれば心細き限りよ、斯かる時に父樣の居給はゞ又啓すべもあるべきを、とぶさき胸裡に賤の小田卷繰りかへすうち、何時しか夢路をたどりしが早や眞夜中とも覺しき頃、不圖眼覺れば冷き燈影に壁の黑き影搖ぐは御母樣の寢れ給はぬ御樣子、再びとろ／＼とする内既に母樣は起出で居給ふに驚きて飛起れば今朝は又何日に無き霽れ／＼敷お顏にて昨夜よりの降續けにて大雪なれば朝寒の風に當りて風邪ひきそ、今日は休みて、晩くまで寢るとなり心の儘にせよと言給ふ、妾も母樣の勝れ給ひしお顏視てはいとゞ嬉れしく、軈て朝がれいも濟み果てゝ後、母樣は窓に凭れて、遠き彼方の峯も尾も豬田も近き此方の抑もま籬も池邊も一面、深雪に覆はれて地は綿を布くかと思ひ梢は松の咲くかと見もるをちこちを、懷し想に眺め居給ひしが、やをら妾が方に向きて風姿を正し給ひ、一昨日の夕暮其方が葉掻きにと出でし後、廣島の父樣の所より玉章來り都へ出でよと言來し給ふ、妾も一時は飛立しかど憶へば都とは名のみ誠は穢しき塵の巷、夫故夫婦して此片山里に移りてより早や二十歳、其女が産れ出でゝより、かく賤しくては兒心にも嘸心細く思ふらむとて父樣は又も塵の巷に出で給ひてより今茲に十二年の春秋、……

……丁度其女が共の時。其方も父樣に逢ひ度く、都も視たく思ふらむ、如何にと妾が面視詰て返事まち給ふ樣は只ならぬ思入り、妾は餘りの事

に驚きしかど漸う〳〵にこゝろ静めて父様には逢ひたう思へど其綜しき塵の巷とやらへ出づる事は赦し給へ、父様も塵の中に居給ふよりは早く此里に歸り給ふて、朝は山路に分入りて夕は親子揃ふて睦まじく憂きもつらきも知らすして行末永く此山里に暮さなん、其金子とやらは望ましからず、却て父様の居給はぬこれ心細しと言へば母様は何故にや熱き涙滾して妾を抱かしめ好くこそ言ひしとさめ〳〵泣き給ひぬ。折しも降雪は止めて東の空より美しき朝日の光現はれて南の端山より一列の雁此所に飛來るには、若しや父様の……。

評　苦みたる跡はあれど、ソレ丈のよき作にあらぬは、作者の文才足らぬ爲めなるべし　（日東）

物うる少女

麹町　山内すゞ

ある冬の朝、急用ありて、いと早くわが家を出でしに、凍りし如き雲のたゞずまゐ、ショールを固く身に纏へど、なほ風冷かにして肌の縮む思ひせられ、一天うす暗くなりゆきて、早やこれよりや、霰ちるらむ雪もふるべき寒空に、冬木立のかげ淋しく見えて、軒の雀も聲いと萎れたり。

幾條の町を廻り越し、とある小路にさしかゝりし時、人の話聲聞えて、いと怪しく耳にとまりしまゝ、小さき垣の外に佇みぬ。年長けたる女の聲として。それではお父様もあるてすね、と云ふに。エヽ、と云ひしば定かに幼き女の聲なれば、そと覗きて窺ふに、一人の少女、勝手口に家の者と語らひ居りぬ。何故二人とも北海道なぞへ行つたのかれえ、と云へば少女は萎れて。お父様が商で損をした故、資金を拵へると云つて三年前に行つて、まだ歸らないから、今年の夏にまたお母様が、お父様の處へ行つてしまつたのよ。それでお前は今何處に居るの。叔母様の處に、まア可哀さうにねえ、少女は暫し首垂れ居たりしが。伯母さん、また明日の朝も買つてお呉れよ、早く賣つてしまはないと叱られるの……伯母さん難有う、と別れをつげて、悄然と表てに出で來る少女を見れば、年は十歳をも越えさるべし、小さからぬ籠の紐を肩に掛け、片手に支へて身をやゝ斜めにしつゝ、わが方を僅に見たるまゝ彼方に路を取りしが、窶れ凋みし顔、頼みなげなる其姿、色の褪せたる袖口さへ、もの云ふばかり哀れに亂れしかば、おのれも思はず涙含み、用事を忘れて暫し佇みしも、明朝は必ず御身に逢はむと心に誓ひつゝ、行くべき道に歩み出でしとき、細りし少女の賣り聲は、はや彼方の町に微かなり。

世にも哀れなる少女子よ、御身の母は如何なる人にして、また誰の妻なるや、恩愛の心を持たぬ者なき人の世に、身の不幸とは云へ、如何なればかく萬里の外にさすらへる、今はかくある少女子も、雙親のもしや此地にいまさらには、一家の愛寵として、花とめではぐくまるゝまだうら若き年の頃なるに、そも如何なる命運ぞ、早くもうたてき世の波風に漂はされ、一日みるだに哀れの様となりにけり、一生のどさて春に逢はずして、つらき他人のうちに住みはつべき事はなきか、世の人なみな厭はしき者と見まがひて、涙のうちに年長け行かむことゝなりはせすや、されば、一すぢに父と母との歸りを待ち佗ひつゝ、手足も凍る冬の日に、冷たき霜をふみしめて、唇も裂けむばかりの寒風に吹きさらされ、いとゞ細りゆく聲をふりたてゝ、知らぬ他人の町に物うる、此最愛のわが子ありと、夢の端にだに思ひ浮べむときは母親の　親の心はそも如何にかあらむ。

評　可憐の少女を描きて、人の同情心を惹起せしむ（日東）

枯れゆく身

下野　神山ふみえ

心弱しと笑はん人はわらへてれ、やがては熱き涙の一しづく、そゝぎ給はん人のひとりふたりはひろきこの世になからめや、身をも命をもすてはてゝ、呼吸のみ通ふなきがらの、只徒らにながらうなる今のわが身には、月いでたりとて、雁なきたりとて、さては留のれさえたりとて、世を白雲のへたてはいく重、胸さわがする思ひらなければ、限りなく前にかさなる將來を、一歩一歩小止なく過去てう名に收めて進みゆくなる、時のあがさにすてはてしこの身をまかして、五十の年月たゞ一時の夢とすぎれと願ふ外はなく、哀ればかなの姿が身や、さはさりながらゆるし給ひ、姿も又罪ある人の子の數にもれざる悲しさは、遠山奥のましらなく聲みにしみて、木枝をならす木からしの燈火くらき窓にもれては、亂れしわが身の黑髮より、いや長き冬の寒夜の物思ひに、いにし昔は樂しかりつる事もありしと、なまじへに今はたこゝに夢みては、いやうち騷く胸の內、嵐もものかは、霰もものかは、亂れ亂れしまさなき思ひに夜はふけて、しきたへの枕かみあふるゝ涙に川や流れん、哀れいく夜をかされなば紅そむる波やたゝなむ、聲力なきこほろぎの、かれゆく身こそうたて哉、

さらばよし今をかぎりと聲そめて、すぎこし方をかいつられ、せめてもの心やりにも、あはれ熱き涙のあふるゝ人よ、あかき血しほのみたぎるひとよ、

げに酷なりしは姿を捕へし運命の神の手なりしよ、あはれ姿は前の世にいかなる罪をば犯したりけむ、父なる人は姿がいまだはゝそはのふところいでぬ其前に、いかに此世を見かぎりけむ、はやくも亡き人の數に入り給ひしとか、げにや姿はいまだ此世の風に吹かれぬうちにはかながらずや、いちはやく幸なき運命の神に捕へられしなれ、姿は母につれられて父なる人の家を去り、母の生家に養はれつ、あはれ姿はげに不孝子なりきよ、破鏡のなげき、さびしきれやに昔を忍ぶ母をしていくたび袖をしぼろしけむ、友とちうちつれてまゝごとひな遊びに、「父なし子」、こはいつも姿をなかすうらめしき事の葉ぞなりし、雁うちむれてなく聲悲しく空をかすめ、月さえ渡りて窓もるかげのさやかなる夕べ、塔へすやおりけん姿をひざへかきのせて、よくきゝてれ、いましあればこそこの母はようなき身をもながらへて、塔へ騷きはづかしめをも尙ほ忍びてあるぞかし、あはれこの母をあはれと思ひなば、われを泣かせぞ身なあやまちぞ、母が願ひはいましがうるはしき振袖すがた眺めん時のそれのみなるに、紅き涙はなごりなく姿のほゝをひたしたりしよ、

やがて姿は世の常の習へにしたがへていまはや亡き父なる人の家へ行くべくなりし、あはれ嵐山おろし烈しくて、いかなればかくかよわき姿を吹きあらすか、うしろ髮ひかるゝ心地とはげにこれをいふらむ、かなしき別れよ、母上はわらはが形見にとて、野菊一もと植ゑしめてき、つくりし花の麗なるよりも、野に咲く花の美なれと願ふ心にとてか、其折り姿は一花手おりてまけかざしつ、しげりし尾花の半ばかれたる汀にたちて、かへり見ては、かくり見ては、

それより姿が運命はいよ／＼ます／＼味氣なく冷酷なりき、やがて學び舍には通へつ、されど祖母なる人叔父なる人はいかなればかく迄に姿をうとみ給ふにやあらむ、冷かなる祖母君よ、あはつけき叔父上よ、よどみなく文よみおほせて教への君にたゝへらるゝにも、母人まさばいかに

喜び給ふらんなど、うれしきにつけ悲しきにつけ思ひださるゝは只母上の情、夜ごとの夢もかつて植えにし野菊の邊りさ迷ひて、されど祖母君叔父上のうとみ給ふは日ごと烈しくなりまさりて、かよわき妾がいかで得堪へん、ある日ひそかに逃れ歸りつ、母上ははふりおつる涙をはらへもあへず、哀れまさなき汝にもある哉、今しばし堪へてれやがては嬉しき花もさくものぞ、何事もこの母のために、わらははまたもやおくりかへされつ、

何事も母のため、妾はかく心にきざみていかなる冷酷なる境遇も決して泣かじとちかへたりしは、げに心強き限りなりきよ、されど哀れ妾が運命は幸なきに始まりて、幸なきに終りをつげけるなり、妾はこの最後の幸な運命のために、終世身をすてはてゝ全く呼吸あるむくろとなりおはりぬ、それば何事、あはれ人々とひ給ふな今おもふだにも妾が少きむれははりさけむ、

母上病あつしとの便りに、こは何せし、いかに、身も世にあらず、足も空に歸り見れば、あはれ妾が萬事をはりぬ、白木の棺はすえられて千香の煙ひくつたなびき、たゞ讀經の聲かすかなるのみ、妾が赤き熱涙は千行にくだりつ

あはれしたはしの母上よ、あはれ戀しの母上よ、などてかく妾をすてゝ父君のみそばへよそゆきませるゆきます母上は婿にからんも、あとに殘りし妾が身は、よるべ汀のよて小舟とぶ人なきはしりませしならんに、あはれ妾がふり袖すがたいかに美はしくきかざりだりとて、今となりてはいかにせん、やがて夕くれの鐘さびしくひゞきて、おくつきあたりけむりのぼりぬ、

むれをはなれしかり一羽、雲うちさわぐ空をかすめつゝ、あはれ心しあれば妾にこゑなきかせでぞ、

ことしの秋もはやくれて、人目も草もおしなべて枯れゆく冬はおとづれつ、堅より堅はよわりゆくなるこほろぎにもにたるあらはが身や、妾があつかりし涙もひえきりぬ、妾があかゝりし血しほも色あせおはんぬ、くる夜半ことに霜おきまさるこのごろよ、

みる人もなきみ山紅葉の、かれゆく身こそいとゞやすかれ、あはれ何なか此世に願ふべき、とこも我世るあるゝ木ぶらしならば、妾をこのまゝちらしてよ、

なつかしき父君、こひしき母上は、妾やくるとまちでまさんに、

評　文想共に冷靜なり

夢ものがたり

相模　うもれぎ

峯の紅葉の囁きぬ、

やよ富貴に誇る人の子よ、汝等が着飾るそのまばゆき錦は何をもて織れるか、蠶絲をもてか織りしか、金をもてか、鳥の毛をもてか、たゞしは咲きれし花瓣をもてか、チヽ金をもて織りしとか、さなり金は此の世の寶こそなければ世は恰も闇ならん、去れど汝は其金を如何にして得しか、自ら働きてか、汝がもつ金は銅くさくはあらざるか、貧民の膏血を絞りし金にはあらざるか、汝が錦を攜へて來れるは汝が錦を誇らん爲めならん、さらば比べみよ汝が錦と吾が錦と何れが美しく何れが榮えあるかを、汝は如何にして錦を飾りしか吾は如何にして錦を飾りしかを考へみよ、錦着て美を競はんとする富貴の子よ、いざくらべみん吾が錦と、天の御神は光りまばゆく西の山にてながめ給へり。

靜の子は囁き給へり。

春は花に戯れ秋は紅葉にあこがれ、晝は金殿玉樓の中に住居ゝ美味美食を貪り、夜は紅閨翠帳軟き布團の上に横り、榮華の夢を貪る富貴の子よ、汝もし美味美食に飽きて世の衛生的運動を名として此處の海邊彼處の温泉と、遊び暮らす暇あらば、一日賤が伏家の生活を訪らひみよ、如何に汝等は驚くらん、亦其所に住む者は汝等を見て如何に驚くらん、世にはかくも貧しき者もあるか、世には又かゝる美しき人もあるかと、汝は唯その見る影もなき外面を見てらず中に入りて見よ軒は朽ち壁は落ち雨は降るまゝ風は吹くまゝにまかせ身をきる如き冬の風を凌がん爲めの障子さへたのみなく、紙は破れて骨まばらなる下には饑に泣く子、病に呻く親あるをきかば誰とて泣かざる者はあるまじ、汝も泣くか、

有らん限りの衣をまとへども尚寒さは堪へがたく、子は親に縋り親は子を抱き締め一夜を爐邊に泣き明すときかば、誰とて泣かざるものはあまじ、汝も泣くか夫は車を引き妻は後を押し子は馬を引き日夜營々として働くも尚ほ貧鬼の責はのがれ難く、遂には可愛き小女をとられ、罪なき汚りなき清き身を此の世からなる地獄の中に投ぜられ、鬼の呵責ならぬ情なき人の玩弄にされ一生浮む瀬もなく涙の中に果つるかと思へば、誰とて泣かざるものは有まじ、汝も泣くか

盲といはず唖さへも尚ほ文よみもかく事なし得る有り難き大御代に遭ひ五官完備しながら學理の何たるも知らず自分の名さへも書かで無學の徒にて終る彼等が境遇思へば悲しからずや、汝等も泣くか

着るものも食ふものも住む處も、汝等の如く美ならむといへども、彼等が中には金剛石よりも尚光る玉をもてり、去れど悲しいかな彼等はそを研くものなき爲めに空しく土中の瓦石と共に朽ち果つるなり、悲しからずや、それも又人の子なり、哀れならばや汝も泣くかナ、汝等は泣くとか、よしされど汝等は唯泣くのみにして止まんとするか、之れ惡饑に泣き病に泣き寒に泣き獄中に泣き涙も涸れんとる薄命の人の子ゝ救はんとはせざるか。

谷間の水は燥きぬ、

貧に泣ける人の子よ、まづしとてさ泣きそ、天の經神は汝等を見給へり、必ず富貴に誇る人の子を見てそねまれんと思ふ勿れ、必ずこの世の光榮を求むる勿れ、汝はまづしと正しき道に正しき事を行ひ行かば幸福は汝等のものなり、高きに上らんとするより底につけきぐれば吾の如く清き〱泉は絶えず湧き出づるなり

昔のおもわ

みか利

物求むるとて手箱の底などかい探るにふと一葉の寫眞出でぬ。幼なけなる頃の跡の某女學校卒業生とぞ記されたる。ゆくりなく昔人等にあひたらん心地して取上打守るに。いといたくもふりたるかな額緣の金文字黒くなりて艶やかなりし色も濕れぬ。同じ様なる袴着たる姿も今は各異となる境遇に身を置きて西東或は遠き外國にかけ離れたるもあり。げに懐かしきはかの頃よ。紫メレンスの木包持ちて行來せしかの大路。夏はてりかいす日。冬はふきつくる北風雨に霧に苦しくも辛くも覺えしが中にこもる樂みも亦澤なりき。朝な〱打連れて通ひしは此端なる君よ今も都の學びやに螢雪の苦積みゐ玉ふ。其隣なる美しき君は夫なる人に伴れて去年臺灣に渡り玉ひぬ。眞中なる丈け高き君は名も掌の玉枝子とよばれて素封の一人子に生し父母の御慈しみよの常ならず萬大様そ育ち玉ひし事とて心様直々と眞にあらぬふしなき君なりき人は衣紋の片節帶留の結びめにも心碎くやつし盛を双の袂肩そしかゝけて母上帶しめてと常に乞ひ玉ふうひ〱しさ友の間の評判なりき今はさる外交官を婿君に迎へ玉て白耳義の都にゐ玉ふかの腰細くしなやかなりし御姿にし洋服のいかにし似合ひて見え玉ふならん。此方なる眉秀で口元しまりたる君はなゝしき事を好み玉ひかの軍人の馬上の姿のいかに〱勇しからずや吾男子

ならぬこそと常にの玉ひしが誠にとなりて今は砲兵中尉某氏の夫人となり玉ひ美しき女の君擧げられぬ。櫻模樣の衣つけたる勝れて美しき君は卒業前已に某省の腕利といふ某の局長の君と結婚の約成りやがて都に上り行き玉ひしも書くといとほしき内端の亂れに人毎に羨まれ玉ひし緣も仇に病をさへ得玉ひて破鏡の嘆し玉へりしと人の御上とも覺えずこそ。ばらの花かざたる君そ。我級第一の秀才はたりがあるが中のいみじき際の内方にてなはしき何業にも勝れ玉ひし中に取わき綺論文章に秀て玉ひ和歌こそ殊に並ふものなくなはしたれ人は己れに似たる者を愛するとか君と我とは學科の嗜好より何かと等しき節の多くかつい其或一方の人々よりたさし出ものよと呼ばれ給ふ程に親切に同情深きとがいたく我心にしみて交はるにつけ日々親しさの度を增して卒業後もとひつ訪はれつ月の中も相見れは一里足つずの間を端書の一ひらそ樣々の事とも細かそ記して送り玉ふ程なりしが定離の例しく我等の上にも來て相しりてより五とせの春まだ淺き三月の初耳談ありて嫁ぎ玉ふとて都の方にと去り玉ひぬ十日又廿日一月とすぎても何の音信もあらずんば新婚の蜜の如き味に醉ひて昔の友の上なとには思ひ及び玉ふひもけけんと嘲るもありしが我のみはゆめさる君にはと心にあけつらひてなほ待々し甲斐なく四年をすぎし今日までもそよとの風の音信なしなれと今も如何なる浮世の浪か彼の君を捲き去りけんとつれなき人の一しほに戀しう覺えてかきたる歌反古なとものゝはざまより覺出てはなつかしき記憶よび起してそのかみの交を思ふこと切なるに君はいづこの空いかにしてかましますらん。敎師となりて田舍にすます君無事にして父母の御許に仕へ玉ふ君いづれもさきくすこやかにをはすらん。さて我はと見れは片すみの椅子にいとやせからびちうつくまれる姿のなかしきに思ずほゝと打笑む折から奧に臥したる乳兒の目覺めて乳をよぶ聲に急き其處つのすみに押しいれつ

散る紅葉

（秋）

久留米　飯田しげ子

はや、秋も深ふなりゆきて、骨あらはせる田面の案山の子收むる人もなく、これも秋の形身とし思へば、何となふしたわしくなむ忍ばる。寒き霜は朝ごとに降りまさり、庭の紅葉はいやが上に色づきて、眺めしいといおかしさから、ある、すめる月の小夜に、枯草ふみしだきてありき廻りぬ。

昔を忍べば四年の昔、紅葉はら〳〵と地に布く頃、矢永の君は學びの奥を極めむとて都に鹽を廻らしぬ。そも、我にしては只一人の友なり。ある夜、月は麗はしく冴え渡り、雁は二聲三聲鳴きすぎて、蟲の音いたう細りし折、君は別れにとて音信れ玉ひぬ。其時、我は只々涙にのみむせびて、一言の別れも告げかねてありしに、君はゆゝしき顔に只管我を慰め玉ひて、必ずな嘆き玉ひそ、六年の後はまた歸らむ程に。たとへ、身は、彼の地に赴くとも、君ます郷をなど忘るべき、錦を故郷に飾るを指折り待ち給へかし。離れてなほもいとしかるべしなど、勞はられしかば、さこそ〳〵涙は君のためならずと思ひて、溢るゝ雫とゞめ、さらば、今宵は共に語りて、盡きせぬ糸の契たゝむ、謁えし時こそ果てし契なる程に、否とよ、なほ君も我も少女なり。まだ來む秋に紅葉見む、またあふ冬に雪愛でむ、別れは逢ふの始めなりと昔人も言ひおけり。なむつがらせ玉ひそ、共に興せむ程に。と、松蟲の別れ歌など唱へぬ。あないとしや。君のゆかれし初めの程は、往き來ふ文も繁くて、人知れぬ袖の露を晃や角拂ひ、君の歸りし後は、晃せむ角せむなど行末を樂しみしに、こも只暫くにて、秋露のやう〳〵うすろぎもて來て、末には絶えて便りのなかりしかば、いたく麻の亂れを催しぬ。されば、止むなく其友に何がひしに、君ははや、野山の花紅葉を辿りぬと、雁の音信を空しき里に振りすてぬ。あな君は、吾が友は我を見限りぬ。如何なる惡魔の惑ひしか。あはれ、都の空は變りなく、この紅葉も四年はかはりなし、月も亦昔に變らまじ。秋は來とも君は來まさじ長へに契りし言の葉を君には忘れ玉ひしか、さらば、今よりは紅葉に思ひを語らなむ。あゝ語らむと紅葉見上げしに、誰しらぬ露はいたふ袂を浸ほし、頬のあたりはた〳〵とうつあり、月の雫か、紅葉の露か、うるめる空の涙なりけり。終に堪え兼て、門戸の小川の流れをうすき枕にひゞかして、内に眠りにつきぬ。

明くる朝起きて見れば、よべの契は紅葉も我を捨て、深き涙に地に落ちてけり。あゝ心なの時雨や。あな恨めしの紅葉や。

和歌

竹柏園主人　佐々木信綱先生撰評

（天　賞）

冬のうたの中に　名古屋正方寺町丶林方　伊東とよ子

にはとりの足あとみえてぬかるみの
　背戸のほし菜に夕日さすなり

評　田園の實景寫し得て宜し

（地　賞）

冬季雜題　山梨縣東山梨郡日下部村　神奈なみ子

たすけおろすせこが夕荷もましろなり
　入相近く雪ふり出てゝ

評　情趣共に備はれりといへど結句の調のあしきをもて天の撰にもれたり作者の考をまつ

（人　賞）

千鳥　名古屋市木挽町六　奥島ひて子

みそれふる港入江の船の灯に
　千とり鳴きよる夕まくれかな

秀逸（賞外）

◉千鳥　函館豐川病院　高橋きよ

松風に吹きよせられて住の江の
　昔のきしに千鳥なくなり

評　着想新らしくはあらねど

◉時雨　本郷天神町池田やま方　大塚きち子

柴つめる馬嘶けど主は見えず
　酒屋の門に時雨ふるなり

◉あられ　長門美禰郡於福村　草賀きくの

たび立ちしわが脊やいかに寒からむ
　そらかきくらしあられふりきぬ

◉冬季雜題　石川縣金澤市南町　森川敏子

きつねなく古城のすゝきかれはてゝ
　ゆふひなゝめに時雨ふるなり

◉凩　信州松本町東の丁　小岩井ちどり

凩の落葉ふき捲く冬の夜は
冴えたる星の影飛ばんとす

◉こがらし　和歌山市北田邊町　橘　な　み　子

少女子の藥買ふべく町に出づる
一里の道にこがらしの風

◉木枯風　信州柴村字田頭小林方　伊　藤　直　子

藥買に里迄出づる少女子の
道三里半こがらしの吹く

◉木　枯　下谷區南稲荷町　白　井　す　み　子

やむ子一人家にのこしてくすしかり
行く道一里木枯のかぜ

◉木　枯　松山市府中町　安　井　滿　世

三百里へたてし兄を夢に見て
さむればさびし木枯のおと

評　へたてし母をいふ方あはれまさるべし

◉凩　信州上水内郡柴村田頭　小　林　よ　し　子

凩のすさぶ枯野の夕まぐれ
酒買ひに行くは山がつの子か

◉冬季雜題　静岡市鷹匠町　三　浦　貞　子

病める子のねがほまもりて物思ふ
まどに音たてふる時雨かな

◉折にふれて　本郷湯島六丁目一〇　小　林　し　づ　か

海樓の風寒きこたひしのふかな
君をあはせし磯千とりの曲

◉冬のうたの中に　愛　知　安　福　鈴　子

刈り上げし唐黍畑の疲せ畑に
小鳥群れ立ちて風寒く吹く

◉冬季雜詠　赤坂區一ツ木一三、兒島方　長　野　き　ん　子

小春日に媼わた乾す椽ちから
枝もたはゝに柑子みのれり

◉仝　磐　城　内　山　ふ　さ　子

去年の冬いにし弟の日記みれば
雪いくさにぞ勝ちしとありけり

評　結句はいまたしけれと……………又二句うせし弟といふべし

◉仝　信濃栗内村一〇七、　竹　鼻　は　る　子

なつかしき父母おはすふるさとの

ゆきの山みる汽車のまど哉

◉冬　思　芝公園十四號の一三　吉野眞子

木がらしの風ふきすさぶ此よひに
かはりわらしな古郷の母

◉冬夜感　近江　よし子

たらちねも病までいますか都なる
われを思ひてこの寒き夜に

◉冬季雜詠　信濃　竹鼻ちとり

うき秋を何處のはてにおくるらむ
みる／＼たかく木の葉まひ上る

◉千　鳥　中村口波秀子

明方を千鳥なく音の寒きかな
月影淡き玄海のなだ

雪のうたの中　甲斐　小尾守秋子

うゑになくにを懐にすかしつゝ
ちゝ乞ひにゆく雪のよは哉

◉冬の朝　九十九里濱　とき子

枯芝に霜おく朝の風寒み
宿なし親子飢に泣くとも

◉樵路霜　河内　河崎ひつべ

柴人が通ふ山路のなだれ坂
しもにすべりしあとぞのこれる

佳　調

◉冬　川　武藏　保谷てい子
背柳の葉は散り失せて谷川の石かわらまて水かれにけり

◉冬　月　岐阜　加藤ゆみ枝
むら時雨晴ゆく空の雲見えて夕月白し今戸石濱

◉冬　月　岐阜　木村榮子
枯はてし尾花か袖に月さえて寒さはてなきむさし野の原

◉寒樹映水　奈良　鹽見繁子
木枯の風にしなれぬ山松の高き操をうつす池水

◉冬季雜詠　靜岡　三浦良子
みの笠も風にまかせ刈はくし門田のそほつ何かゝつらむ

◉幽居冬來　近江　よし子
わびしさに立ちいで野邊をながむ身にふく風さむく冬は來にけり

◉時　雨　廣島　井上睦世子
くれ渡る小野の篠原風さえて分け行袖にふるしくれ哉

◉冬夜讀書　泉州　勢津子
冬の夜の讀書もあきて外見ればいよゝふりそふ花の白ゆき

◉蘆　水　　　本所　宮内ちよ子
日のかけのうとき方よりてほりけりむらたつあしのところ〲に
◉山村雪　　　下谷　白井はま子
銃さきに兎さげて行くかり人も見えてしつけき雪の山里
◉冬　月　　　埼玉　武井睦子
人なまつみやいかならん辻車てらすも寒しふゆのよの月
◉冬　月　　　呉軍港　市川ふみ子
乳買の泣かれて通ゐ橋の上に置く霜白く月冴え渡る
◉落　葉　　　小石川　丸山しげ子
山かつも家路をさしていそぐなりもみぢちりしく岸邊づたひに
◉落　葉　　　駿河　新田よし子
一たびは錦と見えし紅葉も落ちてはおなじ塵さ見るらむ
◉谷　氷　　　甲斐　飯野朝代子
たに川のよとむともなき早瀬にも氷のむすにひまはありけり
◉衾　　　大阪　亀田さち子
たらちねのあつき恵の衾さへうすしと思ふ此の夜寒哉
◉歳暮述懐　　　備後　小川琴子
そらやすく暮る年こそめてたけれつもるよたひはさもあらはあれ
◉落　葉　　　駿河　鳳しやう
さよふけてきけは木葉のちる音をもらぬ時雨の音かとそきく
◉木　枯　　　廣島　岩崎よし子
乳兒を抱き夜さむをわぶる賤の女のつめたされやに木枯の吹く
◉冬の歌の中に　　　磐城　亀岡はる
納豆賣る少女のあまりあはれなれば皆買ひやりぬ霜寒き朝
◉落　葉　　　磐城　鎌田常子

高殿にしらぶる琴の音もやすみて月影寒く紅葉散るなり
◉冬夜雁聞て　　　仙臺　ふさ子
父母のゐますと云ふにあられども古郷戀し雁がねの聲に
◉天長節　　　岐阜　高森とし子
玉垣の黄菊しらぎく咲きみちてかや屋根つゝき御旗ひらめく
◉田舍初冬　　　なみ子
風さむく初霜志ろきこのあした刈穂の上に鳥とまれり
◉千　鳥　　　岐阜　森榮子
むら千鳥鳴く音も近きなには潟聲もまちかに汐やみつらん
◉霜の降りける朝　　　かれ女
冬枯の木々の梢もひと夜はにかすまぬ空の花ぞ咲きけり
◉霜　　　静岡　永山まつ子
月花はさもあらばれ白霜の清きを何にたとへてかみむ
◉初　霜　　　紀伊　川口ふみ子
露のまのいのちなりけり朝顔の枯にし枝に咲ける初霜
◉木　枯　　　新潟　吉田梅子
うらやみしとなりの紅葉ふきたてしわかあれ庭もにきしきにけり
◉時　雨　　　松江　星明文子
まなび舍に遊き小の子うちつれて歸らんとすれば時雨ふりきぬ
◉冬季雜題　　　横濱　柴谷たき子
ふくろふの聲ものすごき山里の落葉をてらす月のさむけき
◉田　殘雁　　　奈良　鹽見姫子
そらがれて霜の初花さくら田におくて來たる雁の一列
◉冬季雜詠　　　信濃　竹鼻はる子
かりてほす稻とりいれて新米の匂ひゆたかに秋は去にけり

◎落葉　磐城　宮崎春子
僧正か歌かき居れはくれなゐの衣の袖に散る紅葉哉

◎冬の中に　磐城　藤倉けさ子
國の爲め今宵はこゝに宿らはやアルタイ山の冬の夕暮

◎爐邊閑談　越後　大島しつ子
埋火に炭さしそへて諸共にまたるゝ花の品さためせむ

◎千鳥　靜岡　永島久子
はまりゆく船の烟におとろきてなみまの千鳥立ちさわくらん

◎朝霜　越後　倉石ふじ
ふる里の友のさむさもおもはれて親なつかしきけさの霜哉

◎山家梅　大坂　村田たれ子
ゐろり邊に梅が香焼きて外見ればこゝもかしこも白砂のはな

◎霜夜月　横濱　戸倉信子
やと毎の瓦もしろく霜みちて月かけさむくすみ渡りけり

◎冬季雜題　大坂　石原幸子
柿ちぎり木の子がりせし山里は木がらし寒く落葉みだるゝ

◎時雨　秋田　武田秋子
逝きし母を泣きつゝおくるほそ野みち時雨ふりきて袖ぬらしぬ

◎旅泊　近江　三井榮麻子
故郷の今宵のつきやいかならむ吹かぜさむく友千鳥なく

◎落葉滿池　本所　宮内榮子
蓮葉も水もか枯たる池水にあふるゝものは落葉なりけり

◎木枯　三重　龜井爲登子
いたづきになやみふす身の淋しきによもすがら吹くこがらしの風

◎雪中梅　松山　安井滿世子
同しこと雪に花さくえたなれとうくひすのなく梅にやあるらん

◎時雨　肥前　佐々木數子
さらぬだにさびしき冬の夕暮に木の葉まじりの時雨ふるなり

◎霰　三重　岸田はる子
ふゆ枯て訪ふ人もなき庭なるを何に玉しくあられなるらん

◎冬月　伊勢　曾江子
入相の鐘のひゞきも身にしみて鏡に似たる冬の夜の月

◎初時雨　本所　岡樺子
中々にさびしくなりぬ宵の間は月見しまとに初時雨ふる

◎冬季雜題　赤間關　梶岡まさ子
草も木もれふり果たる冬の夜に晴衣縫うとて針急きけり

◎冬季雜題　伊勢　四井春子
むら雀梅の林になきたえて夕日靜けき岡の邊の宿

◎落葉　東京　脇屋直子
うなゐこが山坂こえてあつめにし落葉の中に栗の三つ四つ

◎枯野の松　長野　堀内こま子
ゆけど〳〵はてしも見えぬ枯れし野に操なかへむ松のひと本

◎浦寒蘆　横濱　戸倉信子
なし鴨の枯あしの宿月さえて浦風さむく霜のはなさく

◎木枯　和泉　井上濟子
木枯のふきかたまけし梢にはさびしくのこる片われの月

◎冬季雜題　陸奥　羽生利子
足らぬ乳を心にしほる長月の子を守る夜中に在鹿の鳴く

◎冬眺望　陸前　平井岩子
桑畑のあらはになりてさと川のなかれもみゆる冬は來にけり

◉冬季雜題　山口　小林まさ
思ふどち幼な遊びの物かたり冬のながよも短かかりけり

◉嵐　芝　服部まつよ
學びやてゆくべき道と思はずは今朝のあらしはるゝからまし

◉冬季雜題　赤間關　熊谷ふさ子
我が身にもあらはとぞ思ふ雪の日に小犬とあそぶ少き弟

◉冬の夜に　神奈川　森田喜久子
天地もれふる霜夜の松原に乞食の父子よさむにそなく

◉山里冬夕　大坂　井上とみ子
山鳥れぐらたづれて飛ぶあたり木立寒むけく家二つ三つ

◉冬季雜題　下關　梶岡ひさ子
籬くちてかきは仆れて雪の下に操たかへぬ寒菊の花

◉時雨　大坂　秋萍女史
豆腐屋のぬれてゆくさまあはりなり九條通の夕のしぐれ

◉たび　岩手　金田一りう子
みの傘につもれる御雪うちはらひ行く先遠し暮の松原

◉失題　武藏　佐野いう女
草紙さげし元の子供母が刈る稻田のくろにいかで追ひ居る

◉旅中の雪　日向　紀藤榮子
今日も又雪降りにけり旅衣越路の里は問ふ人もなし

◉鹿　水戸　山方とし子
あり明の月もかたむくに山田のかなたの嶺に鹿ぞなくなる

◉冬夜　芝　金平榮子
父母と爐邊せきてふかしけりいつしか春のものがたりして

◉初時雨　岐阜　加藤ゆみ枝
うき雲の晴るゝひまさへなかなかに袖垣ぬらす初時雨哉

◉初時雨　陸中　加賀みれ子
村人に見送られつゝ門出せし吾は初旅初時雨降る松

◉池氷　和歌山　吉山あや子
このあさけ庭の池水こほりけり風にうごきし紅葉なうらに

◉冬季雜題　岐阜　高森ひさ子
獵犬のおし分けいりし征村に見出てゝ折れる寒ぎくの花

◉冬季雜題　陸奥　羽生利子
率土か濱花は都におよはぬな雪のみなとてふりまさるらん

◉千鳥　常陸　岡本とし
さ夜千鳥翅に霜やおきぬらん聲も凍りて憐れにぞ鳴く

◉雪朝　埼玉　林靜志子
白妙の雪のつゝみし大野原只一すぢの川のうれれる

◉冬の歌の中に　芝　椎野[illegible]子
あとけなく網もかむらすうなゐるか吹雪そともに遊戯つくれり

◉殘菊　芝　吉水たか子
もみぢ葉のちりしく庭に菊の花霜かと見えて咲のこりけり

◉霰　相摸　大谷津峯子
山風の音さえさへて、おくつきのむなしきこけに霰たばしる

◉冬月　三重　龜井いと子
枯殘る尾花がもとの辻堂に凄くもさゆる冬の夜の月

◉海邊冬　播磨　中村益子
磯山の松ふく風にさえくれてつきの出しほの色そこほれる

◉木枯　東京　龍崎せん
霜白し都大路も音絶えて楯をならす木枯のこゑ

◉霜夜虫　千葉　寺本うめ子
虫のねは今宵にたえぬそのむしのなみたの露は霜とおくらん

◉冬の夜　英　春
たへちれのあつき衾みに冬の夜のよさむも知らすふすまかされて

◉冬季雜詠　信濃　竹内ちとり
奥都城に手向けん冬ははなもみし榛のさえだゆきのまゝなる

◉雪中松　埼玉　林　つれ子
老い松のかたきみさを其色は雪ふりつめど變らざりけり

◉冬季雜題　下野　波多野ふん子
時雨つゝ風に木の葉のちる宿はよる波よりも驚られさりけり

◉野邊の秋月　神奈川　田嶋すみれ
白露は月なむすびし秋の野は吹きしく風に玉ぞちりけり

◉木枯　靜岡　鵙機花子
夜もすから音もの凄き木枯に心解けてもねられざりけり

◉落葉　備前　富田登茂
おとづるし嵐にもろく誘はれて木の葉散しく頃となり鬼

◉冬季雜題　栃木　佐藤よし子
霜むすふあかつき空にはれつるへくみはつらひて月を見る哉

◉磯千鳥　備後　岡崎擇子
沖つなみよせてはかへすあらいそに夕くれさむくちとりなく哉

◉舟上霜　近江　中井しきな
艪やりて浦わに宿るつり舟のとまの上しろく霜ぞおきける

◉海邊冬月　岐阜　とも子
うら濱の水と靜しかなる住の江の松にさえたる月を見る哉

◉古關時雨　ふえう
あれはてし不破のせきやの板びさししくれのみえてもりまざるらん

◉冬月　久留米　飯田しげ子
吹き送る嵐の木の葉散りはてし梢に氷る冬の夜の月

◉木枯　長崎　寺井ちく子
今年より片山里のわび住居心してふけ木枯の風

◉冬野草　相模　松本やす
日路遠き枯野のすゑに見ゆるなり單やとりのかゝり火のかけ

◉冬季雜題　栃木　前澤幸子
ぬは玉のくろ髮山に雪ふれは心にかゝるふるさとの空

◉冬月　芝　齋藤はつ子
水鳥の聲もさかから凍る夜に光りみにしむ月のかげ哉

◉千鳥　芝　吉水たか子
くだけては玉とちりぬる波の上をむれつゝあそぶ濱千鳥かな

◉冬月　山口　松田きくの
そゝり立つ露居のみねの松か枝に風なかてろ冬の夜の月

◉木枯　肥前　吉田みれ子
猪はいづくの山にひろむらん大地も裂くる木枯の風

◉雨英　愛知　吉田靖枝女
ふきあれし松のあらしそおとかへてきくさへさむくみそれふるらん

◉庭寒草　麻布　馬場邦子
木枯に軒端をはらふ荻の音はあきよりもけにあはれなりけり

◉殘菊　下谷　たじらひ女
冬もなほのこりてにほふ白菊の霜夜の月に色ぞまされる

◉捨小船　神田　賤國家靜子
風寒き芦間に殘ス捨小船波間の鳥や夢結ぶらん

◉殘　菊　下谷　たじらひ女
霜がれの庭の白菊くれなゐに色そめかへてのころあはれさ
◉冬　犬　赤坂　河田とし子
ふる雪にとひくるひとのありそとはかともろ犬のこゑにそこしれ
◉冬山寺　春　洋　子
ふゞきちる夕なよそにこもいつゝ木魚しづけき冬の山寺
◉風　芝　兒々木雪子
歸りきてありし我家のあと訪へはかとかけやき風の鳳
◉千　鳥　周防　小松よし子
風さわぐ夕汐たかくはま松の音にあらはれて鳴く千鳥哉
◉冬　月　山口　三堀ゆき子
白露の光りも今は置かへて枯野の霜に冴ゆる月影
◉落　葉　備前　岩藤みよ子
村がらすれぐら爭ふこゑたちて入日のそらにちる落ばかな
◉冬　獸　茨城　大橋末子
日はへりぬ雪はふりきぬ山の奥にさむさなわびてきつれなくなり
◉湖上千鳥　豐島とも子
ひら山の峯よりおろす風には浪も千鳥も立さわくなり
◉深夜鳥　豐島　加賀美はるの
れやの戸な松風さむくおとつれて落葉はかげにこほろきのなく
◉曉千鳥　千葉　寺本うめ子
葛飾のまゝの入江の冬の夜のかぜなわびしみ千鳥鳴くなり
◉冬季雜題　鶴木　秋野つゆ子
雪ならば空にあつめて貯よまむ霙さじりにふるしぐれかな
◉山家冬朝　信州　山本たゞ子
水仙にさす日な浴びて鶴の姿るあしたの寒くもある哉
◉山家初冬　信州　小林琴子
柿の實の熟る頃　名もしらぬ小鳥鳴く夕べ霜ふりそめぬ
◉冬の歌の中に　信州　小林つれじ子
夜更に亡き弟な偲ふかなけさうなゐらと雪いくさして
◉風　信州　小林きむ子
銀の遥映すごき深山べにこがらし吹きぬ月爽ぅして
◉露　白　菊
なしどりのなくれあはれにきこゆなりかげはす羽がひに霜やおきけん
◉海邊述懐　盛岡　渡邊白雪
波の音鳥のなくねも都よりおとつれなりと思ふけふかな
◉落葉深　信州　梅　魂
もろくちる木々の落葉にうつもれてなれにし路にまよふころかな
◉霜夜閑鐘　金澤　桑田愛子
霜のうへなつたひてやくるかたしきの枕にひゞくあかつきのかね
◉殘　菊　越後　野口ちよ子
もゝ千草枯れふす野邊にたゞひとり霜なしのひて匂ふ白菊
◉庭寒草　麻布　馬場邦子
色かへぬときはの松なよすかにて冬なよそなる庭のつはぶき
◉浦千鳥　神戸　水越秀子
すまの浦や汐みちくらし小夜ふけて松原かくれ千鳥なくなり
◉鹿　伊勢　奥村ちか子
妻よびてよびのあぐみにさなしかは傾く月の峯に立ちたり
◉初時雨　遠州　泉　靜子
山松の姿も秋の名殘てし梢にかゝる初時雨かな

◉初時雨　埼玉　林つれ子
亡母のみ墓のあたりあれはてゝ木葉まじりにふる時雨哉
◉鹿　本郷　青木龍子
さらぬだにさびしきものを男鹿なく初せの山のあきの夕ぐれ
◉鹿　本郷　石井貞子
よもすから妻とびわびてあけ方の月にうらむるさをしかのこゑ
◉鹿　武蔵　酷井貞子
外山ふくあらし身にしむあかつきにつまとふ鹿の聲あはれなり
◉初時雨　大阪　岡あき子
ともすれは夕日かぎらふ海原に一とむらかゝる初時雨哉
◉時雨　大阪　三宅牧子
紅葉ちらす時雨のはれ〳〵野邊ゆけばわが家のかたに虹はかゝれり
◉初時雨　河内　大矢多鶴子
はつしくれ今そふりいつる水鳥のともくるひするおきの波間に
◉鹿　武蔵　保谷てい子
獵人のよぶ笛の音に誘はれて鳴出る鹿のあはれなる哉
◉初時雨　埼玉　岡本しづ子
なき夫の寫眞屆きしこの夕まつ訪るゝ初時雨かな
◉鹿　大阪　岡あき子
ねる夜おちす旅なる背子を忍ぶ身に哀れも添へと鹿やなくらん
◉田家秋景　埼玉　多賀清子
昨日今日稲葉に秋の色見えて鳴子の音そいやまさりゆく
◉初冬　神奈川　村田ゆか子
四方の山木々の梢はちりはてゝあらしにまよふ松の翠かな
◉擣衣　麹町　落葉
たえ〳〵にきぬたの音そきこゆなる外山の里も夜寒なるらん
◉冬季雑題　静岡　松井澤子
木枯のゆきをさそひてはら〳〵と小笹の上にあられ降るなる
◉千鳥　廣島　井手國世子
舟人は冬の長夜もちとりなく波路のゆめや短かゝるらん
◉冬季雑題　下野　神山ふみゑ
霜しろき奥津城あたりさまよいてわが世の冬をあつめてそ見る
◉折にふれて　芝　津田琴子
梨咲める宿のはるしのいきまきて子等遊けまどふ夕暮のかど
◉初雪　和歌山　橋波子
今更に小松植ゑぬをかこちけり日影まつ間の雪のふりしに
◉松契千年　但馬　渡田文子
幾千世か契りおきけんいつ見ても松のみどりの色はかはらす
◉剃師におくる　本郷　石井貞子
くろかみはたけをこえてもふりわけしそのいにしへのしのばるゝかな
◉枯草　牛込　しちゆき
僧は居すや鐘つき堂は荒れにあれて道うづめたる枯尾花かな
◉冬季雑題　埼玉　林つれ子
兄君は瘦て來しきゞす作りけりわらわは川にれぎみ洗ひて
◉落葉を見て人生を思ふ　茨城　葉末露子
落葉をばなにはかなしとかこつらむ人のさだめの定めなきよに
◉冬季雑題　埼玉　林つれ子
霜の夜を庭井のつるべなりやまて枯野を渡る犬の遠ぼえ
◉磯千鳥　河内　大矢多鶴子
こよろぎのいその松風おとたえてあけたつ波にちとりなくなり

◎冬季雜題　仙台　吉田松子

冬はきぬ暮にし秋の名殘さへ園の木の葉空に時雨て

◎磯千鳥　茨城　渡辺とみ子

うしほあみし人は歸りて大磯のいそふく風に千鳥なくなり

◎山家の冬　長門　齋藤久米子

積む雪にかけひの水の音を絶えて月かげすごくきつれなくなり

◎冬　獸　友村穎子

日あたりの椽にねふりし猫の子の霜夜の戀に何くるふらん

◎冬　色　仝　人

大空は一つ色なるふゆきのうちをれくらにいそくむら鳥かな

◎冬　旅　南筑　遊歌里

なか〱に寒き旅路はいそがれておもひしよりも遠く來にけり

◎冬　月　紀伊　松原せい子

その昔みなけありきてふ古池の小波靜かに月澄みわたる

◎冬季雜詠　石川　永山豐子

ちぎりおきし友まちわびてまとの外をながめてをればみぞれふりきぬ

◎冬季雜詠　石川　永矢敏子

やら草のかれふすにはにひと本のもみぢはあきを殘したりけり

◎山家初冬　愛知　角田ともゑ

椎の葉乃おちてぞ冬は知られけりうき世にとほき山家住居は

◎小　春　すみ子

日あたりのさうじに蠅の豆皷うつものどけき神無月かな

◎時　雨　南筑　三毛野生

冬かれし野邊の墓原小夜ふけて狐火すごく時雨ふるなり

◎新嘗祭　越後　高野靜枝

大君の初穗手向て秋津神祭らせたまふ今日の嬉しさ

◎霜　南筑　遊歌里

月かけに杉の葉白く霜みえて鳥居のおくに狐なくなり

◎冬の歌の中に　下總　飯田きく女

栗賣りて歸る少女の一群が急ぐ野路にあられたばしる

◎冬季雜題　香川　ふよう女史

去年の秋逝きにし妹がかたみにとうゑし白菊花さきにけり

◎落　葉　南筑　遊歌里

柿もみぢ折〱おつる音すなり一葉拾ひて歌やかきてん

◎早　梅　むち子

我やどの梅のはつ花咲にけ利ひとつふたつとかぞふはかりに

◎　てうし　すゞきはる

谿奥の枯葉をりたく柴の戸を今日もおとづる白雪の花

◎初　冬　鈴木春蹊

谷合の紅葉の秋も暮るゝなりおく霜白ろき冬の朝に

◎冬季雜題　みちのく　しげ子

夜をさむみ排をふのぶも只ふばしなきさ忘れしうつゝなりけり

◎田舍初冬　岩城　千佐子

ふと見ればかどの小川のうす氷いつかことしも冬は來にけり

◎冬の夜　仝　人

なにとなく戀しくうかぶ冬の夜のうたゝねさむき木枯の風

◎さゝ啼　名古屋　林よれ子

霜どけになやむ小藪の垣根みちおもはぬ方にさゝ啼をきく

◎百舌鳥　名古屋　小塚とめ子

刈りのこすうら山畑の黍の穗にゆふ日うすれてもすぞなくなる

新體詩

天賞

深山の溪流

下野宇都宮清住町八〇、槇塚方　青木ふぢ

ほそき調を谷あひの、　靜けき空に殘しつゝ、
流れ〳〵て幾かへり、　巖にむせび岸に泣く。
ふかき思ひに溢れては、　早瀬とくだけ瀧とおち、
遠きのぞみと流れては、　林にまよひ野べに呼ぶ。
春はさくらの花をうけ、　秋は紅葉の色うつす、
とはの調をうたひゆく、　谷のながれを掬ひみよ。
そこに盡きせぬ憂あり、　そこに乾かぬ涙あり、
しづかに聞かば永劫の、　神のみこえも宿るらむ。
朝ふる雨は音もほそく、　夜半ふく風は波さわぐ、
おゝ奥山の旦暮に、　誰かきくらむ水の聲。

評　げに大海の壯美を歎美して措かざる情の人に、聞かせまほしきは奥山の水の聲ぞかし（蝶二）

地賞

おもかげ

名古屋市皆戸町車町東北角千代倉屋方　林よね子

夢とも云はじ朝夕に、　まどふまぼろし俤の、
かよふや胸の琴の緒に、　猶うつゝなき身をまどふ、
幽かに白き天つ日の、　今沈みゆく海のごと、
はてなく遠き浪の上の、　淋き光を慕ふかな、
戀の懊惱を例ふれば、　げに和田津海の眞珠狩、
千尋八千尋八千尋の、　なほも深きて身をまどふ
まどふにやすき人の世の、　かの美酒に醉ひしれて、
うたふはそれよ「人の世も、　醉えば忘るゝ憂き運命。」
天の火柱くづれてし、　昏き水の面に漂ひて、

行衛に迷ふさゝ舟の、　遠き光を慕ふこと、
燃えてぞさとる人の世の、　戀ははかなきさゝめごと、
たゞ俤を慕ふこそ、　つらきがなかの慰藉なれ、
今太虛を射る虹の輪の、　奇しき技藝は仰ぐとも、
消ゆるにやすき幻影の、　さむるにつらき夢ならん、
夕暮ひとりわら磯の、　磯の眞砂路さまよひて、
はてなく遠き浪の上に、　奇しき運命をまどふかな、

評　沈痛の調を以て、常に人間の運命を歌ふ、君が詩才はわが深く感服する所なれども、着想いつも同一にて、單調の嫌ひあるを惜む　（蝶二）

入賞

落花流水

信州松本町東の丁　小岩井愛子

深山の奥ゆ流れ出で、　末は悲しき荒海と、
知らでや急ぐ谷川の、　汀に咲けり百合の花。

清くま白き花びらに、　宿れる露も汚れなし、
物思ひげにうなだれて、　下行く水に問へるやう。

さばかり急ぎ流れ行く、　君が行へは何處ぞや、
しばしは此處に止まりて、　わが花かげに憩はずや。

水は答へぬ今更に、　君行末を問ふなかれ、
行へは何處わかねども、　神や導きたまふらん。

こゝに憩ひて汚れなき、　君が優しき姿をば、
寫さまほしく思へども、　流れ行く身よ如何せん。

えにしの糸の絶えざらば、　またも淸水と湧出でゝ、
思ひくだくる谷川に、　君が姿をうつさなん。

われは悲しき谷水の、　止まるべくもあらぬ身よ、
さらば別れん百合の君、　さきくいませへ長しへに。

いと淋しげにうなづきて、　再び百合は語るやう、
君つれなくも行ますか、　まづ聞きたまへわが願。

君行きまさばまた誰と、　深山の奥に語るべき、
人に知られで谷かげに、　たゞ空しくや萎れなん。
清きにほこる花の色、　かりの契は淺くとも、
影はうつれる谷川に、　深き情のなくてやは。
君に別れてたゞひとり、　あとに殘りて徒らに、
愁の終り見んよりは、　ともに行かまし末長く。
ねがふは君が情には、　我を浮べてとことはに、
流れたまへと白百合は、　行く水の上に散りにけり。
影をうつしゝ谷水は、　しづかに花を浮べつゝ、
もとのまゝなる囁きに、　行へも知らず流れ行く。

評　落花すでに情あり、流水豈意なからむや。切なる細みもだしがたくて、しづかに花を浮べ行く水の流れに末やいかに（蝶二）

入賞

比翼曲

長野縣上水内郡榮村小林翼軍方　小林柳烟女史

夫
伏屋の軒のこがらしに、　霜夜の鐘は寒けれど、
添寢やさしきわが妻の、　情に醉へば春なれや。

婦
辛しと斗りかこちける、　昨日は夢か世の中の、
幸の限りを運び來し、　君が惠ぞ大いなる。

夫
おんみの細くやわらかき、　腕はよわくみゆれ共、
わが世に出でゝなす業を、　支ふる杖の力あり。

婦
君に知られしきのふより、　我身を任す君が宿、
きみが情の露をたゞ、　花の命のわが身なり。

夫
うき世のつらき仇浪に、　我も打たれて倦にしが、
卿が優しき眼ざしに、　今新しき勇みあり。

婦
愛を一つ、宮として、　そこに二人が契りたる、
心に同じさゝげもの、　碎けむとてももろ共に。

夫
あゝわれ今日の幸に居て、　浮世をひろく見渡せば、
たゞ樂園のこゝちして、　わがものならぬ物もなく。

婦

未來遥かにかけめぐる、　希望の星の影きよく、
手にもとるべく輝きて、　妹脊が中に落ちんとす。

評　夫婦の愛情溢るゝが如し、このやさしき歌をよまむもの、誰れか希望の光はゝとめざるべき（蝶二）

秀逸

臨終の笑

本郷天神町一ノ五
○池田やま様方　大塚さち子

やせさらぼへる容顔（かんばせ）に、　かすけき光うかべつゝ、
言葉はなくてひそやかに、　ゑまひて君はゆきましぬ。
長きこの世の夢さめて、　心のなやみにたゆりばか、
天つみ國に近づきて、　つみの絆の解くればか。
まだうら若き青春の、　希望の血しほわくものを、
歡樂のいづみ汲みもせで、　闇にきえゆく君が身や。
神の迦のにじのはし、　ゆふべの空に懸れども、
かよわき君を唯一人、　渡すはいとも悲しきに。
君がゑまひの消えしとき、　君がまなこのとぢしとき、
この世に遺きみすがたの、　たふとかりしも涙かな。
たとへばゆるき浪の上に、　しばし入日の匂ふごと、
しばし落花の浮ぶごと、　臨終の笑のはかなさよ」。

秀逸

客窓苦吟

千葉縣長生郡關村
尚德高等小學生徒　露崎時

かへらなむかなたらちねの、
　まちてゐませる故郷に、
　　かへらなむかなわが友の、
　　　ゑみて迦ふる故さとに。
逢ふて別るゝことなくば、
　たえて愁はなきものを、
　　別るゝときのこともへば、
　　　われは歸るにためらひつ。

嗚呼水行く、夜更くるも、
たくみは朽ちず空のほし、
くるしむちりの人の世を、
慰むる汝のなつかしや。

佳調

蓮に寄す

信州　琴舎女史

日ごろかたみに語れたる、　いとしの君は我がもとに、
しげき人目の關こえて、　蓮の鉢を贈られぬ。
花まだ咲かぬそのはちを、　机の上にのぼしつゝ、
あさゆふ愛づる我が心、　ひとり知るらん彼の君よ。
花の蕾はあたゝかき、　春の情は絆されて、
色うるはしく香も清く、　咲き粧ひけり昨日今日。
今日やきのふのわが心、　迷ひの霧のいとふかく、
愛でし花を今更に、　君が面とし偲ばれて。
袖は涙にしぐるれど、　人のかげぞやましくて、
夢より外に逢ふとの　わゝなりがたき我身かな。
さもあらばあれやよ蓮、　君が情ひをこめられし、
花にしあらばとこしへに、　色もうつらでかほれかし。
汝れが姿をかの君の、　やさしき顔にたぐひつゝ、
えだえぬ胸を慰めて、　晴れて添ふ間を忍びなむ。

心の雲

武藏　吉田清子

母に抱れしみとり子の　いま何ことを思ふらむ
乳房探りつ手をふりつ　うすくれなゐの顔色に
溢るゝ笑をもらしつゝ　いつ悟りけむかた言に
廻らぬ舌をうごかして　聲たからかに歌ふなる
いつしか年の廻り來て　早まなびやのゆき通ひ
ふたり三人の友とちと　紫つゝみ手にかゝへ
物の道理もわきまへて　今ぞ我が身のゆく末を
思ひ煩らふよもすから　笑にし頬はかげうせて
心の霧のはれやらで　小雨そぼふる夕ぐれに
折り戸の下に人知れす　胸をいたむる果なさよ
ちりの巷のかぜあらみ　神よりうけしま心も
うすらぎ行きて末遂に　けがれ行くこそ哀なれ

天長節

熊本　むらさき

みそらに紫雲靉きて

集ふ白衣の天人の
奏づ妙なる天樂に
合せぞ謡ふ民草も。

漁る海人も凪柴とる
深山　奥の杣人も
老も若きも酒酌みて
祝ひぞ謡ふ君が御代。

曇りがちなる冬の日の
日影も今日はうらゝかに
吹く風さへも暖かく
立てる國旗ぞ翻る。

夏猶ほ寒き石狩の
川の流れも冬寒き
新高山も榮え行く
君の御稜威を歌ふらむ。

湧く歡聲のその中に
調も高くオーガンの
今日の尊き祝ひ日を
歡び謡ふその歌に
「君が代は千代に八千代にさゞれ石の
巖となりて苔のむすまで」る

しらつゆの歌

信州　小林芳子

たのしからずや白露の、
あゝ天高く氣は清く、
黄金の波は世に溢る。
うれしからずや白露の、
蟲は天地の秘を語り、
嫦娥は清く世を照らす。
あはれゆかしの白露を、
浮世の塵を洗ふべく、
つきせぬ恵み添ふらむに。

野邊よりのべを飾るとき、
肥馬はゆたけき野に眠り、
のべより野邊にみつる時、
草は美妙の衣を織り、
誰しと誰か歌ひけむ、
天津神よりくだされて、

病床吟

下總　飯田さく女

今宵もあるゝ木枯に、
枕邊ちかきこほろぎの、
闇の灯火消えがてに、

重き枕をもたげつゝ、
思ひやるさへ得堪えぬに、
やつれ果たるおも見れば、

とてもはかなき運命を、
杖柱とも頼みたる、

すきもる月の影すごく、
鳴く音も哀れ弱りつゝ、
夜も早いたく更けぬらし。

辛うすかりし身のはてを、
みとり給はる母ぞみの、
泣かじとすれどつらき哉。

おひこし身をば嘆かれど、
一人の子をば先立てゝ、

罪に殘らむたらちれの、　君の心やいかならん。
あゝそれのみか我とても、　さすがに惜しき命ぞや、
幾世かへじとちかひたる、　我背の君のこむ春は、
學びの業をなしとげて、　歸りまさむときく君を。

情こもれるたまづさを、　せめてうれしきかたみにて、
われや戀なくちりはてん、　殘る思ひはたらちれと、
玉の都のまなびやに、　いそしむ君が夜半の夢路に。

月夜

山口小松よし子

音を忍ぶわが身こそ　夢はづかしき思かな
忘るとすれぱまぼろしに　人のおもかげ身にそひて
紫苑の花ぞ咲き匂ふ　月靜かなる秋の夜半
思ひ出すもはづかしき　心を君にあかしがた
つゝむにあまるわが胸を　君もいとゞなつかしみ
ふみと迷ふやとろ／＼に　ふかき戀路に亂れつゝ
露ぞふかき春のくれ　こぼるゝ花のおぼろ夜に
君と手をとりたどりつゝ　仰げば冴ゆる二つ星
空よりおろす鐘の音　ふけゆく夜をば靜かで
うれしとおもふ花衣　夢にも似たるこの夜哉
君の妙なる笛の音に　しらべ合すや琴箏の
音色に通ふ松風も　冴えて清けき月の前
朝な夕なの片時も　忘るゝ折はなきものを
うつろひやす　花衣　ふりすてられし恨かな
情けにもろきわが涙　つれなき人の水莖を

なきてながむるわが胸を
　君はいかにかおぼすらん

月みる毎にすぎし世の
　契りし人の忍ばれて
かたみに殘るおも影ぞ
　今更つらきおもひ草

おとづれきかぬ君はりも
　いづくにありてすみ淚る
今宵の月の光りなば
　見てやおはする今はりも

うつしゑ

堀口寶相寺はつね子

罪なきなれのまなざしに、
おほふれたみのうらめしき、
消えいましのおもかけに、
　かゝるうれひのつらかりき。

千代もといのる汝かために、
親はおこともなりぬるを、
　やさしき汝はふくかぜに、
　あはれ木の葉とちりにしよ。

形見にせよとひとひらの、
このうつしゑに長きよの、
　わきぬ佗びしき思ひ出に、
　　いましをうつゝおかさるに。

天よりきつるなれなれは、
あめに歸るは惜しまれと、
　うき世は塵のふかゝとて、
　　このはゝひとり淋しきに。

月の夜のころなひさのへに、
添乳のゆめはむすびしを、
　花のあしたなうくひすの、
　なく音に汝はゑみけるを。

とかき汝のくちびるの、
あかさみれたむ覧の神に、
　もみぢのことき手も冷えて、
　うらみのちしほわきたつよ。

おちゆくゆう日なかめては、
失意のくもにちからなき、
　ゆふへの鐘をなれやさく、
　淋しき友はこゝにあり。

くらくなりゆくとも火に、
心のやみもしくれつゝ、
汝かうつしゑをいたきては、
涙にぬるゝ袖おもき。

雪のあした

下總　郡司文子

うるはしきかな清きかな、
　まろがれの衣たまのはだ、
みどりの髮の空たかく、
　ゑむや、朝日にいや匂ふ。
天地死にしその中に、
　一縷のけぶり昇るなり、
息か通へる野に山に、
　春や潜めるうもれ木に、
たかどのゝ中酒汲みて、
　唄ふか、こゑのすみ渡る。
物賣る少女あないぢらし、
　泣くか、血に跡染めて行く。
うるはしき姫ゑむは何、
　やがて時へて日昇らば、
おのがなみだに身を隱し、
　骨あらはれてさらばほへむ。

うま人唄ふふしやなに、
　あしたの眺め時の間ぞ、
めぐる火車來むゆふべ、
　灰と變らん名とたなち。
物賣る乙女泣くはなに、
　燃ゆる血しほの溢れゝば、
やがて來らん春の野邊、
　そこに汝のはなは咲く。
うゑにや鳴かむたび烏、
　凍えやすらむかたゐの兒。
見渡す限り物ぞなき、
　悲歎聞ゆなりほの〲と。

失題

伊勢　西井善子

貧しき家に生るとも、
ゆめな歎きぞ人の子よ、
富みたる家に生るとも、
ゆめなほこりぞ人の子よ。
見ずやみ空に輝ける、
かの清らけき月影は、
賤が伏屋も高殿も、
同じ光に照せるを。

星と人

大塚楠緒子

彼方と指をさすに似て、み空つむざく杉の上、
夜毎に雲の窓明けて、下界をのぞく星ひとつ、

星はひとつの星ながら、影はひとつの影ならず、
影はひとつの影ならず、曇りて欲まず光将た、

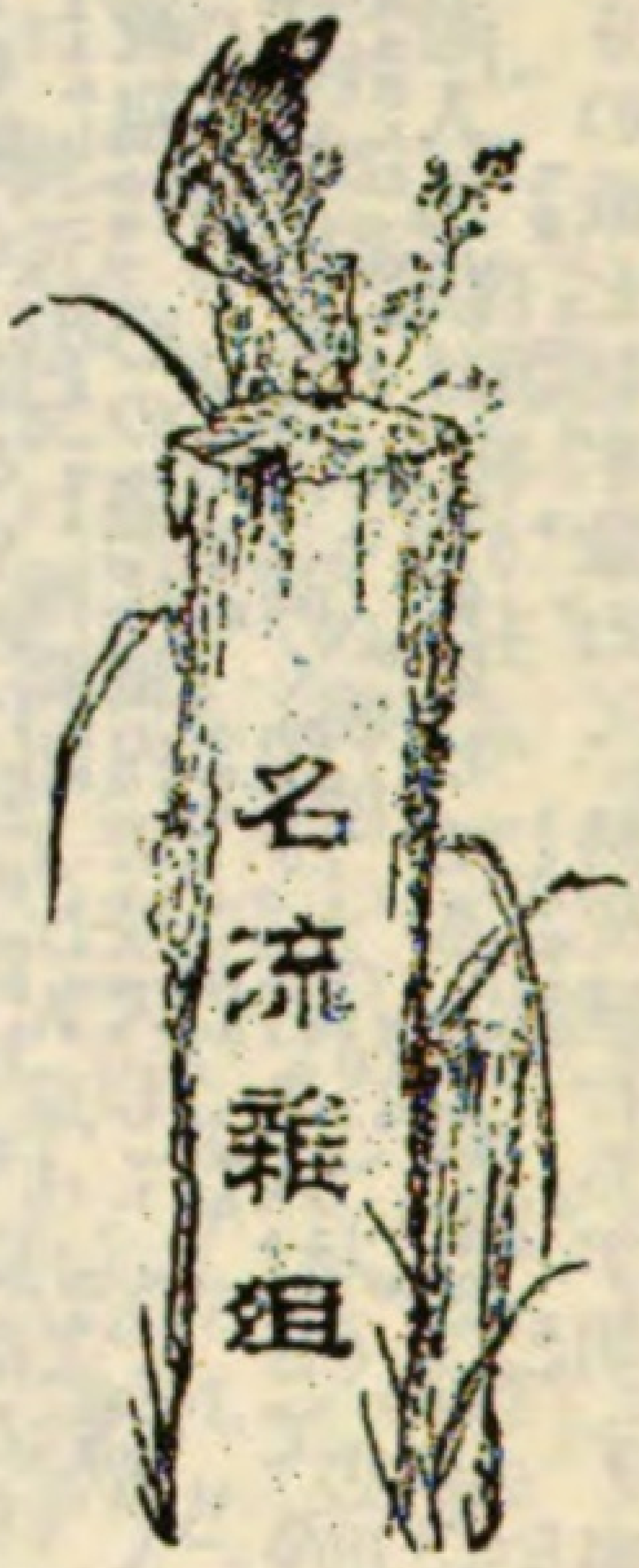
すぎし世語りかたり出で、親しみ深き宵あれば、
未來遙にうらなふや、悲み多き夜半もあり、

のぞみの的とかゞやきて、励みの翠を下す時、
なげきの羈絆それとなり、憂の息を落す時、

ほゝゑむとみし面影の、たちまち病める姿とも、
天の園生の花かとも、鬼の嘲のまなこことも、

時にとゞろく我胸は、歡喜の泓を起す夜も、
とみにつめたく我頰を、こほる泪に濡す夜も、

快樂懊惱それいづち、汝にありやわれにありや、
杉の古木の上と下、天に在る星と地に居る人、



名流雜俎

上川の風雪

下田歌子

余この度、北海道巡回の節、上川郡鷹の巣村なる、第七師團の營舍中に立てられたる、小學校に聘せられて、參りし時、士官達の、去冬嚴寒の折、各將校の家族方が、困難されたる狀況を聽きて、頗る同情を寄せたりき。抑々。我が日本の版圖廣くなりて、臺灣の如き熱地に住し、又、北海の如き寒國に移り住む人の、殊に、天皇の勅を畏こみて、茲に此家屋に住ふ者此の兵營に職を奉せらるゝ方々の困難を極められたる狀況を聞きては、輦轂の下、溫暖の地なる、東京に住する吾等の幸福を又今更の如く思ひ、顧みて更らに吾等が、職責を盡さゞる可からずとの感の益々深く成を覺えき。北海道は此の度び、第七師團の設け出來て、去年の十月中に、兵營及び、官舍も落成し、十一月の始めには、內地より移り住まれたる人及び、札幌なる月寒府兵營に居らるゝ方々も、皆引纏めて移轉さるゝ筈なりし由なるが、去冬の寒さは、殆ど北海道の開け始めたりしより此方、多く逢はざる所の嚴寒のよしにて、豫期されたる官舍の建築は、如何に工事を急ぐとも、捗取らず、十月中旬迄にと期したるものが、十一月中旬に至りても、落成せざるが故に、左らでだに家屋勘なき北海道に、何時迄も內地より移り住みたる人の假住ひせらるべきにもあらねば、不完全なる官舍に寒氣を冒して、移轉せらるゝことゝなり。十一月の下旬より十二月の初旬に懸けて、將校の家族は、同所に引移られたり、此方々の住居は、師團建築の前迄は、熊と愛奴の住所にして、鬱蒼たる深林が、曠漠たる原野の中に、此處、彼處に在るのみにて、更らに人煙絶えたる所なりしを假かに、切り開きて造りたる道は、猶ほ未だ完からず。旭川の市街に通ずる事

一里餘、（旭川の市街も去ぬる二十六年に、師團を、愈茲に建てらるゝ事と、決定りたる時、始めて市街地と定められたるにて、家屋も未だ充分完からざる有様なり）て此原野に、新らたに通じたる道は、霜柱深く立ちて其上に白雪深く積みたる、固まらぬ道は、踏む脚は沒して霜氷は殆ど股の上に達する其中を、中少尉の家族の、札幌より移轉されたる日は、恰かも吹雪烈しくなりて、日沒に至れ共、官舍に達せざる人さへありしかば、遂ひに兵士を派して、其所在を探ぐる事となり、或人は風雪の中に立ち竦みて、殆ど感覺を失ひたるもありしを、辛うじて兵士の肩に引き掛けて運び來るもあり。さて、移住する所の官舍は、如何にと云ふに、連日の積雪と、寒冷とにて、工事甚だ捗取らぬ故に、或るものは戸障子も無く、或るものは壁の設けも完全ならず、吹き荒ふ夜嵐は、心の儘に室內に侵入して、送らるゝ吹雪は、臥床の傍らに埋つ高く積り。若き人はさても有りなむ。老人小供は、火を置けども、煖爐を置けども、更らに寒さの敵を防ぎ兼ねて、終夜睡むらず明す事もあれば、年若き兒、年若き嫁は、老人の肌を暖たゝめて、幼兒を懐ろに抱きて、夜の明るを待ち詫ぶるの有様なり。然るに左らでだに人口寂寥として、人の手間賃高く、全道の中、殊に最も寒冷なる、此兵營には、誰れとて來り事へんと云ふ、下女下男も無く、尉官以下の將校家族に至りては、み雪降る、冬三月、一人の下婢も無く、豆腐一挺求め、大根を一本買うにも、此氷雪を踏みて、一里餘の市街に出でざるを得ず。或時は、米を炊ぐとて、馴れぬ寒さに凍瘡を感じ、或時は、衣を洗ふとて、烈しき風に濡れたる衣は吹き氷らされて恰も昆布を立てたる如くなり、如何んともする事能はずして、之を縮り上んとする手は氷の小片に切られて鮮血淋漓たる、見るも最とあはれなる有様は、恰も、敵國の野營に冬を向へたるが如くなりきと。而うして、此四月の始め漸う〳〵雪融の頃になり、或る一人の大尉の一人息は、腦膜炎のために、遂ひに、不歸の客と成りぬ。さて、溶け初むる、雪を分けて之れを葬らんとするに、未だ共同地の設けも無く、況や、寺院墓所等のあるべき筈無ければ、先づ、そ

ある岡を未來の共同墓地と定め、愛兒の尸を玆に葬らんとせしに、月頃移り住みて、近傍に居る農夫の來りて、忠告する樣は、方々の御越しありしより、晝間こそは荒熊の出てゝ人を害する事も無くなりたれど、夜に入りては、此近傍には猶徘徊して人氣あれば必ず、之れを屠り食はんとす。亡き骸ながら葬り給はゞ必ず熊の爲めに取り去られ給はんと云ふ。さらば之れを火葬せんとて、小さき櫃に石油をそゝぎて、僅かに一片の荼毘の煙りとなし、白骨を埋めて去りたる時、子を失なへる若き夫人は泣く音を忍びて人に語られけるやう、一人兒の病ひせるうち、欲しと望みし玩具一つ、食べたしと云ひし食物一品だに、斯かる不便なる土地にては、與ふる事も能はずして、遂ひに亡き人の數に入れたるを、今また、夫れが尸をうしろやすく葬ふる事も叶はで見す〳〵宵ひ〳〵毎の光りを助けし燈火の油に、吾が手して燒き失へる悲哀さは、到底內地に於ては、夢にだに見る事叶はず、之も唯、君の爲、國のためぞ、な、泣きぞと叱からるゝ良人の言葉に、勵まされて、今日迄は口にもえ出ださゞりしが、最早今は、程經つると思ふものから、止めあへぬ涙と共に、甲斐なき繰り言をも言ひ出でけるよと、云はれたるを聽きつる人、思へば今も淚の種なりと語られき。此の如く吾等の同胞姉妹は、大王の勅かしこみて、

海行かば水つくかばね、陸行かば草むすかばね、大王のべにこそ死なめ

死を以て君に事へらるゝを思へば、吾等は、いかでか、吾が職に手着く事を、怠るべきかと、或る友に語りたる事を其まゝ（了）

乙女心

故英國大宰相（虞氏）夫人作
在大學 古賀根生 譯

「アンナや！アンナや！も起きてもよかろうよ」と寡婦のレブハードは自分の小女を呼び起した。でアンナは自身の寢床で飛び起きたものゝ、よく睡て居たもんだから暫く眼を擦つて居る。

『おッかさんはネお前と同伴に市場へ行かれないよ、今朝はなんだか大層鹽梅が悪るいから……』
すると、アンナは寢床から飛んで出て。
『おッかさんエ御心配なさいますな、市場の事なんか私獨りでよッく致しますよ、數へて見ますと私も昨日で丁度十二歳になつたんですもの……』。
『お前は運のわるい子だよ、生れてから悲しげなとばかりで日を送つて來て、誕生日にも何一つ祝ひを受けたことなしにサ、若しやおッかさんが癒らなんだ時には、お前がどうする事かと思ふと、ホンに行末が案じられてならないよ』。
『おッかさんッ！あんた、ちッきに能くおなりなさいますよ、おッかさんエあの博士サイゲルト樣のお藥を、モウ一瓶いたゞけば其れでようございましうよ、わたしが今週と來週よい都合にあの雛を賣りましたなら、其のお金で此の間の位の大さの瓶に充分にお藥が買えましやう』。
『おッかさんもねエ。早うさうなればよいがと思うてるんですよ』。と母親は歎いた。
此の寡婦のレブハードは、シレシアの都のブレスロウと云ふ所から彼れ是れ一里程も離れてゐる微小な荒れ屋に借り住ひをして居るのである。其の家はたッた二つ室があるばかりで。――一つは寡婦と小女との臥室に居室の兼帶をして居て、モ一つの方は冬を過ごすための割木や馬鈴薯が入れておつて、そして雛の戸家ともなつて居るのである
アンナは自身で手ばやく衣物を着ました。見ばアンナは美しひ愛くるしい乙女である、短かい縞の上衣を着て居て、短衣はボタンが外づしておつて、頭の毛はうつくしう前の方で編むでおつて、そして其れが二連になつて腰の邊まで垂れ下つて居る。
アンナは部屋を清潔に掃除して仕舞ふてから、ストーヴの下を燃しつけて、それからおッかさんに大きなコップに珈琲を一ッ杯拵らへておげて、そして自分のも一ッ杯拵らへて黒パンの薄い一切と同時に喰べた。
『おッかさんエ！わたしや母樣におげますパンが無

いのですよ、ですけれどねェ、あの雛を賣りましたなら、二つの白い捲麵包が買つて來て あげられるでしやうと思ッてるんですよ」。

『お前、何疋賣るのがあるのだェ？』

『おッかさん、四疋なんです。そしてモゥ四疋も此の次の週あたりには、市場へ持つて行けます位い大きくなつて居ますよ、あの雛の一對ひが二拾五錢宛に賣れゝば、おッかさんに七日分の御薬を買つてあげられましやうよ』。

『アンナや、お前はほんとうによい子だから、サァ行つて來てお呉れ、遲くなるといけないからねェ、雛の大麥を買ふ事を忘れてはいけませんよ、そしてねェお前の鳩のお豆も』

アンナは臺所へ行つた、其所には四疋の雛が市場へ持つて行くやうにチャンと鳥籠の中に入れてある、ほかの鳥は窓の外に飛んでゐたが、アンナが朝飯をやらうと思ふて呼んだものだから、みんな集つて來た、アンナはまた籠の中に居る奇麗な二疋の鳩にも餌をやつた、此の鳩はアンナの大事に大事にして可愛がつてゐるものである、アンナは此の鳩と秘密の關係がある、だが其の事は自分のおッかさんにも知らさない、——それは聽て解かる。

アンナは自分の手から鳩どもが豆を摘むのをながめて微笑むで居る。

『可愛らしい鳥だことねェ、お前等は今朝私と伴に市場へ行くのだよ、そしてお前等はたつた一週間だけ、新い御主人と機嫌ようして居ねばなりませんよ、たッた一週間だけなのよ、そのかはり一週間さえたつたら又私が家へつれて來てあげるからねェ」と謂ッて。

『おッかさん！私しや荷車を引いてまゐりますよ、モゥ雛も大分よく飛べるやうです』

と聲高に云い添へた。

「お前の隨意になさいよ」と母親はいふ。

ブレスローの市場は、グロース、リングと云ふ大きな四辻の内に開かれるので、田舍から豬や鴨や雛鶏や、さて

は鳩の生きて居るのを持つて來る、鳥の直段は大そう廉ひ、が能くしたもので、その代りに、小さくて、そして一向に肥えて居ない。市場は活潑な景色を現はした、最初に手車や荷車や、一二疋の犬に曳かせた小さな二輪車に家禽の澤山はいッて居る鳥籠のいろ〳〵の列が來た、それから天幕の花店——日光が當らない樣に、柱を立て丶、上に帆布を蔽うた——花店の列が遣つて來る、之が仲々見物で、これを番する婦人の中には花毬を賣るものもあれば、窓置きにする樣にチャント鉢植えにした美くしい植木を賣る者も、また懐い人のお墓の飾物にする番石榴や薔薇の花環を編むで居る者もある、次ぎには野菜類がヅッと列らんで、それから又瀬戸物が地面に並らべ立て丶あつて此の大きな空地もギッシリて、さて斯く擴げられた色々の品物が、中々よく賣り捌ける樣子てある。

アンナは今朝は大層運がよかつた、アンナが市場へ着いてから、そうだ十分も過つたかと思ふ時分に雛は賣れて仕舞うた、雛をお買いなずつた奥樣が、荷車の上の二疋の鳩の入れてある籠を御覧じて。

『此の可愛らしい鳩は幾何程ですか』。とたづねられた。

『奥樣、此の鳩は賣るんぢやございません』

『さう!そんなら何故にお前市場へ此の鳩を持つておゐでたのだエ?』

斯く謂はれて、アンナは顔を赤らめた。

『娘さんエ、お前ね、妾に其の譯けを言ふのが耻かしひのかえ?』

『あら、奥樣さうじや御座りませんよ』

『そんなら妾にお聞かせなさいな』

『あの、私のおッかさんが、病氣で大層わるいので御座いますよ、そうですからおッかさんに博士サイゲルト樣のお藥を、モ一瓶戴いてあげたいと思ふのですけれど、私の家が貧乏なもんですから迚ても即時に藥價を拂ふと云ふわけには行かないんて御座いますよ、さうなもんですから私しやお醫者樣が今日半金お取り置き下ずッて、此の鳩を後半金の抵當物と

してお預かり下すッて、そして今直ぐ様お藥を下さるといふ様だとよいがと思ふてるんですよ、次の土曜日には又た四疋の雛が賣れるやうになりますから』。

『さうだけれどねエ、お前のおッかさんがソンナにお惡るいのなら、お金はおッかさんの爲めに殘して置いて、そしてから／＼だと、其の譯けを云ふてお醫者様に、お前の鳩とお藥とを交易して貰ふた方がよいではないかエ？』

『だッて、奥様おッかさんは死ぬやうな事は御座いませんもの、シテ此の鳩は他へはやられません』と斯くアンナはさも自分の大事な鳩を離れんともなそうな素振で云ふた。

『ちやアー、何だねお前はおつかさんよか鳩の方が可愛いんだね。まアーどうでも宜ろしい、左様なら、小女さんエ』

といつて奥様は別かれてゆかれた。

アンナは市場にまご／＼しては居なかつた。買物をして、お醫者の許へ行つて、そして家へ歸るに心せかれて、先づ捲麵包を買いにゆき、珈琲と大麥とそして豆をも少々買うた。アンナは此の買物を鳥籠の中に入れて、それから博士サイゲルト様の屋敷を指して、荷車を曳いて行く。

博士サイゲルトといふお醫者様は貧民を憐み助けるので名高いお方であつて、診察は無謝儀でして下さるが、藥價は矢張拂はなけりやならぬのである。

アノソレ、さツき雛をお買いなされた奥様は、此のお醫者様の御令閨である、が奥様はチヤントお歸りになつて居て、アンナが軈て家に來るといふ事を旦那様にお話しなすつた。

『あの小女の終生の戒めとなるやう、旦那様その鳩と交易するんでなけりや、お藥をおやりなされてはいけませぬエ』

『なぜあなたお前は小供に、そんな酷い事をせえと云ふのか、何か譯があるのか』

『旦那様、別に譯も何もあるんでは御座いませんけれ

ど、たゞあの娘のためを思ふからですよ、あの娘は且那様のお薬で母親が助かる健くなると思ふてるんでは御座いますけれど、そこが小供だもんですから、自分を棄ても親を助けると云ふ事を未だ存知ません』

暫時たつてアンナは御醫者様の御目通りに紹介された。此朝は博士サイゲルト樣が無謝儀で診斷をなさるゝ定日なのである。

『小女さん、何御用！』と博士は心よげに問はるゝ。

『アノ、先生、……先達ての御藥でおつかさんの氣分が大分よろしふ成ましたから、モウ一瓶戴だきにまゐりましたので御座ひます』

博士は診察控帳を繰り返へして見て。

『ウ、茲に藥方書が記してある、お前のおッかさんはレブハードさんと云ひましたね。然しねェ小女さんお薬の調合に大分高價くつきますが、……お金は持つて來られたかな？、二拾五錢ですよ』。

『アノ、先生、わたしや拾錢しか持てまゐりませんので御座います、其の代りに一週間私の鳩を先生にお預けまうして、次の土曜日に私が殘りのお金を持てまゐりました時に、鳩をいたゞひて行きたいと思ふのですよ』。

『何處に、お前の鳩は居るのかエ』。

『先生、おもてに居ります、どれ連れてまゐりましやう』。

アンナは博士は自分の願ひを聞き屆けてくださる事と思ふて、大そう嬉れしそうに鳥籠を持つて來た。けれどもサイゲルト博士が、

『私しや一週間もお前の鳩の面倒を見てやつて、そして丁度わたしが鳩を可愛とおもひ初めた時分に持ッて行かれるなんて、そんな事はいやだよ、お前はお藥が貰ひたいと云ふのだし、私しの方ちや其の鳩でよいのだから、ねエ、いつそのことお前と私と替ことしやうぢやないか、そして鳥籠には餘分に拾錢わげるから』

と、おッしやられた時には折角の悦びも挫けてしまつ

た、アンナは驚き落膽したが、かういッた。
『だッて、先生、ありや私のですよ、……先生、……私の大事の〳〵のものですよ、私しや自分でお金を貯めてあの鳩を買つたのてす。……私しやどうも此の鳩と離れともないので御座います……』
と吃ッて謂つた。すると博士は少し立腹した樣な振りをして。
『ちやあ、私の方でもお藥をはなしたくないよ。左樣なら、モーお前に用はない』。
博士サイゲルトは此の日診斷を乞ひに來た患者が澤山あつたので、アンナの事に就て殊更に奥樣と話をされた時は、はや晝時である。
『あれは藥をあの兒にやらなかつたのを、何だか可哀そうに思ふよ』
『それが畢竟あの小女の爲めになるので御座います、私しや彼の兒に自分の『我欲』てあつたと云ふ事を悟らせたいのです、あなた、屹度明日あたり又まゐりましやう』

アンナは面白くなく日を暮した、家に歸つて來た時に、おッかさんは大そう衰弱て、そして悄然として居られた、がアンナの歸つて來たのに氣が付て、目を醒まして市場の事をお聞きなされ、よくやつて來た事を讃めらる丶
『アンナや、その拾錢をおッかさんの針箱の隅ッコにしまつてお置きよ、此の調子で次の週に子お前運がよけりや、それこそ私にお藥を一瓶買うて呉れる事が出來ませうよ、何もアンナやさう氣を落したものぢやない、ねゑ、お前お金が天から降つて來るのぢやなし、地から涌くと云んぢや無いではないかね』
怎うした言葉もトント此の兒の氣を安んじることが出來ぬ、アンナはいつもの樣に鳩と遊ばうとしたけれど、博士の奥樣が『お前はおッかさんよりか鳩の方が可愛のだね』と仰せられた事を想い出して、『私が自分の鳩を可愛がるに何の差支があるものか、あのお醫者さんは澤山に奇麗な物を持つてお居でなすつて、又おまけに彼の樣な立派なお屋敷に住でお居でなさるのに、何

たつて私の鳩を呉れいと有仰のか知ら、まあ酷い方だよ』などとつぶやいた。

アンナは寐る時刻が來た時には嬉しげであつた、母親は夕暮から大そう熱が出て來た、でアンナはおッかさんがスヤ〳〵と睡られゝばよいがと望むだ、がおッかさんがうめく度毎に家にお藥があつたならよいものをと思ひ出す。――然しそれに就ては鳩を手離さなけりやならぬ。とつをいつ、どうしたものかと子供ながらも思案にくれて居たが、とうどうアンナの良き方の心が勝を占めてしまうた、『私しや鳩よりか、おッかさんの方が可愛いよ、さう、さう』、と斯く決心して眠りに就いた。

博士サイゲルト先生が、朝早くに珈琲を飲で居られた時、召使の者が這入つて來て、

『旦那樣、昨日のむすめの兒が又まゐりまして鳩を持つて居て、なんだか旦那樣に御面會がしたいと申して居りまする』。

『ウ、左樣か、その兒を直ぐ玆によこせ』。

アンナは例の鳩の籠を持つて、座敷に來て丁寧に禮をした。

『お前、今朝は何御用』と博士が問はれた。

『先生、私しや鳩を持てまゐッたので御座います、どうかお藥を頂戴いたされますやう』。

とアンナは臆して答へた。

『それぢや、お前は何かね昨日私しが云ふた通り鳩と藥を交易しやうと云んだね』?

『先生、左樣で御座ります』

『けれどねエ、モシお前あとで後悔するやうな事があると……』。

と博士の夫人はアンナの顏を眺めて云はれた。アンナは此奥樣が昨日自分に忘れも得せぬ事を言はれたお方であるのを見てギヨットした。

『あなた……、あなた昨日私におッしやッた事、お覺えて御座いましやうな』

と少し吃ッて云ふと。

『ハイ、覺えて居ますぞえ』とやさしく答へられた。

『奥様、ほんとにあなたの仰しやッた通りで御座いました、私しやおツかさんを大切に思ふのて御座いますけれども、今まで鳩の方を大事にしすぎて、おツかさんを助けることを忘れて居りました事が氣がつきました。それでモウ鳩の事を思ひ切りますから、私しやおツかさんのお藥を戴きたいものて御座います』。

『天晴れ！よくいつた、えらいものだ。サア私と伴においでなさい、先達のより大きな瓶にお藥をあげるから、そしてお前にお約束した、鳥籠の拾錢もあげるから』。

アンナはうれしいので歩く間もおそしと馳け出すばかりに家に歸つた。

『御覧なさい！おツかさん！御覧なさいよ、私しやお藥を持つて來ましたよ』

とアンナは微小な荒屋に這入りながら云ふ。

『アンナや、お歸りかえ、おツかさんはホントにうれしいよ、おやまあ、お前何處てこんな大きな瓶に、買ふだけのお金を工面したのだエ？お金を拂ッたのかえ？もうお前プレスロウへ行つて來たのかエ、どんなに早い歩き樣をしたのだらうねエ、私しやインマ起きたばかしたエ』

アンナは母の臥床の上に端座つて、そして、其の仔細を話して聞せた、自分の失策をも藏さずに。嬉し涙にかきくれし寡婦は低い聲て。

『有難う！有難う！お前はほんとによい兒だよ。その内にお金を貯めといて新に鳩を買うてあげましやうよ、ねエ、アンナや』

然し藥瓶よりもモツト親子を驚かす事が出來たのである。

此の日の晩に一人の小兒がアンナの家の戸をトン／＼と敲ひて、大きな包一つをなげ入れて行つた。其の包の中には鳩の二疋はいつてゐる鳥籠や、お菓子や、上等の肉汁などが「レブハード殿の息女アンナ殿へ、博士夫婦より」と大文字で認めた名刺と共に入れてあつた。皆さん御覧なさい、我欲でないことの報ひはソレ此の通り！

（完）

上洛日記

（故）梅颸夫人

はしがき

梅颸夫人の上洛日記は賴家の家藏にして藝州竹原の人雨讀樓主人の謄寫して我か女學世界に寄せられたるものなり、夫人は飯岡氏、名は靜子、春水先生の配にして、この日記をものされしは安永九年にして、春水翁にとつかれたまひ、あくる年の卯月、春水の父君、亨翁が、竹原より春水に具して、上阪せし時なれば、夫人のよはひは、正に廿一歳にて、山陽翁の懷姙中にてありしなり、めづらしきものなれば少しく改訂してこゝに掲けぬ（編者識）。

去年の冬もゝの敎をうけて賴氏の家にかへる、良人の父君は千里の青海をへだてゝ安藝の國にいましける。かゝる遙けき境なれば、拜み奉ることのかたく、まゐて仕へ奉るはいふもさらなり。明暮にこれのみわび思ひしに、はからずも、今とし卯月はじめの三日、良人の弟君を具して登らせ給ひ、はじめて御おもて拜みまゐらせ、有がたく嬉しさ、比ふべきかたなし、いつしか馴れむつびまゐらせ、終日御傍らに侍るに道すからの御詠あるは、人よりこせし面白き文ども操ひろげみせしめ給ふもうれし。ほどなく京へものぼり給はんとて、わらは二人したがひ、奉りて途々の宮仕へにはへりぬ。八日の夕つかた船をいたし、江に溯りゆく、岸の木だちの眺もみづらかなり。夜に入て月いと白ふ澄わたれる景色えならず、夜半はかり雨しきりにふり、風荒ひけれけ、船かゝる風爐やうのもの、用意したれば、酒などあたゝめ參づ所は、平かたにてぞ有ける。飯酒など賣る船とも互ひにらうがはしく詈りたるも所からおかし、あるしかくなむ

半夜江行興可嘉、携妻扶老向京華、蓬窓雨滴不蕭寂、
百里離家如在家。

わらはも其心を

楫枕、苦もる雨のわひしさも、
まきるゝはかりむつかたりして、

こゝにて夜明け、苫をしあけ見れば、岸のあなたの野山のわか葉の景色いはんかたなく、いと〳〵珍らかなり。それより八幡山、さき行かたの山々の眺め又なくぞ覺

へ侍る。淀の城はしの景色もめつらし。

此ごろは初音や嗁むほとゝきす
　淀のわたりの雨のなごりに、

ほとなく伏見にいたり、竹田とかやいふ道をゆく、大人は籠齋らしたれば、召て妾はら従ひてゆく、雨そほふりて道いたく悪しければ、とかく歩みかたく、人にをくれて行ぬるを、心うく覺してや、草鞋てふもの穿せぬるに歩みやすくなりて、とこしへに縷りし姿のおかし、漸く高瀬川のほとりをゆく、卯の花くたす折なればや、水の音もすさまし、あなたは桃山となん彌生のころは大空も花にゑふはかりなるよし。今はしも名殘もなく散りいてゝ、ひとつわか葉に青みわたりてこと木にまかふ。とある庭にしはしかほと休らふ、見えわたる山のたゝすまひ、木の本たち霞るかことく、曇りたる景色いとおかし、頓て立出、過行は木の間くらく茂れるに、かたへは水の流れいと清し瓢子もてくみなどして、

夏あさき岩間の清水たちよりて、
　むすぶ手すゝしこけの下道

ゆき／＼て細やかなる流れあり、渡らんとするは脛の濡れたらんは歩みかたしと、あるじなる人きこへ給ひ、くせし人のいたわりて渡しぬ、のり物はとくわたりぬれは、やう／＼として辿りつき、打むれてゆく、此わたりには牛車の物おふせて所せくまて立並べたるあり。

をのか名に、にすもあらなん荷を重み
　くるまのうしのくるしけにみゆ

ほとなく京地にも入しか、車のこゝら行かふに折しも雨ふりしきるなれば、いたく道あしくて捗しく歩もやられず、六條わたりには先よりしれる人のやとりせるよし、聞ゆれば、其方をなん、さしてゆくほとなく本願寺の門前にもなりぬ、人してとわせ侍れは、三日はかりまへに歸りにしよしを答ふ、いと本意なし、わらはゝ此わたりめつらしく、御堂にもまふでんとゆく、御堂の有さま荘麗いはんかたなし、こゝは其かみ、とほるの大臣陸奥のちかの鹽かまをうつし給ひし所のよし君まさてけぶりたえにし鹽竈のと咏しもむかしにて、今に此寺の庭なん、其あとなるよし、さだかにはしらず、日もいた

く傾きぬれば、三條あたりにさためし宿のあるを力にゆく、きゝなれし寺々もいそくまゝに、立もよらて過行に、三條のわたり大はしにて、夕陽もにしにしつみて、暮近くなるに霞みて見へわたる山々いと床けなるは、みな名におふ所々なり。川のなかれ音しづかに聞ゆるも、いと珍らかなり。頓てやとりにつき、ゆひき夕食いとなみなどして、古郷への文したゝめぬ。うしも終日のなかめに睡りをもよふし給ふ、庭もせは、ゆふづく夜の影しめやかに、木の間をもりくるもあはれにおかし、ほどなく夢をむすぶ。

けふは九日大人のしきしまの道しるべせし小澤といへる博士のがり行なんと、出行給ふにしたがふ。きのふには引かへ、そら晴れ、いと長閑かなるに、行かふ人も賑わし、あるじは知れるかた訪つゝも、ゆき〳〵て小さはのたちへまふて案内せさせぬれば。やがて出むかひわくら葉に對面しかたみに、よろこびをのべ給ふ、女のあるじも出て何くれと、いとまめやかに晝食の いとなみなどもして款待給ひぬ、折から雨いたく降出ければ、

けふはいつかたへも行たまふまじ緩々かたり給へなといとねもころに聞へて、歌物かたりのとり〳〵を、いひきこへ給ふも、やんごとなくうれし。庭もせの草木もおのかまゝにしけりあひて、今ふりし村雨に露溜あまりたるけしき、住人からいと心ありけなり。齋せしさちへやうの物とり出て、しば〳〵汲かはしうし頓て言葉の花の色に出て

いや高くしけれるかけやことの葉の
　さかへをみする宿の松か枝

わすれめや心をのふることの葉の
　道しるへせし人のめくみを

あるしとりあへず子のこの千世はいふへくも侍らすとなんいらへ給ひて

なからへて行末ひさに我門の
　まつのこと葉のさかをもとへ

わらわが歌こひ給らせしかいもとせのよろこひそのへ給ひて祝の心をとなん

咲かゝる契りそならは藤の花

松のみさをにならへとぞおもふ

みな短尺にかひつけて給はりぬ、かくしつゝ日もなゝめになりぬれば、まかりなむ、これより大みや拜みま欲しくといふにぞ、とく晝きて道をしへ給ふ、いとうれし、おもふこと殘して立いでぬ、行々て大内にいたり、彼方こなたの宮つくり、世つかすめてたけれみかどの御所おがみ奉るにも四つの海靜かに、民ぐるなびく御めぐみかけまくもいとたふとくぞ侍る。かなたをみやれば雲の上人とおぼしくて、けふの人々迄こそにさうぞきてみゆるはいづれの御かたならんと人にとひ侍れば、九條關白殿と聞へぬ。世の聞へめでたくおはしませば拜み奉る事のいと尊もおぼえ侍りき、かへさにしれるかたに尋ね暫しやすらひ暮ちかくなるまゝにやどりに歸る。

けふもつとめて出なむと更に井川氏桑田氏を伴ひ行ほどに南禪寺の松林にいづる、此寺をよそにみなし、永觀堂は心をすます、鐘の音ばかりしていと物しづかなるに、折からうぐひすの人くとなくも心わりげなり、かなたに藤の咲かゝりてやう／＼過ぬるもをかし。花いとながく大人の杖もて比べ給ふにもまされり、岡にのぼりて見わたせば、遠近の野山目のおよばぬかたまでも見へわたり、世の外のおもむきふかし、かゝる所にては、心のほそものべがたし、などたわふれもて、行かたの木の間日を蔽ふろばかりにしけり、折から道しばまで露けきさまちと哀なり、此あたりには山崎先生の御墓あるよし、あるじは詣たまふ、かくして黑谷を過行聖護院のもりにいたる、木かげの茶亭にやすらふ、此あたりに年ころあるじのまなびの友とし給ふ人の旅やどりにおはしますをとむらひ給ひ頓て過つゝ行手なる小川をわたりにしきおる家居などたづね女の馬おひてさかなく物いゝわたり行かふもをかし、みどりの木の間竹の林を過行けば、北野の御社に詣づ神の御惠みとり／＼なれど、わきてひちりの道をふかくまもり給ふとかや、わらはの父も夫もひたすらに此道をのみしたひ侍れば、いとゞ尊くめうがあらせ給へと、おがみ奉る紅梅との老松も物ふりてみゆるはづかの道を行けば清き

流わり紙や川と聞ゆいとおさければ、人々掲してをりひたしかなたこなたつどひ遊ぶ。

　　いづくよりながれて秋のかよふらん
　　　紙や河原の水そすゝしぎ

これにかゝれるを高橋となんいふよし、わたりて平のゝみやしろにもふす、御宮居いとかみさひてみゆ、夫よりもと來し道にかへり、又大みや拜み奉り、ほどなく加茂川に出る故郷のつとにとて、石拾んとすれど、すかの根のながき日さへ暮近くなるまゝに、たどり〳〵てやどりに歸る、きのふとひ參らせし小澤氏の御元より、老のなぐさめにとて菓子やうの物給ひぬ、翌日なむみつの浦はにかへりなんとて何かれといとなみものすみじか夜の明やすきねふりいまだなかばならさるに、鳥のわかつきをつぐるにぞ、起出て手あらひ、櫛つり朝けなとしたゝめものして此はとのやどりにだに名殘おもはれて

　　草まくらかりのやどりもいまはとて
　　　おきわかるれば露ぞこぼるゝ

夫より白川をみつゝ知恩院にいたる櫻のはやし青みわたり花の比さぞとゆかし、山門はこどにむね高くとぶ鳥の翼もさふるばかりなり、朝まだき行かふ人目もまれなるに、坂をのぼり御堂に詣づ、いさゝかの岡に鐘楼あり、洪鐘かゝれり、見つゝ猶ゆけば、祇園林にゆく、若みどりの心よげに繁りわひたる、いはんかたなし。御社にもふて行々て、八坂の塔をも過つ、清水寺にいたる、とつ國の人あつまりて順禮の歌をとなふるあり。舞臺といへるはいたく荒てはしに寄りいかたし、頓て新たに造るめりと聞ゆ、山いと近く仰ぎて見るもいとみし。音羽の瀧世々の歌人のことの葉にげき所なりけらしわらはけ幼かりし時もふて來て瀧をもみしか、此程は牛のあゆみをいたはり參らせてゆかす木がくれなる細道をゆくいと心ほそし、此ほとりを鳥邊山といふ、やがて大谷にいたる松に昔つるゝ風のみして、さらに人めまれなり、うしのゆかりの靈ましますよし、拜みほどなく大佛殿にゆく、おさなきよりもおがみ侍れと、今さら目を驚す、こゝかしこに立やすらふ、遠津國より伊勢

詣ての童なるか、集りて物をこふ、此柱らの隙くゝりなば錢とらせむと、の給ふにぞ、皆とく捨りてさらは給はれなと、縋りいふも最とけふあり、ひとりくゝり忘すいかゝやと心つかひせしに、いひもるけのふところに入たるかさゝへられたるにてぞ有ける、やかて出つゝ行手なる池にかきつはたのけにもゆかりの色に出て咲みたれたるいはんかたなし吹くる風もにほふばかりなればわやにくにたゝまくおしくこゝにしもしはしやすらひて

衣手にすりても行むかきつはた、
　　ゆかりの人のかたみともみめ

さてしもあらねは行まゝに深草の里になりぬ、こゝには畚べの手すさみなど世わたりになす家おほし、あるじ幼なきものに家苞にとらせんとて、求めなとす、みづからにはさばかり思ひ侍らねど大人の折々は輿の窓よりおも見へ給ひて、玉鉾の道すがら、いと遙けし、何にかれ便宜もとめて憩ひてよと聞へ給ふもことなふられし。泉涌寺、東福寺をも見やりて行かたに朱の鳥井のみゆるは稲荷の御社なめり、やがてもふてかしこく拜み奉る、山の葉ごとの夏木たち、猶おかす珍らし、こゝにて藤井何かしにも逢ぬ、此ほどの言種ひとつ、ふたついひわたり、難波にてこそ語り盡さめとて、別れぬ。とある水むま屋にしはしかほとやすらふ、かくしつる内にも時うつりなんとて、いそぎ打むれて行くかなたより、それのへに面影のいとよくにしかみゆなどいひもてゆく近づきて見れば日ころ、むつひぬる橋本のぬしの妻子つれて、葵のみわれ、邦にとて行なりけり、そめにも思ふこと語りてまたも行きて見んやと、いへれど、たわむれんもよしなしと、名殘をしみてわかれぬ、いつしか伏見の渡口にも來ぬ、何かと認めものす、船け非川氏の出し給はりぬれば、ほかにのるへなし、時はさるのこくばかりなり、深草にてもとめし調度めて、もの煮おるは準備せし茶などたてまゐらするも、慰めの便がとはなりぬ、日もたかけれはこゝかしこの眺め飽もせず、なを珍らし淀のわたりも何處やうやらん、此わたりちかけれは夜ふかき頃にはあらどね時鳥そきかまほしき

そこより南のかたにみわたるゝは八幡の御社なめりまゐらんこともかたければこゝより拝み奉りて。

ゆく末をかけてぞ頼む石清水、神のちかひのめぐみあふきて

山崎もすきつ、此わたりにて暮ちかくなるまゝに、もとの木たちもおほ〱しく遠こち寺のかねのねにけふもくれぬと驚く、はた夜に入て雨もよふす、苫打おほひゆふ風のいと涼しきに大人のはた寒からんゞわかふすまに入てよとおゝせきこへ給ふも有がたく、うれし、漸うふくる比おひ寝るともなく覚むるともなきに、棹さす歌のほのきこゆるも旅のあわれを催ほせり、さしゆく船のときを題になして歌よめと仰らるゝに、

かへるべき難波にはやもつきなまし　水の心にまかす川船

月の桂もきよく澄わたり、晉夏の夜の霜とかや、しまねの松にさへられて、すへのゝ里もおぼろげなるか、とがむる犬の聲にこそこそとはしりぬ。江口長柄も此わたりならん、今はむかしかたりのうかれ女の船だに見へずかくしつゝ行まゝに、いつしか難波につきてめなれし橋のかず〱かぞへ〱て丑満る比にこそ家路にかへる。

こほ水（支那教訓談）

菊の屋女史

枝在ニ墻東一花在レ西。自従レ落レ地任ニ風吹一。枝無レ花時還再發。花若離レ枝難レ上レ枝。

この四句は、むかし人のものしたる婦を棄るの詞なり。いふこゝろは、婦人の夫に随ふは、花の枝に附するが如きものにて、枝は縦し花なきも、春に逢へば再び萌し花は若し枝に離るれば、復合ふべからずとて、世間の婦人達に、夫に事へてよく其道を盡し、甘きも苦きも共に嘗め、始めよりして終りに至り、強ちに富みを慕ひて貧しきを嫌ひ、其こゝろと行を二ツにして、自から後悔を貽すが如きことなかれかしと勸むるものなり。

むかし前漢の時とかや、一人の名臣ありけり、其人未だ

世に出ざりし時、妻なるものいかにこゝろの惑ひけるにか、世の常言の眼あれども泰山を識らずと云ふに洩れず、終に其夫を棄て出去りしが、後に到りてこれを悔ひしも、及ぶことなかりけりとぞ、今北の大路を左に註すべし。

呉中會稽郡に朱買臣となん云ふ人あり、朱は姓にて、買臣は名なり、字を翁子と云ひしとか、家貧くて産業もなく、夫婦二人にてあるむさくろしき巷の破れ屋に住居したりけり。

買臣は日々附近の山中に入りて柴を砍り、挑ひ出てはこれを市中に賣り、少しばかりの錢を獲て、其日々の米鹽に換へ、細く烟を立つ吝も、いく回となう迎へられ、今は早や四十路の坂をも趨へけるに、若き時より好めるは、別きて書を讀む業にして、いかなる時も手に書巻を釋てしことはなかりけり。然れば日々市中に出ゆかんにも、肩には擔ふ柴の束、手には擎ぐ物の本、柴を賣らんとにか、本を看んとにか、且は行き且は誦して、休むことをなし、市人等は見も慣れ聞もなれて、あやしともせざりしが、柴を購はんと思ふものは、其朗かに書を誦するの聲をきゝて、買臣が來ぬるを知り出て呼びとゞむるを例とせり。買臣は平常に價錢の多少を云はず、唯購ふ人の云ふがまゝなる直段にて、柴を取らせしかば、他の柴賣人よりは、賣行はど容易かりし。

さる程に、市中物のことはりをも辨へざる輕薄の少年、及び兒童共は、毎々買臣の柴を挑ひながらに書を讀みゆくを見て、三五群を成し其後に隨ひて、或は嘲けりのゝしり、或は笑ひたはぶれなどするもあれど、買臣は少しもこゝろを留めざりけるが、ある日の事とかや、時は秋の末方、日も早や黄昏の夕風は、やゝ身に侵て寒さを覺え、柴賣盡たる買臣は、入日の光のあまりにて、聲朗かに書を讀みつゝ、我家を指して歸り來ぬ、足元おろそかなりければ、忽ち路上に横はれる何かの障碍に打躓き、覺えず大地に倒れたり。然なきも惡いたづらなる兒童共は、例の如くに後を跟け來り、この狀を見て一度に鬨と聲を揚げ、手を拍て笑ひ興じたりしが、其時買臣の妻は丁度夕餐の準備を半ばに、水汲まんとて門を

出て、ふと見れば、斯る夫の爲体、東西分かぬ兒童兵にも輕しめ侮られ、白痴者か、瘋癲人かと笑ひ嘲けらるゝとは、さても〳〵なさけなし、斯ては世間の手前、ひとり夫の身の上ならで、我身までもこれに過したる耻はあらず、年頃日頃の艱難苦勞は、今更云ふにも及ばねど、斯くてありなば、終にはいかに成りはてん、次第に寄する年の波、老後の事も思はては叶ふまじ、榮耀榮華をせんとにはあらねど、我夫は唯書を讀むことにのみ耽けて、家の産業を興さんためには、こゝろをも盡されず、其日〳〵の口ぐらしに、纔かに米鹽の資は得べきも、今は又時候も日益寒けくなり來りしに、未だ冬衣を作るの方便もなし、あはれ云ひ甲斐なき我夫やと、思ふも兎角に女性のはかなさ、夫の後來をはかりかね、己がこゝろの惑より起りし歎きと知られけり。頓て買臣は回り來りて家に入れば、妻は勸めて云ひける樣。

我夫よ、おん身必ず書を讀まんとならば、其間柴を賣ることは止め給へ、若し柴を賣らんとならば、其間書を讀むことは止め給へ、斯程の年紀に至りて、白痴か瘋癲にもあるまじきに、書を讀むか如く、又柴を賣るが如く、何れを何れともなくして、行きながらに誦しつゝ、先程の如く不躰裁なる事を演出て、兒童等にまで笑ハ嘲けらるゝは、あまりに羞しとは思はずや、妾は誠に悔しくて、堪えも切れず侍るなりと。

思入りたる風情なり。買臣は頓て答えて云ひける樣。

そなたの云ふところ、實に然ることなり、努無理とは思はず、然りながら、我の柴を賣るは、今日の貧困を救はんとてなり、又我の書を讀むは、後日の富貴を取らんとてなり、この兩樣の事、兼てこれを行ひ各〳〵和妨ぐることなし。笑ふものには笑はしめよ、嘲けるものには嘲げらしめよ、我の關はるところかはある、捨置べし〳〵と。

妻は買臣の取合ふ氣色もなきに、こゝろ苦〳〵しく冷笑ひて云ひける樣。

おん身若し富貴を取り得べくば、後山と云ふにも及はず、未だ初より柴賣はせずして、今頃は早已に大官人とも爲りしならん、むかしより今に及ぶまで、何處

の柴賣人が官人と爲りにけん、妾は曾て其例のありとも聞かねば、見もし侍らず、いかにおん身なればとて、その樣なる寢惚人の話の如き事にて、人を欺かんとせらるゝも程こそあれど。

云ひ畢りて空嘯けば、賈臣は從容として、言葉和らかに云ひける樣。

先こゝろを押沈めて、更に我云ふところを聽れよ、凡そ人の富貴貧賤は、各〻其時ありてかはり行ものゝなり、始めに富貴にして、終りに貧賤なる人あり、又先に貧賤にして後に富貴なる人あり、皆定まれる天數によりて、しかなることなり。何時ぞやわれ人して我生誕の八字を占はしめけるに、年紀五十歳に到らば、必ず運を開きて富貴の人と爲るべしと云へり。われ今こそは貧賤なれど、後には富貴をも得らるべし、そなたは唯眼前の事のみを見て、何かこゝろの惑より、彼此と我を推しはかるものならん、世の常言にも海水は斗量すべからずと云ふことあり。われ自から海水をもて比するにはあらねども、そなたをもて我を推しはからんことは、よしもなきことなれば、そは思ひ止むこそよからめと。

妻は益〻冷笑ひて云ひける樣。

妾何のこゝろの惑ひかあるべき、おん身の事は何事も、底の底まで推はかりて、いと瞭然と見極みをつけ侍るなり。かの占者の如きは、おん身が痴癲の爲躰を見て、故意に言葉を設けて、おん身を翻弄らんとしたるに外ならざらん。おん身若しこれをまことゝし、然なくも浮世のたのみがたきに、わてにもならぬ空言を、夢か現にたよりつゝ、老ひ行く旅も忽ちに、五十路の坂にも到りなば、躬も早や疲れて手も腰も、思ふまゝには何として、柴の束さへ擔ひ得んや。頓ては路頭に餓死の、非業を遂るも其分なるべし。おん身は其期に及び、閻魔王廳の小判官はいざ知らず、尙ほこの世に仕りて、大官人たるを希ふとも、得べきことにはあらぬべし、さても笑止〱と。

賈臣は更に從容として又云ひける樣。

しか思ふは、乃ちそなたがこゝろの惑ひなり、そなた

も曾て聞知りぬることならん、むかし大公望は、年紀八十歳の時、尙渭水のほとりにて、魚を釣りつゝ、ありける程に、遂に周の文王に遇ひ、拜して尙父と爲されたり。又本朝の丞相公孫弘は、年紀五十九歳まで、東海の隈にて豕を牧ひ居けるに、丁度六十歳に及びて、纔かに今上皇帝の御知遇を蒙り、漢爵をまで授けらるゝに至りたり。我五十歳にして運を開かば、かの秦の時僅かに十二歳にして、身を立にし甘羅に比ぶれば、いと遲しと云へども、この二人の老賢人共に比ぶれは、尙十年若くは數十年も早きにあらずや。そなたもよこれ等の事共を鑒み、今暫く耐忍びて、時の來るを待たれてよ、定まれる天數のあるものを、いかて人の思ふまゝになるべきぞと。

妻は又益々冷笑ひ、いかにも夫を見下げたる面色にて、云ひける樣。

いかにおん身の自惚れつよきことよ、いにしへに倣ひ、今に較ぶることは止め給はれ、かの魚を釣り、豕を牧ひしものは、孰れも皆尋常の人ならず、身に才學を備へて、胸に成竹ありしことならん。今おん身は人に超ゆるところとてもならきに、只徒らにこの數卷の死書を讀まる、縱し日〳〵讀みて一百歳に到るとも、和も緩らぬ其汚れ面に、果して何の得るところかあるべき。末期の時の悔しさに、おん身はいかに懊惱むらんと、思へばいとゞ笑止なり。そは兎も角も、おん身が平日の爲す業は、世の人々より見なば、白痴とも瘋癲とも爲しもすらん、妾はこれさへ口惜しきに、目のあたりなる先程の耻さらし、妾が面皮もこれがため、剝がれて今は泣くばかり、斯る影くらき姿して、このまゝ世にや立るべき。おん身にして妾が云ふ事をきゝ給はず、又書卷をも拋ち給はずは、妾も。覺悟あり。緣あればこそ夫妻なれ、緣盡れば他人ぞかし、妾女性の身なればとて、いかでか他人の衣食を仰がん、妾はこゝろ已に決して侍る、長くおん身に隨ひて、身を終へんこと思ひもよらず。おん身も妾もこれよりは、各〳〵自から身を愛し、思ひ〳〵に世渡して、彼此互みに妨げずもあるべし。いかにおん

身の爲にも、いと便よき事ならずやと。
買臣は妻が斯までも云ひ募りて離緣を求むるに困じけるが、いかにもして思ひ翻へさせばやと、いとゞ言葉和らかに、慰めて云ひける樣。
そなたが我家に緣附しより、この數年の間の勞苦は、我が常々かたじけなしとぞ思ふなる、尙この上に御艱難させんことは、いとこゝろ苦しくはあれど、思ひ直して離緣の事は求めずもあらなん。我今年に已に四十三歲なり、今より七年すれば、頓て五十歲運の開けん時到るべし。以前の勞苦は長かりしも、以後の艱難はいと短し、これまでとても耐え忍ばれしものを、この後は心抱し得ずと云ふ理もなからん。この後そなたが心抱も、七年とし云へば、悠々として長きが如く思はるれど、過して見なば束の間の、短き夢の中なるべし。先にも云ひし如く、凡そ人には天數あり、又むかしの聖人も、人事を盡して天命を待つと宣へり。我等夫妻今より尙七年、躁がず焦らず、人事を盡して天命を待たんに、何の仔細かあらん。天命違はずして世に出ることを得んは、大江の水の流れて、東海に歸するよりも、猶たしかなることゝ知る。我よく富貴の夫となれば、そなたも亦富貴の妻となるべし、これをしも思はず、今卒かに我を捨て去りゆくは、あまりに氣短き所作にて、なさけの道にも背くものと云ふべし。よく／＼分別して後の懊悔をな貽しぞと。
買臣がいと懇功なるこの數々の言葉も、妻の耳には空吹く風の過ぐればあとに香も留めず、聽分くべくもあらばこそ。妻は頓て前にも增して、夫を見下げたる面上る、忿怒の焰さへ燃出で、物狂はしげに罵りだてて云ひける樣。
さてはよしなき囈語のみ、賤の苧環それならぬに、よくも／＼くり返し給ふものかな。お身が繰言は、最早聞くさへ腹たゝし。妾はお身に別れ去ればとて、何の懊悔さの後にてせん。この世の廣き何處にも、柴賣る程の人は數多あり、一人お身にあらぬぞかし。妾若しお身ばかりをたよりとし、尙七年の

晨霜を守らば、云ふにも及ばず其間には、おん身は更なり妾までも、餓て果るか凍えて死するか、孰れか非業を免れざらん。妾はいかに愚かなれども、斯る見易き成行を悟り居らずと云ふにも侍らず、いかで看す〳〵餓と凍の、非業の途をたどるべき。又おん身も男子の一人、縦しや妾に見限らるればとて、世は女子に乏しからず、妾よりいかばかりよき女子の、おん身に嫁ぎ来らんも知りがたし、未練を残さず、愚痴をこぼさず、さらりと妾を離別して、おん身はおん身の思ふまゝ、後の事共はからはせ給へと。

身を揺り足踏み鳴し、離縁を迫りて已まず。買臣は妻が決心の到底動しがたく、切れし手綱の離れ駒、引留むべくもあらぬを見しかば、悄然として歎きつゝ、云ひける様。

已みなん〳〵、然ほどの決心なれば、今は詮方なし。只願ふはそなたに若し再嫁の心あらば、この朱買臣に勝る者を撰みて、其夫とせられん一事なるぞかし。

妻は買臣がこの離別の言葉に、願望も協ひて宛ながらに、捨にし命を拾ひたるが如く、嬉しさいとゞかぎりなく、今までも哮り狂ひし雷電の、いかりの焔も噴に消え、平常に還りし女性の姿、色もやはらぎ、聲もやさしく、いとおとなしやかに、云ひける様。

それはいとかたじけなし、妾若し再び夫を得なば、よかれあしかれおん身には、何程か勝るものなるべし。妾が事は兎も角も、おん身が後の事こそ想ひやらるれ。最早時候も冬に近づきぬ、凍死などし給はぬ様、乾度用心せさせ給へと、

云ひ畢りて買臣に一禮し、いと悦ばしげにしたり顔して、門打出てぞ去りゆきたる。買臣は感慨やるせなく、筆執りて、四句の詞を壁上に題しぬ、其詞に云へらく。

嫁レ犬逐レ犬。嫁レ雞逐レ雞。

妻自棄レ我。我不レ棄レ妻。

其後七年、買臣は丁度年紀五十歳の時に至り、時の天子武帝は、詔を天下に下して、世の賢人を招き求めさせ給ふ。買臣はこれを聞て、其都長安に至り、禁闕に參

じて一篇の意見書を上りけるに、其頃同邑の人にて嚴助と云ふものあり、天子の側近く事へ、おん覺もいと目出度かりけるが、これも亦買臣が才學を知りて、これを天子に奏し薦めしかば、天子は買臣を召見せられて、種々の御下問などあり、其尋常の人ならざるを知し召し給ひて、拜して中大夫に爲され、久之して又會稽の太守に拜されしかば、買臣は頓て驛を馳せて赴任し、會稽の界に入りける程に、長吏は新太夫の來任あるべきを聞て、大に人夫を發し、道路を修治せしむる折柄とて、買臣が妻の後夫も亦其役中に在りて勞作しけるに、其妻は髮もおどろ〳〵に振亂し、脚さへものをも着けず、跣足にてこれに附き隨ひ、飯櫃など運び居たりしが、太守が大勢の從者共に、前に呼はれ後に擁せられて、進み來るを、傍よりこれを窺へば、思ひきや故夫の朱買臣なり。買臣も亦車中に在りてこれを一見し、故妻なることを認めしかば、頓て從者してこれを呼びて、別に車に載せて太守の府第に來らしめしに、故妻は只羞慚ふて頭を地に附けつゝ、罪を詫るばかりなりけり。買臣は又其後夫に對面せんとて、これを招き請じけるに、其人も亦唯だ地に拜伏して、敢て仰き視ず、戰き慄れて爲すところだも知らざるものゝ如くなり。其時買臣はこゝろ竊に、其人の蠢愚なるをあはれみつゝ、其妻に向ひて云ひける樣。

我今そなたの夫に對面するに、未だ朱買臣に勝るところあるを見ず、そなたの爲めにいと氣の毒なりと。

其妻再三頭を地に叩き、且は詫び且は悔ひ、婦人の性の淺ましき、己が心の惑より、富貴の人の妻たるべき、幸あるものを我ながら、行へき道を行きもすて、迷ひ入りたる暗黒の中、物の黑白も分たねば、事の理非をも辨へず、なさけをこめて引留し、故夫捨てこゝろにも、あらぬ新夫其人に、托せし今の身の果は、世に耻かしき貧賤の、又貧賤の境界なり。今更云ひ出でんものにあらん、あまりに厚顔しとは知るものゝ、さて已むべくも覺えねば、伏し拜みつゝ泣くが如く、訴るが如く、いとあはれげに、云ひ出ける樣。

妾は實に賢女にも均しき目くらにて、道踏み違へて

こゝろの暗黒、ふかき罪をぞ犯して侍る。今は中〳〵羞しく悔しくて、再び大官人に見参らせん面伏もなし。唯大海のいと寛濶なる御こゝろもて、おはれ妾が罪をゆるし、婢とも姿とも爲し召使ひて、身をば終させ給はずや。いかに妾か故夫なる大官人よ、妾が切なるこの願事、不憫とも思召し、枉げて聴入れさせ給へかしと。

買臣は聽了りて、頓て召使の人に命じ、一桶の水を取來りて階下に覆さしめ、其妻に示しつゝ、さて諭して云ひける樣。

あはれそなたの事、亦この水の如し、この水已に覆されぬ、能く故の如くにせられ得へきか、若しこぼされし水の再ひ收めらるべくば、そなたも亦再ひ迎ひらるへし、事のことはり相同じ、よく思ふても見よかし。然れど我も亦そなたがむかし若かりし時、髪を結ひしこゝろ根の、ふかき因縁のありしを忘れねば、後園の中に住居せて、そなた夫婦を扶持し遣さんと。

斯くて其妻は後夫に隨ひて、一先府第を辭し去りしに、路上の人皆これを知りて、これは新大守の舊夫人なりとて、相指して嘲り笑はぬもなかりけり。其妻痛くこれを羞て遂に自から河に投じて死けりとなん、鑒むべきことならずや。こゝに詩あれば證と爲さん。

漂母尚知憐餓死。親妻忍得棄貧儒。
早知覆水難收取。悔不當初任讀書。

寒國の風俗（エスキモーの話）

菅原白峰

北極探檢に就ての種々なる奇談は吾等の屢々聞く處なるが、寒國に特有せる風俗習慣に就ては此のアラスカ、エスキモー人種ほど奇にして且つ珍らしきはならじ、抑もエスキモーと稱するは地球上北極圏に近き寒帯地方に棲息する一種し矮人種にして專ら海豹、捕鯨の獵者として知らしたり、此の人種の最も多きは北米アラスカ州にして北緯五十六度より七十度の朔北窮境に

亘りて住せり、當時此の地一帶露西亞領にして目下薩哈連土人等の海獵を試むる處たり、元より斯る寒帶地の事なれば生活上に天然の恩惠至つて薄く耕作は勿論牧畜の業とても起すべきなく土地の面積は頗る廣くして海岸線屈曲して三百里に及ぶも其人口は極めて尠し、斯る北邊の地なれば氣候の嚴寒なる事は言ふまでもなく、四季の天象頗る奇異にして迚も我々暖帶國人の想像の及ぶ處にあらず、就中尤も奇なるは無日の長冬なり。

太陽は十一月二十一日を以て全く地平線下に入り、夫より十二月の中頃迄は、唯正午に南天の美麗なる深紅色を呈するを見るのみ、其樣恰も夏日の曉紅に彷彿たり、十二月の中頃には北氷洋洲地方の太陽と最も遠ざかる時なるを以て、此の曉色も稍や微弱なるが如く、一月の始よりは再び次第に依然し美事なる深紅の空際を呈し來り、一月廿四日に於て南天始めて久慕の太陽を拜せり、然かしども其位置甚だ低く、地平線上只其全徑の四分の一を現はせるのみにして、其出沒の間は僅かに十五分時なりし、日色甚だ赤く、更に光輝の赫々たるを見ず、左ながら松間に懸る中秋の明月に似たり、是より毎月十五分時間位づゝ延び行き、三月二十日頃に至りて晝夜全く相平均す、三月中旬頃は日光の暖氣肌に感じ、何となく春氣を覺ゆる樣なれども、全土一木を生ぜざれば甚だ殺風景なり、

此地は緯度の點に於ては諾威國の最北部はツヤフエスト府と等しく北緯七十度近邊にあり彼の地にありては大麥の耕作盛に行はるゝも彼の地に於ては雜草の繁生すら甚だ微弱なり諾威北岸はシキレコ灣より起る處の急激なる暖潮に於て洗はし、アラスカ北岸も日本より來り暖潮に浴するに拘らず、斯く草木の發生の差異あるは全く土地の貧富によるなるべし、尤も少しく南方に至れば太平洋の暖流によりて谿谷及ひ山の半腹は地上一面枯草を以て覆せ夏季二三月の間新草其間に生じ又種々の草花開く、日受よき處には草覆盆子の類を生ず、土人之を以て酒を製す又部落の周邊に野菜園を耕すものありて蘿蔔、チサの類元氣より生長するを見る、

扨又此の地の實況に不案內には定めて太陽の入滅より其再來に至る六十日間は全く暗夜のみならんと想像するならん、然かれども前述の如く曉光か北光明を放ち四方の白雪に映じ午前十時より午後二時迄は戸外常に明にして細字を分辨し得るに足る、降雪も亦戸外に少なく、冬春にかけての積雪は其深さ平均五尺位にして此五尺とても重に谿間抽塘等の凹所のみにして、平野海岸處々に土砂を見るべし、降雪の少なきは寒氣の猛烈にして大氣の甚だ乾燥せるが故なり、總じて十一月の末より四月の始まで降雪甚だ稀にして、時々海上氷原中に水路或は割目を生じたる處より發する水蒸氣の、大氣中に混化して、微妙なる凍躰の細霧となりて降る、冬中は空氣の甚だ乾燥なるが故に、土人の吐血鼻血に苦むものあり、嚴冬戸外に出たる時は、鹿皮を以て作れる二重の衣服により、全身を包み、僅かに顔面を出すのみ、其微風に面せるのみにても、鼻頭頬面の凍ること容易なり、土人により嚴寒に堪ふるも、冬期中戸外の勞働時間に凍瘡を苦しむもの多し、全は無風の日を撰みて成るべく、戸外に散歩せしが時としては眉毛、睫毛、髯等の結氷し殆ど眼口を閉ずるの姿を呈せり又二重の毛皮靴及び手袋等を用ふるに拘らず指頭、足趾を凍らせたること度々なり、加之渴を感ずること甚だしく强て之を忍ぶこと久しきに至れば吐血の恐れあり、

寒國の生活

北氷洋洲の地は氣候沍寒して土地磽确毫も耕耘に適せざるを以て、此の地に住するイスキモー民族は年の三分を陸上の狩獵に費し、年の七分を海中の漁獲に過して僅かに其天壽を全ふするを得るに過ぎず、其食料の重なるものは、海豹にして海馬、鯨、鴨、雁、之に次ぎ冬期には海氷を穿ちて小魚(或はカヂカ)を釣るも、捕獲の量微少なるが爲めに、臨時の附皿として味ふに過ぎず、陸上に於ては鹿を重なる捕獲物となし、又河流より白魚を網みし得て常食の一部分に充つ、鹿肉魚類は之を割烹することをなさず、凍體の儘食用に供へ(海豹、海馬、鴨、雁は冬時に在ては其肉を除くの外、臟腑一切凍體の儘之を食す、鯨族の如きは捕獲の際流出する

血液を除くの外は寸毫も失ふ所なく、外部の黒皮は土人が無上の珍味として舌打鳴らして之れを食する樣子は、恰も邦人が初鰹の刺身を味ふに異ならず、肉は常食の一となり、脂肪は爐火、燈光の用に供し、又凍肉を食するの際醬油の如く之を右の脂肪に浸して食せり、鯨の齒骨は之を白人に賣りて、火器、彈藥其他の必用物を得るの材料として、大に之を貴重す、鹿は肉を食して皮は衣服に造り其筋纖は麻布の用に代へ、魚を捕ふるの網衣服を縫ふの絲は一に之れに依れり、海豹は年中海岸近くに棲息して容易に土人の掌中に落ち其肉は常食の七分を占め、皮は靴、綱並びに舟底を蔽ふに用ゆ脂肪は鯨の脂肪は同途に用ゆるなり

夏間氷雪の融解流失せる頃に至れば南より來る處の日本潮流に伴ふに種々の枯木海岸に漂着す、是れ即ち土人の薪炭となり爐火の材料となる、之を以て夏間土人は木片の蒐集に從事すること甚だし、冬來り氷雪海陸を覆ふて海岸又一物の眼界遮るものなきの時に際しては、粘土を以て造りたる皿樣のものに鯨油、或はアザラシ、油を燃きて爐火に代用す、食器は甚だ簡略にして木製の椀鉢及杓子あるのみ食するに肉叉又は箸の類を用ひず、庖丁と五指の働きを以て爲すのみ又生來五體を洗ふことを爲ず、故に皮膚は其色常に暗褐色を呈し、衣服は油類に汚がれて臭氣鼻をつくも、人は一體壯健にして能く風雪寒威に堪ふ、稀に彼等の苦む處の疾病はリヨウマチス、氣管肢病、熱病の類にして、又初夏五六月の頃雪に輝く日光に射られて眼疾に罹るもの多しと雖も、藥石の之を治するものなきが故に、其苦難を忍んで、自然の平癒に任かせ、來りしが、白人の來航以來遂に恐るべき傳染の梅毒に、精神を狂亂せしむる處の酒精を此の無幸の人類に撒布せり、此害毒たるや僅少の時間に驚くべきの結果を顯はし、既に沿岸土着人口半數を斃せり、加之現今生存せる土人にして此病毒の多少を帶びざるもの殆んど少なきことぞ

土人の奇習

イスキモー族は西半球北緯六十度以上の寒度に住居す大族にして、モレゴリヤ人種の一たるは世の知る處な

れども、其祖先は何族にして何時何邊より來りしやは、土人の文字なく紀號なく、且つ計數の能力甚だ微弱なるが故に、世の探穿者の知るに殆んど途なく、固より此土族中には其口吻に傳ふる種々の昔話多しと雖も、彼等は僅か二十年前の往時すら追算するの力なきを以て更に其時代を知るに由なく、甚だしきに至りては漸く五六才を徑過せる己れの子供等の年齡さへ之を告ぐる能はざるものありと云ふ、

アラスカイスキモー人は身の丈け四尺五六寸顔の形丸いして暗褐色を帶ぶ、鼻は廣遍にして兩眼の即更に丘陵なし、頬骨高く出て眉目も亦秀づ、頭髮荒く其色黑し、男子は其頭の絶頂を剃りて周邊にのみ長く垂ること二三寸、女子は前頭に於て之を左右に分ち、兩端をあみて長く左右の耳邊に垂る、男子鼻下髯を生ぜず、中年後の者稀に之を貯ふるも、至つて疎にして短し、眉毛は冬期に至れば之を截り縮む、男子二十才以上より左右口角の少しく下部に穴を穿ち、角牙寶石を以て造れる裝唇器を着く、女子は下唇より顎にかけ三條の黑線を文身す又耳朶には角牙等より造れる耳裝を帶ぶ、彼服は甚だ單一にして鹿皮を以て製せる二枚の短衣よりなる、下着は毛を肌にし上着は之を外に現す襟には縫付の頭巾ありて僅かに顔を現すのみ、股引を鹿の皮を以て製し漸く膝下に至る、靴は海豹の毛を以て底となしたる鹿皮の長靴を用ひ、靴足袋、手袋も皆鹿皮よりなる、帶ひ鳥爪、或はおゝかみの爪を以て飾りたる熊皮の一重卷にして、後部に狼尾を垂る、女服は男衣より長く殆んど膝下に垂る、而して帶には狼尾を付せず、股引は靴と共にぬい付鹿の脚皮を以て之を造る、男女兩服とも狼毛、又は山猫等の長毛を以て盛かんに其袖口、裾、襟等を飾る、此地の土人は皮の何類たるを問はず、寒氣を防ぐ爲めに毛を其まゝに存し、只裏のみをナメシて用ふ、夏はアザラシ(海豹)の柔皮より造れる不透水の長靴を穿つ、

土人其性質温和にして且つ甚だ謙遜の風あり、又能く外人を厚遇す、しかのみならず、相互憐憫の情深く、一片の肉も之を分配せざるを辭せざるなり、

嚴冬長夜の冬期に於ては夏間鯨船等より交易したる饂飩粉、コーヒー、茶の類を煮て互に往來饗應す、又此間公會所に老弱男女相集まり舞踏を催すこと屢々にして、其樣甚だ奇なり、樂器は法華宗の太鼓と半弓の如き三味線のみ、又狂言にはおかめの如き假面を用ふ、扨て小供の遊戯に至つては我東洋も彼の歐米も亦此イスキモーも殆んど同一なるが如く、石を積み砂を盛りて山河を築し、雪を丸めて達磨大師に擬するなど、又は蹴鞠、擲、すべり等も此の兒童の遊技なり、其外好んで弓、矢、投石の遊を爲す、さりながら土人は一般に酒と煙草を嗜み、酒の如きは其妻子を賣りても尚ほ之を得んことを勉め、其一度之を得るに於ては泥酔するに至らずんば滿足せざるなり、政府は堅く酒類の使用を禁じあれども露國、米國より來る捕鯨者等は毎年多量の酒を密輸して皮類鯨骨と交易す、其價一圓の酒能く八九十圓相當の鯨骨を買ひ得べし、土人は又白人の傳習に依て麥粉と糖水とを用ひ、我が濁酒の腐敗せる如きものを製す、故に麥粉、糖水も亦酒類に次ぎ最良の交易品にして、其他鉛、硝烟、煙草類、布類、庖丁、ノコギリ、針、櫛、茶、ナベ、釜の如きは通常の貨物となす而して其土人より得る處の皮類は白熊、茶熊、黒熊、白、赤、黒、其他各色の狐、山猫、獺、狼、麝香鼠、北極の豹鹿、山羊、鯨骨、海馬の牙等なり、政府は土人に向ひて酒類の外、又後裝銃及び銃砲の使用を禁じあれども、酒類と同じく捕鯨等の狡猾なる密輸によりて、今は沿岸土人一般に之を使用す、故に馴鹿の如きは年を逐ふて其數を減じ同時に遠く山地に移り行けり彼等舊來の獵具は弓矢投槍、係蹄、網の類にして、投槍、網の如きは今尚ほ之を使用せりといふ、

●結婚と祈禱

アラスカ洲中北太平洋に面せる沿岸に住する土人にして米人は之を呼んでアラスカインヂヤンと稱す、彼等は北米内地の兇猛なる銅色インヂヤンとは全く其族を別にすれども、アラスカ土人中の猛族なる彼等は他の二族と全く異なる土音を用ひ、其音聲稍我北海道のアイノ人に似たる處あり性質勇猛にして漁獵をよくす、

面貌風俗よくアイノに似たり、眉目峻しく逆上し、顴骨高く秀ず、頭髮は黒く男女共に之を後部の左右に垂れて敢て結ばず、耳に環をかけ、女子は顏面に松ヤニ、セール油、烟煤等を塗りて其艶をよくす、性懶惰にして深く虚誕に惑溺す、病者あれば之を惡靈の仕業となして更に療養せるとをなさず、醫人山伏を招きて惡魔を拂はしむ、其方法は山伏自から病者の枕頭に座をかまへ家族をして其周圍に圓座せしめ、而して自分は大鼓を敲き、木造の龍頭を振り廻し、大音に惡魔の名を呼ぶ周圍の一座は時々大音をあげて山伏の氣勢を助く、斯くすること終日終夜病者の其騷動に堪へず、自から爲めに快氣を覺へたりと云ひ出すにあらずんば其死に至るまで祈禱を中止せざるなり、病者死する時は石を積みて造りたる穴中に死軀を投じて之を焚く、其灰骨を埋葬せる地上には、狼或は鯨を彫みたる大標を立てゝ惡魔の再び死灰を犯すを防ぐ、又山の靈、水の靈、風の神ありと信ずれども我國の如く社堂を建設して之を拜せず産婦は必ず別室に獨居せしむ其他種々の惡弊ありて、露國人米國人の教會を設け、教師を派遣して子弟を教訓し愚昧なる人民を諭すこと數十年の久しきに及べども、此の弊は依然として今尚存せり、甚だしきに至りては白人の來住以來惡魔の靈は海に山に却て其威を逞ふし漁獵年を追ふて衰微に赴くなど云ふに至れり、山伏は我舊時の法師の如く、子々孫々祖業を繼ぐ、然れども其術に至りては子孫巧拙あり、彼等は斷食苦藥して始めて其術の奥妙を窮むるものとなせり、

土族早婚の弊ありて、小女の年齢十四五才に至れば、其情夫は小女の兩親に就て其娘を嫁らんことを求む、背諾を得れば結納金又は物品を送り吉日を期して其家に赴き、先づ戸外に背して立ち、其招待をまつ、愛婦の一家族は和集まりて、其送り物の好惡を評し、之れに依て招待の可否を決す、送り物彼れ等の意に適すれば小女は出てゝ情夫を招き情夫家に入れば一家親族は祝歌をうたひ或は舞ふ、之より新夫新婦は斷食すること四日各々自から別居すると一ヶ月計りにして再び相會す、

之より全く偕老同穴の契を結ぶ、風習奇と云ふべし、土人の重なる食物は鹿肉、魚肉、海豹、鳥類なり冬は深山に入りて獸類を狩り夏期は其皮を白人の買出人に賣りて、衣服、麥粉、火藥、彈藥等に換ふ、皮類はセーアック、セーブル、ミンク、リインク、獺、山羊、熊、狐等なり、又よく木地物を造り木皮、獸皮を以て美事なる籃、敷物等をあむ、能く弓矢を用ひ投鎗を巧にす、沿岸木材に富めるを以て丸太或は割物を以て家を造り、其内に住居す、船は重に一大木を掘り彫み之を造り櫂は短き手かいを用ふ又土人は一般に頭首を有たざれども政府は堅く酒類の供給を禁ず、土人一部落に酋長ありて軍事を總督す、故に獵地の爭などより屢々戰を起すことあり、政府は之が爲めに鎭臺兵を駐在せしめ不虞の變に備ふと云ふ。

（をはり）

新大陸婦人の服裝

在米國スタンフォード大學　飯島立峯

女學世界第九號より第十一號に亘って米國女氣質と題して私しは現に私が留學して居る處の米國婦人の內容外形に就て聊か申しましたが、玆には其の服裝といふ事に就て少しく申し述べやうとおもひます併し服裝と申しても中々一寸した觀察談で言ひ盡す事は出來ませんから唯其の概略と覺召されたいそこで便宜上左の項目に分けて申しませう

（一）東西兩海岸に大差のある事、（太平洋の側即紐育の方 大西洋の側即桑港の方）
（二）社會階級の間に差のある事、
（三）衣服の種類、及員數の少き事、
（四）老幼の間に區別のなき事、
（五）起居動作に便利なる事、
（六）服制上の缺點、
（七）帽子を盛飾する事、
（八）結髮の事、
（九）靴の事、

（一）東西兩海岸に差のある事、

米國は一名、ニユー、ウオード（新世界）と稱へらる、と

とは、諸孃も御承知の通り、千四百九十二年（今より凡三百年前）に、始めて「コロンバス」に依て、此一大新世界があるといふことを知られたのであります。偖て此新世界の中でも新と舊との區別がありまして、東海岸（即ち紐育の側）諸州は舊邦と稱へられ、西海岸或は太平洋海岸（即ち桑港の側）の諸州が新開國といはるゝ事は、恰かも我日本に於ける九州並に中國邊と奧州或は北海道との比較であります。其理由は詳しく辯明する迄もなく後者は漸々と後に開けた次第で、現に桑港の如きは、一昨年開市五十年の紀念祭を執行したるとを以ても知られます。此新舊の區別は歐洲諸國と新世界たる米國とが、諸般の事に差違のあると同樣に、米國々内に於ける新舊の兩諸州は種々の點に於て又大に差があります。

大体に付いて言はゞ東方諸州は、（紐育方）概して歐洲の風に近い所が多くありまして、何となく古風にして、奧床しい、人に就ていはゞ沈重て大度の風があります、從て衣服の如きも、俗にいふミヲで清秀閑雅なる風があります。衣服に附屬する諸種の飾りも、同一の範圍内を出でません。之は此地方には歐洲より移住したものが多い上に、亦歐洲に近くして其往來も頻繁であるから、自然其故國の餘風を襲ふて、其に接近する結果であらうと思ひます。之に反して西海岸の諸州（桑港方）は、萬事豪奢を競ッて華美であります。人心も隨ッて輕快洒脱といふ方で幾分か浮薄の風がありまするから、衣類等も之に伴ッて專ら艶麗なるのは、自然の傾向であります。換言すれば一般にハデの風が、非常に流行します。此等は歐洲より遊米する人々の眼に著しく感ずる點であります、新開地の風俗が一般に華美である事は、我日本に於ても往々見る所の事實でありますが、之には種々の原因があらうと思ひます。當米國の西海岸諸州（桑港方）の如きは、第一氣候が殆んど四季の區別なく、終始春夏の間にありまして、所謂陽氣の氣候が續いて居るのでありますから、人心が常に浮いて居る、其が萬事に影響して、着類にも表はるゝのでありませう、又經濟上の點から云はゞ、新開地は一般に金儲

が荒い、金融が盛である、從つて金を散することが荒い。換言すれば衣食に奢る風があります。又諸方面から聚り來ッた、所謂一攫千金山師的根性の人が多い、から、自然に衣食住に奢る結果となります。尙其他種々の原因が、斯る陽氣なる華麗なる風を來すのであらうと考へます。

（二）社會の階級の間に差違のある事、

社會の階級とは少し難語でありますが、近き例は往時日本に士農工商の區別のあつたやうて、現今ならば、官吏若くは農、工、商業家又は資本家、勞働者といふ區別をいふのであります。倩て米國に於て、其間の差を申せばウォークメン（勞働者）社會が、最も奢侈で華美であるといふ事は、一般學者、實驗家の認むる所であります我日本に於ても、同一の傾向があることを思へば斯る事は自然の勢と見て可いのであります。斯の社會の華美で、奢侈をする事は、彼等の妻子の着類、又は飮食物の上に於て明らかに、表はれて居るのである。



此事も西方諸州に於ては、特に著しいのであります。信用のある二三の觀察家はこう言ひました、「西方諸州を旅行する時は、汽車の中で殆んど下層社會の妻子と思はれるものを見ない、男にもまして粗暴の振舞をなし、又は身に汚衣を着けたものなぞ決して見受ない。

然るに歐洲では少くとも、中流社會の妻子眷屬と見ゆるものは、何づれも勞働社會である」と言つて居る。元來歐米の二國を比較すれば、米國人の多數は宛も歐洲の中等社會に屬する程度であるとは、多くの人の言ふ所であります。此に米國の下流社會の女子の奢侈でわるといふ實證を述ぶれば、まづ一般書店雜誌店を通して、最も澤山に賣れる書類は多く衣類服裝並に裝飾に關するものである、是は決して都會のみに見る現象でなくして、却て地方村落に於て甚しい、而して其購讀者は主に給金取勞働者の妻女でわるさうな、此を證明する事實は、田舎に於て新流行佛蘭西風の衣裝が多く、見らるゝ事である。單に彼等の盛裝の時、即ち俗に他所行の時に見るのでなくして、平常婢僕の仕事をする婦人に就いても、之を認むること得るのであります。

以上は下流勞働社會の狀態でありますか、中流以上の衣服裝飾に付いては、大凡そ一定して居りまして、甚しく時流を追ふ風は見えませぬ、之は常識智力の遙かに彼等下等社會に優つて居る所より、自然温順なる態度を探り居る結果でありませう。

（三）衣服の種類と員數の少き事、

之は歐米に通じ、亦男女の別なく、一樣の事實でありまず。東方諸州の如く、四季の別わる地方に於ては、夏着冬着の二種類は、是非必要でありますが、西海岸其他南方諸州の如き、氣候に左程の變化もない地方に於ては、殆んど一樣の衣類でも事は足ります、從つて此地方は貧人や學生に向つて、至て經濟的で便利であります。併し一般に付て言へば、夏冬の衣類は別にして居りますが、只色合で分つ位で濟みまして、甚しい厚薄の差を要しませぬ。

一般に種類員數も少い事は確かでありまず。上は上院議員若しくは金滿家、幷に中流下層の兩社會の婦人の衣類に付て觀せても貰ひ、聞いても見ましたが、到底日本に於ける婦女子のやうに、簞笥が幾棹、長持が幾個といふやうなことはありませぬ。大概員數が一種に付て二枚から多くて三四枚であります、先づ常服、他行服、禮服、喪服、其他にて五種あるものとすれば、一種に就

いて三枚平均とすれば、都合十五枚、五枚平均とすれば二十五着でありますが、まあこの位が頂上でせう即ち古いものはドシ／＼賣拂つて、之に金を足して新衣を購ふといふ一事は、上下を通じて行はるゝ習ひであります。切言すれば西洋人は經濟的智識の發達して居るだけ、着類迄も經濟的に取扱ふのであります。日本の婦人一般の習慣たる、衣服の蓄積即ち一度求めたものは、終身は愚か、子々孫々にまで傳へて、員數の多きを誇るやうな事は決してない。何となればたとへ員數は澤山でも、實際役に立つ品が割合に少ないのであります。柄の時勢に適せないもの、身長に合はぬもの、汚損したもの、或は兩親兄弟の遺物、或ひは何々と、是等が積むで山となり居るのであるから、轉居、火災、其他移動の時に、澤山の手を煩はし保存の方法に面倒のかゝるのでありますされば日本人も米人に習つて不用の品をドシ／＼賣拂て、有用の品に換へ、又餘分の手數や、費やを避くるは、實に經濟的であらうと信じます。願くは日本の御婦人方が此點に御注意御賛成あらんことを希望いたします。

一體西洋婦人の服裝を、日本人の眼から見る時は、極めて單調で、變化に乏しい言を換へて言はゞ賑やかでなく、至て寂しい樣に感じられます。第一地質が殆んど一樣であつて、決して日本の如く千種萬樣でない。亦變化即ち種々の飾りを施すべき餘地が極めて少ないといふ事も原因の一です。日本で一番目に觸れて飾りともなる丸帶、帶揚、帶締、其他これに附屬した品の西洋人に更らにないことか、特に其原因であると思はれます、牡丹に唐獅子など、華やかに染出した友染縮緬といふやうなものなく、幾種の色もて織なしたる竪縞、横縞若くは碁盤縞といふやうな變りもないから、實に無味乾燥であるそれ故西洋人か日本婦人の服裝を褒めてに決して飾言でも、諂諛でもなく、實際を言ふのです。

（四）老幼の區別を見ざる事

起居進退の有樣は老幼一樣であると共に衣服に於ては著しい差違がありません。我日本に於ては、第一に

躰格上に非常な差を來すと共に、一般の動作進退も之に伴ふて遅鈍になり、從て之を表證せむ爲めなるか、衣服にも頗る變化があります、米國婦人に就いて見るに、其の所謂紅顔妙齡の淑女も、白髪老齡の媼も、全く一樣の服を着け、帽を冠て居ります、例へば老人でも赤色のもの、粗大な柄のもの、華麗な裝飾を施したものを着て居る、これは日本人の眼から見ては、寔に奇怪に感ずる風躰です。而して之か一般の風でありますから、往々老幼を混視することがあります。之から、をもへば、日本は餘りに老幼の別を立てるかと思はれます、從て精神身躰に自ら老人たる傾向即ち年寄染みた風を增成するの弊害があるかと思はれます。何でも西洋を眞似るではありませぬが、衣類に老幼の大區別を立つることは、少しく斟酌して可からうと思ひます。是れ一方に經濟上の大利益があることは明らかであります。

（五）起居動作に便利なること、

服制は衛生上、經濟上亦は美術上より、大に研究すべき問題でありますが、生れより論すれば西洋の女服は、大に缺點があることは、其國に於ても認めて居ることがあります。數年前世界の服制に就いて、衛生上の優劣を廣く投票に問ひたる結果を、或外字雜誌に見ましたが、最優等は支那服、次は日本服、第三は西洋服でありました。之は主として身躰の發育保護を完ふする點より見たることは明らかであります。併し衛生は躰育を含むで居りますから進退動作を自由ならしめ、運動の輕捷敏活を圖るには、西洋服は首位を占めます。日本服の進退動作に不適當にして、只美の一點より他邦の服制に優るのみの事は、諸孃の御承知の處であります、要するに日本婦人現今の服制では、活潑な運動も望まれず、良人知友と共に、愉快な郊外散歩も困難であります。本人は勿論、同行者も其遅にとして、而かも難澁な步行の狀態を見ては、甚た憐むべきと共に、迷惑を感するは亦少からぬ事であります。事態斯の如きでありますから、一二度すべき戸外散步は一度となり、若しくは蟄居の傾向を來すのであります。之に反して西洋婦人特に米國婦人は、步行頗る敏活にして如何なる山野も平

氣て勇ましく跋跡します、それですから自分も娯み、同行者も愉快であります。之を爲し得るのは、一は服の製法に起因するは言を要しませぬ。

（六）制服上の缺點、

利益の大要は前項に述べましたが、今此に其缺點を短所に付いての一二を記します。其一はコーセットであります、自然の發育を妨げ、一種の畸形たるに拘はらず却て細腰を誇り、以て美人の標本とするの弊風がある、これ恰かも支那婦人の纏足と等しく、更に文明國の一大瑕瑾と謂つて可へでせう。近年其弊害を認めて、數多の衛生雜誌及び一般の雜誌紙上に痛く非難の警鐘を鳴して居りますけれども、其効果は殆んど認められませぬ。唯に普通一般の女に其迷夢の覺めないのは、倘恕すべき點もあれど、堂々たる大學の敎育を受け居る女學生、若しくは明識ある婦人間にて、毫も悟了する事のないのは、大に怪むべき事でありまして、實に習慣を除くは、宿痾を治療するよりも難いと謂ふ諺に漏れません。

其二はスカーツ（裾裳）の長きに失することであります。之は今日我國の女學生間に流行して居る袴に相當するもので、昔の裳に當ります。即ち男子のズボンに相當するもので、西洋婦人は終始之を着けて居るものであります。然るにも拘はらず、恰かも我婦人が長裳を愛し、用ゆると同じく、西洋婦人の此スカーツは、常に地上に曳き歩るくのであります。日本では戸外に出づる時は、之を揚げて短くしますが、西洋では戸の内外はありませぬ。それですから泥濘の時は勿論乾燥の時も衣類の汚泥し塵埃に染むことの甚しきは言ふまでもなく、従て衛生上に害をなし、衣類の經濟に大不利益なる結果を來すことは、明らかであります。其三は襟の緊縮なる事であります、男子は同樣のネツクタイを用ゆる女も、澤山見受けますが、之は別に害がない。併し多くは絹布類にて首を緊しく卷き居りますが、之は血液循環の自由を妨ぐることは、明らかであります から、彼の腰を締め居ると同樣に、衛生上少なからぬ害あることゝ思ひます。併し彼等自身に於ては習慣の魔

力によつて、何の窮屈をも感じないと言ふて居りますが、これは習慣の怖るべき事で。是等を參考して見ますと、日本婦人の服裝は、比較的身体に自由でありまして、寧ろ解放に過ぐるのが缺點となつて居るかと思はれます。

例へば日本婦人の歩き方を見ますれば、萬人擧て內股に歩行いて居ります。即ち足先を內方に向けて、俗に言ふ八の字を踏むのが、一般の禮法であるとか、或は女の優美なる點であると傳はつて居ろ。併し能く分解して見れば、服裝上止むを得ざる理由から、斯の風が起つた事が分ります。即ち若し外股、即ち足先を外方に向けて、逆の八字を踏で御覽なさへ。衣類の合目がとけて、肉體が露はれ、忽ち裸躰非攻擊にも優る大騷動を起こすかも知れぬ。之が爲めに成るべく內股に歩て着物の裾の開かぬ樣にするといふ習慣が、即ち今日は禮法と誤信せられて居る。（實際は禮法に相當しませう）然るに此の點が西洋婦人は大に違つて居りまして、私のやうな日本婦人に目慣れたるものは、實に憎らしい程

に逆八の字、即ち足先を外方に向けて歩行いて居ります。日本にて軍人は、足を短形よりも少しく狹く開くと云ふ事が、一般の定めでありますが、米國では決して軍人のみでなく、一般の男子、一般の婦人、皆此の規定に從つて居ります。否其步行法が彼等の生來の習はしてある事が分ります。

序に今一つ步き方に付いての相違を述べますが、米國婦人の大股に步くには驚きました男子と少しも異りがない。常足にても我々よりも速かでありまして、實に活潑で壯快なる步き方であります。日本の御婦人は之を御轉婆風であると評を下さるゝに違ひないと思ひます。併し斯る評を耳にする間は、到底女子の體育も覺束ないと信じます。而して日本婦人はと言はゞ小股に小足に足を曳みて步行く之が禮法である謂れはて居ります。然るに今日は禮法かも知れませぬが、其根本に立戾ッて考へて見れば、矢張前者と等しく、服の製法上止むを得ざる點から、出た老慣であります。大股に步けば前が開く、開けば風俗壞亂となる、遂に聖人をも俗

化せしむるの憂いがある、其所で小股に歩いて、着類の締りを能くするといふ事が、嚴しき敎となつたのであります。若しも服裝が然樣で無かつたならば、或ひは少くも男子と同樣に歩行も出來共に手を携つて山川風月の樂みも爲すことを得、食後の戸外散歩も出來たのでありませう。從つて男子の風儀も今日の如く、惡臭紛〱たる事は少かつたかも圖られませぬ。何となれば滋味溢るゝ夫人息女と共に、自然を愛し、無言なれども有情の草花を賞するなど、苦樂を信實にするの機會を増し、夫人は常に良君に近接し得る結果として、良人の邪道に踏み入を戒むる機會が多いからでありませう。之に反して米國婦人が、外灣で且つ大股に所謂大道を横行濶歩するの風儀を爲した所以は、彼等の服裝が毫もさる懸念がないからで、彼等の半身以下に着くる下着及び上裝たるスカーツは、如何に濶歩するも、肉體の露はるゝ慮なく、亦自由なるが爲めてあります。現今我日本に於ても、女子の服裝の改良を唱ふる樣になつたは、大に慶すべき事であると喜むで居た所へ、米國婦人の狀態を見て、益々其必要を感じました。

（七）ボンチツト（婦人の帽）

日本で婦人の頭飾には、なか〱の大金を要する事は、私の常に耳にする所でありますが、米國婦人に付いても、類似の事があります。即ち帽子を盛飾する事であります。御承知の通り、頭髮直接には或場合を除いては、飾を着けませぬ。其代りに、ボンチツトに金を投じます。私は此飾りを評して越後獅子と言つて居りますが、飾りの多い程、如何にも獅子の房々したるに似て見えて、日本人の眼にはドーモ相當しませぬけれども、彼等は大に之を誇るのであります。之に付いて一種異樣の感を懷きました事は彼等が兎角鳥獸の毛皮を愛する癖がある。日本婦人は一般に、斯る品は之を飾りとも思はず、之を嫌ふ傾向があります。然るに米國婦人の中には、日本婦人の最も憎惡する蛇の蛻を、ボンチツトの周圍に卷いて居るを時々見受けました。其他之と同樣のことが、多くあります所から考へて見ますると、兩者の間には餘程精神的傾向の上に差があること

が明らかでありまして、啻に體格上の差異のみでないといふ事が、注意すべき一點であります。

(八)頭髪の事、

我邦にては身分年齢に從て頭髪に、種々樣々の結ひ方がありますが、西洋婦人は一般に、所謂束髪であることとは、御承知の通りである、併し小學時代の幼女は一般に束髪でなくして、所謂垂髪であります、然うして日本では、束髪と云へば必ず髱も鬢も全くなきもの丶樣に心得てか、殆んど之を見ませぬが、米國婦人に付いて觀れは、二者ともに丁度我邦固有の結び方と同樣に、澤山の形があります。而して帽子を冠りますから髷か後方に下つて居ります、此二點が日本風の束髪と異る所てあります。

偖て米國婦人の頭髪の事に付て賞すべき事は左の數點であると思ひます。

(イ)毎日一回櫛を入る丶こと、夜に入り寢床に就く時は、髪を全く解放して、寢る習慣になつて居る。(怠りて實行せぬものあるは東西同一なり)從つて起床後必ず之を結ばねばなりませぬ。

(ロ)鬢付油の類を使用せず、之を用ゐぬか一般てあります、其か爲めに兎角蓬々たる頭髪のあるは、日本婦人よりも多いのである、併し稀に用ゐる人あるも、極めて淡泊なる香油に過ぎませぬ。

(ハ)前二項の結果、日本にて往々臭氣芬々として鼻を掩はんければならぬといふ如き、不都合なる婦人は米國には斷してありませぬ。是は外部に對して、斯る不體裁不都合なきのみならず、其人自身の衛生上の利益は、非常に大なることに屬します。

(ニ)束髪の利益は、解結共に簡易なる事、從つて終始清潔にするを得る事、并に運動の捷輕活動に便なる事等である。特に最後の點は大に注意を要すべき點である。日本に居ました時に、事に當つて髪か解けるとか、壞る丶とか云ふ事を、婦人の口から往々聞きました之を推考しますと、女學校に於て運動の時に、此心配から運動を嫌ふ傾向が、確かにあると思ひます、今日女子體育の必要なる時に際し、結髪法の改良も大に緊要で

あると信じます。

（ホ）白粉の事　之は東西を通して婦人化粧品の一つである。併し日本婦人と異なる點は、西洋婦人は概して普通學の素養があるから、鉛毒の如何は十分に承知して居ります。從つて斯る分子を含むものは、使用しませぬ。且一般に白粉もありますが、多くは溶液に爲て居ります。之には種々の種類がありまして、之はミセス用、之はミス用、之は家婢用といふ別もあり、又各等級の中に澤山の種類階段のある事は、何品にも異りませぬ。序に述べますが、當米國では男子用も、此等の種類の中にあります。

（ヘ）剃刀を用ゐざる事　化粧の一に加はる事ですから、頭髪の事の序に、此剃刀の事を記します。日本男子が弊衣破袴、鬚髪蓬々たる事を以て、却て青年の特色とし、質素、朴訥慷慨家なりと、人より稱讃せられ、已らも以て得意として居ますが、米國の男子は青年と老年とを問はず、殆んど毎日若しくは隔日には、必ず剃刀を顔にあつるのを、習慣禮義として居ります、之に反して婦人は之を用ゐざるを以て習ひとして居ります。さればとて顔や首に全く毛の生ないのではありませぬ、婦人の中にも、遠眼でも認むることを得位に口鬚の生えて居るのを、澤山見受けます、それでも剃刀は用ゐません、況して顔一面に薄毛の蓬々たるは、窈窕たる淑女の中に一般でありますが、其は一旦剃刀を入るゝ時は、漸々毛を粗大に、且つ濃黑にする爲め、又皮膚を荒くするの虞があるから、用ゐないと云ふ事であります、兎に角我等の考へならば、奇な習慣であると感じられます。

（九）靴の事、

此事は前にも大略述べたかと思ひますが、なほ一二の點を記せば其種類は場合に應じて、樣式を異にして居ります。例之ば禮服用、夜會用、舞踏用、常用旅行用等に從つて、異つて居るのでありまして、形は成るべく小形を貴むで居ります。從つて足の小さき方が、交際社會に褒めらるゝといふ風がある（感心すべき事ならず）其結果は幾分か自然の發育を妨ぐる傾向なしとも云右の次第であるから、靴は足尖幷に踵の成るべく小さき

ものが、婦人社會一般の用である而して常用は概して黒革である、變色のもの又は革製でなきものは、其他の場合に使用するのである。

出雲の狐

(歐人の日本風俗觀察記)

帝國大學講師　小泉八雲述
下平龍崖譯

こは東京文科大學講師ラフカヂオ、ヘルン氏の(日本瞥見記)の一節なり。氏は米國人にして初等教育を佛蘭西に受け、後米國より某新聞の通信員として本邦へ渡來し、出雲松江にて夫人を娶り、遂に日本に歸化して小泉八雲と姓名を改めしが、再來島根第一中學校、第五高等學校等を歴任して、今や小泉八雲の名を以て、東京帝國大學(文科)の講師となりぬ。始め阿彌陀教の英語、エマーソン、ホーソンの余集を携へて、孤身飄然長崎に上陸した無名の一記者は、今や堂々たる帝國大學の教官となるに至り其の牛込の寓居にては珍書萬卷、由來交際嫌の氏身を書齋の間に横臥せしむ

(一)

日本の山野を跋渉すると、能く吾人の目に付くは田舍道の傍や、古い森の中や、到る所の岡の巓、又は村端に、或る小さな神塔の祠を見受けることである。其の祠前に、若しくは其兩側に、互に對ひ合つた狐の石像が置かれてある。其の石像は一對あるが常であるが、時としては十二、二十、時によると數百も見受ける。斯く多くの數の在る場合には、其の偶像の多くは頗る小いのが習ひである。又、有名なる大都市に於ても、或る宏壯なる宮の前に、其不像の高さ、數呎を越へない程の玩具のやうなものから、其の臺石のみでも人の頭を超ゑる程の巨像に至るまで、あらゆる形の石の狐が、數限りもなく併んで行列正しく殿堂のぐるりに蹲踞つて居るのを見る。誰も知る如く、斯の祠堂は即ち、「稻の神」なるイナリサンに奉献せられたものである。(稻荷祠を稻の神とする歐人の觀察)

日本の山河を縱橫に跋渉したあとで、一と度訪ふた塵の田舍の景色を追懷すると、其の記臆の片隅には、かならず、一對の鼻の缺けた青灰色の石狐の像が浮んで

來るに相違ない。首府の近在、のみならず東京の內、時によると其の墓地の域內にすら、恰も獵犬のやうにすらりとした、頗る美しい、理想化された狐の像を見ることがある(理想化の字義頗る妙)。此等の狐は水晶、石英或は其の他の透明な物質で造れた綠色若しくは灰色の長い眼を有つて居て、神話的意想の如き一種の强き印銘を人に與へる。深く內地に入るに從つて、其の狐像はおひ〳〵粗拙になつて行く。別して出雲に於ては、此の種の彫像が、全く原始的の相貌である。此の「神の口」と稱せらるゝ出雲には、如是狐の像が、其の數も、其の種類も、實に驚くべきほど夥しいもので、或は滑稽なもの、或は幻怪をきはめたるもの、異形なもの、奇怪なもの、實に數へきれないばかりで、其の多くは皆な荒刻みのものである。が、荒刻みだと云ふて、自分は決して其の興味を殺くを得ない。すべて東海道の彫刻師の製作は、輕き優麗と、幻怪とに於て、習俗的の技術意想を示して居るが、之に反して、出雲の田舍の狐は、優麗な處が少しもない、全く怪異をきはめて居るのである。

しかし、其の途徹もなく奇怪な鑿の痕に、巧に製作者の個人的想像を現はして居るからおもしろい。其の風といへば、誠に奇怪なの、變徹なの、いやに奇古たの、氣のきかないの、道化たの、意味ありげなの等さま〴〵で、或は眼を眤つて居るのがある、伏目になつて居るのがある、尻目をして居るのがある、見て見ぬふりをして居るのがある、皆あやしげな笑を含んで人を見て居る。而して其の長ひ耳を振り立てゝ偸み聽いて居るかのやうに見える。口は開いて居るのもあれば、また閉ぢて居るのもある。其等の狐像はみな、彼の鼻の缺けた先生に至るまで、各々おもしろい特質を具へて居て、其の多くは、いやに人を嘲弄したやうな風を示して居る。且つ又、此等田舍の狐の古き像は、其の東京に在る近來の眷屬中には見るべからざる一種の自然の美を有して居る。即ち、彼等が其の臺石の上に坐して、各世紀の退潮滿潮に傾聽し、あやしき笑をおびて、人類を嘲りつゝありし間に、「時」は、美しく和かなる色の、種々の摸樣ある衣を彼等に被らしめた。彼等の脊は、きはめて美

しい綠苔の天鵞絨を以て裝はれ、其の肢も、亦た同じく摸樣つけられ、其の尾は、纖麗であつた。「フンシ」(粉賦？)も色褪せて、微かに金色銀色の昔の面影を留めて居る。而して彼等の占めたる場所がまた、最も愛たいところなのである。即ち、高く蔽へる森の影には、綠なる薄色の裡に、「ウジヒス」歌ひ、聲なき祠堂は寂然として立ちて、殆んど土色の菌類から出來て居るのではないかと疑はるゝ迄苔むした石の燈籠及び石の獅子を扣えたる處、其間に彼等は寂寥として坐つて居るのである。

さて其の狐像の何れを見ても、千中の九百までは、皆其の鼻が缺けて居る。彼の澤山の出雲中の狐の鼻の缺けを集めたならば、松江市中の本通を、端から端まで敷きつめることが出來るであらうと思はれる位である。(歐人の觀察はいつも此のごとし)自分はどうしても其の譯がわからなかつた。然し日本の一友は、自分の斯の怪疑に答ふるにきはめて簡單なる一語を以てした。曰く、子供。然り、子供！ 此の簡單なる一語の中には、極めて深長なる意味を含んで居ることを味はゝねばならぬ。

（二）

稻荷と云ば狐神のことゝ、誰も知る處である。此の稻荷なる稱號は、「稻の神」なる意味を示して居るが、此の神祇の昔の名は、「食物の大叫神」(August Spiritof food)であつた。即ち彼は、古事記に於ける濶苷御靈尊であるのだ。古事記、及び其の註解者の說に據て見ると、豐受姫神、一名鵜茸御靈は、素と女性の神祇である。加之彼の神學の泰斗なる平田翁の云ふ所によれば、此の稻荷樣と稱する如き神祇は、眞實、全く無かつたものである。此の稱號は途方もない誤謬で、全く世の俗人が、稻荷神なるものを捏造したのである。とは云ふものゝ、俗傳を研究する者にとつては、たとへ存在するものと雖も、決して無意味ではない。稻荷の神話的存在に就ては、京都に於ける其の宏壯富麗な祠堂が、何よりたしかな證據であるのだ。以下、自分は彼を男神として說く積りである。といふのは、繪畫、彫像何れを見ても、彼は盡く男性の神祇として見なされて居る

からである。

狐禮拜と其關係を示せる「三狐神」なる稱號は、遙かに下つて近世に得た彼の名である。さて此の狐を以て超自然のものとなすの想像は、第十世紀頃の以前に於て、日本へ紹介せられたものとも思はれぬ。此の神祇の祠廟は、數多の狐の彫像と共に、到る處の宏大なる神塔の殿堂の廣庭の中に見ることが出來るけれども、日本に於て最古の神塔の祠廟と稱せらるゝ、岐築の大社(出雲大社)の廣大なる神苑の中には、たとへ其の隈々を求むるも、一個の狐像をも見出し得ないのである。是れは僅に一考の價値がある。彼の稻荷の形を、鬚髯を蓄へて白狐に乘れる男神としてあらはしたのは、遙に近代の技術であつて、豐國其の他の人々の手に成つたものが多い。白狐は日本の美術家の得意な題目である。白狐のかたを描いた頗る美くしい掛物が、西暦千八百九十年の東京博覧會に陳列されたことがある。燐光を放てる狐の像は、彼の古色蒼然たる繪畫の中に、よく見る所である。此等の繪畫は、現今頗る珍奇として世に愛玩されるので、其の繪師等も近來に至つて、其の名を世界に知られるやうになつた。時として狐は幽かなる火の舌(狐火)をとろ〱と其の頭上に燃しながら夜中彷徨せるかたに描かれて居る。彫刻に於ても、繪畫に於ても、狐の尾端は、通例、古佛教の技術的に、符咒的の寶玉を以つて飾られて居る。自分は明煌々たる寶玉を其尾尖に保持せる白狐の掛物と一幅有つて居る。これは松江の稻荷の祠(御城山の稻荷樣)で買つたもので、其手際は甚だまづいが、一種おもしろい興味を有して居るので、未だに大切にし有つて居る。

稻荷は、啻に稻の神として崇められて居るのみではない。日本には實に澤山の稻荷がある。恰も古代希臘に、ヘルメスとか、ヂウスとか、アテナとす、ポセイドンとか種々の名の神祇があつたと同じやうである。學者は此等の神祇に就て、いろ〱と理窟をつけたけれども、思ふに普通の人民の想像といふものは全く之に異つて居て、恰も此の日本に於ける稻荷樣と同じやうであつたに相違ない。

稲荷は其の異つた性質にいろ〳〵と理窟をつけて、夥く其の数が殖された。例へば松江にカミヤサンの稲荷様といふのがある。是れは出雲地方に流行するひどい咳嗽、及風邪の神である。此の稲荷がまた、河内村にも一つ其の祠を有つて居て、其處では「風の神」なる殺風景の稱號の下に、非常の崇敬を受け、多くのカミヤサンの稲荷の中でも、遙かに鄭重に禮拜せられて居る。之に祈願をかけて咳嗽や風邪を癒して貰つた者は、其の祠へ豆腐の供物を捧げる習ひである。

おははの村にはまた頗る有名な一種の稲荷がある。其の社の壁には一個の大きい箱がぶらさげてあつて、其の中には、小さな粘土製の狐が一ぱいに入れてある。参詣人にして、何か祈願のあるものは、此の狐を一つ袂へ入れて歸る。而して満願の日まで鄭重に之を捧持して、あらゆる崇敬を盡す。祈願満つれば其の狐を社へもつて行きて、もとの箱へ收め、若し出來得る者ならば其の社へ些少の供物を捧げるのである。

稲荷は屢々醫者として禮拜せられて居る。しかし富を授くるの力を有せる神祇として崇敬せらるゝ方が、なほそれよりも多い。（是れ多分古代日本の富は凡て米の石によつて算へられたからであらう）だから、彼の狐に、時として其の口に鍵を喰はへて居る形にあらはしてあることがある。而して富を授くる神祇であると云ふ譯から、稲荷は又或地方では娼妓社會の特別なる神となつた。其の一例を擧ぐれば、横濱の近邊に一見を値する稲荷の社がある。此社は、辨天の社と同じ境内に立つて居て、稲荷の社としては普通のものよりもずうと宏大である。先づ之に近くと、互に前後相重なれる鳥井の一列がある。鳥井は各々其の高さを異にしてゐて、社に近きもの程、其形を少さくして居る。形の小くなるにつれて、益々密接に立てられて居る。各鳥井の前には、其の左右に一對の奇怪な狐が安置してあつて、第一對のは獵犬位、第二對のはそれよりずつと小く、凡て鳥井の形の小くなるに従て小さくなつて居る。社の木造の階段の下には、其の首の周圍に赤いきれを纏ふた暗灰色の石の狐の、頗る優麗な一對があ

る階段の上には、又た夫れ〱其の兩端に一個づゝの狐が在つて、上の方に至るにつれ、次第に其の形を小さくして居る。入口の閾の上には、頗る小い三吋より高からずと思はれさる二個の狐があつて、空色の臺の上に坐つて居る。此等の狐は皆其の尾端が黄金色に染めてある。さて社内を見まはすと、左手の方に長い、低ひ机に似たものがあつて、其上には彼の入口に在るものよりはなほ小い、數千の狐像が安置して在る。又、釘を嵌めた木の底を有して、硝子の側で圍んだものがあつて、其の釘の上には、祈願の蠟燭を立てるやうになつて居る。

さて氣をつけて見て居ると、美しい唇を染めた、麗しい昔の服裝をした處女でもなければ、人の妻とも見えぬ婀娜な娘が一人ならず、二人ならず、斷えず詣でに來て、階段の下に到り、入口にある錢箱の中へ貨幣を投げ入れて「オロウソク」と呼ぶ。すると奥の方から一人の老女が、火を點した蠟燭を手にして、神前へあらはれ出で、かの燈籠の釘の頭へそれを立てゝ退く。斯の蠟燭の供物には、必ず之に幸運を希ふ秘密な祈願が伴ふて居るのである。彼の狐の首のまはりに纏ふた赤いきれも、亦た祈願のために献げられた供物である。

(三)

出雲の國に於ては、他の諸國に於けるよりも、一層多くの狐像は見受けられる。實に此の像は、稲の神として信仰せらるゝのみではなく、其の他の點に於ても、多くの農民より敬信せらるゝ一種の偶像である。云ふ迄もなく、神道上より與へられたる、稲の神としての信仰とは、全く關係なき別物である。下等人民の間には、只狐其の者を禮拜する虚誕極まり無き有樣のものとはなつたのである。

本來、狐は稲荷に臣屬する神聖なる使介であつて、其の、關係は恰も、彼の金比羅神の蝙蝠、春日大明神の鹿、大黒の鼠、蛭子の鯛、辨天の白蛇、毘沙門天の百足虫に於けるが如きものである。然るに永年の經過と共に、主客其の位地を轉じて、今や狐は神として崇められる樣になつた。狐を信仰する證據は、單に石狐像が路ち

れた故のみではなく、殆んど凡ての稲荷社の後壁に、地面より高きこと二尺餘の所に、穿かての一個、又は二個の徑八寸程の圓形の穴がある。之れは狐の出入に便にしたもので、時としては滑板の作用により狐の意のまゝに出入自在にならしめたる穴さへもある。若し其の穴の中を窺ふ時には、豆腐の如き狐の嗜好する供物のあるのを見てあらう。又屢ゝ孔の附近の木の切株の上や、小高き滑らかな土地などに、米粒の散亂しゐるのを見るであらう、又時としては百姓共が孔に向て、祈願拍手、病氣本復、災難退除などの爲めに、其の米を戴き居るのを見てあらう。斯る孔に出入する狐は、所謂百姓がお狐様と崇むる所のもので、目にて見る能はざる神狐で、偶然形を示すことがあれば、彼等は即ち白色なる毛色のものだと云ふであらう。

狐を種別すれば幾多の種類がある。二種に區別して單に稲荷狐（お狐樣）野狐（きつね）とし、或は四種に區別して、白狐、黑狐、靈狐、神狐とし、何れも魔力を有するものとする、或は三種に類別して、野狐、人狐、稲荷狐とする。然れども多くは野狐と人狐とを混同し、又他方では稲荷狐と人狐とを同樣に考へるものがある。斯の如く、誰人も此の三種を確然と區別する事は出來難く、況してや、百姓の混同するのは無理もないことであらう。且又、此の區別は土地によりて異るものである。余は、幸にも狐の迷信深き出雲の國に十四ケ月間滯在して、多少得る所もありたが故に、狐の種別に關して、玆に其の概略を述て見やう。

凡て狐は魔力を有するもので、善惡二狐に區別するが、彼の稲荷狐は善狐で、惡狐は善狐を怖がるものである。惡狐の最も甚だしきは人狐であつて、人身に乘り移つて害惡を逞ふするものである。人狐は其の形狀恰も「いたち」に似て、其の尾のみは狐の特有のものである。通常他人の目には見ることが出來ぬけれ共、其の主人なる狐憑きの目には見へるとのことである。好んで人の住居に住み込み、主人より養はれ、其の取扱ひの叮嚀なる場合には、其の家に福を持たせ、又務めて水田及び飯焚釜に水を供給すとのことだ。然れ共若し人狐を

して怒らしむるときには、其の家に患を來し、又は秋の收穫なども皆無ならしむとのとである。野狐も亦た惡狐の一種であつて、時として人に憑くことがある、而も最も得意な所は、人をうまく誑す魔力を有すので、如何なる形にも化けて、其の身をくらますことが出來る。只大に遇ふ時は、直ちに化は見露されるから、彼は非常に犬を恐怖する。百姓は野狐を殺し得るが、後に至りて其の狐の仲間、又は其の狐の氣の爲めに誑さるゝとのことである。然し其の狐の肉を食たものは、其の後決して化さるゝことはないと云ふ。野狐も時々人家に住み込むことがある、其時は形の小なる人狐と共に同宿するとのとである。或る人民は云ふには、野狐が百年も老ゆるときには、其の毛色は全く變化して、恰も雪の如くに眞白となりて、稻荷の狐の上級に進むものだと噺された。

斯かる信仰に付きては種々の奇怪なる、矛盾せる話もある。故に、狐の迷信を説かんには、之を信仰する人が餘りに種々の癖を云ひ、終に複雜となるのみならず、其の元素たる狐其の者にも種々あるから、甚だしき困難を感ずる、狐の迷信は、古來支那より傳はりたるものであるが、加ふるに神道によりて種々に變更し、廣汎せられ、延ひては佛徒の怪談、奇術と和合併して、非常に奇怪至極のものとなつて來た。然れ共、概するに、百姓は狐を恐怖する所からして、終に信仰するに至つたものであらう。

（四）

昔に於ても、特に大博學者の著書は兎も角、も一般通俗上より觀察すれば、狐の異りたる種々の階級、將た、稻荷としての狐と、妖術を逞ふする狐との區別の如き點に至りては、今日に於けるよりも多く注意せられたりとは思はれざるが如くである。今現に奈良東大寺に保存せらるゝ、彼の秀吉より狐の神へ遣した手紙を見るに、誠に其の當時は、稻荷の狐と、誑す狐とは同一視せられたることを窺ひ得べきである。次に其の手紙を載けて見やう

一書拜呈仕り候尊下の統御の下に屬する一狐は余

の召使の一人を証しあまつさへ彼并に其の他の者共をして非常に困却致させ候間此の旨御進達申上候余は貴下に向かつて事の斯く成り行き候事實を逐一御吟味下され且つ貴下の使臣は何故に斯の如く彼を困却せしめたるか其の理由をたゞされ尚ほ其の結果を余に御通知せられんことを要求致候

若し其の間の結果彼の狐にして其の行爲に相當なる理由を辨解し能はさるときは直に捕縛致され候上相當に罰せられ度候若し貴下に於て躊躇致し候へば余は此の土地に於ける狐を一匹殘らず殺戮致すべき命令を發すべく候

貴下若し事の事情を知らんと欲し候へば如何なることなりとも逐一神官吉田に向かて御尋問下されたく候

以上亂紙禮の段は御詫し有之度斯の如くに候草々

京都にて

第三月七日　太閤秀吉

稻荷大明神殿

然れども或る地方に於ては、武士が稻荷を尊崇する點よりして、二者の間に或る確然たる區別は設けられて居る。出雲の士の如きは、是を稻荷の神として祭りたるが故に、云ふまでのなく、誰れも彼も之を尊敬する念は深い樣である。現に、松江に於ける殆んど凡ての古き士族の住家の庭園には、祠前に小さき石狐像を置ける稻荷大明神の祠を見受ける。而して下等社會の想像によれば、凡ての士族の家族は、狐を有するものとした。然し士の狐は少しも人々をして恐れしむるものゝ類ではない、彼の所謂良狐なりと信ぜらるゝものであつた。彼の人狐に付ての迷信は、封建時代に於ては、何れの士族の家と雖も之を信じ、以て恐怖の念を懷き居るが如き樣子はなかつた。が、今日士族の或る家族が、迷信の犧牲となるに至つたのは、彼の迷信強き町家人と婚嫁を通じたるより出來た結果である。

出雲の松平大名(昔の殿樣)は、最も大なる狐の所有主として百姓仲間に知られて居た。松平家の大名の一人は、常に東京への使者として狐を使用するものと信

ぜられた。尤も百姓共の一般に許す觀察によれば、狐は數時間のうちに、横濱から倫敦まで旅行することの出來ると思ふて居た故である。而して松江には今も尙ほ昔の傳が殘つて居る。夫れは東京の近くの或る「わな」で、一匹の狐が掛かつたことがあつたが、其の狐の首には、やつと其の日の或る朝に書かれた出雲の大名の手紙が結んであつたと云ふ。尤も狐の使者は、人目には見えぬ樣に旅行するものだけれ共、若し一朝「わな」にかゝり、又は人手に罹つて殺されでもすれば、其の魔術を失ひ、本體が見える樣になるものとの事である。松江の「御城山の稲荷樣」と云ふて、昔しの城の内にある稲荷の堂は、千萬の石狐像が置かれてあるから、土地の人民は是を以て松平樣が信仰するのは稲荷でない、却て狐を信仰する明白な證左であると考へて居た。

然しながら今日とても、彼の稲荷としての狐と、妖術を逞ふする狐との區別は、生物學上の論據よりして、特異の點を説明するに足る程の區別は立てることが出來ぬ。尙且つ、「狐の氣」即ち狐の主腦と、「食物の大明神」（稲荷の神たる稲荷と云ふに非らざるか）との間の區別さへも、彼の文士なるものが、單に稲荷なる名によりて兩者を思考するから、さつぱり分らないように混雜して仕舞ふた。昔に古代神道の神義によれば、「食物の大明神」に就ては、尤も嚴格に説明したけれども、狐の事に關しては何とも云ふてはない。即ち兩者の間には少しも關係がなかつたのだが、而も出雲の人民は「カツリツク」教の信徒がする樣に、自分の主腦から割り出して神義を造て居る。若し人にして其の人民に向つて、彼等は稲荷を惡魔として恐れて、夫れが爲めに尊崇するのであるか、又は、稲荷の狐は善なるが故に尊敬するのであるかと問ふならば、彼等は、即ち稲荷は善なるもので、又稲荷の狐は善なるもので、決して惡魔を逞ふするものでないと答ふるであらう。彼等は狐には二種あると信じて居る。一は白く、他は黒い、白き狐は尊敬せられ、黒き狐は殺さるべく、而して其の善なる白きは、「コンコン」と云ふてなき、黒くして惡しきは、「クワイ〱」となくものである。そ、然し實際狐に憑かれた人は「己れ

は稻荷だ」「たまぶしの稻荷だ」とか、又は、何處の稻荷とかて大聲で叫めくか常てある。

（五）

狐は三つの惡ひ事をする風だあると云ふので、出雲の國ては、奇妙な程非常に恐怖の念を懷て居る。

其の第一は、人に惡事の仕返をする爲め、又は惡戲をする爲めに人を誑す事てある。

其の第二は、或る家の召使などゝなりて住み込み、隣家の者をして大ゝ的に恐怖せしむる事である

其の第三は、最も惡ひ事て、或る人民に乘り移り、非常に殘酷に働き、其の人をして狂氣とせしむることとである。此の患に罹つた人を「狐憑き」と云ふ。

魔狐が人間を誑かす爲めに用ふる尤も得意な形は、美人に化けることとである。稀には婦人を誑す爲めには若き色男然として現はれることとである。狐が美人となつて人を化かす仕方に付ては、非常に多くの話しが言傳へられ、又は、書かれもしてある。而して男子をして自由自在にならしめ、果ては男の身に付けて ある凡てのものを奪ひ取りて仕舞ふ樣な恐ろしい事がある。

手管のある女は、一般の人より非常に賤められ、擯斥の一言として彼の女は狐であると呼ばれて居る。然し狐は決して人の形になり得るものとは信ぜぬ。が、狐は或る魔術の力により自分が人の形になつたと人が思ふ樣に欺くか、或は、ある魔い氣を人ゝの周圍に撒ひて斯く人を欺き得るものだと信して居るが一般である。

狐に決して何れの場合にも惡戲なことをする爲めに婦人の裝をして現れるものではない。美人を裝ふ女狐が、男子と結婚して子を生んだと云ふ話しは、二三にして留まらない。而も其の中の一つは、旨く行はれ、夫婦の愛情も出來 凡て滿足に行はれたが、家庭の幸福は、只其の產れた子が奇妙にも好んで生物を食ふ性質があつたから破綻を生じたとの事である。

狐は只人を苦しめる目的丈てあれは、常に婦人にのみ化けるのが最上の策とも限らんのである。中には女子の情にさへ染まぬ男子も數多あり。併し狐は決して化ける手段のさきに苦しむものではない、彼の「プロテ

アス（海上の神にて萬物に化け、凡てのものを自由自在になす）の神よりも多く行ふ事が出來る。加之、狐は人に物を見せしめ、聞かしめ、將た想像せしめんと欲するときに、其の通りに人をして見せしめ、聞かしめ、將に想像せしむることが出來る。彼は人をして其時以外、將た其場以外の事とも目の前に示すことが出來る。即ち彼は過去を追懷せしめ、又は未來を洞察せしむることをも出來るのだ。此の力は、泰西の文明思想が輸入せられても、打破ることが出來ぬ。玆に一つの話しがあるが、彼は數年前、東海道線に幻影の列車を走らしめ、會社の機關士をして大に驚かしめ、且つ恐怖せしめたことがあるではないか。然し一概に云へば、野狐は凡て寂寞たる場所を撰ぶものだ、夜に至るときは、彼は提灯の光に似たる狐火と云ふ奇妙なる、怪しの火を造り、且つ是れを持ちて、難義の土地を彼方此方に飛び廻る樣なことを好んで行ふ。而して人々にして彼の惡戯を免れんと欲するときは、兩手の十の指を以て菱形の孔の出來る樣に、妙な工合に組み合せ、此の孔を通して光の方角に向ふて、如何に遠くでもよき故に、息を一吹し、其の上に一種の經文（狐火か本火か吹て見れば解かる）を唱へ、此の怪の火を見るときは、最早其の怪しの火は消へて仕舞ふ。斯くして惡戯を免れることが出來るとの事である。然れ共狐が災を行ふの力を示すは夜中に限ると云ふではない、眞日中にても彼は人をして命を失はしむる處に行く樣に誘ふことをするとが出來る。又は或る怪物を現し、將た地震のゆり起る樣にも思はしめ、人をして恐怖に陷らしむる事をもなし能ふ。是を以て蕃野の人民は非常に奇事に遭遇するときは、自分の見る目を疑ひ、是も狐に誑されて居るのではあらざるかと思ふことが屢々あるやに言ひ傳へらる。

玆に其の一例がある。

抑も、明治二十一年に起りたる磐梯山の噴火の實に驚くべき大破裂は、一大火山を微塵に吹き飛ばし、延ひては綠陰深き林を埋め、綺麗なる河水を枯らし、幾多の山村鄕落を埋め、生きながら住民を地中に葬らしめ、廿七方哩の地積をして、哀れや終に不毛の地となさしめ

たるを、今倘人は深き記臆に存するであらう。然るに此の驚くべき、神震ひ、魂飛ぶの際に當り、愉快とも云ふべきは、此の實況を目撃し居たる一老農夫であつた。彼は近くの峰の上にありながら、不然として芝居でも見物するの如き風情にて、終始此の大破裂の状況悲哀云はん方なき實況を見物して居たが、彼は何物ぞ、暗々たる焔と、蒸氣との柱が、二千尺の高き冲天に登り其の頂に達せしときは、恰も洋傘狀をなして、日の光を蔽ひつゝ擴がるを見疑めた。次て、彼は風岩の間より、も倘熱き奇妙なる雨が、彼の身上に幾穴落つるに心付きた。次いで彼は四圍暗々漠々となり、自分の坐り居たる山が、其の根本より振動し、且つ此の世が破壊せらるゝとも思はるべき、轟々たる大鳴動を耳にした。然るに、彼は凡て此の恐るべき、此の驚くべき天變地異の平穏に復する時迄、依然平然として居たのである。彼は終始決して恐る可きものに非らずと思つて居た。何となれば今見もし、聞きもしたる凡ての有様は、是れぞ即ち、狐の妖術によりて出來たる一つの幻影に過ぎぬのだと想像した故である。

（六）

奇怪なる哉魔狐が乘り移りし狂人である、此の如き狂人等は、或る時は、裸躰のまゝ、街路を叫きながら驅け出し、或る時は横に打臥して口にはぶつ〳〵と泡を出し、狐の鳴くが如くに鳴くのである。又狐憑の身躰の或る部分には、其の皮膚の下に、ぴく〳〵動く所の肉の塊球狀のものがありて是れが狐憑の命の樣に見ゆる。夫れを縫針を以てつゝく時は、此の塊は直に他の場所にぐるりと逃げて仕舞ふ。又如何に堅く押ゆるも、指の下から滑らぬ樣に憑むことが出來ぬ。且つ又狐憑の人間は、其の以前狐が乘り移らざりし時には文通の出來ざりしものも、其の以來は一見人をして驚かしむる如き、文通も出來、又は字を旨く書くことが出來る樣になるものと云ひ傳へらる。彼等は狐が好んで食べると思はるゝ豆腐、油揚、小豆飯等のみを食べ、且つ彼等は廣言して我れは飢ゆるにあらざるも、我が狐が飢に迫り居るを以て、あると云ひながら、中々驚くべき程大食

をするとの事である。此の狐憑の犠牲となりたる人々は、屢々彼等の親類より殘酷なる取扱を受くることがある。即ち狐を追ひ拂はん爲めに、いと嚴しく燻られ、且つ打たるゝ。其の時は、魔祓ひ即ち山伏、又は法院が迎へらる。此の魔祓ひは、其の狐と議論を戰はし、理屈責をなして追拂ふのである。而して議論をする狐は、狐憑の口を以て答辯するのである。而して議論上狐は法院の爲めに三舍を避くに至る時は、遂に狐憑は身体弱り、言語も容易に出すことが出來ぬ樣になる、然る時は狐は一般に豆腐其の他のものを多く供給せらるゝとの條件を以て、立ち去らんと約束するのである。而して約束の食物は、狐が自分は何々の使臣だと宣言せし處の或る特別の稲荷堂に直ちに持ちて行かねばならぬ。尤も狐憑の狐は誰れに呼び出されても、普通何の稲荷の臣僕だと白狀するが常である。が、時としては自れに稲荷樣だと云ふ事は無いではない。狐憑きが狐に去られた時には、忽ち彼は卒倒して無感覺となり、しばしの間死人の如くなるが常であると言ひ傳へらる。又一度狐に憑かれたるものは、其の後、決して再び豆腐、油揚、小豆飯、又は其の外狐の嗜好するものは食はぬと云ふことである。

（七）

人狐は人の口にて見得べきものではないとしてあるが、若し其の人にして靜謐なる水邊に近くときは、狐の面影は歴々として水面に映じて、之れが爲めに其の眞相を發見せらるゝ恐あれば、狐憑の人は決して谿水又は池水の邊に漂ひ、或は彷徨することがないとのことである。前述の如く、人の目に見る可らざる狐が、ある人に乘り移り居る場合に於ては、日本狐の召使と同樣に、其の一家内に屬して居るが常である。若し其の一家内にて、娘にても他へ縁付く時には、其の花嫁にも付き纏ひて婚家に行き、終に新夫婦の家内中に擴るのみならず、進んでは其の花聟の親戚一同に人狐は擴がるものとしてある。又斯る樣は、普通何れも七十五匹の一家族を有して居て、必ず此の一家族は、凡て此の一匹の狐の力にて養はるゝとの事である、併し斯る狐の一

家族は必しも七十五匹と云ふ數の定まり居るものでもない。只斯る狐は一種の魔物の如きものであつて、ほんの僅かの生活費用を要するに過ぎぬけれども、如何にしても此の多數なる家族なるを以て、其の費用も少しとは云はれぬのである。狐持は、一定時間内に白分の持分たる狐の七十五匹に食事をなさしめねばならぬ。而して其の持分の狐が、先づ最初に食事をなし、次に此の七十五匹が食事をなすのである。釜中の飯の焚き上るや、狐持は釜の縁を高らかに叩く然る時は、數多の狐共は、床下の中より各々躍り出てゝ食事をする。又た彼等の食事は、些かたも人目に見ゆるのに非らず、又た食事の音は耳に聞ゆるにも非らず、然るに實に不可思議なるは釜の飯の徐々と減し了るのである。夫れが爲めに、窮厄に迫る貧民にして、狐持となることあらんか、其の口との費用だに窮せる上、斯く數多の狐の食物をさへ供へざるべからざるにおては、終に死地に陷るの恐るべきに至るとの事であるから、貧民は實に此の狐を恐怖するは一方てはなる。

（一八八）

然れ共、狐持の家の煩累は、單に狐の家族を養ふ費用に比すべきものにあらざる程の煩勞を生ずる。狐共は一定の道德の觀念もなく、無邪味に惡戲をすることなれば、中々不都合千萬なる召使とも云ふ可きである。彼等は一家の繁盛する時には入り込み、其の繁榮なる間は逃ぐることはなけれども、若し一朝其の家が、彼の七十五匹の狐の暗々裏に助くるに拘はらず、不幸に遭遇する時は、彼等は一家内に屬する値打ある凡ての物品をば悉く持ち去り、其の家を見捨てゝ仕舞ふ。斯る有樣であるから、狐が主人の家に運び來たる貴重の物品寶玉は、凡て何處よりか盜み來たれる品物であるから、例へ狐の行爲とは云へ、狐持の家は、世に對して最も不道德極まるものであると云はねばならぬ。且つ狐は魔物であり、又一定の考へあるのでないが爲め、頓でも無きことを仕出かし、大に公衆の平和を害することが少くはない。狐は夜中隣家に忍び入り、財寶など貴重の物を盜み、是れを主人の家の戸口に置く事がある、夫れが爲めに、若し其の隣家の者の見出すが如き事あらん

か、圖らざる大撞着を引き起すに至るは當然の事である。

狐の他の惡しき習慣は、自分の聞ひた私事を口外し、是を以て人を苦しむる手段を構造せんとを計劃するとである。一例を揭げて見るに、松江の小林さんと云へる家に屬して居た狐は、主人が隣家の永山さんといふ人を、內密に嫌つて居ることを口言したのを聞いて、彼の忠實なる召使の狐は、直に永山さんの家に走り、永山さんの身體の中に入り込み、「私は汝がこれ〳〵の惡事をなした小林樣の召使である、私の主人が、私にのけと云ふて命令をする迄は、私は汝を苦しめてやる」と云ひつゝ、殊に殘酷に彼を苦しめた。

最後に狐持の尤も煩累を來せるは、其の狐が家內の或る一人と非常に仲惡きこと犬猿も啻ならざる事がある。尤め狐は魔物でありて、人類ではない、故に人たる感情及び高尙の考を持ちて居ないからして、時々家族のものと、惡感情を惹起することのあるは免るべからざる處である。誠に案外千萬の場合に當り、狐は如何なる理由の存するか、些かも譯の分らざるに怒りを發することがあり。又は何如にして欲きか、實に無口のまゝ怒ることがある。然れ共、僅かに狐の或る者には、其の主家の爲めに忠實を盡すことがある、夫れは主家を助けて、金儲の手助をすることがあると云ふ。世人は一般に、狐は天眼通を所有すると信して居る、即ち天眼通とは、天耳通と云ふ義にて、世界の凡ての事情を耳にすることが出來、又他心通と稱する他人の凡ての秘密を知り、寂明通と云ふて、過去の事柄を知り、人觀通と稱して有ゆる現世の事情を探明し、且つ物象を自由自在に變化せしめ得る力を有して居る、夫れ故に、假に狐は誑す力を有たさるとするも、惡事を爲すに於ては、本性として全能の力を有して居るのである。

（八）

以上說明し來たるが如く、日本の多くの人の頭には、狐に付ての迷信は深く印象せられて居たのであるが、然し此の不可思議なる信仰は、非常なる速度にて消失しつゝあるのである。稻荷の社は年々破壞せられて、

又建てるものもなく、彫像師の造る狐の像さへ漸次に減少し、狐憑きも追々病院に入れられ、獨逸語を解する日本醫師に治療を受くる樣になつた。此の原因は決して昔の信仰の衰へたるのではない、即ち迷信は宗教よりも長く續くものである、又彼の西洋より來りたる基督教宣教師の御蔭でもない、之等宣教師の多くは、惡魔を信ずるものであれば、如何して彼等は此の迷信を打ち破ることか出來よう。實に此れ等は文明の教育の結果である。公立學校在學のものは宗教に偏癖の者もなく、各々公平なる眼を以てし、最近の科學も學びつゝある、如何に貧苦なる小兒も頭腦迄も、今や文明化せられ十四五の小供にさへ、ダウヰン、ハーバート大學のハドレーや、スペンサーの名を知らぬものもなき有樣である。此等の小供は、狐像の鼻をむしり取りたる手で、植物に關する論文や、出雲の地理に付ての文を作る樣に至り、最早や現今の青年には、此等狐を信仰するものがなく無つたのは、實に教育の御蔭である。實に此等を改良發達せしむるものは、小供てある。

（ヘルン氏の狐に付ての觀察は、單に之れのみに非らず、尚は深く且つ愉快に詳述しあると雖も、本雜誌の紙數に限りあれば已むを得ず其の一班を記せしのみ、讀者其の意を諒せよ）

大殿卿有家

心かれのとこにあらしをかたし
きてひとりやねなんさよの中山

藤原秀能

夕月夜汐みちくらしなには江の
芦の若葉をこゆる白波

鴨長明

霞さそうあまつ春風かをるなり
高間のやまの花さかりかも

小侍從

まつよひにふけゆく鐘の聲きけ
ばあかぬわかれの鳥は物かは

東海みちの記

中村秋香

本篇は「ほの命毛」と題して本誌第一號より第六號に亘りて分載せる三枝栄澗刀自の紀行文の續篇なり、刀自文化四年四月五日江戸を發帆して東海道に向ひ、箱根、足柄を經て同月十日頃の紀行文には駿河國岡部あたりの景色おもしろくうつされたり即ち前篇『まかれふく黄色たつものゝ物賣家にあまた頭はたる河ならんとおもへと例のとふ人なければたゞ過ぎに過行く』といふよりつゞくべし、(本篇の解題並に刀自の小引は本誌第一號に在り)

水もりてふ所にやすらひてぞ瀬戸の染飯なるよしを志りぬる、飯をくちなしもて染つゝ押開めて干餉したるにて、食ふべき程のものならねどうつくしうて背戀しき心地ぞする、わがれる代は驛のさだめ覺束なく旅路いとうき程にて、野にふし、草まくら結べる頃なれば、干飯もりて旅のうゑを凌ぐなるは常のことなれば、にや、在中將のかれ飯になみたおとしてほとびぬるなとさるためしぞかし、そをもて思へば染飯など今は名のみにて、旅客の見もいれぬものなれど、これぞ古き代の旅粮のなごりにやあらん、今はおほみまつり盛にて、驛路軒をならべてうちつゞき物賣る聲賑々しく、ゆきゝの人を呼とゞむるもなまめかしく、萬つ足はぬことなくて、やすきたび路のなりにも、我身の旅は公さまにいかめしき樣なるものから何くれの事人には與りけれと、民の煩ひいかにと推測られて、心遣ひのみぞせらるゝ、水もりてふ所は土などはなくてたゞ白砂のみなり、つゝみ高くつみなして水もなき所々に、竹にてかごをあみ石多くとりいれて山をつみあげたり、ます〳〵つくれる田畑もみな水におしながされて、荒田となれるもあまた見ゆ、こゝらのけしき川音も高きものから、大井川近くやなりぬらんとおしてぞ志らるゝ、行く〳〵て見るにはてもなき野中、あるは小高き所々に、さきに荒たる田畑にひとしきいとおほかり、人欲の盡せぬ習ひ實のるましき田を知る〳〵も空しう力をつひやして作れば、おのづから水の行さきを止め、水の心にさかへば、水いよ〳〵さかしまに流れあふれつゝ、水田はさるものにて、家居をうしなひ、美田をそこなふぞ痛しき、水災のことわりを知らぬにはあらねど、美田は供米あり

荒山には租税なきによりて、理を忘れつゝ力を入るゝそはかなき、凡そ人の欲する事水山のみかゝるにはわらで、よろづかくもはかなき利欲にて、一世に苦しむならひ、大欲は無欲のことわざげに淺ましかりけり、半のつかり大井川を渡る、げにや海道第一の大河とき〻しよりも猶おそろし、この程水おせく唯一なれと、廣々とはてなき河原に鬼に均きをのこども、皆赤裸にて犇々とより來て、繩もて輿をくる〱とおしまきて、たかうもたげて、各いや聲を出して水もなき河原を飛鳥かなにその様にかけり行く、なべて身はうすつくがごとくにて頭も足も所をかへつゝめぐるめき、いきもすぎあへず、かく苦しきを幼ものども如何ならんと思ど詮なし、川に走いるほど思ひやるべし、逆まく水にざとうちいるゝ勢ひ、大石は刀劍のごとく、小石は牙歯に似たり、かゝる石ども恐しき水の勢ひにおし流されつゝ、塵埃か何ぞのやうに輕々と流れ行を見て、向ひの岸に走あがりて飛行くと思ふにくる〱とおし廻して肩より押落されたる、百丈の巖頭より逆まに落かゝるとぞ思はる、渡りはてゝ女がたみな顔の色まさをにぞあるを、人々わらひのゝしる河水あさき頃は、ことに斯るめに何ぬると、後にぞ人のかたりし、

世の中をわたりくらへむ大井川人の心の瀨やはまさると

げに世のうきに較れば易かりけりと思ひしも、初倉の山の遠ければこゝらより見むと思ひしも、おそろしさにわすれにけり、遠寺の鐘もろともに金谷の宿にやどり求めてぞ心地いき出にけり、此頃おそろしき山も川も平かに越をよろこばひて、ずんさに物とらせ、古郷へも志るしばかりの文かきつゝ、みやびわすれぬ人々こひしくて此頃の櫻餅など抑つゝみてやる、

十一日けふもまた小越とて、れいより急つゝ、松ともしていづ、菊川と云は黃門宗行卿きく水の四句を詠じ給ひし所とか、去にし承久のみだれにも、俊基朝臣それを哀れと身につみて、古へもかゝるためしをきく川のと、宿の柱にかゝりつけ給ひしとか、かた〱忍ぶふしおほかる處なれど、まだ明はなれぬ程にて底を谷しられず

明うなりてさやの中山にかゝる、高々此山頂四望只烟雲下有條道わけつゝゆけば、けにまこと古歌の心も見てこそしられけれ悲などいふ山ならねど、ひとへに長くよこたはればや、横をりふせるとはいひけんかも、阿波が嶽の雨もよひに朦々として、わはと谷めんとも見えわかず、兩谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀を足の下にきくと、古人のいひけんむべなり、朝たつ人のまれなればにや、たえて人にもあはず、雲霧にさへられて四方の眺もつやなし、腰を抱きて過こしかたをつくづくと思ひ出れば、哀れ只うしとみし世のこひしきを、世のおし映る有さまより、身の老にけるほどを思ひめくらせば、げに悲きこといと多かり、さりし安永の頃こゝを過ぎしは、童ごゝろに萬つ思ひもわかざりしぞかし、夫より後二十年あまりをはふれわりきする程のもの思ひ、衣食のたづきは更にもいはじ、我はたゞすゞろなるやうにて、わからさまにやすぐいてましと思ひさだめするを、さりがたきふしいてきつゝ、本意かなはで人にかゝづらひて、とざまかくさまにさいなまれつゝ、四十路のきはにけふたまでゝを越ゆべしとはかけても思ひよらざりしを、さても命ぞすれなりける、いひがひなき女の身にしあれば、よろづをしたちたるわざなきが中にも、身ひとつにうし戀しと思へるいか計り多かりけれど、萬づたゞ一所の親の爲にぞねんじ過しければ、今度もそれをそむかじとて、うはの空なるやうにて惑ひわりくを、人は如何にか見るらんとさへ、かへりては悔う、などやそむきてもをちとまらざりけん、あまりになよびつゝ弱げなりけるよと口惜に、いとゞ結ぼるを世の人はさしすぐいたるすぢをはかせたちいひなすこそ易からね、夫によりても猶浮世を背かまほしきぞかしとかへすがへす易からぬ心地す、我有所念人隔在遠々鄕有所感心緒在深々膓とうちながめて、すだれ少し打あけたれば、ほのぼのと明行山きはこくらき梢とも霧りわたりて、空の氣色くもらはしく、朝風秦蓋の松におとづれて商絃の響をなす、

命あればうき身ながらにめぐり來て越ゆるもつらし
　さよの中山

下りになれば、こゝの名あるものとも餅飴などあきなふ、老を養ふ藥とはいへど、盜跡こそ世におほけれ、綠林の便ならんかと思へばたゞ過ぎに過行く、くつかけといふより雨さとふり出ていと强し、日坂に志ばしやすみて雨の具ともうちきていそぐ、風は例のはげしうて行なやむ、かしこうぞ大井川わたりけりな、此頃ならば渡りもとまるべきをなどとり〲いひもて行く、雨なからましかば八はたの宮、ことのまゝのやしろ、たのもしき物からかねてより詣でなんと思ひもかけつれど、かきくらしふるに從者ものうがれば、人して奉幣たてまつる、行手のおこたりを神もいかゞ覺にかといとたい〳〵し、けふも又荒田すきかへす所々いと多かり、簑笠うち着て雨もいとはぬなりはひ、是や世のおほんたからと忝し、居ながらにはむものは、こしにのりつゝ何心もなくてぞ行く、げに心なき業なりや、苗代雨にあひて一しほ靑やかに綱引わたし、鳴子うちわたしたるは、秋の心ちぞする、中の時に天龍川を渡りぬ、けふのあらしに水かさまさりて恐ろし、安〳〵とうちわたりぬ、道も遠し日ひとひふりくらしたれば、かはたれ時に濱松にやどる、誰も〳〵いとゞぬれてほしわびたり、

十二日鷄鳴に濱松をいづ、まことや神君のおはしましゝもしるて。賑ひ、松のはやしことさらに畵にかきたらんやうなり、朝風枝をならさず、鳥居なはてを行くに、おさづく日うら〳〵とさしあがりたる氣色、たぐひなくいとをかし、農夫脊舊穀、蠶妾接新衣、機杼札々として日にさらせる布いとおほかり、賤がかきねにしろくさけるは何の花ぞと見るを、卯花のゆきかとまで咲みだれたり、節は中呂にわたり、新樹をくらくして花いと麗なれはわかず眠るに、かの足からなりし子規の一聲おもひ出られてこひしきを、それよりのち夢はかりのしのびねば、

深山路のその一聲のしのばれてこの卯の花のかげぞ
過うき

右に蓮池とてひろ〳〵と見えわたれど、浮葉ひとつだになきを、時もさつきにちかし、などてかきたえ見えぬ

にや、かつまたの池ならむかいとふしぎなりかし、しの原といふ所にやすみつれど、明はてゝほどなければ、食べきものなしとて、下衆どもいと〳〵はらだちてあからさまにいでゆく、早くも舞阪に來て、己の時にわたる、とほつあふみの海を乘おし出す舟の行末こゝろもとなくて、不二の根を見よと言人もあれど、なかめもやらず、風なきわたれば、海はたゝみを敷たるごとくなれど、とほつあふみよりはるかにたちくる波は三丈ばかりにたち上りて、こしの白山ともみつべきを、空もひとつなれば、雲と見まがふ、松のへだて長〳〵とつゞきておほ海をへだて浪をわけたる松のむら立を有しはこゝならんかし、むかひのすさきに人おりたちつゝ、かたみをもちて貝にやあらんひろふとみゆ、黑き鳥のうきすにゐて魚とりて喰へるも見ゆ、かく長閑になぎわたれど、浪たかくて心地あしとてひきかづける人もあなれど、我はまた山のをくらく九折なるよりはまされりとぞ思ひ出る、扁舟旅身を寄す千ひろの底も、一心の水棹觀には只一乘のふねこそたのもしけれ、午の時にかなたの岸につく、

船より輿をうつしておほやけのさだめどもあり、いそぢあまりのうば頭になにやらん戴きて出きつゝ、事ともとりあつかふさま、ひなびたれとむかし覺えてさすがによし〳〵し、關の人々さま〴〵のゝしりはてゝ橋もそのすくに休む、昔濱名のはしの跡とか、朽にけるつたへを人のいふほどもまた遥なり、箱根の關にて女のさほふ有り、こゝもまた同しさだめなる物から、をのこならざらんは、いかにふるさとこひしともとみにかよふべきことも絶えはてたりと思ふに、いといみじうこゝろぼそう悲し、

古郷をとほつあふみにへだて來て濱名のはしの跡も
たえけり

建久のはじめ源二位のやどりありしもこゝらなるべし、花もさかぬ里なれど、よし野新田と云もうち過ぬ、白須賀をうち越え、汐見阪をのぼる、古歌に見えし高師山此わたりなるべし、はるかに見おろせば蒼海漫々として水や空ともみえはかず、うちよる波の色藍をすりたるごとく、潮聲山木の梢に和して、さながら雷の轟く

にことならず、きのふの雨に汐合わろく、かぜひさだめぬにや帆かげひとつも見えず、漁舟もなし、げにおそろしき七十五里の遠江灘とはこゝなめり、世のさわがしかりし頃神君のをさなくてこゝを過させましゝを、織田氏うばひ奉りて尾張にゐて奉りしはこゝなり、こゝら猿がばゝよりはじめ、所〳〵ふるきいくさの跡あめれど、女のしらぬ業なればもらしつ、遠江の堺を經て松原を行になが〳〵と遠けれど、松の木立ことさらに美しうむかひの山に立石明神とてたゝせおはします、岩形は有べきとかいふ書法に似て、そのあはひよりから松などいふ姿の松ともこゝちよげに生出たる、なべて人の工みに及ばぬ氣色に見ゆ、いかで語る程を書きとめる人にみせばや、さしもなきをも名にたてゝもてはやしつゝからのみからめいたるをおともせざるこそいと口をし、未の時に吉田を過ぐ、この所にはならぬべくもなく、にぎはゝしさまた類ひなし、あそびどもいと多くて、ひなひたる中にも都めきたるけそひたれば、いとめやすし、かぢどもあまたにてあゐうつ音左右にひゞきて吉田の橋をわたる、げに海邊には稀なる長はしにて、昔は豐川より本野の原へ出し古みちあれど、今は四ッ谷と云を過て小阪井村へぞかゝるに、こゝに人多くあつまりてつゝみ打たてゝはやし物をしもて行く、何ならんとみるに神まつれるわざなり、だんじりふたつ車のおほきやかなるをすゑたり、山はこたつも人かた造て三四たてり、そのさま田造るものゝ姿にて三尺はかりなる、あるはものゝふなど、太刀ぬき持たるなども見ゆ、とうろもあまた有り、けふの神わざに民のなりはいもうちやすらひて神すゝしめたいまつるべき兼ての定やらん、小わらは女子と云もの皆太布の赤き靑き花など摺入て、薄紅梅の木綿の裏打たるをきわたしつゝ、いみじうはなやきつと思ひ誇りて鼻うでめかしつゝ居たり、翁よりはじめをのこと云ものみなもろはだをぬぎ、しりかきあげ、いさめる姿に足ふみならしたり、うばなどを先としてわかき女も木櫛つまくしさし添えつゝ、ふとぬのゝさま〴〵に色どりきつゝ、白きもめんを長やかにこしにひきむすびなどして、顔

け霜夜のおさけにひはだのやねにおきあまるはかりのおもゝちなれどおのがさま〴〵賢かうぞさうぞきたてつと思ひあがり、ほそ首をかきあげおほ腰をよぢらし、いみじきみやびしすと思ひをりて、宮居に詣來るありさま、誰も〳〵見るからに目も口もはたかりにたり、されど所からにはめやすくや見ゆらん、みそかに袖を捉てけそうめくをのこも見ゆ、いなびて古めかしきはさるものにて、おちうばのきほひ顔なる、あるは男女からみのたゞならぬなどをかしう見ゆるものから、我聲けはひや人にしられんと夫をねんじて、ひそまりぬるが、かへりては苦しかりける、中にもことにあさむばかりのことは、口なしの黄色なるして長ものをわれも〳〵と手に引さげつゝゆく、何ならんとよく見れば、世に多く人の食へる澤庵漬と云おほ根をひきさげたり、こはいかにそこらをみわたせばほとりみな板おしわたして、此おほ根のつけものをうちひろげてぞあきなふを、人〳〵落もなく一本つゝをかひゆくさまなり、なぞふし處なり、よそにはなべてこぬ業なるを、こもまた神事に故あるやらん、關の東などには何にまれあきもの多き所なれども、是を大路に賣杯はみなれざる程なれば、人〴〵あざみわらふこと大かたならず、この故をきかまほしきまでにぞいひあひける、そも此おゝん神は兎足神社と申奉りて延喜式神名帳にいらせ給ふおほかみにて、即ち比賣陀君の祖兎上王をまつりたいまつる、こゝには則併禮の故もて八幡宮とあがめ奉つるなり、けふは道遠し、あら井のわたりにてとかくする程に櫻町より日くれつゝ御油なはてより月出たり、ことにこよひはくまなく晴わたりて一ひらの浮雲もなく、ひろ〳〵と遙なり、田面より遠く山〳〵うちつゞきみえわたりたる、薄墨に書かけるにことならず道はひと筋にて行かふ人も夜はたえてなければ、なかむるからにこゝろもすみのぼりつゝ、來しかた行末おもひ出らるゝを、いつちならんはるかに笛の聲きこゆ、樵歌牧笛の諺なれば草苅童の道におくれたるならんなど耳とゞむるに、さにはあらで大雅の音にぞきゝなさるゝに、猶あやしと思ひいるれば、大食調に似たり、い

かならん人がかゝる所にかくれおはしましけるとあやしけれど、更におもへはこゝは名たゝる守のしらせ給ふ所なるをや、絃歌の聲むべなりけりとおしはかられたり、聲々故園を憶に似たり、此時聞者頭白きに堪たりとうち嘯きて戌時ばかり赤阪にやどる

雜報

天長節

本月三日は名にし負ふ天長節日和は前日の雨雲名殘なく霽れて秋晴最も爽快、觀兵式は無かりしかど參賀に遊歩に滿城の賑ひなりき、

▲御祭典　は兩陛下兩殿下いづれも御代拜を以て行はれたり

▲御宴　午前十一時豐明殿に於て恒例の如く御宴を開かせられ左の勅語を賜ふ

朕は本日の誕辰に際し朕が敬愛する交際列國の外臣幷に朕が政府の臣僚と此宴を俱にするを歡ぶ

桂首相及び古參白耳義公使の奉答左の如し

（首相）本日陛下御誕辰の佳節に際し此の御宴に陪し且つ優渥なる勅語を下賜せらる臣等感激の至りに堪へず茲に陛下の臣僚を代表して恭しく聖壽の萬歲を祝し奉る

（公使）外臣等陛下天長の佳節に際し御宴に陪するの榮を得殊に優渥なる勅語を賜ふ眞に一同の光榮とする處なり今本使は各國公使を代表し陛下の萬歲を奉祝し幷せて貴帝室の益御繁榮を極めさせられんことを祈り奉る

皇后陛下は午後二時三十分より皇族御女性方を召して御祝宴を開かせられたり

●天長節夜會の模樣

小村外務大臣は例に依り當夜午後九時より帝國ホテルに於て夜會を催したりまづ玄關正面の廣間には昨年は日光並木の躰に模し幽邃の樣を示したるが本年は松の木の間に巧に紅葉點綴し紅葉狩の躰に擬し又左右の幕は杉の葉を以て造りし中に各一個宛の菊花にて作れる桐の紋を現はし五七の桐花を黄色の豆電燈にて點せしは殊に來賓の注目を引けり來賓は九時前後より續々馬車若しくは腕車を驅りて同所に至りしが主人の外相幷に同夫人代理戸田伯爵夫人は玄關正面の入口廣間に立ちて一々是れに挨拶し掛員は之を休憩所に案内せり來賓は小松大宮殿下閑院宮殿下同妃殿下を始め奉り桂總理以下旅行中の大臣を除き各大臣及米國公使を

除き各國公使領事內外朝野の貴女紳士等無慮七八百名に達せり軈て十時に至るや小松大宮殿下は閑院宮妃殿下の御手を閑院宮殿下は戶田伯爵夫人の手を小村外相は伊太利公使夫人の手を取り以下順次舞踏室に臨み嚠喨たる樂聲と共に舞踏始まり是より數番の舞踏終りて十一時に至り小村外相の案內にて各大臣公使等は食堂に入り一般來賓は假設の食堂に入り食後にも尙數番の舞踏あり各自充分の歡を盡し十二時前後より漸次散會せりと

●靖國神社臨時大祭の景況

本年は拜殿の新築も成りたる上昨年北淸の戰役に名譽の戰死を遂げし吉見陸軍大佐服部海軍中佐外諸將校以下下士卒千二百餘名を合祀する次第なりしかば祭典もいとおごそかに行はれたり先づ本月一日午前三時庭燎を燒初め六時卅分陸海軍の掛官出張となつて神職と共に神殿に出仕し諸員起立の間に宮司御開扉を行ひ禰宜等五十膳の神饌を供し奉りしが七時に至り陸軍大臣代理中村總務長官山本海軍大臣其外臨時大祭委員長將官同相當官勅奏任文官等の昇殿あり此時宮司玉串を神前に奉り祝詞を奏し終るや間もなく勅使參向あり右祭文を奏し終りて下向となりたる後遺族の參拜に移り續いて九時陸海軍軍人の參拜式あり近衞及び師團の步騎砲工輜重鐵道大隊海軍諸兵肅々として捧銃式を爲し右終ると共に宮司は閉扉を行ひ當日の式を收めたり又當日の拜殿に就き其御裝飾の模樣を記さんに中央部には壯嚴なる神旗をかゝげ入口には菊花御紋章の紫縮緬の幕を張り左右には各御紋章の麻幕を張り詰めしさまかう〳〵しくも覺えたりきかくて既記せるが如く內砌には左右にアーク燈をたてられし外各皇族を始めとして官民よりの奉納品並びに山本海軍大臣の夫人が發企にかゝれる石州流の生花等陳列あり又同社近傍の家々にて八軒毎に櫻花と錨とを染め出したる軒提灯を掲け國旗を交叉し頗る祝々の意を表したるが前夜來の雨に妨げられて普通參拜人は割合に少く餘興の數々も中止となりたるは遺憾千萬といふべし

▲二日目の景況

天長節に付同神社臨時大祭の祭事及び餘興物は總て中止されたるも折柄の好天氣に參拜者は早朝より陸續として參集したれば流石に廣き社內も人を以て埋められ殊に新築拜殿前入口の如きは肩と肩と摺合ふ迄の群集なりしが警戒の巡査は便宜人を量りて進ましめ辛うじて混雜を防ぎたり左れば舊競馬場に於ける見世物小

屋は例の鉦太鼓を囃立て聲をからして客足を引止め又九段坂上より富士見通り三番町にかけての露店商人は所狹き迄に店を張るなど其賑ひ大方ならず社内に假設せる日本赤十字社救護所の如きは特に數名の醫員詰切りて應急手當の備準を爲し憲兵巡査は社の内外の取締りに餘念なかりき

▲三日目の景況

大祭第三日目には加茂宮司以下神職一同は早旦より神殿の莊飾を爲し陸海軍兩省掛官正服にて參拜ありしが朝來天氣も快晴なりしため午前の中より老若男女の參詣するもの引もきらず奉納の餘興物なる擊劍、里神樂、丸一大神樂等も舊競馬場の東南兩隅に高く舞臺を設けたれば見物には至極都合よく夫より同場内東部の兩側には普通の興行もの鉦太鼓を打鳴して囃したて殊に餘興相撲も初日にて午前中より觀客陸續押寄せ大に賑はへり左れば附近の飲食店も食事時には押返されぬ程の來客あり何れも相應の賣入ありたる模樣なり尙ほ夜に入りては鍵屋の餘興煙花ありたり。

●臺灣神社鎭座式と大祭

去月二十七日臺灣神社鎭座式當日は快晴といふ程には非りしも風無く穩にして祭式滯りなく擧行せられたる由此日拂曉臺灣總督府なる御齋館を淨掃し嗽所をしつらひ三小隊の護衛兵及憲兵警官館の前後を警衛し門前左右には一大隊の儀仗兵整列したりやがて勅使宮地嚴夫氏柴の直衣紫の袴冠正しく西警部長警部數名に護衛せられ掌典補及禰宜を隨ひて馬車にて來着嗽所にて淨嗽進んで御齋館の扉を排し神座を移しまゐらせ三柱の神靈は白丁之を奉じ故北白川宮能久親王殿下御靈代は掌典之を捧げ午前七時過御齋館を發し臺灣神社一の鳥居に着せられたるは同八時三十分頃なりき一の鳥居右側には德川公、伊達侯、清棲伯、德川伯、德川從四位等の御緣者を始めとし乃木男、大森總務長官其他在臺文武高等官左側には外國領事、代議士等肅然として整列し御靈代の着御を待受けたり軈て第一鼓の響鳴渡り明治橋畔嚠喨たる喇叭の聲起ると共に御靈代御着あり軍樂隊の君ヶ代を吹奏すると共に參列者一同皆敬禮を行ふ勅使は一の鳥居内にて下乘御靈代は山口宮司の御先導にて直に一の鳥居内なる御滯在所に入御兒玉總督即ち二の鳥居内にて之れを迎へ奉る少時にして妃殿下には白洋服の御正裝松岡老女の御陪乘にて御馬車に召させられて御着あり御滯在所に入らせらる第二鼓の響き渡ると共に勅使は御靈代を護して御滯在

所を出で社頭に進む妃殿下總督以下供奉一同手水及稜ひの儀ありて御靈代を正殿に安じ奉り勅使神前に進み恭しく御祭を申し奉り神職神饌を供し祝詞あり勅使再び進んで御祭文玉串を奉り妃殿下以下參列者の禮拜ありて爰に御式を了し一同下向したり翌日は午前七時三十分頃兒玉總督黑の直衣黑の冠裝束にて勅使として參向御祭式を執り行ひ妃殿下にも松岡老女御介添にて御參拜玉串を奉り御祭式を了れり此兩日間共圓山公園附近の雜踏は非常にして餘興場には臺北座及十字館の俳優演舞等あり神社境內の寫眞は次號に掲ぐ

大橋佐平翁の永眠

本館の創業主たる大橋佐平氏は、昨年末より胃癌症に罹り、爾來療養手を盡せしも其効なく、遂に去る三日午前四時を以て遠逝しぬ、氏は天保六年十二月二十二日越後長岡に生る、氏十四五歲に至り、兩國を周遊して還る頗る得る所あり、嘉永六年米艦浦賀に來りしより、海內騷然氏憂國の念に堪へず、藩の要職等を徃來して時事を談じ、內外の形情を究む、戊辰の役氏は開戰の非を主張したれども、大勢の赴く所如何ともする能はず、長岡終に干戈の區となる、氏兩軍の間に往復して斡旋する所少からず、明治維新の後小學を建て道路を修むる等、鄉黨公共の爲に盡し、政黨の論熾なるに及びては、新聞紙を發刊して不偏不黨の主義を唱ふ、明治十九年氏時世に觀る所あり、東京に出て、博文館を創立し圖書出版の業に力め、以て今日の盛を致す、二十六年歐米各國を漫遊し、出版印刷製紙等の事を視察して歸り、三十一年博進社を起して、印刷洋紙販賣等に從ひ、益斯業に貢獻する所あり、既にして痾疾に罹るや、自ら起たざるを知り、多年の素志たる圖書館設立の事に着手し、石黑男、上田博士、田中帝國圖書館長等に其設計を囑托し、資金十萬圓維持費二萬五千圓を投じ、財團法人の方法を以て、之を上六番町の自邸內に建設し、現に其工事中なるが落成を見ずして長逝せるは誠に悼惜すべし

猶ほ氏は其臨終に際し、特に遺命して葬儀を質素にし、造花放鳥等の贈物は一切之れを謝絶せしめ、嗣子新太郎氏より左の向々へ寄附を申出、又た生前關係ありたる印刷製本諸工場の職工千餘名には反物一反づゝを贈りたりと

一金一千圓　越後國長岡小學校奬學資金
一金一千圓　日本橋市立小學校奬勵學資金
一金二千圓　早稻田大學基本金
一金一千圓　新義眞言宗大學基本金

一金三百圓　東京盲啞學校基本金
一金二百圓　哲學館基本金
一金一千圓　東京書籍出版組合基本金
一計六千五百圓

葬儀は去六日に行ひしが、午後一時上六番町の自邸より出棺し、其遺志により勉めて質素を旨とし、嚴に其の裝飾の浮華に流るゝを避けたるも、朝野名士の會葬頗る多く、一同護國院に着するや、瑜珈大僧正大導師となり、越後文尾僧正其他歎徳師を勤め、奏樂鉾供、灑水式、傳記讀上、弔詞捧供、理趣三昧、後讚、光言、奏樂、回向等、式順の如く了て遺族以下の燒香あり、會葬者の重もなる者は、澁澤男、安田翁、青木子、岩倉公、石黒男、九鬼男、岩崎男、楠本男、田口、井上の諸博士、島田三郎、古河市兵衛、加藤弘之の諸氏、其他政治家實業家等數千名にして民間稀れに見るの盛葬なりし

◎流行のくさ〴〵（口繪參照）

衣服の模樣、裝具の格好、年々に變り行きて、去年のもの最早今年のものと別なり、今池の端の玉寶堂に就き、櫛、笄、簪、指環さては帶留、千代田袋など當節流行のものを聞くに左の如し

▲櫛。笄。櫛は從來月妻形とて、半月形のもの行はれたるが、近年は全く廢れて、今は遠州形とて角形のものの流行せり、大さは背の厚さ二分より二分二三厘、横二寸八分より三寸上り、山は一寸一分五厘位にして、之れにともなふ笄は、厚さ三分巾四分位、模樣は一般に寫生物よりは、光琳風の圖柄行はれ居れり、今同店にて賣出したる、金地に菊兒葉を現はしたるもの、これは三十歲前後の向なれど、上品には廿歲前後のもの用ふべく、又黒地梅にこぼれ松葉、梅は一輪毎に純金、青金等を用ゐたるもの、これは二十歲前後のもの用ふべきも、上品向には三十歲前後なり、四十歲以上五十歲がらみの者には、此の形にて總体に隅を切りて丸身を持たせ、背は厚さ一分、横巾二寸八分、山は一寸位にして、笄は小口を丸めて、三味線形にしたり、模樣は古代模樣の研ぎ出し、或は總彫などの素質なるものにて何れも流行形なり、

▲簪は鼈甲もの全く廢れ、今は祝儀用の外には之れを用ふるもの殆ど皆無の姿にて、後ざしには金の平打のすかし彫又たは寶石入のもの用ゐられ、玉ものは、斑、無地瑪瑙等あれど、珊瑚尤も勢力あり、足は一樣にゴールの赤者と定まれり、同店の製作にかゝる、柿の二つ實、一つは金、一つは眞珠、葉は三枚總金にて之れに色繪を施せるものは、二十歲前の者の向きにて

頗る好意匠なり、又田中子爵夫人の考案にて束髪及び丸髷の前指用にと造れるは、蚊帳釣草の寫生にて、總金製、葉は三枚、中に花を包み、花の心には、ダイヤを入れたり、これは當今盛に貴婦人社會に用ゐられ居れり、

▲帶留　金物は多く眞珠、ダイヤモンドを始め、其他の寶石を襯めたるもの流行にて、中には目貫の草花、龍などの金物を用ふるあれど、概して寶石入のもの勢力あり、紐は鹽瀬、繻珍、つゝれ織などにて、組糸は流行せず、紐の中にても尤も多く用ゐらるゝは鹽瀬の無地にして、華美向には之れに縫取を施せり、繻珍は古代模様の、細物に用ゐらるゝもの、つゝれ織は浪に千鳥又は光琳風の至つて高尚なる模様ものなり、金物は、菊の折枝、牡丹の折枝などにて花の中に寶石入のもの、二重爪に眞珠を入れたるもの、又葡萄の寫生にて、葉は金の臺にて、之れに赤銅、紫銅等の色繪を使ひ東七寶を用ひ、實は眞珠にて十粒、十二粒位着けたるもの等、何れも新製品にして實行殊に宜し、又新工夫に成りたる帶留、指環、簪、襟留の四種に兼用するものあり、是は取り合せ組外し自在なれば中々重寶なり圖柄には、菊、桔梗などの崩しを用ひ居れり、

▲千代田製　地は赤き鹽瀬にて、菊、牡丹の唐草などの縫模様あるもの或は古代紫に、三保の羽衣、片側に菊水の模様あるものなどにて、又手提鞄は切地繻子、縫取を使ひ、口金は、銀の上に蒔繪を施したるものなど共に貴婦人間に流行し居れり、

◉口繪説明（三井呉服店陳列場備品）

◉淨眼夫人三澤初子の衣と帶　こは伊達伯爵家の所藏にして戯曲千代萩に政岡局と稱するは此夫人に擬せしものなりと此衣の地質は本紋綸子地お約束の櫻に蘭の折枝に雷紋を置き地色は鬱金黄色にして五七の桐を肩より袖裾と千鳥形に順序よく配置し桐の葉を紅と紺藍にて疋田に絞り花と唐草とを白、赤、緑ノ色糸を以て繍ひ取り葉の周圍に切箔を押したる其跡歴然として金色の幾分を存す

帶は御納戸地の紋綸子に櫻唐草を白上げに其帶の一端は斜に紅にて疋田に絞りまゝ古瓦形に紺と紅とにて同じく疋田に絞りたるもの何れも優美にして高尚なるは今人の企て及ぶべきにあらず

◉淀屋小袖（不昧公遺愛）　浪花男と其名も高き富豪淀屋辰五郎が後世意匠畫家の泰斗として歐米の美術工業

家までが敬慕措く能はざる尾形光琳をして衣全體に淡彩を以て松竹梅を揮洒せしめたるものなり下前褄に青々光琳の落款あり筆勢淋漓として麗はしく眞に奇世の名品なり去れば如何にして此品が不昧公の御手に歸せしやは今是れを知るに由なきも公が之れを愛惜せられしは明なり其譯と云ふは公が二代目の清元延壽太夫を寵愛せられしは世に隱れなきことにて或る時延壽太夫は日頃懇望せし此淀屋小袖を達て公にねだりしも公は是ればつかりは遣されぬとて延壽の乞を拒みたり左れども延壽は垂涎三尺忘るゝの暇なし不得止己が子なる一醉庵梅秀は抱一に學びて光琳の畫風を慕ふものゆへ之れ幸ひとて其模樣を模寫せしめて日夕座右に置きたりと其圖は現時小紋中形に有名なる笠仙即ち金屋仙之助氏が先代延壽太夫の娘なる阿葉氏より讓り受けて秘藏せしを此度此眞物が此陳列會の參考品として陳列しあるを聞き高意にも此秘物を該會參考室へ陳列せられしにより淀屋小袖の由來なども併せて明瞭となりしと云ふ此詮索は世に博覽強記の聞へある大槻如電先生の斡旋によるものなりと聞きぬ、

◉友禪小幅縮緬(十四圓八十錢)(京都西村總左衛門製)
紫紺地疋田にて垣を現はし大形の蔦を影にし其上へ思ふがまゝに赤藍、紫根等の色を以て或は緞絹に或は白上げに染め出したるもの材料は簡單なる垣と蔦との二種に過ぎずして西洋趣味を貯へて其鋒鋩を現はさず自然に之れを我が獨特の模樣と調和を試みたるの手腕さすがに京都屈指の友禪家千總氏其人の製作たるを知る

◉綴織丸帶(三百圓)三井呉服店京都綴織工場製
錆茶地に寂びたる色糸を取り交ぜて古模樣の鳳凰と桐ノ花とを織出し一々模樣の形と其配色とを異にし殊に鳳凰の尾と桐の花とは斜に配合を變じて其の尾端より唐草を出したる意匠の高遠なるを見るさすがに三井呉服店意匠部の考案なりけり

◉友禪鹽瀬女袴(三十五圓)東京下村忠兵衛製
葡萄茶地に鎗梅を裾一杯に餘り強からぬ彩を或は暈繝に或は疋田に或は白上げに染出し紐を締めれば同じ梅花の二ッ三ッ染出したるを見らるべく地色も模樣も鮮麗眼を奪ふばかり殊に賞すべきは袴なれば如何なる模樣にても染め得らるべきものにあらず襞積の後に隱れては模樣を爲さず成るべく襞積丈の處に模樣を限り得べきものならざるべからず今此鎗梅を以て染上けたる用意の周到なる慘憺の意匠を凝らしたる是れなり當今婦人の袴は或年齡迄は此葡萄茶色と限られたが如き有樣なれば

是れを以て男子の袴なる色合と縞柄に自由なものに比較せば修飾を要する女子は却て修飾を要せざる男子よりも淡白無味の傾きあり學校がよひの稽古袴とか前かけ替りのものとせば差して懸念は無用なれど若し或る儀式めきたる處とか西洋服を着せらるゝ中に交る場合の如きときには何か物足らぬ心地こそせめ果して然らんには今一層の修飾を加へ優美の趣味を要するは必然の數なるべし此時に當りて下村氏が新に工夫を凝らして爰に着眼をせられたるは大に時機に投じたるものといふべし

山階宮妃殿下薨去

山階宮菊麿王殿下御息所範子殿下には去月三十一日王女御分娩後御健康勝れさせ給はず爾來專ら御療養中なりと承はりしに御養生叶はせられず終に去十一日午前五時十分を以て薨去遊ばされたり、依て平生の御性行一般を左に掲げん

▲九條公の姫君　九條道孝公の第一の姫君は疾にお隠れとなり今日にては範子殿下が第一の姉君に當らせられ第二の姫君は東本願寺の新法主に御輿入りあり第三の姫君こそ東宮殿下妃節子殿下に渡らせ給ふなり

▲學業の御成蹟　殿下は天資御聰明に在して最も學業を勵ませられ華族女學校御通學中は常に優等の御成蹟なりしが御退學後山階宮家へ御輿入りになりし今日迄も尚學事に心を寄せさせられ津田梅子女史を御邸に招かれ英語を御研究遊ばされたりと

▲御平生の慈善　殿下の特質として常に下を惠ませ給ふは御側に侍するものども皆感泣して措かざる所なりと承はる今其一例を擧ぐれば平生殊に孤子を憫み給ひて御側に召使はせらるゝものも多く此孤子を選み給ひしと云ふ以て慈善心に深かりし御美德の一般を察すべし

▲父君の御介抱　九條道孝公には兼て御病氣中なりしも近來大いに快力に赴かれしより去九日より山階宮邸に赴き一昨夜迄殿下の御介抱に手を盡されたりと御親子の御間柄拜察するに餘りあり

▲東宮妃殿下の御對顏　東宮妃節子殿下には近頃より鎌倉に御保養中なりしが姉君の御危篤なるを聞し召させられ昨日午前九時卅分新橋着の滊車にて御歸京遊ばされ一旦赤坂御所へ御歸館の上直に御出門山階宮邸に到らせられ御對顏わらせられしと承はる御心中の程拜察するも痛ましゝ

▲痛惜の極みなり　殿下は明治十一年十二月四日の御誕生にして今や僅かに御二十四歳にならせられしのみ、學業と申し御聰明と申し將又慈善事業に御心を寄せられ給ひしと申し、斯くも春秋に富ませられし御方を失ひしこそ痛惜の極みなれ

▲殿下の陞敍　九日附にて畏き邊りより左の通り敍勳の御沙汰あらせられたり

勳一等菊麿王妃勳二等　範子

勳一等に敍し寶冠章を授く

◉實業課と女子教育

文部省にて此程任命したる實業教育學科課程調査會は農工商の三科に分ち夫々根本より調査を爲しつゝあるが同委員の中より女子教育に就いて說を出したるものあり其の大要は近來各府縣に於て女子教育大に進歩し高等女學校の創立相踵いて起るは甚だ祝すべき事ならず其の成績如何と見れば學問にのみ進み最も緊要なる職分即ち一家の主婦若くは慈母として家庭を整理するの能力を缺如しあるもの、如し斯くては甚だ遺憾至極なれば此際女子の實業教育を適當なる方法によりて奬勵するの必要あり其の課程を取調ぶるの必要も一事業なるべしと云ふに在りて滿場異議なく之を可決し三十日に開ける農科大學の農科調査委員會に於ても之に因りて調査の方針を協議し養蠶、養鷄、園藝等農家の女子に適當なる手藝に就て取調ぶる事に決したりと

◉婦人雜俎

◉婦人と發狂　獨逸精神學の泰斗チムマー教授は女工發狂の原因を熱心に研究した結果、若し女子が男子と並び立つて生存競爭をするとなれば、女子の發狂者は實に多大の數に增加するであらうとの斷案を下した學校女教師の發狂者數は男教師の二倍數であるさうで、同教授の研究區域は獨逸は勿論、瑞西、墺太利、露西亞に渡てゐるのだ

◉女子の長裾排斥　女子が長き裾を引つ張るに就いて歐米諸國共に甚だ異論非難があるのだが、此頃獨逸では盛に之を排斥し、或る地方では路傍の木に張紙して長き裾を引き摺る女子は罰金を課すと公示し、また或る地方ではコンな風向があらうとは知らずに長裾を引いて歩いてゐた女子が衛生吏の爲に捕へられて立處に裾を切られたのがある、また或處では長裾の女子は公園内を散歩させ無いと定てゐる、此頃伯林に於ける衛生運動は殆ど狂氣沙汰とも思はるゝばかりで、店頭の麵包や菓子や肉野菜等に手を觸るゝものは罰金に處すと寧ろ滑稽的な新令を下したさうだ

◉異聞くさ〴〵

▲面白い倶樂部　墺太利ウヰンナの富者の一團隊は面白い倶樂部を作つた、それは貧しいもの〻娘が多く伉儷を得ずに終へるものあるに同情を表し貧しい娘に結婚しようと約束を固めた青年團隊なので、もし違約して富者の娘と結婚したものは一千磅の罰金を課せられる、そしてこの金は貧乏な新婚者に與へられる規定てある

▲若い茶屋女は嚴禁　匈牙利の首府ブダペストでは四十以下の若い茶屋女は以來禁制といふ布告を發したそれは風俗取締のために内務大臣の發したものださうで、由來年若きハンガリー美人を以て著名なる同地の料理店と茶屋女社會に大恐慌を來して居るとか、大阪などでも少しこンな事をやつて見たら面白からう

▲いつまでも年を取らぬ發明　佛蘭西學士會院の有名な博士ゴーシエ氏はいつまでも年を取らぬ方法について驚ろくべき説を公けにした、それは人間の老衰するものペクテリアの作用に歸するので、そのペクテリアがプトマイン毒に似た毒を構成するため衰弱を起すのであるからその毒を中和する事が出來さへすれば人は決して老衰せぬといふので、博士は既に毒物その物を發見したから中和劑を見出す事も敢て難事ではあるまいといふのである

▲蛇の皮の衣服　世界で最も珍奇な最も高價の衣服は紐育洲ローチエスターに住んで居る米國紳士セーター、クラッパーの所有せる響尾蛇の皮から製した衣服であらう、この衣服は黒色、黄色褐色灰色等四種の響尾蛇百二十五頭の皮を集めて製したもので頗る美麗であるといふ事だ、鈕は矢張響尾蛇の頭を剝製にしたもの、帽子からステッキまでまた同じ蛇の皮を張つめたものださうだ

▲珍らしき反響　ミランから二哩の處に珍らしい反響を起す處がある、それはシモナッタの古城のある處で一發のピストルの音が六十回反響されるさうだ

▲木材の耐久性　木材は乾燥した處では殆んど信ずべからざるほど耐久の性質があるものだ、どの耶基督降生前二千年乃至三千年前の埃及の古墳から掘り出した木片木具等は全く腐朽せずに居たさうである

▲活氣充滿の時機　規則正しい習慣と健全の身躰を有するものであるなれば活力の最も充滿せる期間は男子が三十歳より五十五歳迄女子が二十四歳乃至二十五歳より四十歳迄の間であるさうだ

女學世界第十六號記事要目

毎月一回五日發行

定價表

一冊(紙數二百八頁)…金二十錢
四冊(三ヶ月分)……前金七十五錢
八冊(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六冊(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
内{定刊數……………十二冊
　{增刊四回…三、六、九、十一月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁廿二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年十一月十五日發行（第一卷第十五號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館諸雜誌發行表

定價

- 太陽　一冊二拾錢　郵稅三錢　毎月一回
- 少年世界　一冊拾錢　郵稅壹錢　毎月二回
- 中學世界　一冊貳拾錢　郵稅貳錢　毎月一回
- 女學世界　一冊貳拾錢　郵稅貳錢　毎月一回
- 文藝倶樂部　一冊廿五錢　郵稅三錢　毎月一回
- 太平洋　一冊六錢　郵稅五厘　毎月[illegible]回
- 圖書世界　一冊三錢　郵稅五厘　毎月一回

十一月發行表

六大雜誌及增刊

- 太陽第十三號　五日發行
- 少年世界第十五號　一日發行
- 中學世界第十四號　十日發行
- 女學世界第十四號　五日發行
- 文藝倶樂部第十三號　一日發行
- 女學世界增刊 磯千鳥 第十五號　十五日發行
- 圖書世界第五號　十五日發行

太平洋

- 第四十四號　四日發行
- 第四十五號　十一日發行
- 第四十六號　十八日發行
- 第四十七號　廿五日發行

廣告料

- 太陽……一行一回金四拾五錢　十八字詰五號活字
- 少年世界……一行一回金四拾錢　廿五字詰五號活字
- 中學世界……一行一回金三拾錢　廿四字詰五號活字
- 女學世界……一行一回金三拾錢　廿四字詰五號活字
- 文藝倶樂部……一行一回金四拾錢　廿四字詰五號活字
- 太平洋……一行一回金四拾錢　廿五字詰五號活字
- 圖書世界……一行一回金拾五錢　廿五字詰五號活字

詳細は御問合せの事

蠶業叢書

全部拾貳冊

洋裝菊判美本

正價　一、一冊金三十錢〇六冊前金一圓七十錢〇全部十二冊前金三圓貳拾錢〇郵稅一冊六錢

發行の趣旨

富國強兵の策は他なし殖産を興し民力を休養するより急なるはなし、本邦は古來扶桑國と稱し蠶桑の業を以て名あり宜なり歴朝能く斯業の奬勵に勉め人民亦孜々之れが發達を企圖するや其現今に至り已に輸出物全額の大半を占むるの盛境に達したる眞に偶然にあらざるなり惟ふに我邦家の消長は蠶業の盛衰に關するや大にして國家は殆んど斯業によりて其運命を卜するに似たり、然りと雖も蠶絲は獨り本邦の特有物産にあらず清國の多產伊佛の精良尚は我を凌いで餘裕あり、去れは本邦の蠶業は將來益々進んで之れが勃興を圖り之れが改善を講せざれは彼の列强に對峙すべくもあらず然るに本邦未だ斯業に關する學識經驗共に幼稚の域を脱せず是れ本館が當代斯業界に於て錚々の聞えある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を乞ひ蠶業叢書の名を以て遂次之を刊行し汎く當業の士に頒ち斯業改善の良友たらんを期す其全部の要目左の如し

第壹編　蠶業通論　三谷敬作・池田榮太郎君著

第二編　生絲檢査論　德山寳也君著

第三編　栽桑新論　池田榮太郎君著

第四編　桑樹病害論　岩淵平太君著

第五編　養蠶新論　望月閑馬君著

第六編　蠶體解剖論　松下憲三郎君著

第七編　蠶體生理論　松尾直信君著

第八編　蠶種論　岩淵平太君著

第九編 蠶絲新論 井上陞君著

第十編 殺蛹乾繭論 三谷徹君著

第十一編 多化蠶飼育論 山田島次郎君 大森孫十郎君 共著

第十二編 蠶業經濟論 徳田實也君

第壹編 蠶業通論

農商務省東京蠶業講習所技師農學士本多岩治郎君校閲

三谷徹君 池田榮太郎君共著

全一冊 正價金卅錢郵税六錢

本書は所謂蠶學蠶業の總論にして世界蠶業の起原より蠶業に關する萬般の事項を括論せるものなり本邦從來此に類似せる一二の著書なきにあらずと雖も陳腐にして見るに足るものなし然るに本書は斷然奇抜以て斯界の既往に鑑み現在に照し以て將來執るべき方針に及ぼせり卓觀特絶の論錄を入なして蠶然蠶界の活劇に遊ばしむるの感を興ふ實に本邦古來空前の良書なり凡そ斯業に從事する諸氏は其學者たると實業家たるとを問はず本書を一讀せば恰も闇夜に一道の光明を得たるの觀あらむ

第貳編 生絲檢查論

横濱生絲檢查所長 岡毅君序文

横濱生絲檢查所技手 徳田實也君著

全一冊 正價金卅錢郵税六錢

本書は我邦に於ける生糸檢査の方法を論述し進んで其精粗優劣の由て來る所を詳説したるものにして著者自ら其職に在りて日常檢査に從事し見聞調査せる事項を發表し以て全國各地製糸業の趨勢を窺ふの便に供す殊に昨年内外生絲業者に締結されたる條約中水分檢査の項目の如きは具に之を解釋し製糸家及び生絲業者の參考たらしむること甚だ大なり蠶業家の本書に待つ所鮮少にあらず

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（挟付の三）

警察監獄全書 全部六冊 完成廣告

社會問題國家問題として大に研究すべき必要書籍「警察監獄全書」全部六冊茲に完成を告ぐ此際警館に於ては江湖購讀諸君の御便利を謀り全部六冊取揃へ御注文の方に限り

上製六冊金貳圓八拾錢並製六冊金貳圓

にて送本す請ふ續々御注文あらんことを希望す

●定價●上製壹冊ハ拾五錢郵稅壹冊拾錢●並製壹冊四十錢●郵稅壹冊八錢

第壹編 監獄學

法學士 谷野格君著

監獄費國庫支辨案は上下兩院を通過し監獄事務は內務省を脫離して更に司法行政の配下に歸屬せり然れども半從の國人中克く其事務を知悉せるもの果して幾千人ぞ而て其國庫を辨となし又は司法行政事務をなすの當否に關し獨立の見解を有する者に至りては寥々として誠に晨星の如し夫れ監獄學は大學獨立の講座たるに足り監獄制度は優に一國樞要の立法又は政略の問題たるに足る而して國人の頭腦監獄思想缺乏する所の如く太甚しきせば豈に當に當該者の不幸のみと言はんや

第二編 司法警察手續法

法學士 中大路正雄君著

社會の罪惡は濱の眞砂の盡きざるが如く、人間道義心の腐敗とゝもに益ます增加し之を防止する司法警察の任務は日に益々重きを加ふ司法警察の職を全ふすることまた難い哉、是れ本書の著者が多年東西名家の所說を參考して此書を編し司法警察法規原理を論究し讀者をして其手續に熟熟し以て社會の罪惡を矯正せんと欲する所以なり司法警察の意義、警察官の責任、其責任を全ふす方法等は詳說して餘蘊無し

（綴付の四）

第三編　警察學

法學士　宮國千代吉君著

警察とは公共の安寧秩序を維持し幸福を増進する爲に直接に人の自由を制限する國家行政上の一制度なり而して警察學とは此種の制度の得失を攻究するを以て其目的と爲す其警察制度の良否は直に一國人民の權利消長に影響を及ぼし延て國家隆替の一因となるに至るを以て制度の整備せると否とは以て一國文明の程度を卜するに足るべし苟も此制度をして其機能を全ふせしめんと欲せば警察學の攻究豈忽諸に附すべけんや

第四編　衛生法

法學士　廣中佐兵衛君著

疾病の流行は社會の災厄なり其の人口を減ぼすこと數萬の多きに達し其公役を廢すこと數百萬の多きに達し、戰災海嘯如何に甚だしと雖も未だ以て疫病の災害に若かざるなり豈に寒心すべきにあらずや是を以て我に傳染病豫防法の發布あり次に海陸檢疫法の發布あり關する衛生の事務も疾病の流行と共に愈々其繁激を加ふ而して本邦の爲め中北際に職し又其の行政と關係に關し斯法の蘊奥を究めたる效果として幾千人を國人の衛生思想は缺乏する夫れ斯の如し、是れ本書の著者が多年研究の結果を社會に發表せる所以なり

第五編　日本監獄法

法學士　佐藤信安君著

改正監獄則を以て舊則に比すれば其進歩や雲泥を啻せしが如くも未だ以て完全なる規定と稱するに足らず故に監獄の基礎を刑法に定め獄制の改良を計ること焦眉の急といふべし著者茲に見る處あり先づ監獄制度の概念より本邦監獄則各條の正文によりて主要を摘記し懇篤説明して餘蘊なし職に監獄警察に從事する者必ず座右に備へざる可らず

第六編　行政警察法

法學士　中大路正雄君著

警察行政に從ふものは深遠なる法理を知るよりも法令の實際を知るを以て貴しとす然るに現今の警察に關する著書を見るに概ね形式に走りて實質に遠かり法理を論じて解釋に及ばざるもの多し是れ本書の著ある所以なり本書は實質に最も重きを置き解釋に疑義あるもの又は適用の多きものに限り其說明懇切なれば本全書に就も重要の書といふべし。

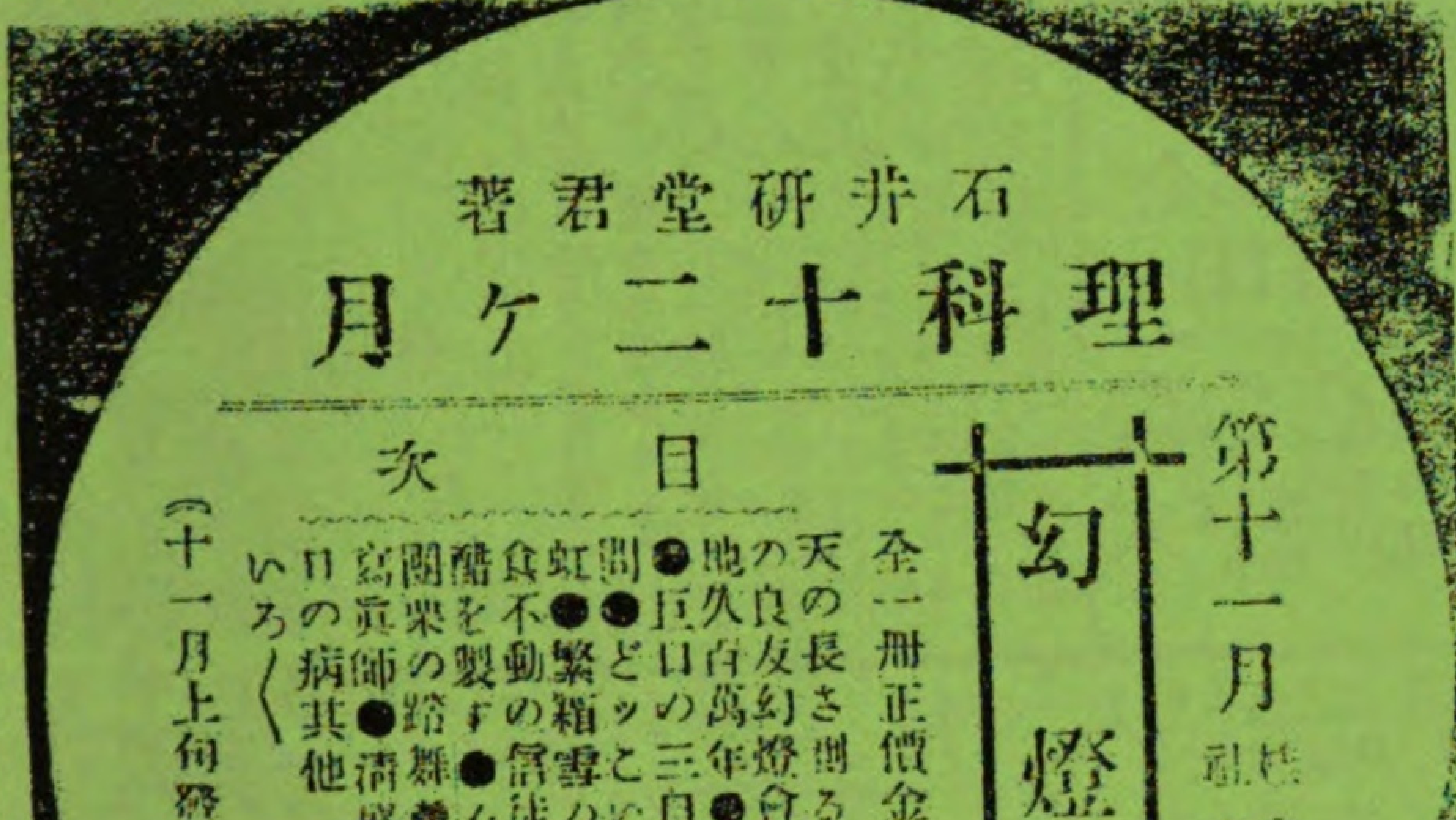
發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（奥付の五）

全部十二冊

一月●新風船
二月●雪達磨
三月●花の錦
四月●汐干狩
五月●植物園
六月●蜻蛉祭
七月●游泳臺
八月●富士詣
九月●暴風雨
十月●銃獵者
十一月●幻燈會
十二月●歸省錄

一六冊五拾八錢



發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

十一月上旬發兌

男爵石黑忠悳君述

東京博文館發兌

新版

況翁閑話

附 況翁談片

全壹册洋裝菊判
寫眞銅版口繪挿入
正價貳拾五錢
郵稅六錢

維新前後、刀圭を擲ちて政海に入りたる名士、大村寺島芳川諸氏を始めとして其人に乏しからず、而も身醫家に生れず早く國事に奔走し、一旦翻然杏林に投じて遂に國家に大勳を奏し、華族の貴爵に陞り、然る後高踏勇退せる況翁石黑男爵の如きは當世の奇傑と言ふ可らずや。本書は翁が明治初年以來の談片を輯錄する者、事百般に渉りて而も時事を諷せる者多く、往々奮慨を諧謔に寓する者あり、機鋒鋭利、談論輕快、興趣津々として妙味盡きず、繙讀の間、翁と膝を交へて其佳譚を聞くの想あるべし。

五版

天則百話

男爵加藤弘之君著

通俗的に高遠ある學理を說き其間復た社會萬般の事柄を評論し以て俗見の誤まれるを正し論理一還の非眞理なるを打破す議論正確文字平易明治今日に一異彩を放つものなり

正價金三拾錢郵稅六錢

三版

人事百話

子爵福羽美靜君著

本書は人々處世の道一百條を學德共に高き子爵が丁寧懇切に講述せられたるものにして何人を問はず必ず一本を坐右に備へざるべからず

正價金貳拾錢郵稅四錢

(大谷製本)

女學世界
定期增刊
第壹卷第十五號
(明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可)
(明治三十四年十一月十五日發行)

洋裝菊版美本

壹冊百卅頁餘

著名文學大家執筆◉有名和洋畫伯揷畫

少年讀本

全部五拾册每月壹回發行

- 1 高島秋帆 福地櫻痴君著（年方畫）
- 2 白河樂翁公 中郡秋香君著（永洗畫）
- 3 河井繼之助 戸河殘花君著（半古畫）
- 4 三條實美公 依田學海君著（廣業畫）
- 5 曲亭馬琴 饗庭篁村君著（觀山畫）
- 6 井伊掃部頭 巖谷小波君著（沖舟畫）
- 7 山田長政 遲塚麗水君著（春汀畫）
- 8 錢屋五兵衛 桐生悠々君著（永洗畫）
- 9 春日局 岸上質軒君著（春汀畫）
- 10 水戸烈公 野口珂北君著（大觀畫）
- 11 桐野利秋 春山鶴峯君著（泉堂畫）
- 12 藤田東湖 大和田建樹君著（不折畫）
- 13 伊能忠敬 幸田露伴君著（永洗畫）
- 14 新井白石 武島羽衣君著（敬中畫）
- 15 水野越州 中村桂軒君著（永洗畫）
- 16 池大雅 田山花袋君著（觀山畫）
- 17 木內宗吾 松原廿三階堂君著（春汀畫）
- 18 西鄉隆盛 川崎紫山君著（年方畫）
- 19 阪本龍馬 坂崎紫瀾君著（年方畫）
- 20 橫井小楠 大野酒竹君著（不折畫）
- 21 貝原益軒 石原笠堂君著（春汀畫）

第四十一編
熊田葦城君著
阿部伊勢守
遠藤耕溪君畫
洋裝全壹冊
正價金拾三錢
郵稅四錢

明治今日の開明を致せるは世人薩長諸藩の功あるを知りて幕末の賢相阿部伊勢守の力大に與れるを知らず伊勢守の如きは難局に當りて苦心經營に堂々大臣の風を失はず本書を讀みて其然るを知るべし

- 22 渡邊華山 渡邊霞亭君著（年方畫）
- 23 中濱萬次郎 石井研堂君著（耕溪畫）
- 24 近衞忠熈公 勢多章之君著（不折畫）
- 25 間宮倫宗 文學士笹川臨風君著（古洞畫）
- 26 周布政之助 堺枯川君著（松亭畫）
- 27 荻生徂徠 內田魯庵君著（蕉舟畫）
- □山吐虹君著（□帥畫）
- 29 中江藤樹 [illegible]君著（古洞畫）
- 30 島津齊彬公 春山鶴峯君著（弘光畫）
- 31 高野長英 千河岸貫一君著（春汀畫）
- 32 橋本左內 桐生悠々君著（蕉舟畫）
- 33 釋月性 千河岸貫一君著（春汀畫）
- 白河鯉洋君著（古洞畫）
- 35 熊澤蕃山 幸田成友君著（年方畫）
- 36 雲井龍雄 玉木□園君著（古洞畫）
- 37 野中兼山 北村香樹君著（耕溪畫）
- 38 大鹽平八郎 堀紫山君著（蕉舟畫）
- 39 佐久間象山 塚原靖君著（春汀畫）
- 勢多章之君著（古洞畫）

正價　前金壹冊拾三錢●六冊金七拾錢●十貳冊金壹圓三拾五錢●郵稅壹冊に付四錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

東京秀英舍印刷